

茨城県教育財団文化財調査報告第317集

大谷貝塚

国道125号大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書2

下巻

平成21年3月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第317集

おお や かい づか
大 谷 貝 塚

国道125号大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書2

下 巻

平成21年3月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人茨城県教育財団

目 次

- 下 巻 -

2 弥生時代の遺構と遺物	425
(1) 竪穴住居跡	425
(2) 土坑	448
3 古墳時代の遺構と遺物	450
(1) 竪穴住居跡	450
(2) 古墳	479
(3) 土坑	486
4 平安時代の遺構と遺物	490
(1) 竪穴住居跡	490
(2) 竪穴建物跡	494
(3) 火葬墓	507
(4) 土坑	508
(5) 周溝跡	512
(6) 溝跡	514
5 中世・近世の遺構と遺物	516
(1) 土坑墓	516
(2) 周溝跡	517
(3) 塚	519
(4) 溝跡	521
(5) 道路跡	528
6 その他の遺構と遺物	532
(1) 土坑	532
(2) 遺構外出土遺物	539
第4節 まとめ	562
付 章	
1 大谷貝塚出土の縄文時代前期人骨について	571
2 大谷貝塚出土の縄文時代人骨の自然科学分析について	576
3 大谷貝塚の土壌サンプルから得られた貝類遺体(予報).....	578
4 大谷貝塚の貝層サンプルから得られた動物遺体	591

写真図版

抄録

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡14軒，土坑9基である。以下，それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。なお，確認した9基の土坑の内，出土した遺物が少なく，時期を判断できない土坑7基については，出土遺物，形状，重複関係，覆土の様相などの総合的な所見から，当時代に属すると判断し，長径150cm以上のものをA類，長径100cm以上150cm未満のものをB類，長径100cm未満のものをC類，長径100cm未満の柱穴状のものをD類，方形及び長方形のものをE類と5類に分類した。

これらの土坑については，実測図と土層解説だけを掲載する。

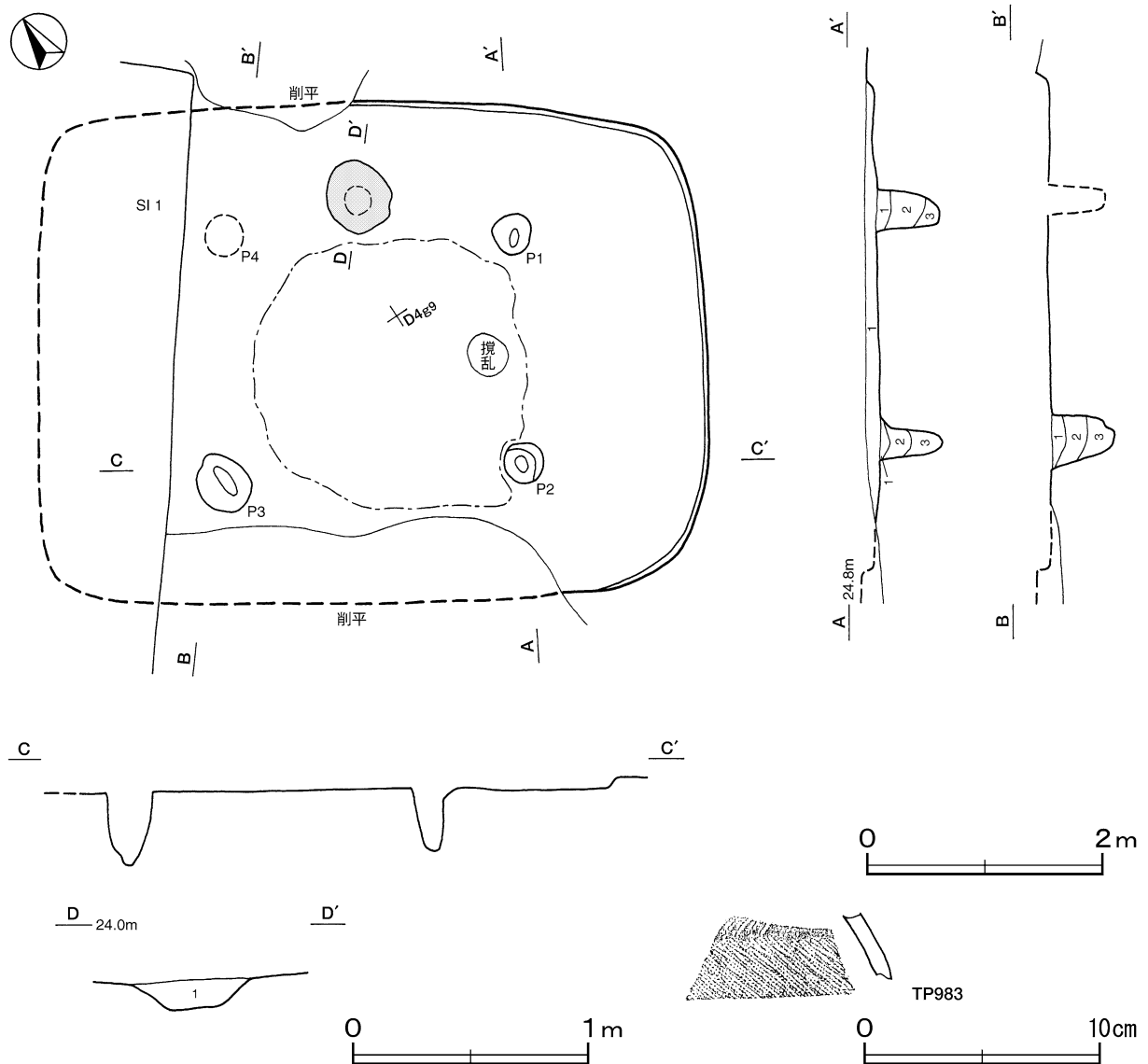
(1) 竪穴住居跡

第4号住居跡（第325図）

位置 調査区北部のD 4 g9区で，標高24.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・55・56・57・63号土坑を掘り込み，第1号住居に掘り込まれている。第54号土坑と平面的に重複しているが，先後関係は不明である。

規模と形状 西側が第1号住居に掘り込まれ，南側が削平されているため，確認できた長軸は4.54m，確認で



第325図 第4号住居跡・出土遺物実測図

きた短軸は4.00mで、本来は長軸5.70m，短軸4.20mほどで、主軸方向がN - 33° - Eの隅丸長方形と推測できる。壁高は7～9cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、主柱穴の内側は踏み固められている。

炉 中央部から北東に偏った壁際に位置する地床炉である。長径60cm，短径55cmの楕円形で、床面を皿状に12cm掘りくぼめている。火床面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量

ピット 3か所。P1～P3は深さ54～57cmで、主柱穴と考えられる。想定される北側の主柱穴は、第2号土坑の覆土を掘り込んでいた可能性があるが、確認できなかった。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子少量
3 褐色 ローム粒子中量

覆土 単一層。周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況 弥生土器片4点（甕）が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片39点，土器片錘2点，剥片2点も出土している。

所見 時期は、土器片の様相から後期と推測できる。

第4号住居跡出土遺物観察表（第325図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP873	弥生土器	甕	-	(2.9)	-	石英・長石	灰褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を羽状構成に施文	覆土	

第6号住居跡（第326・327図）

位置 調査区北部のD5h2区で、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第87・116号土坑を掘り込み、第74号土坑・第1号墳に掘り込まれている。

規模と形状 南側が第1号墳に掘り込まれ、西側が削平されているため、確認できた長軸は4.63m，確認できた短軸は5.00mで、本来は1辺5.10mほどで、主軸方向がN - 20° - Wの方形と推測できる。壁高は20～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際及びコーナー部付近を除いて踏み固められている。

炉 中央部のやや西寄りに位置する地床炉である。長径112cm，短径104cmの不整楕円形で、床面を皿状に23cm掘りくぼめている。明瞭な火床面は確認できなかった。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ60cmで、出入り口施設に関連するピット，P2は深さ16cm，P3は深さ35cmで、柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量
4 褐色 ロームブロック多量

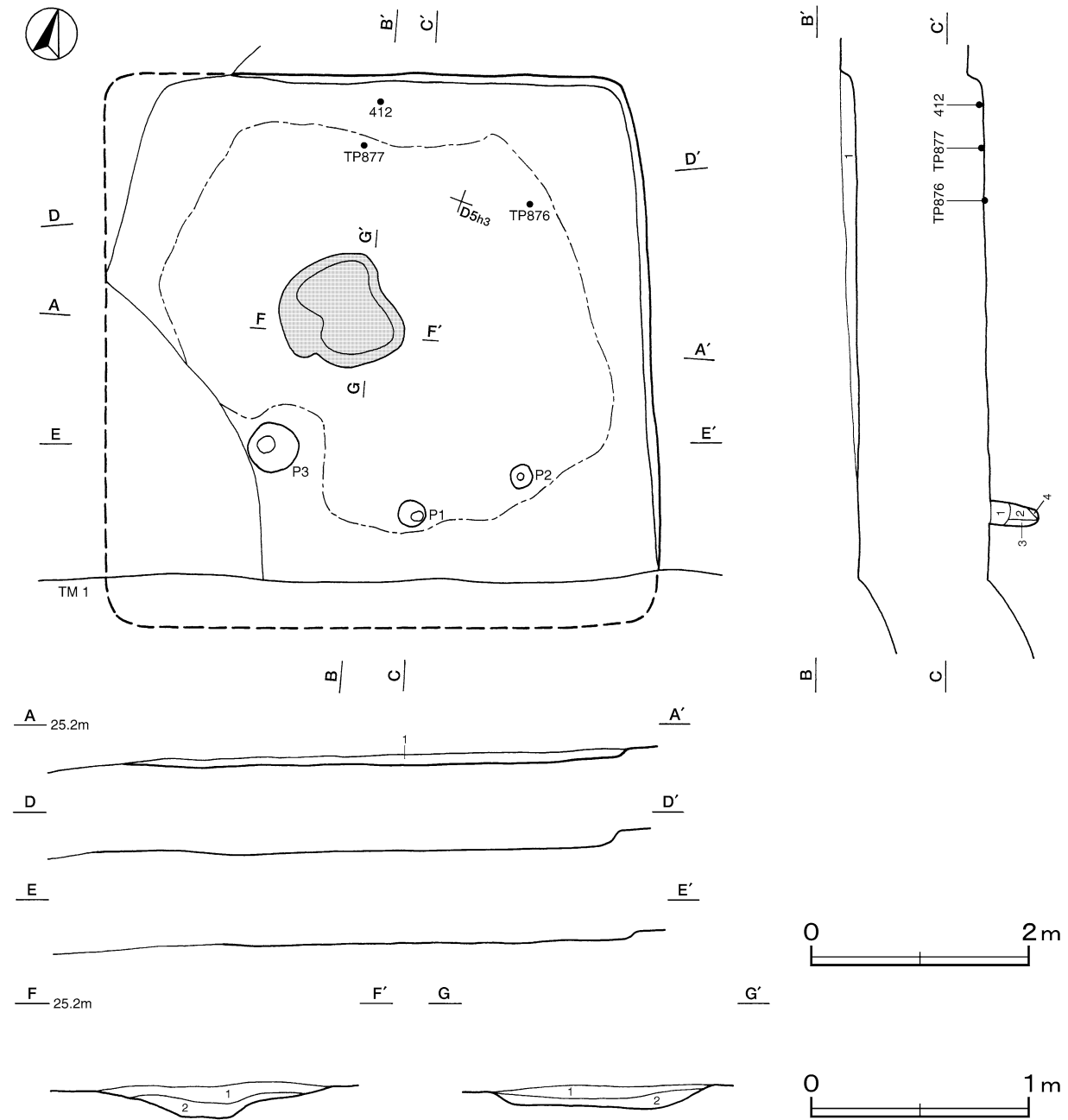
覆土 単一層。周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片160点（甕）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片366点，土器片錘3点，土器片円盤1点も出土している。

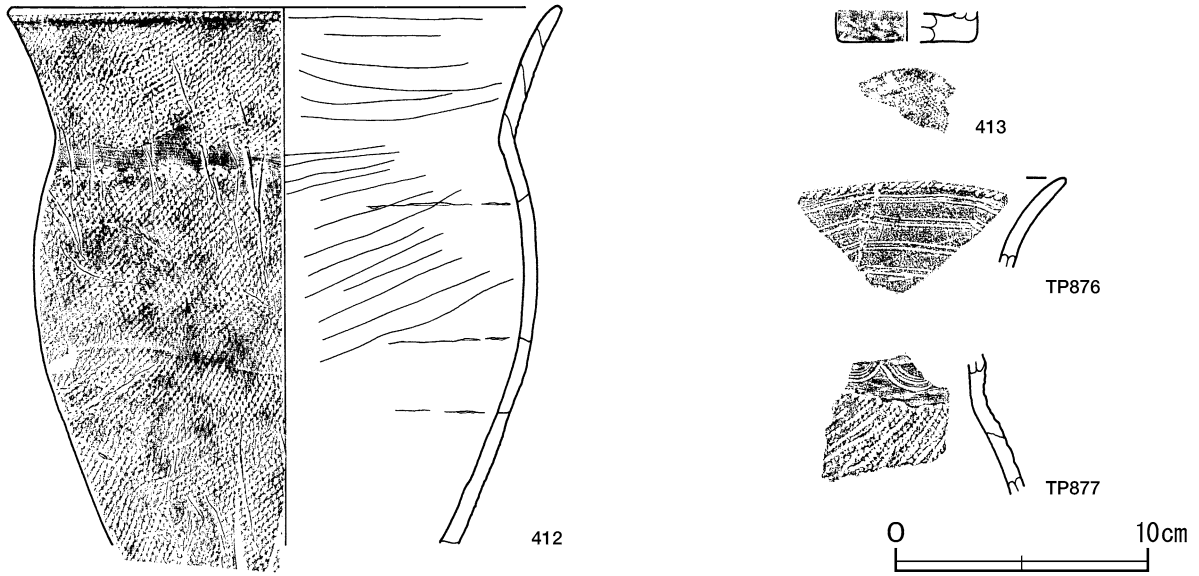
所見 時期は，土器片の様相から中期末葉から後期初頭である。



第326図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第327図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
412	弥生土器	甕	[22.0]	(21.3)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 頭部のくびれに強いナデ跡が残る	床面	30% PL52
413	弥生土器	甕	-	(1.2)	[5.4]	石英・長石・雲母・赤粘土	明赤褐	普通	横位回転の付加条を施文 底部布目痕	覆土	5%
TP876	弥生土器	甕	-	(3.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部は2本櫛歯の平行沈線文を横位に巡らす 口唇部上端に横位回転の付加条を施文	床面	
TP877	弥生土器	甕	-	(5.6)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	頭部は4本櫛歯の連弧状のモチーフを描出 胴部は横位回転の付加条一種付加1条を施文	床面	



第327図 第6号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡 (第328図)

位置 調査区北部のD5 f4区で、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝，第7号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西側の一部と東側が第1号溝，第7号住居に掘り込まれているため，確認できた長軸は4.42mで，本来は長軸4.70mほど，短軸4.46mで，主軸方向がN - 61° - Wの長方形と推測できる。壁高は3 ~ 8 cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，壁際を除いて踏み固められている。

ピット P1は深さ77cmで，出入口施設に関連するピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量 炭化物微量

覆土 3層に分かれ，周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

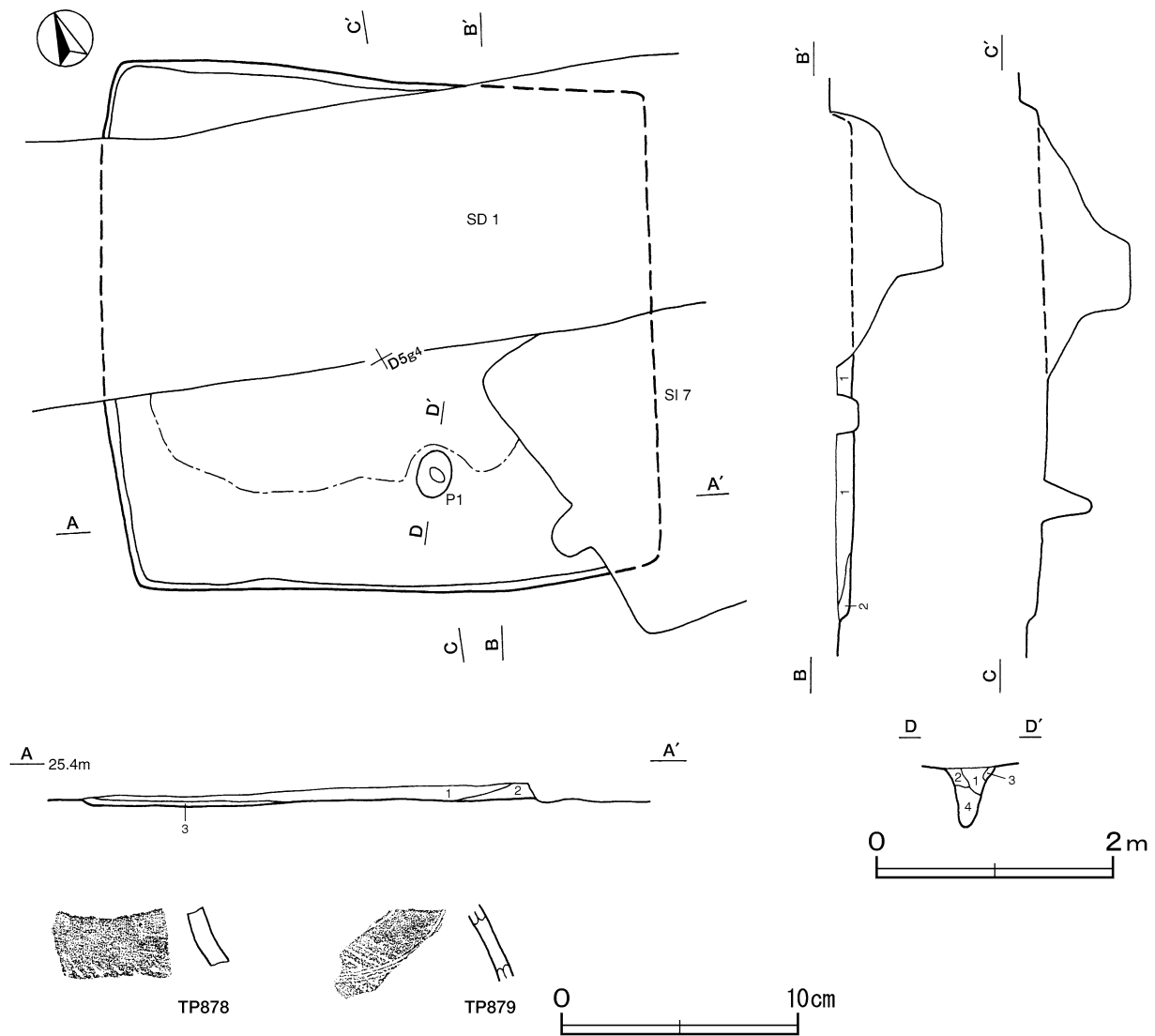
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片19点（甕）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片207点，土器片錘1点，混入した土師器片3点も出土している。

所見 時期は，土器片の様相から中期後葉である。

第8号住居跡出土遺物観察表 (第328図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP878	弥生土器	甕	-	(2.5)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	胴部は横位回転の付加条を施文	覆土	
TP879	弥生土器	甕	-	(3.2)	-	石英・長石	褐	普通	胴部は3本櫛歯で連弧状のモチーフを描出 地文は横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	



第328図 第8号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡（第329図）

位置 調査区北部のD 5 g7区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。北コーナー部は調査区域外に延びている。

規模と形状 北側が調査区域外に延び、南側が第1号溝に掘り込まれているため、確認できた長軸は3.56m、確認できた短軸は3.46mで、本来は長軸4.20m、短軸3.50mほどで、主軸方向がN - 15° - Wの長方形と推測できる。壁高は8 ~ 18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

炉 中央部に位置する地床炉である。長径58cm、短径48cmの楕円形で、覆土は確認できず、火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 3か所。P1 ~ P3は深さ41~68cmで、支柱穴と考えられる。南西側の支柱穴は、第1号溝の構築によって失われている。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |

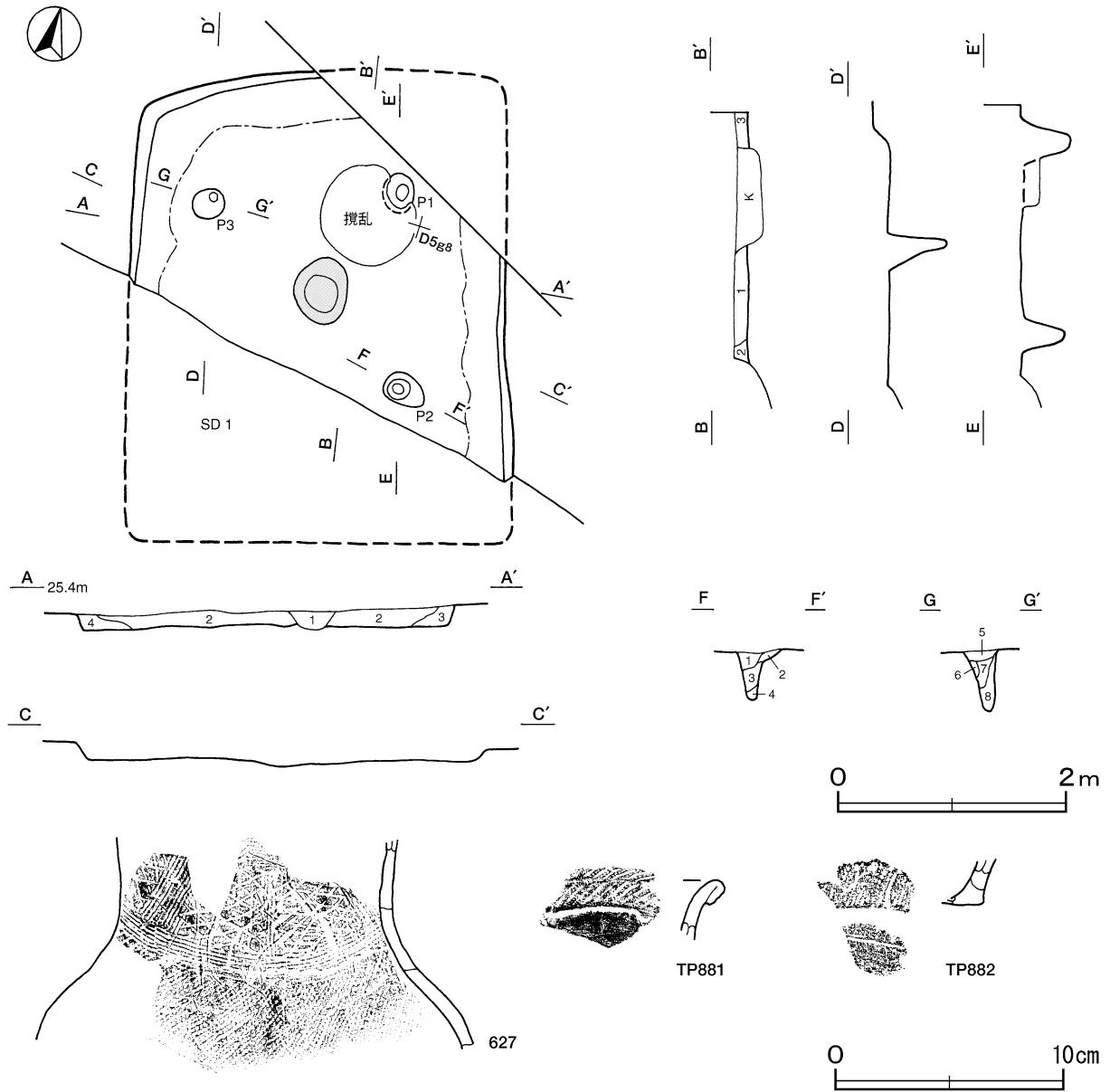
覆土 4層に分かれ，周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片10点（甕）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片100点，混入した土師器片1点も出土している。

所見 時期は，土器片の様相から中期末葉から後期初頭である。



第329図 第10号住居跡・出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第329図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
627	弥生土器	甕	-	(9.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい 黄橙	普通	頸部に6本槽壺による縦位・横位の平行沈線文で方形区画を形成。区画内に鋭い先端の棒状工具で斜格子目状のモチーフを描く。胴部は横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	10% PL52
TP881	弥生土器	甕	-	(3.2)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	折り返し口縁部 横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP882	弥生土器	甕	-	(2.0)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土	

第13号住居跡 (第330図)

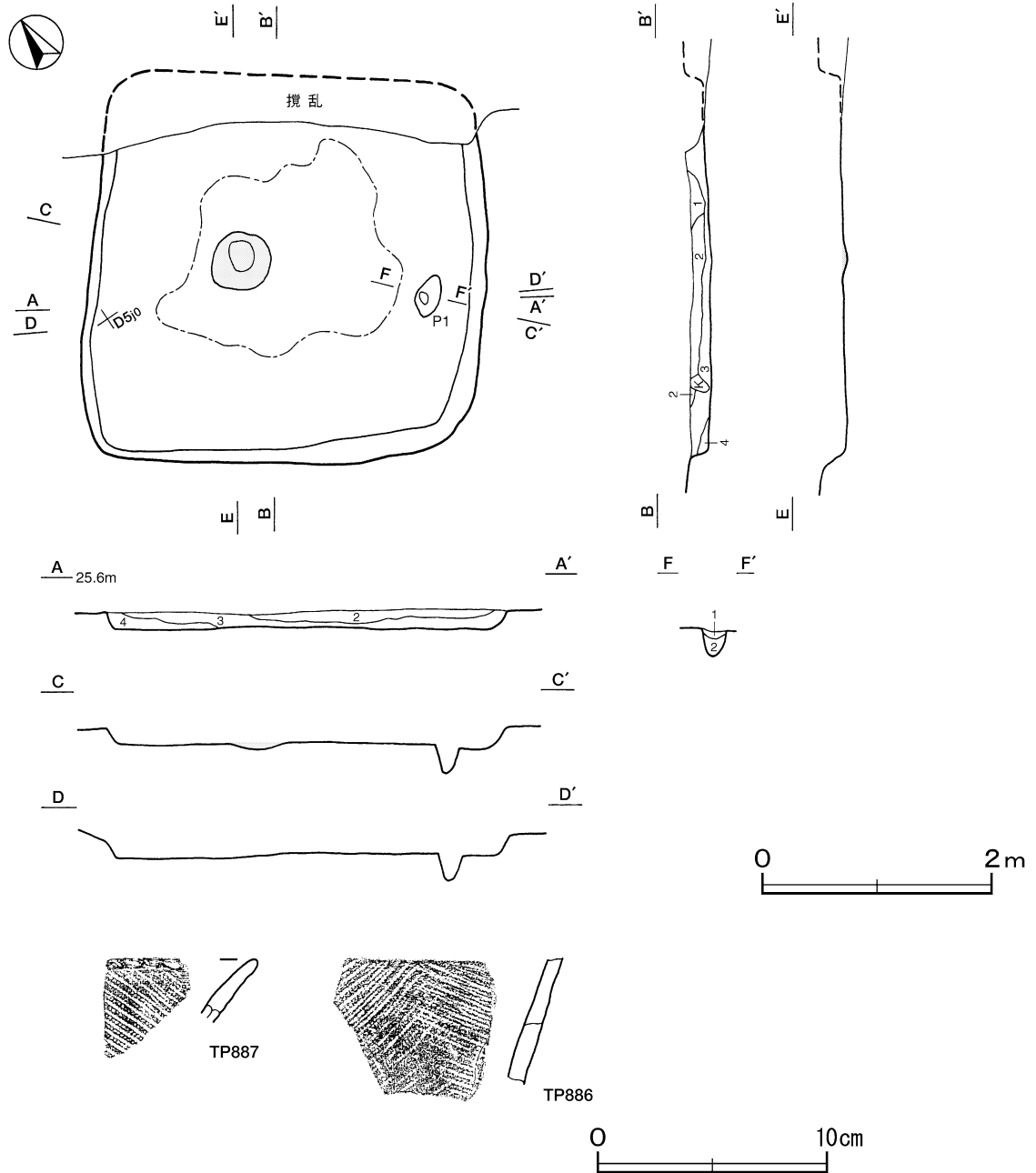
位置 調査区東部のD 4 j0区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第130号土坑を掘り込み、第150号土坑と重複しているが、先後関係は不明である。北東側は攪乱で削平されている。

規模と形状 北東側が攪乱で削平されているため、長軸3.56m、確認できた短軸は3.00mで、本来は短軸3.40mほどで、主軸方向はN - 54° - Wの方形と推測できる。壁高は16~22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉を取り囲む中央部付近は踏み固められている。

炉 中央部の北西寄りに位置する地床炉である。長径151cm、短径50cmの楕円形で、覆土は確認できず、火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。



第330図 第13号住居跡・出土遺物実測図

ピット 1か所。P1は深さ22cmで、出入り口施設に関連するピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック中量

覆土 4層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 極暗褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片16点(甕)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片58点、敲石1点、混入した土師器片1点も出土している。

所見 時期は、土器片の様相から中期末葉から後期初頭である。

第13号住居跡出土遺物観察表(第330図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP886	弥生土器	甕	-	(5.5)	-	石英・長石	灰褐	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP887	弥生土器	甕	-	(2.7)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	

第14号住居跡(第331~333図)

位置 調査区東部のE6a2区で、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

確認状況 北東側は攪乱で削平されている。

規模と形状 長軸6.41m、短軸4.02mの長方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壁高は25~27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、支柱穴の内側が踏み固められている。

炉 中央部に位置する地床炉である。長径77cm、短径50cmの楕円形で、床面を皿状に15cm掘りくぼめている。

火床面は第1層の下面で、火熱を受けて赤変硬化している。覆土の第2~4層は掘り方への埋土である。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック中量,焼土ブロック少量 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化物微量

ピット 5か所。P1~P4は深さ60~64cmで、支柱穴と考えられる。P5は深さ56cmで、出入り口施設に関連するピットと考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量,炭化物微量 3 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中量 4 褐色 ローム粒子少量

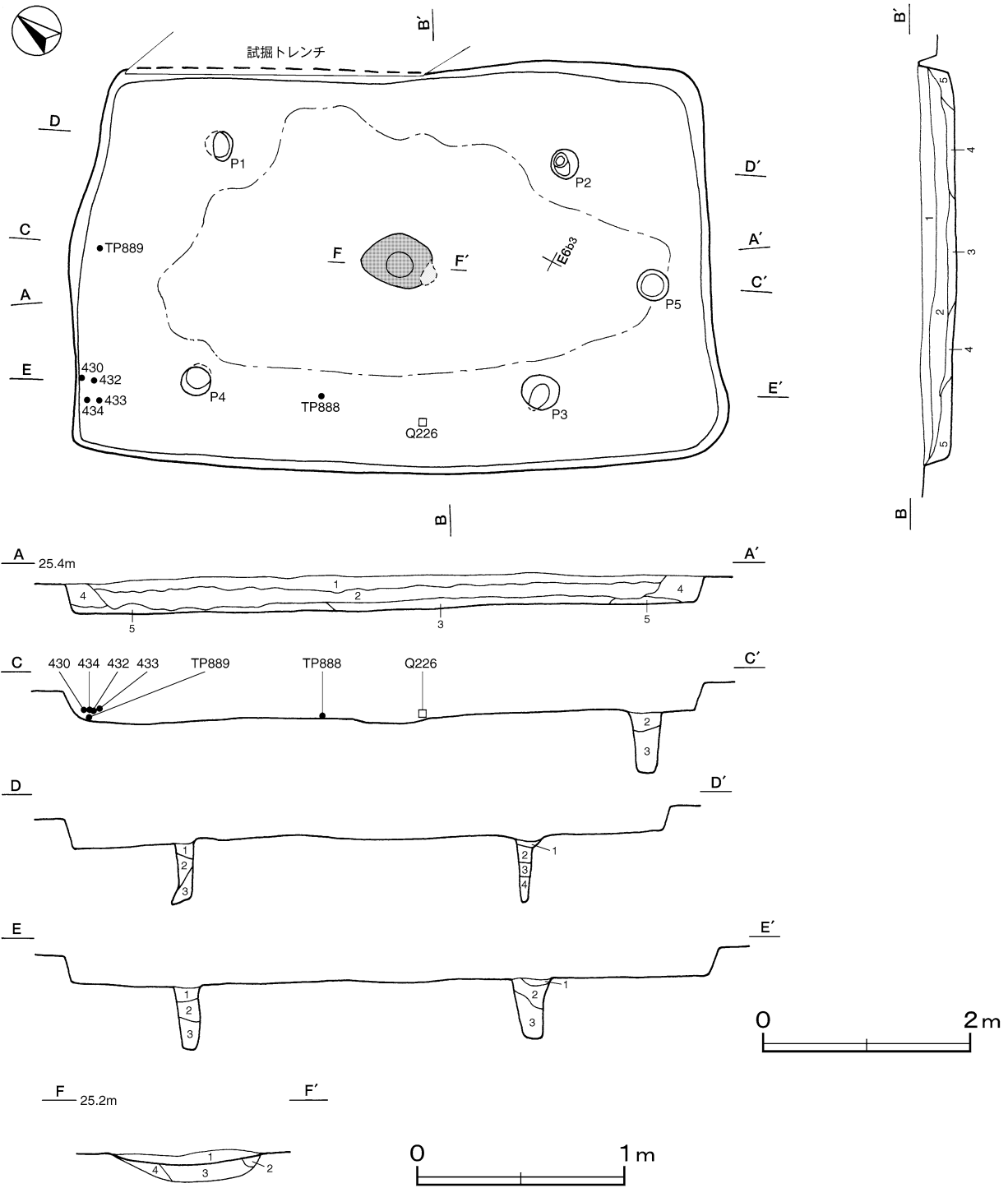
覆土 5層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量,焼土ブロック・炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック少量,焼土ブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化粒子少量 5 暗褐色 ロームブロック多量,焼土粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 弥生土器片279点(広口壺2点,甕277点),台石1点,敲石1点が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片197点,土器片錘1点,剥片4点,混入した土師器片1点も出土している。

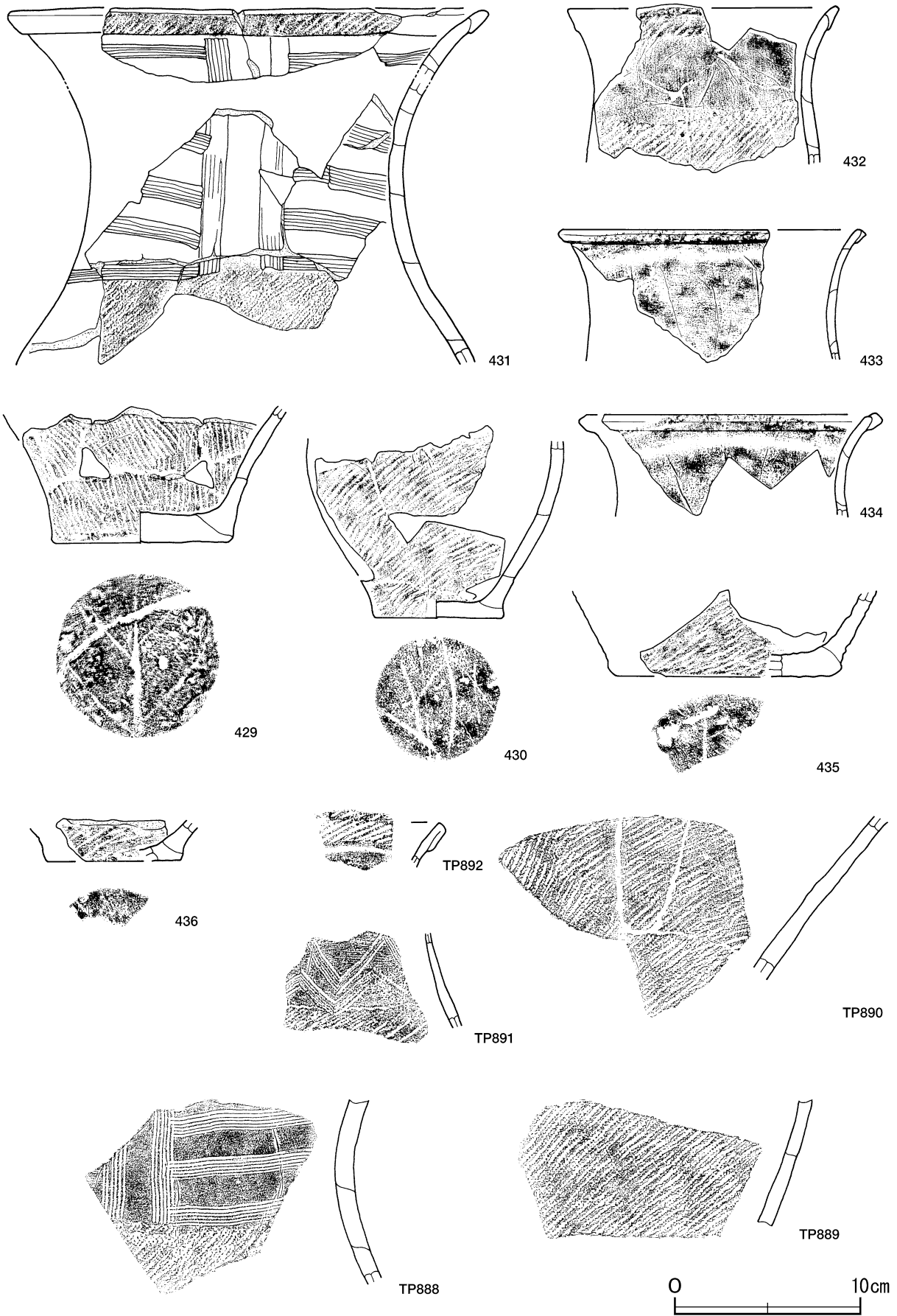
所見 時期は、出土土器から後期前葉である。



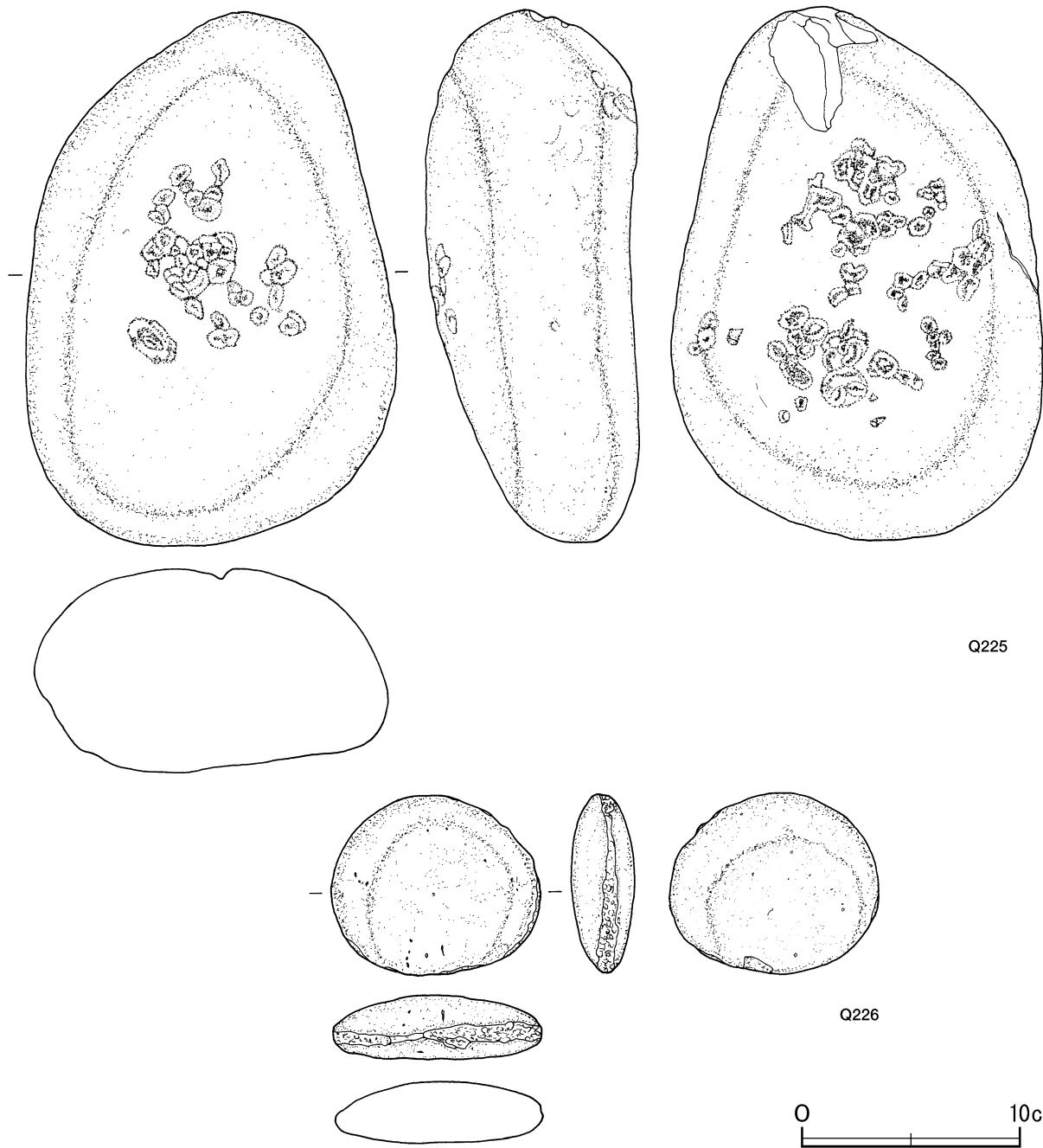
第331図 第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土遺物観察表 (第332・333図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
429	弥生土器	甕	-	(7.0)	9.0	石英・長石	にぶい黄橙	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土	20%
430	弥生土器	甕	-	(9.5)	7.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土下層	20%
431	弥生土器	甕	[25.6]	[19.0]	-	石英・長石・雲母	橙	普通	折り返し口縁 口唇部・胴部に横位回転の付 加条一種付加1条を施文 頸部は6本櫛歯の 平行沈線を縦2列、横6段の梯子状に施文	覆土	TP888と同一 個体 15% PL52
432	弥生土器	甕	[14.6]	(8.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁 口唇部・胴部に横位回転の付 加条一種付加1条を施文 頸部は無文	覆土下層	15%



第332图 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第333図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
433	弥生土器	甕	[15.9]	(7.1)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁 口唇部上端に横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部は無文	覆土下層	10%
434	弥生土器	甕	[15.6]	(5.5)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	折り返し口縁 口唇部上端に横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部は無文	覆土下層	10%
435	弥生土器	甕	-	(4.6)	[11.4]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土	10%
436	弥生土器	甕	-	(2.2)	[7.2]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土	10%
TP888	弥生土器	甕	-	(10.0)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	頸部は6本櫛歯の平行沈線を縦2列、横3段以上の梯子状に施文 胴部は横位回転の付加条一種付加1条を施文	床面	431と同一個体
TP889	弥生土器	甕	-	(6.8)	-	石英・長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土下層	
TP890	弥生土器	甕	-	(8.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP891	弥生土器	甕	-	(5.1)	-	石英・長石	灰黄褐	普通	頸部は5本櫛歯の平行沈線を鋸歯状に施文 胴部は横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP892	弥生土器	甕	-	(2.5)	-	石英・長石	黒褐	普通	折り返し口縁 横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q225	台石	24.7	17.1	9.8	5360.0	砂岩	両面の中央部付近に痕状の凹み	覆土	PL54
Q226	敲石	8.3	9.5	3.0	319.1	砂岩	側縁部に敲打痕	覆土下層	

第15号住居跡 (第334図)

位置 調査区中央部のE 5 e1区で、標高24.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第131・132・153・155号土坑を掘り込み、第1号周溝に掘り込まれている。東側と南側は斜面で削平されている。

規模と形状 西側が第1号周溝に掘り込まれ、東側と南側が斜面で削平されているため、確認できた南北軸は、3.44m、確認できた東西軸は3.55mで、本来は長軸4.00m、短軸は3.50mほどで、主軸方向がN - 1° - Wの長方形と推測できる。壁高は6cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、2か所の炉とP1に囲まれた範囲が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部の北寄りに位置し、長径33cm、短径30cmの円形である。炉2は炉1から86cm東側に位置し、径31cmの円形である。炉1・炉2ともに覆土は確認できず、火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

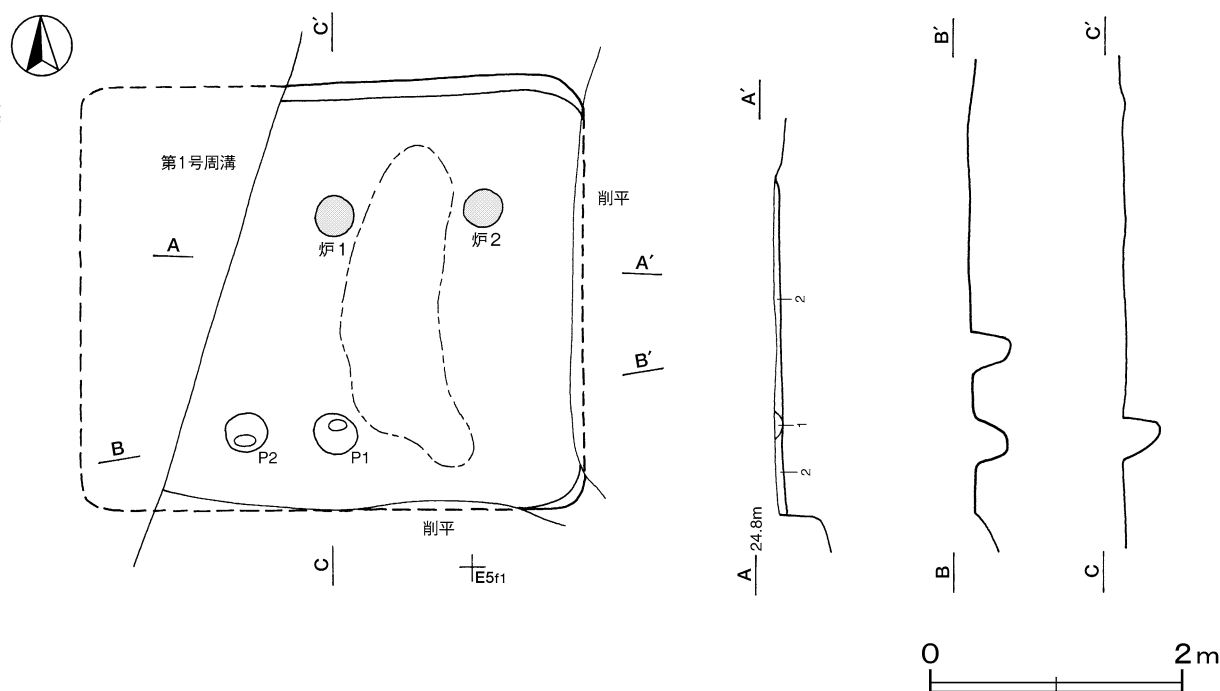
ピット 2か所。P1は深さ32cmで、出入口施設に関連するピットの可能性がある。P2は深さ29cmで、性格は不明である。

覆土 2層に分かれ、層厚が薄いので、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量

所見 時期は、重複関係から縄文時代中期以降、古墳時代後期までと推測できるが、平面形が長方形で、内部施設として炉を有していること、当遺跡で確認された住居跡の様相から、弥生時代後期の可能性が高い。



第334図 第15号住居跡実測図

第16号住居跡 (第335図)

位置 調査区中央部の E 5 a2区で、標高24.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第164・167・168・169・170号土坑を掘り込んでいる。北側と西側は攪乱で削平されている。

規模と形状 北側と西側が攪乱で削平されているため、確認できた長軸は4.48m、確認できた短軸は4.21mで、本来は長軸5.00m、短軸は4.30mほどで、主軸方向がN - 32° - Wの楕円形と推測できる。壁高は5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 6か所。P1～P5は深さ24～57cmで、柱穴と考えられる。P6は深さ29cmで、性格は不明である。

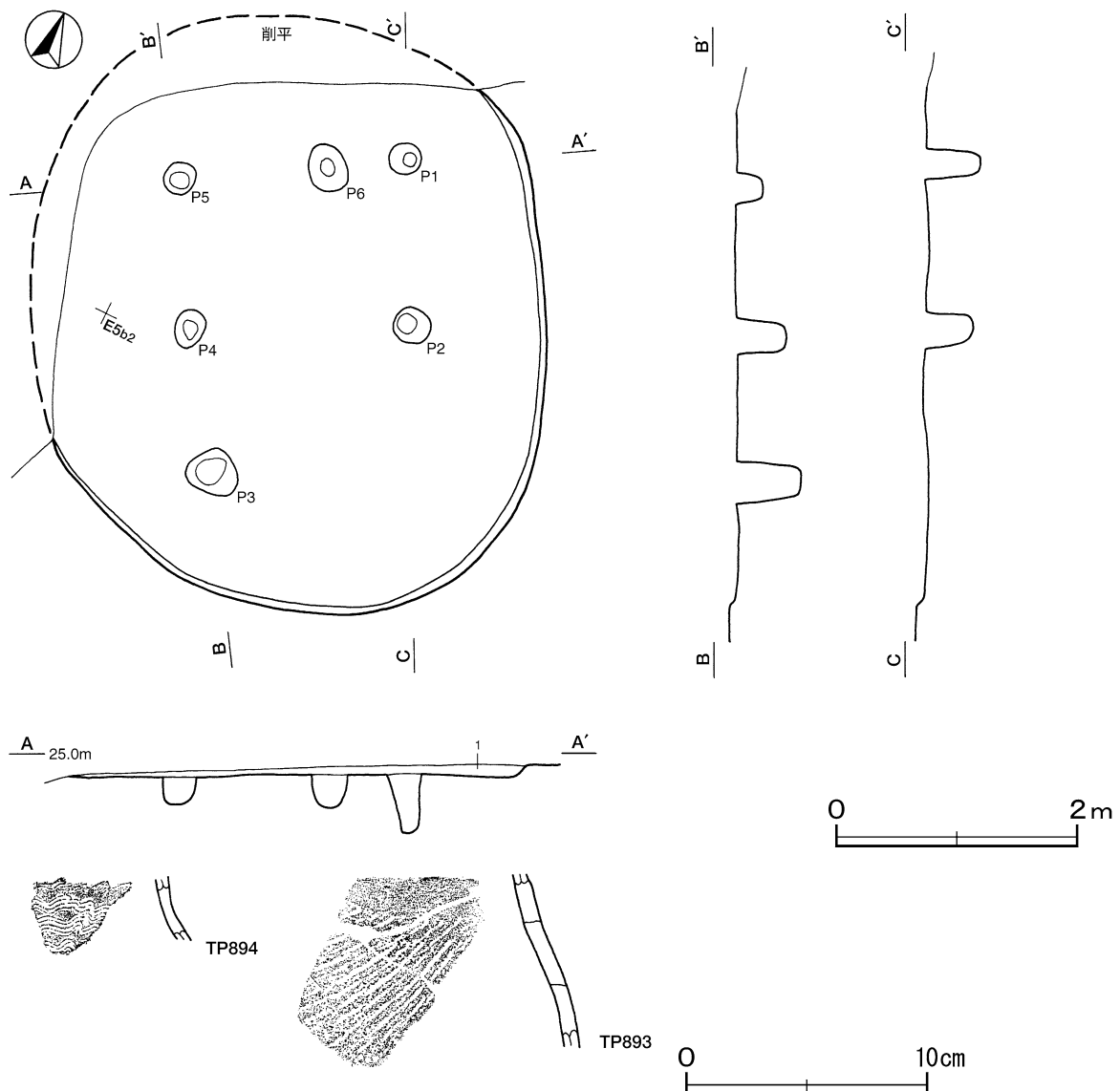
覆土 単一層。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量 焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片21点(甕)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片16点も出土している。

所見 時期は、土器片の様相から後期前葉である。



第335図 第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第335図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP893	弥生土器	甕	-	(7.4)	-	石英・長石	灰黄褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP894	弥生土器	甕	-	(2.7)	-	石英・長石	黒	普通	4本櫛歯の波状文を横位に施文	覆土	

第18号住居跡（第336図）

位置 調査区中央部のE 5 a6区で、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北側が第2・6号溝に掘り込まれているため、確認できた長軸は5.82mで、本来は長軸6.10mほど、短軸4.84mで、主軸方向がN - 33° - Wの長方形と推測できる。壁高は23~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部の北寄りに位置する地床炉である。長径70cm、短径57cmの楕円形で、床面を皿状に10cm掘りくぼめている。火床面は第1層の下面で、火熱を受けて赤変硬化している。炉2は炉1の南側に近接し、長径50cm、短径35cmの楕円形で、床面を皿状に8cm掘りくぼめている。火床面は第1層の下面で、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量 2 赤褐色 焼土ブロック多量，ロームブロック中量

ピット 5か所。P1~P4は深さ49~66cmで、主柱穴と考えられる。P5は深さ45cmで、出入り口施設に関連するピットと考えられる。

覆土 5層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

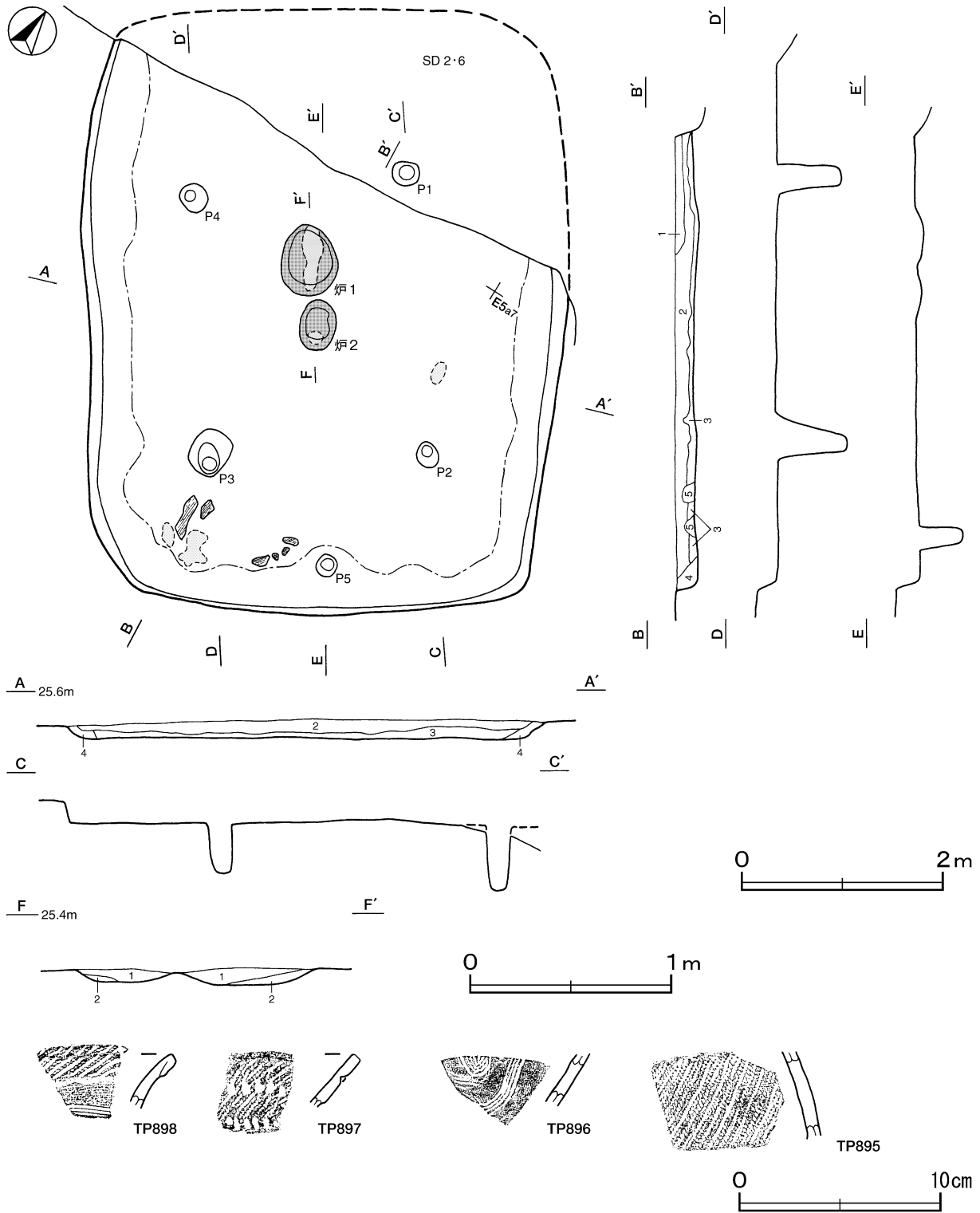
- 1 黒褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 5 黒褐色 焼土ブロック・炭化材多量，ローム粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片31点（甕）が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片43点，土器片錘1点，混入した土師器片6点，土師質土器片2点も出土している。また、南コーナー部と東側の床面直上から、焼土塊と炭化材がまとまって出土している。

所見 時期は、土器片の様相から後期前葉である。2基の炉は造り替えではなく、規模から炉1が主炉、炉2が副炉として、同時に使用されていたと考えられる。南コーナー部を中心に、焼土塊と炭化材が出土しているが、それらは量的に少なく、床や壁に火熱を受けた痕跡も認められないため、上屋などが焼失した可能性は低いと考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表（第336図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP895	弥生土器	甕	-	(4.2)	-	石英・長石	灰黄褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP896	弥生土器	甕	-	(2.6)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	4本櫛歯で連弧状のモチーフを描出	覆土	
TP897	弥生土器	甕	-	(2.6)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	2段の刺突文を巡らす 横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	
TP898	弥生土器	甕	-	(2.8)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	折り返し口縁 横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部は最低でも3本櫛歯の平行沈線を巡らす	覆土	



第336图 第18号住居跡・出土遺物実測図

第21号住居跡（第337図）

位置 調査区中央部の E 5 e8区，標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号建物跡を掘り込み，第1号墳に掘り込まれている。

規模と形状 南側が第1号墳に掘り込まれているため，確認できた南北軸は1.74mで，本来は南北軸4.20mほど，東西軸4.83mで，主軸方向がN - 21° - Wの長方形と推測できる。壁高は10～12cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

炉 北西コーナー寄りに位置する地床炉である。長径70cm，短径45cmの楕円形で，床面を皿状に8cm掘りくぼめている。明瞭な火床面は確認できなかった。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック中量，炭化物少量

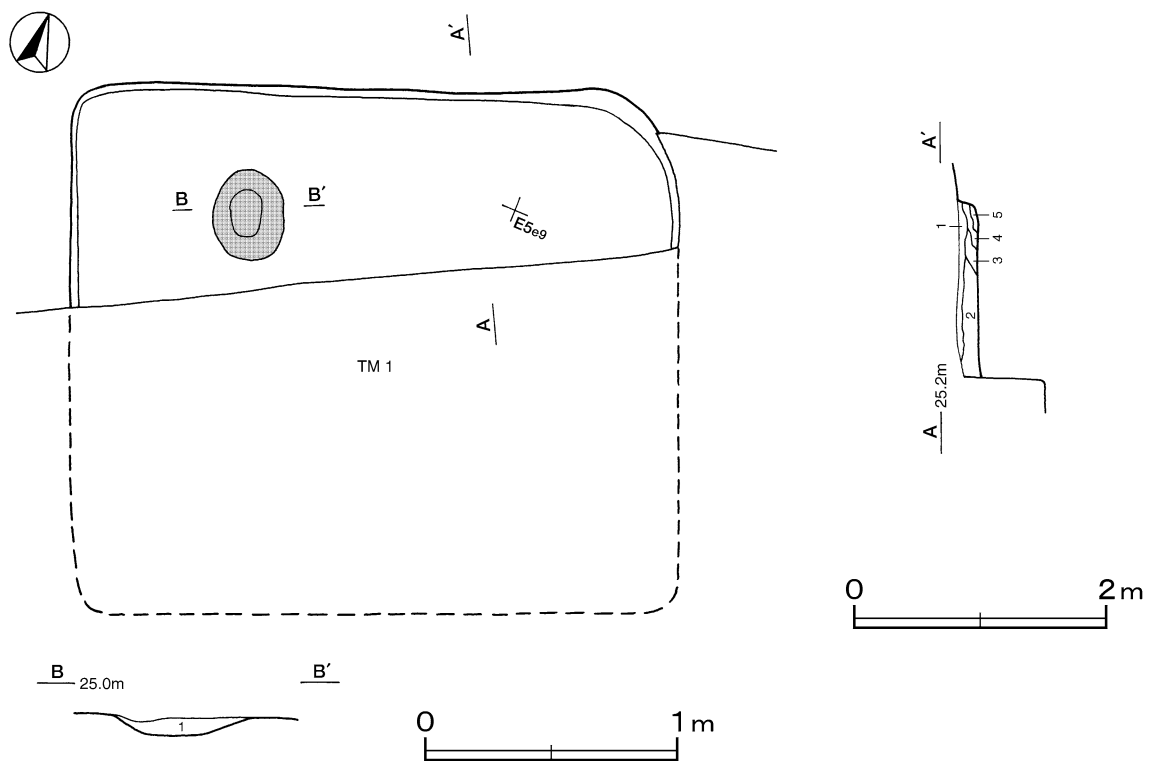
覆土 5層に分かれ，周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 3 明褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量
- 5 明褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片5点（甕）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片73点，混入した土師器片14点，須恵器片1点が出土している。

所見 出土土器は細片のため図示できない。時期は，重複関係から古墳時代後期以前と推測できるが，平面形が長方形で，内部施設として炉を有していること，当遺跡で確認された住居跡の様相から，弥生時代後期の可能性が高い。



第337図 第21号住居跡実測図

第25号住居跡 (第338図)

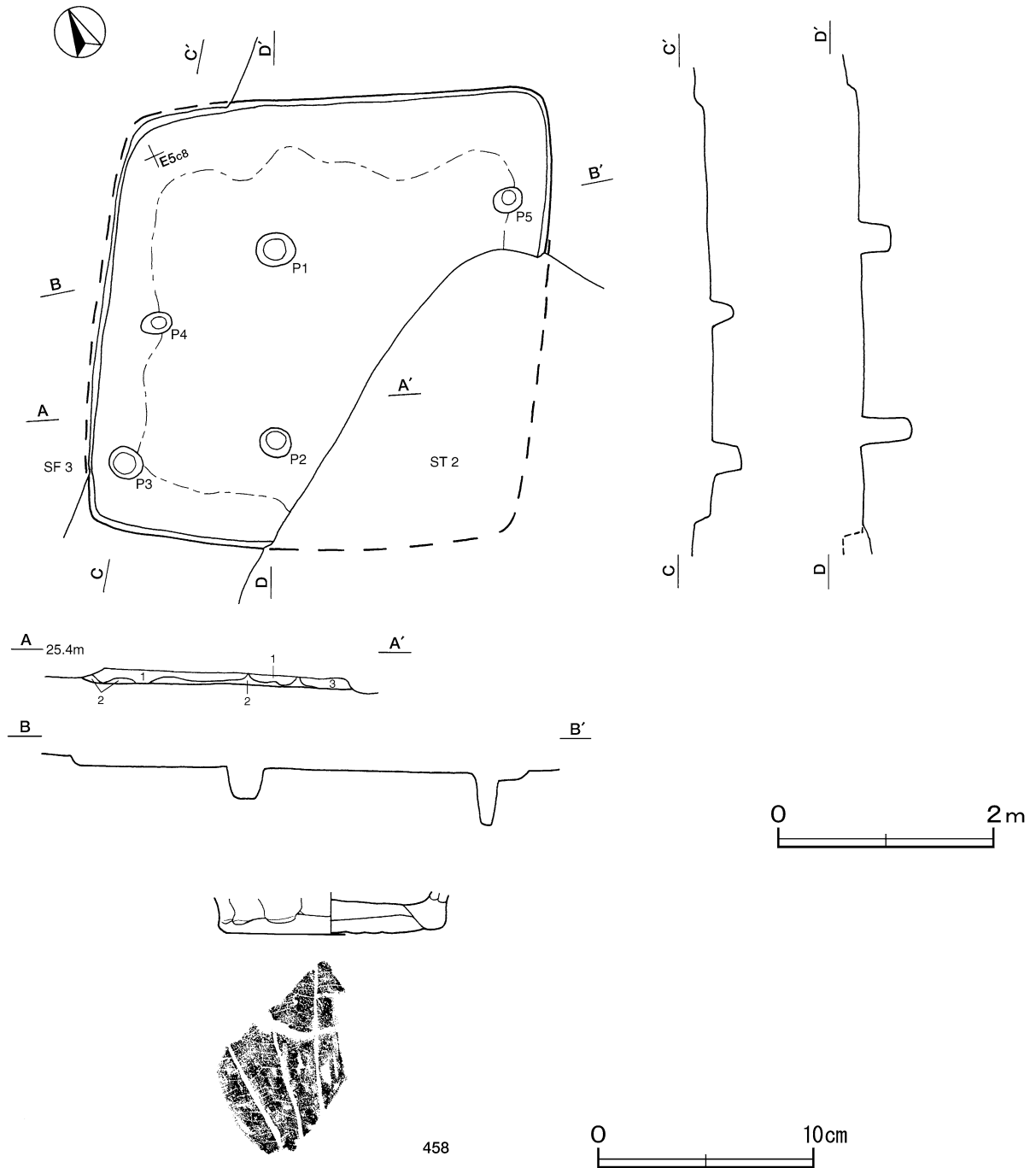
位置 調査区中央部の E 5 c8区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第263号土坑を掘り込み、第2号建物、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.18m、短軸4.04mの方形で、主軸方向はN - 31° - Eである。壁高は8 ~ 15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

ピット 5か所。P1は深さ30cm、P2は深さ45cmで、柱穴と考えられる。P3 ~ P5は深さ25 ~ 52cmで、性格は不明である。



第338図 第25号住居跡・出土遺物実測図

覆土 5層に分かれ、不自然な堆積状況から、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 明 褐 色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片18点（甕）が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片5点も出土している。

所見 時期は、土器片の様相から後期と推測できる。

第25号住居跡出土遺物観察表（第338図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
458	弥生土器	甕	-	(1.9)	[10.6]	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	ヘラナデ 底部木葉痕	覆土	5%

第26号住居跡（第339図）

位置 調査区東部のE 6 a5区で、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第345号土坑を掘り込み、第11号住居に掘り込まれている。北東側は調査区域外に延びている。

規模と形状 西側が第11号住居に掘り込まれ、北東側が調査区域外に延びているため、確認できた南北軸は、2.32m、確認できた東西軸は1.57mで、方形ないし長方形と推測できる。壁高は12cmで、外傾して立ち上がっている。

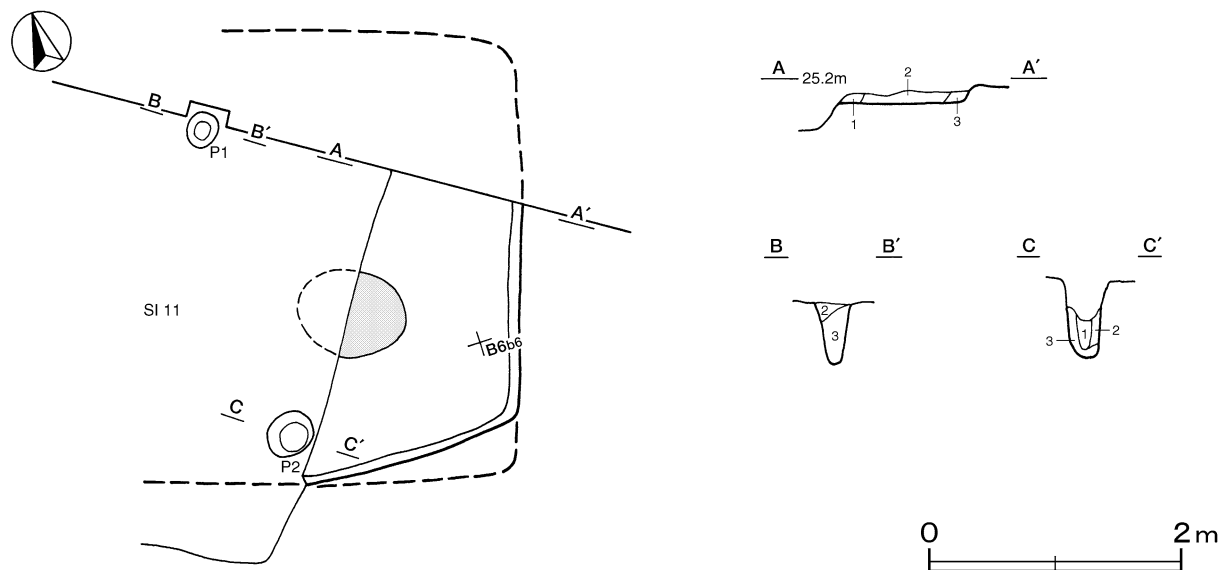
床 ほぼ平坦である。

炉 南東コーナー寄りに位置する地床炉である。確認できた長径は46cmで、本来の長径は90cmほど、短径70cmの楕円形と推測できる。覆土は確認できず、火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ47cm、P2は深さ55cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 褐 色 ロームブロック中量



第339図 第26号住居跡実測図

覆土 3層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 流入した縄文土器片3点が出土している。

所見 時期は、重複関係から縄文時代中期以降、古墳時代中期までと推測できるが、平面形が方形ないし長方形で、内部施設として炉を有していること、当遺跡で確認された住居跡の様相から、弥生時代後期の可能性が高い。

第27号住居跡 (第340・341図)

位置 調査区中央部のE 5 c5区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第275・286・318・319号土坑を掘り込み、第2号周溝に掘り込まれている。

規模と形状 南側が第2号周溝に掘り込まれているため、長軸4.55m、確認できた短軸は2.97mで、本来は短軸は3.00mほどで、主軸方向はN - 50° - Eの長方形と推測できる。壁高は5～30cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際及び南コーナー部付近を除いて踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置する地床炉である。長径54cm、短径41cmの楕円形で、床面を皿状に12cm掘りくぼめている。明瞭な火床面は確認できなかった。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

ピット 6か所を確認した。P1～P4は深さ18～53cmで、柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

覆土 7層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

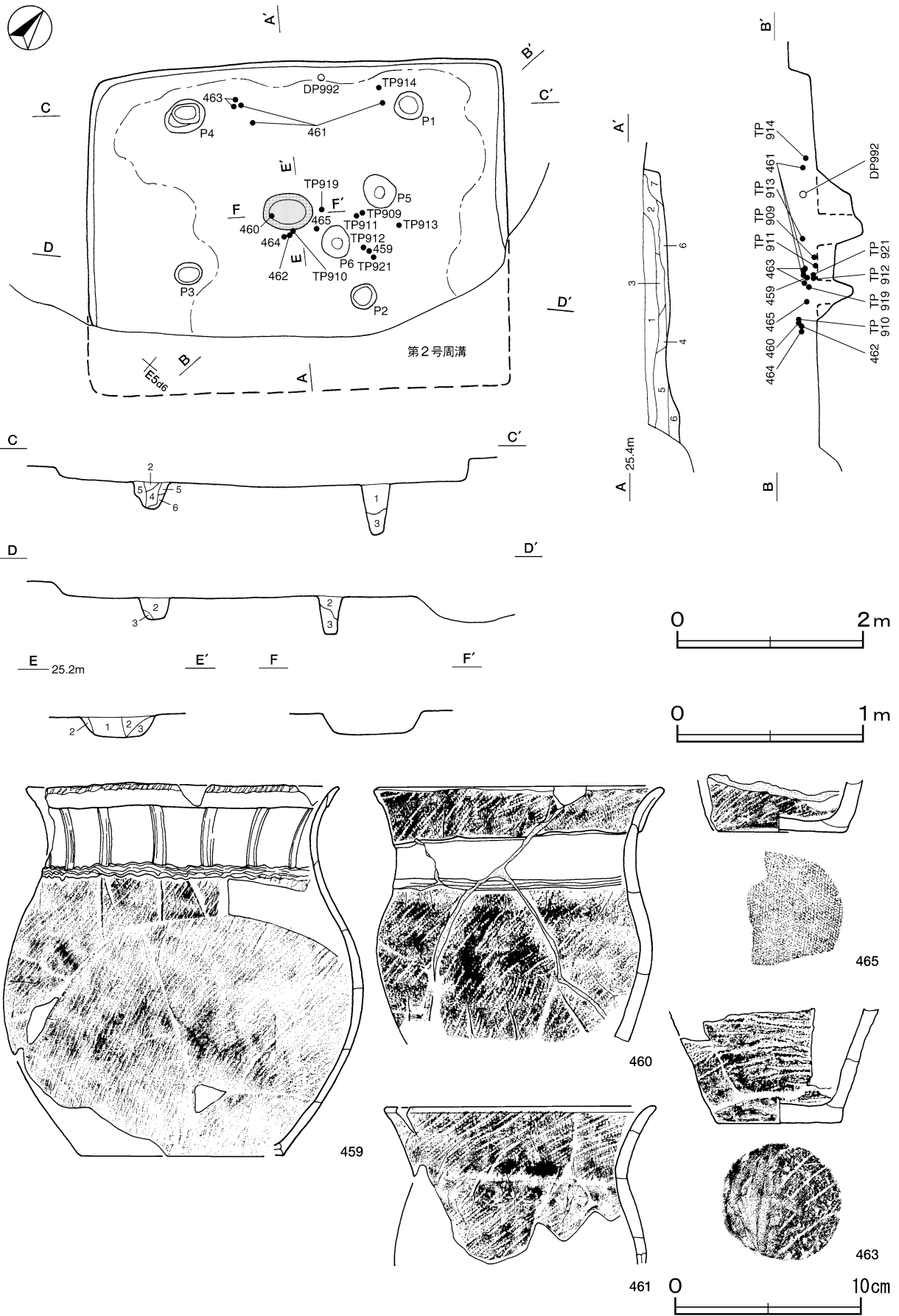
- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片331点(甕), 土製品1点(紡錘車)が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片33点, 磨製石斧1点, 剥片3点, 混入した土師器片3点も出土している。

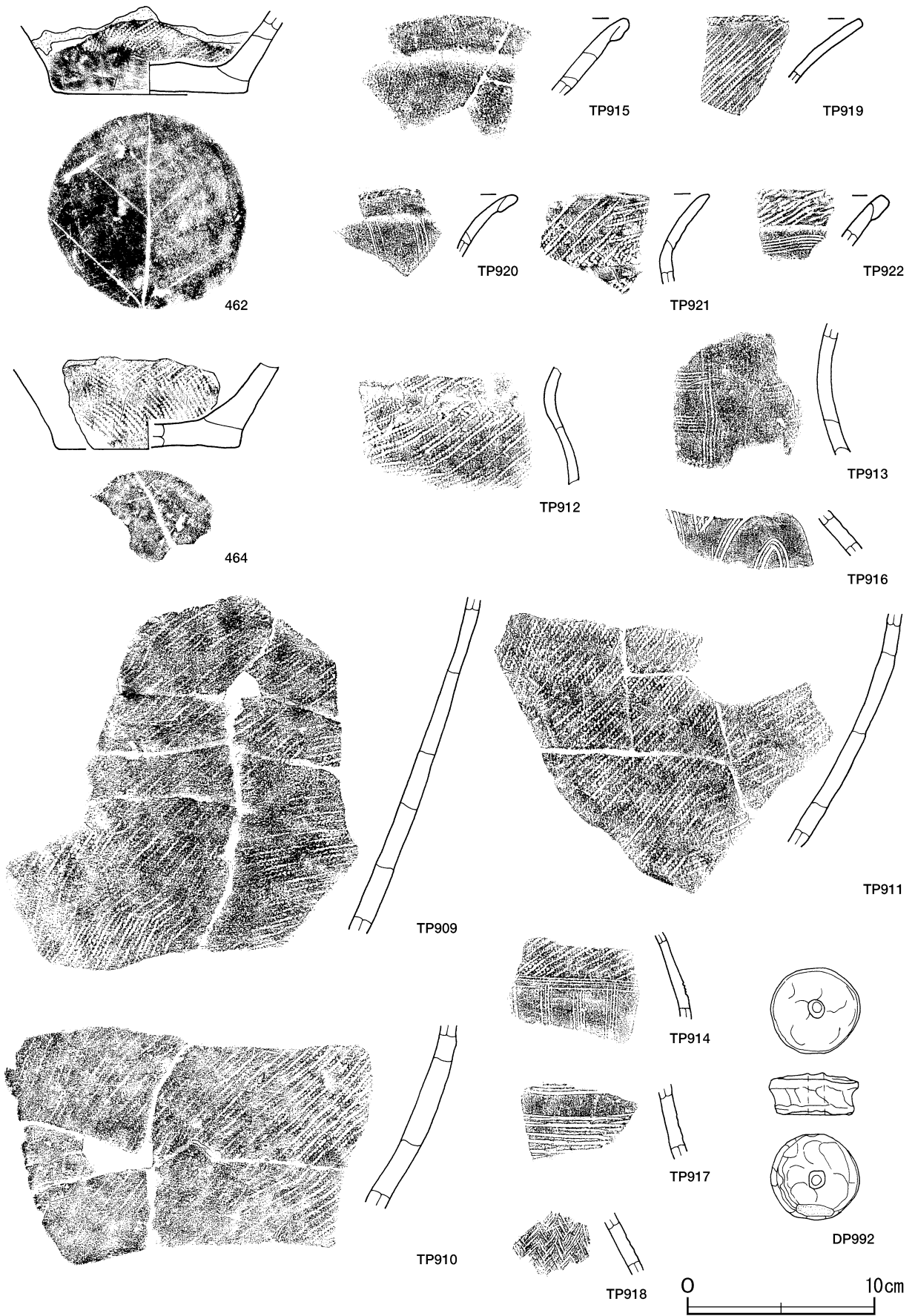
所見 時期は、出土土器から後期前葉～中葉である。

第27号住居跡出土遺物観察表 (第340・341図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
459	弥生土器	甕	16.6	19.8	10.9	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口縁 口唇部上端・胴部に横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部は4本櫛歯の平行沈線を縦8列以上, 下端で波状に施文	覆土下層	40% PL47
460	弥生土器	甕	15.2	13.7	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	折り返し口縁 口唇部・胴部に横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部は無文で, 下端に3本櫛歯の平行沈線を巡らす	覆土中層	30%
461	弥生土器	甕	14.6	8.5	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部・胴部に横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土中層	20%
462	弥生土器	甕	-	4.5	10.2	石英・長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	覆土中層	10%



第340图 第27号住居跡・出土遺物実測図



第341图 第27号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
463	弥生土器	甕	-	(6.1)	6.7	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕 強い指頭ナデ	覆土中層	10%
464	弥生土器	甕	-	(4.6)	[9.4]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	縦位・横位回転の付加条一種付加1条を羽状 構成に施文 底部木葉痕	覆土中層	10%
465	弥生土器	甕	-	(2.8)	[7.0]	石英・長石・雲母	黄橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部 布目痕	覆土中層	10%
TP909	弥生土器	甕	-	(18.1)	-	長石	橙	普通	横位・斜位の付加条一種付加1条を施文	覆土下層	
TP910	弥生土器	甕	-	(9.8)	-	石英・長石	浅黄橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土中層	
TP911	弥生土器	甕	-	(12.4)	-	石英・長石	明赤褐	普通	横位・斜位の付加条一種付加1条を施文	覆土下層	
TP912	弥生土器	甕	-	(6.2)	-	長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加2条を施文	覆土下層	
TP913	弥生土器	甕	-	(7.0)	-	長石	暗灰黄	普通	6本櫛歯の平行沈線を縦2列、横2段以上の 梯子状に施文	覆土中層	
TP914	弥生土器	甕	-	(4.8)	-	石英・長石	橙	普通	4本櫛歯の平行沈線を縦4列以上、頸部下端に巡ら し、胴部は横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土中層	
TP915	弥生土器	甕	-	(4.1)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	折り返し口縁 無文	覆土	
TP916	弥生土器	甕	-	(3.0)	-	石英・長石	橙	普通	2本櫛歯の平行沈線で弧状のモチーフを描く	覆土	
TP917	弥生土器	甕	-	(4.1)	-	石英・長石	明赤褐	普通	2本櫛歯の平行沈線を巡らす	覆土	
TP918	弥生土器	甕	-	(3.5)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	鋸歯状に沈線を施文	覆土	
TP919	弥生土器	甕	-	(3.5)	-	石英・長石	明赤褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土下層	
TP920	弥生土器	甕	-	(3.4)	-	石英・長石	にぶい黄褐	普通	折り返し口縁 口唇部上端に付加条一種付加1条を 施文 頸部は4本櫛歯の平行沈線を縦2列以上施文	覆土	
TP921	弥生土器	甕	-	(4.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土下層	
TP922	弥生土器	甕	-	(2.7)	-	石英・長石	灰黄褐	普通	折り返し口縁 口唇部上端に付加条一種付加1 条を施文 頸部は5本櫛歯の平行沈線を巡らす	覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP992	紡錘車	4.5	4.7	2.3	55.2	粘土/石英・長石	指頭ナデ調整 1方向からの穿孔 孔径0.5cm	覆土中層	PL57

第29号住居跡（第342図）

位置 調査区中央部のE 5 b4区で、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号周溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.62m、短軸3.35mの方形で、主軸方向はN - 52° - Eである。壁高は10～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は深さ46cm、P2は深さ47cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量

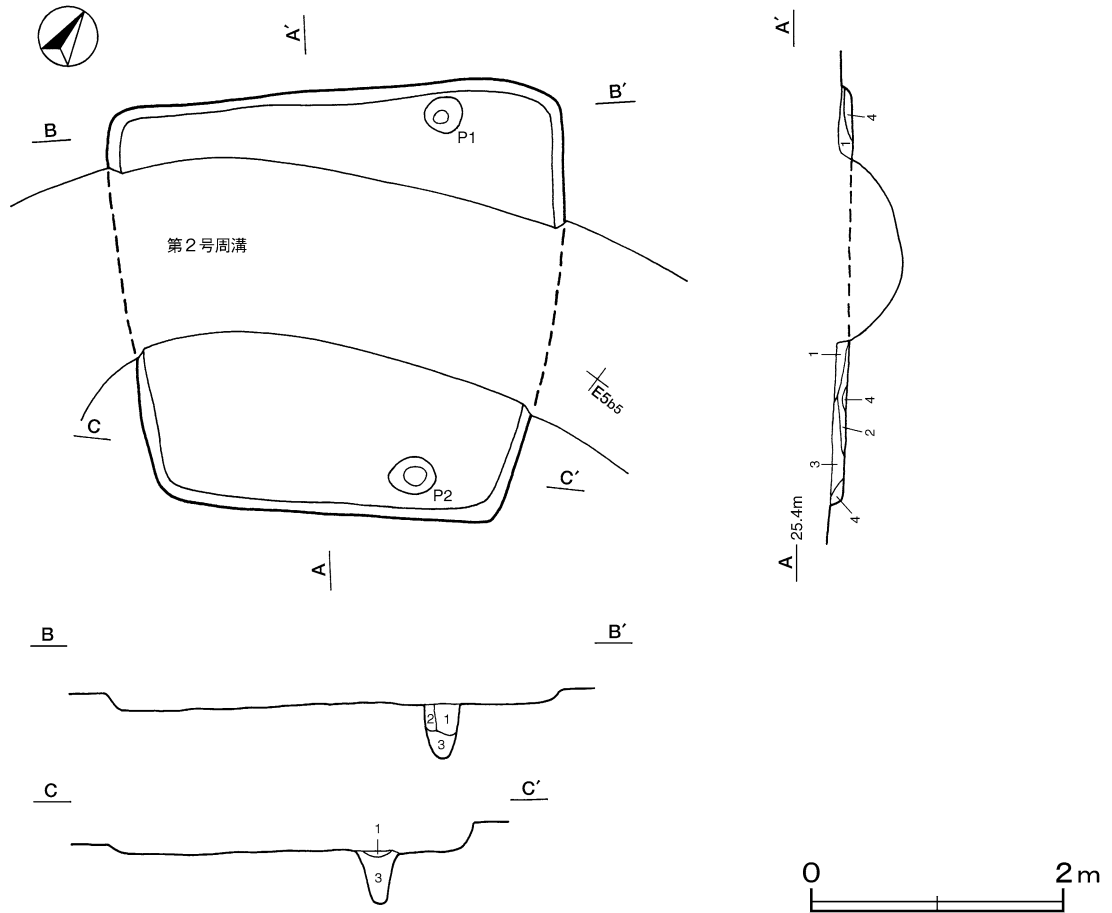
覆土 4層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
2 褐色 ロームブロック中量 焼土ブロック少量 炭化物微量 4 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片9点（甕）が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片3点、混入した土師器片1点も出土している。

所見 出土土器は細片のため図示できない。時期は、土器片の様相から後期と推測できる。



第342図 第29号住居跡実測図

表6 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設							覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								ピット				竈	炉	貯蔵 穴				
								主柱穴	柱穴	出入口	不明							
4	D 4 g9	N - 33° - E	隅丸長方形	(4.54)×(4.00)	7 ~ 9	平坦	-	3	-	-	-	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器	後期	SK2・55~57・ 63→本跡→S11
6	D 5 h2	N - 20° - W	[方形]	(4.63)×(5.00)	20~40	平坦	-	2	-	1	-	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器	中期後葉 ~後期初頭	SK87・116→本跡 →SK74, 第1号周溝
8	D 5 f4	N - 61° - W	[長方形]	(4.42)×4.46	3 ~ 8	平坦	-	-	-	1	-	-	-	-	自然	弥生土器	中期後葉	本跡→SI7, SD1
10	D 5 g7	N - 15° - W	[長方形]	(3.56)×(3.46)	8 ~ 18	平坦	-	3	-	-	-	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器	中期末葉 ~後期初頭	本跡→SD 1
13	D 4 j0	N - 54° - W	[方形]	3.56 ×(3.00)	16~22	平坦	-	-	-	1	-	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器	中期末葉 ~後期初頭	SK130・150→本 跡
14	E 6 a2	N - 26° - W	長方形	6.41 × 4.02	25~27	平坦	-	4	-	1	-	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器・台 石・敲石	後期前葉	-
15	E 5 e1	N - 1° - W	[長方形]	(3.55)×(3.44)	6	平坦	-	-	-	1	1	-	地床炉 2	-	-	-	後期	SK131・132・153・155 →本跡→第2号周溝
16	E 5 a2	N - 32° - W	[橢円形]	(4.48)×(4.21)	5	平坦	-	5	-	-	1	-	-	-	-	弥生土器	後期前葉	SK164・167~ 170→本跡
18	E 5 a6	N - 33° - W	[長方形]	(5.82)×4.84	23~34	平坦	-	4	-	1	-	-	地床炉 2	-	自然	弥生土器	後期前葉	本跡→SD2・6
21	E 5 e8	N - 21° - W	[長方形]	4.83 ×(1.74)	10~12	平坦	-	-	-	-	-	-	地床炉 1	-	-	弥生土器	後期	本跡→ST3, 第1 号周溝
25	E 5 c8	N - 31° - E	方形	4.18 × 4.04	8 ~ 15	平坦	-	-	2	-	3	-	-	-	人為	弥生土器	後期	SK263→本跡→ ST2, SF3
26	E 6 a5	-	[方・長方形]	(2.32)×(1.57)	12	平坦	-	-	-	-	2	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器	後期	SK345→本跡→ S111
27	E 5 c5	N - 50° - E	[長方形]	4.55 ×(2.97)	5 ~ 30	平坦	-	4	-	1	1	-	地床炉 1	-	自然	弥生土器・紡 錘車	後期前葉 ~中葉	SK275・318・319・326 →本跡→第2号周溝
29	E 5 b4	N - 52° - E	方形	3.62 × 3.35	10~20	平坦	-	-	-	-	2	-	-	-	人為	弥生土器	後期	本跡→第2号周溝

(2) 土坑

第71号土坑 (第343図)

位置 調査区北部のD 5 f2区で、標高24.9mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.50m, 短径0.45mの円形である。深さは23cmで、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は緩やかな凹凸を有している。

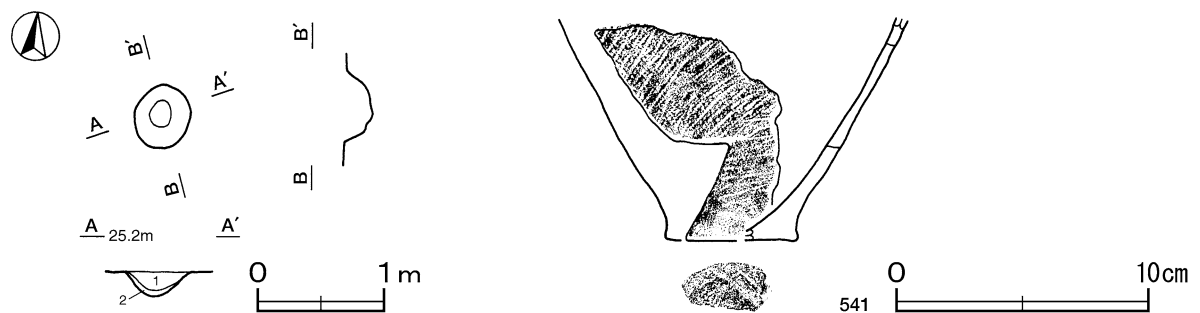
覆土 2層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片9点(甕)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片11点も出土している。

所見 時期は、土器片の様相から後期と推測できる。



第343図 第71号土坑・出土遺物実測図

第71号土坑出土遺物観察表 (第343図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
541	弥生土器	甕	-	(8.8)	[5.2]	長石・雲母	にぶい横縞	普通	横位・斜位回転の付加条一種付加1条を施文	覆土	10%

第210号土坑 (第344図)

位置 調査区南部のE 5 i7区で、標高24.9mの台地平坦部に位置している。

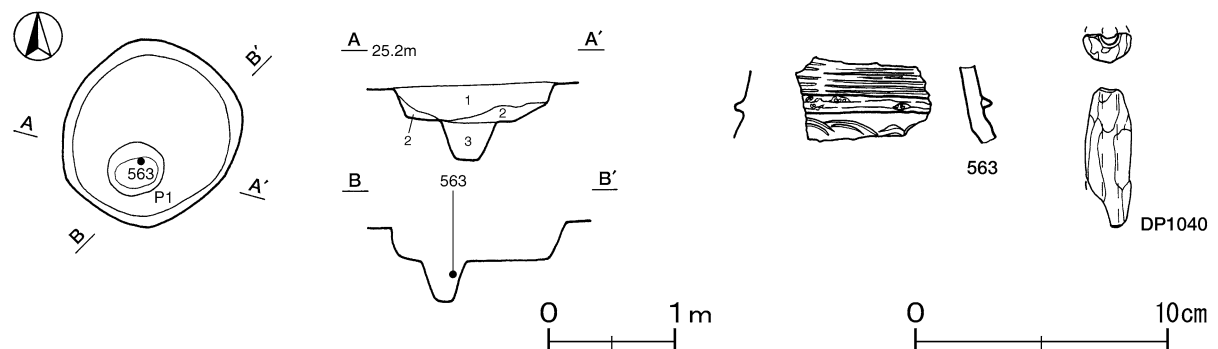
重複関係 第212号土坑を掘り込んでいる。第23号住居跡と重複しているが、先後関係は不明である。

規模と形状 長径1.43m, 短径1.37mの円形で、深さは30cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、中央部の南寄りに深さ31cmのP1を有している。

覆土 3層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量



第344図 第210号土坑・出土遺物実測図

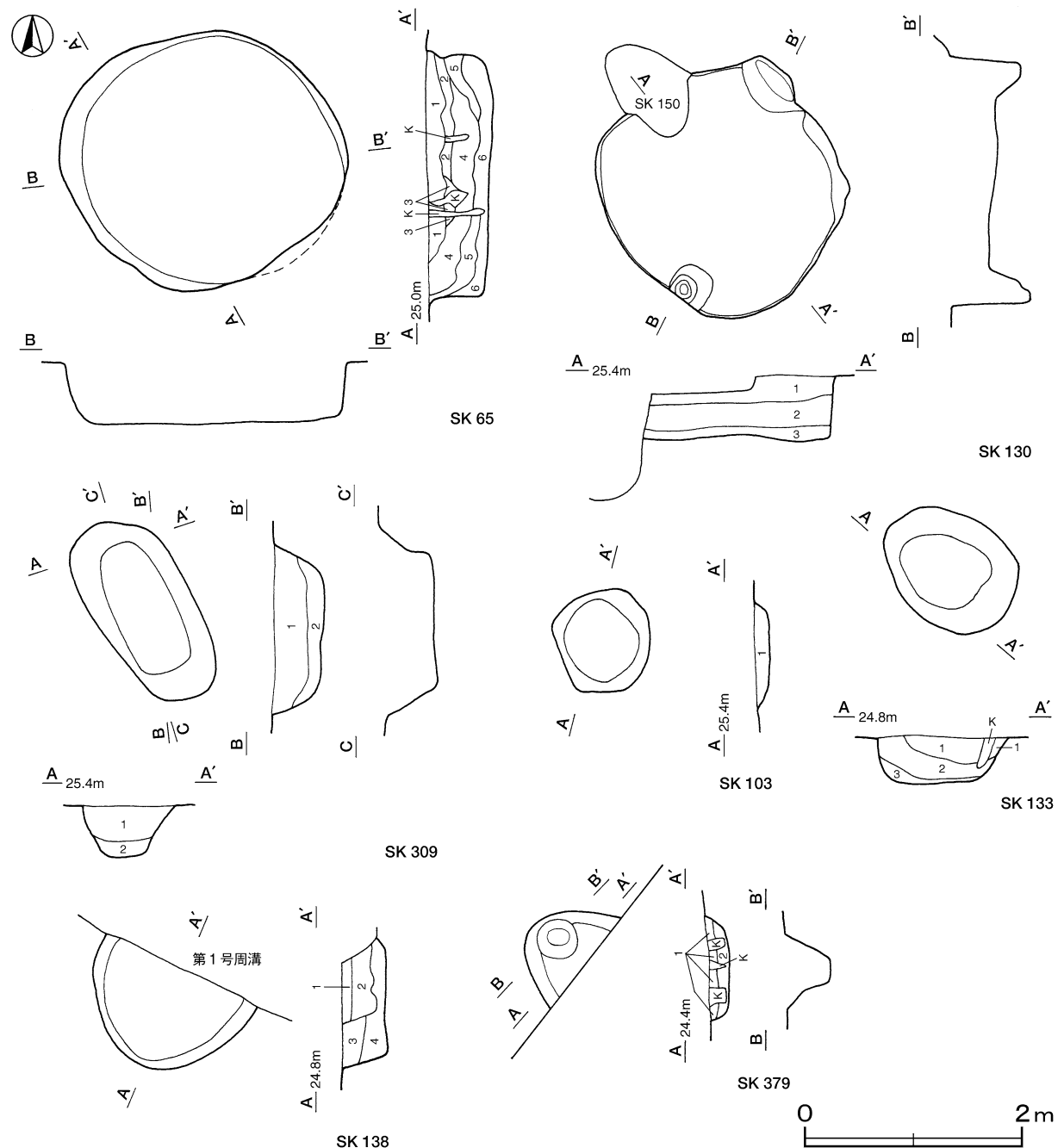
遺物出土状況 弥生土器片3点(壺), 土製品1点(管状土錘)が, 覆土中から出土している。その他, 縄文土器片190点(深鉢), 石器2点(剥片, 軽石), 土製品2点(土器片錘)も出土している。

所見 時期は, 土器片の様相から中期末葉である。

第210号土坑出土遺物観察表(第344図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
563	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	突帯を巡らし, 先端の鋭い棒状工具によって横位の平行沈線と重弧状のモチーフを描出	P 1 覆土	5%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP1040	管状土錘	1.9	5.5	0.6	(8.1)	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土	



第345図 土坑実測図

第65号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量

第103号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量

第130号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第133号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第138号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

第309号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子微量

第379号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

表7 弥生時代土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	時期	分類	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸(m)	深さ (cm)								
65	D 5 f 1	円形	-	2.45 × 2.44	57	外傾	平坦	-	人為	弥生土器	-	A	SK64→本跡
71	D 5 f 2	円形	-	0.50 × 0.45	23	緩斜	凹凸	-	自然	弥生土器	後期	C	-
103	E 6 d 2	不整形	N - 15° - E	0.98 × 0.92	14	緩斜	平坦	-	自然	弥生土器	-	C	SK104→本跡
130	D 5 j 0	[楕円形]	N - 39° - W	(2.23) × (2.17)	45	直立	平坦	2	自然	弥生土器	-	A	本跡→SK150, S113
133	E 4 e 9	楕円形	N - 48° - W	1.33 × 1.04	44	緩斜	平坦	-	自然	弥生土器	-	B	本跡→第1号周溝
138	E 4 c 9	-	N - 27° - E	1.53 × (0.97)	42	緩斜	平坦	-	自然	弥生土器	-	B	本跡→第1号周溝
210	E 5 i 7	円形	-	1.43 × 1.37	30	外傾	平坦	-	自然	弥生土器・管状土錘	中期末葉	C	SK212, S123→本跡
309	E 5 d 6	楕円形	N - 25° - W	1.81 × 0.89	50	緩斜	平坦	-	自然	弥生土器	-	B	本跡→SK296
379	E 7 f 3	-	-	1.01 × (0.61)	20	緩斜	平坦	1	自然	弥生土器	-	B	-

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡8軒、土坑5基、古墳1基である。これらの遺構は標高23.8~25.2mの台地縁辺部から平坦部に位置し、時期は中期と推測できる。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

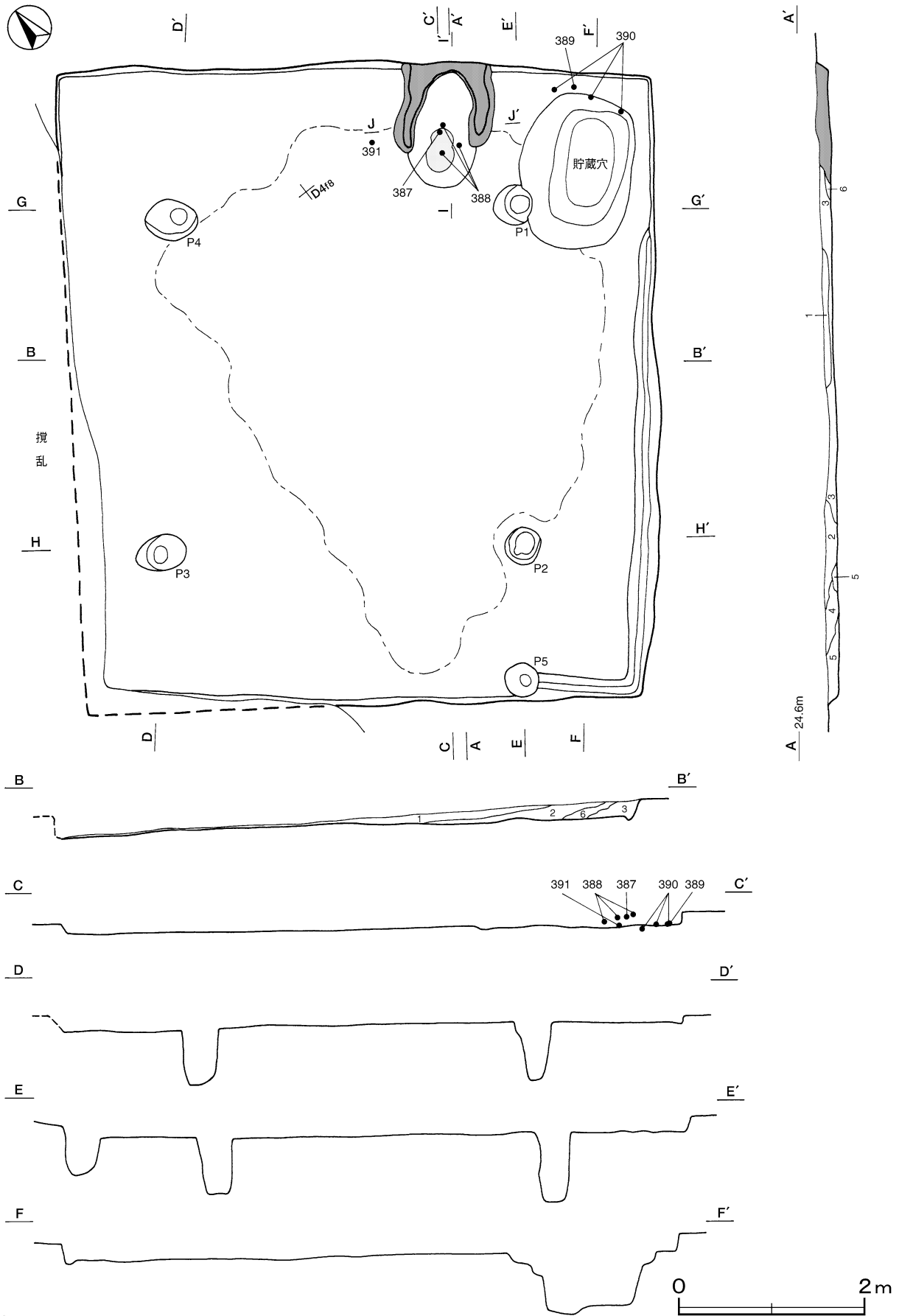
第1号住居跡 (第346~348図)

位置 調査区北部のD 4 f 7区で、標高24.4mの台地縁辺部に位置している。

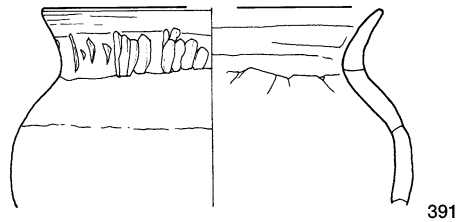
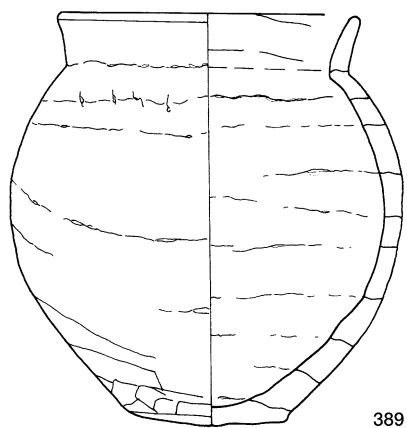
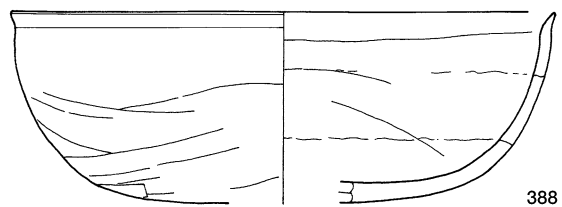
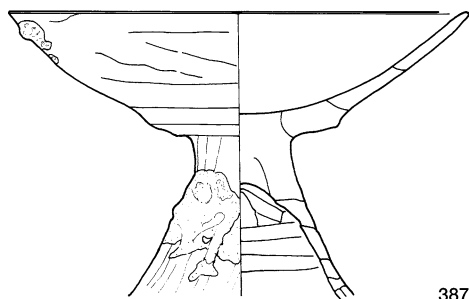
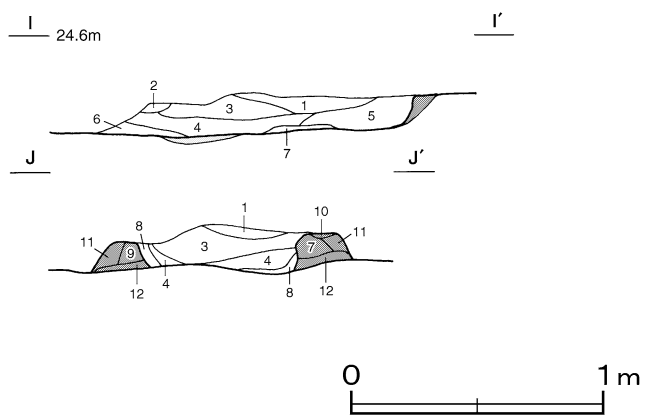
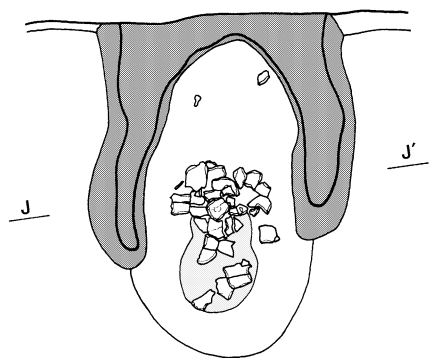
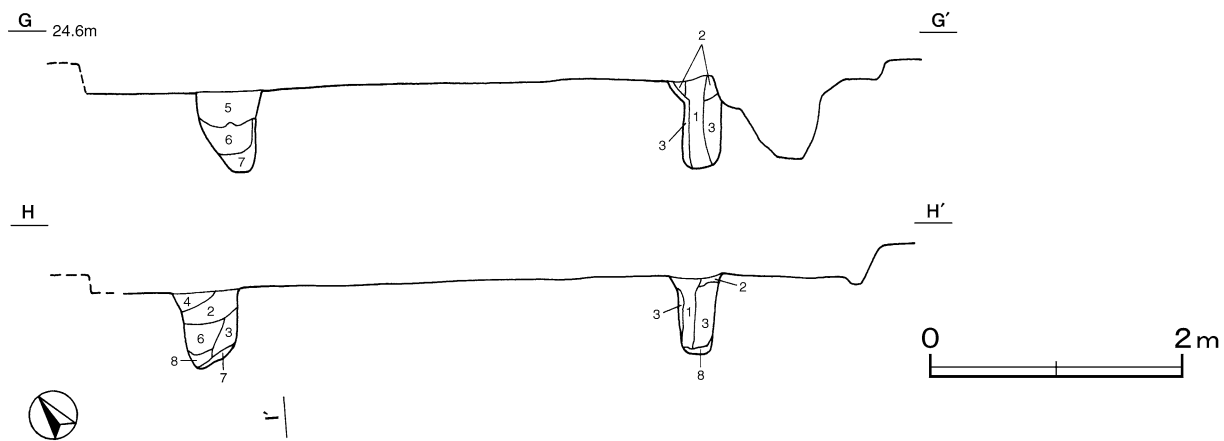
重複関係 第4号住居跡、第2号土坑を掘り込んでいる。西側は斜面で削平されている。

規模と形状 長軸6.91m, 短軸6.46mの方形で、主軸方向はN - 45° - Eである。壁高は5~26cmで、外傾して立ち上がっている。

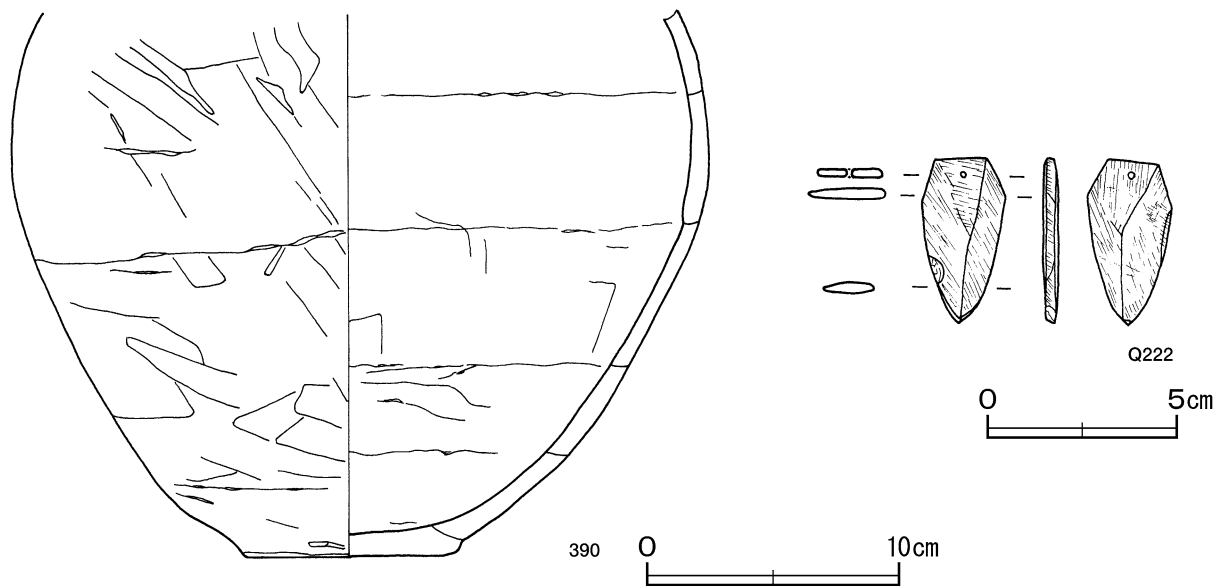
床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が北東壁及び南西壁の一部の壁の直下で確認され、幅は17~30cm, 深さ5cmで、断面形はU字状である。



第346图 第1号住居跡実測图



第347图 第1号住居跡・出土遺物実測図



第348図 第1号住居跡出土遺物実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ61～74cmで、主柱穴と考えられる。P5は深さ47cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 |

竈 北東壁の東寄りに位置し、煙道部は壁外まで掘り込まれていない。規模は、焚口部から煙道部まで135cm、燃焼部幅60cmである。袖部は第9～12層で、ロームブロック・砂質粘土ブロックの褐色土で構築している。燃焼部の中央部から焚口部寄りに位置する火床面は、床面をわずかに掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------|-----------|------------------------------------|
| 1 にぶい褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | 焼土ブロック少量, 砂質粘土ブロック・ローム粒子微量子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 にぶい黄褐色 | 砂質粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | 砂質粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 5 黒褐色 | 砂質粘土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック中量 |
| 6 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量 | | |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長径170cm、短径120cmの楕円形で、深さは66cmである。底面は緩やかな凹凸を有し、壁は底面から中位まで直立し、上位で外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片263点(椀11, 高坏20, 鉢13, 甕219), 石製品1点(剣形模造品)が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片809点, 弥生土器片36点, 土器細片34点, 土器片錘1点, 土器片円盤1点, 剥片2点も出土している。東コーナー部の貯蔵穴の周囲から大形の土器片が出土している。竈内からは、388を含む土器片が正位の状態の378の上から潰れた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉である。後述する第2号住居跡と規模や形状、主軸方向、内部施設などの配置に共通性が認められる。

第1号住居跡出土遺物観察表(第347・348図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
387	土師器	高坏	18.1	(11.4)	-	石英・長石	橙	普通	外面ヘラナデ 脚部内面輪積み痕明瞭 支脚転用 2次焼成 焼成粘土付着	竈火床面	80% PL47
388	土師器	鉢	21.5	(7.5)	-	長石・雲母	橙	普通	ヘラナデ	竈覆土	45%
389	土師器	甕	12.0	16.2	6.3	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	外面ヘラナデ 胴部下端ヘラ削り 内面輪積み痕明瞭	床面	90% PL47
390	土師器	甕	-	(21.6)	7.9	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	内外面ヘラナデ	床面	40%
391	土師器	甕	[13.4]	(7.8)	-	雲母	橙	普通	口唇部外面横ナデ 口縁部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q222	剣形模造品	4.4	2.2	0.5	6.2	滑石	全面研磨調整 中央部に稜 上部穿孔 孔径0.2cm	覆土	PL55

第2号住居跡(第349~351図)

位置 調査区北部のD4h0区で、標高24.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第31・32・57・60・61・81号土坑を掘り込み、第1・34・58・82・83号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.98m、短軸6.90mの方形で、主軸方向はN-38°-Eである。壁高は19~28cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が全周し、幅は12~25cm、深さ6~14cmで、断面形はU字状である。

ピット 4か所。P1~P4は深さ67~73cmで、支柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量・炭化粒子微量
2 灰褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック中量、砂質粘土ブロック少量
3 褐灰色	ローム粒子・焼土粒子少量		

竈 北東壁の東寄りに位置し、煙道部は壁をわずかに掘り込んでいる。規模は、焚口部から煙道部まで165cm、燃烧部幅48cmである。袖部は第9~13層で、ロームブロック・砂質粘土ブロックの褐色土で構築している。燃烧部のほぼ中央部に位置する火床面は、床面をわずかに掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

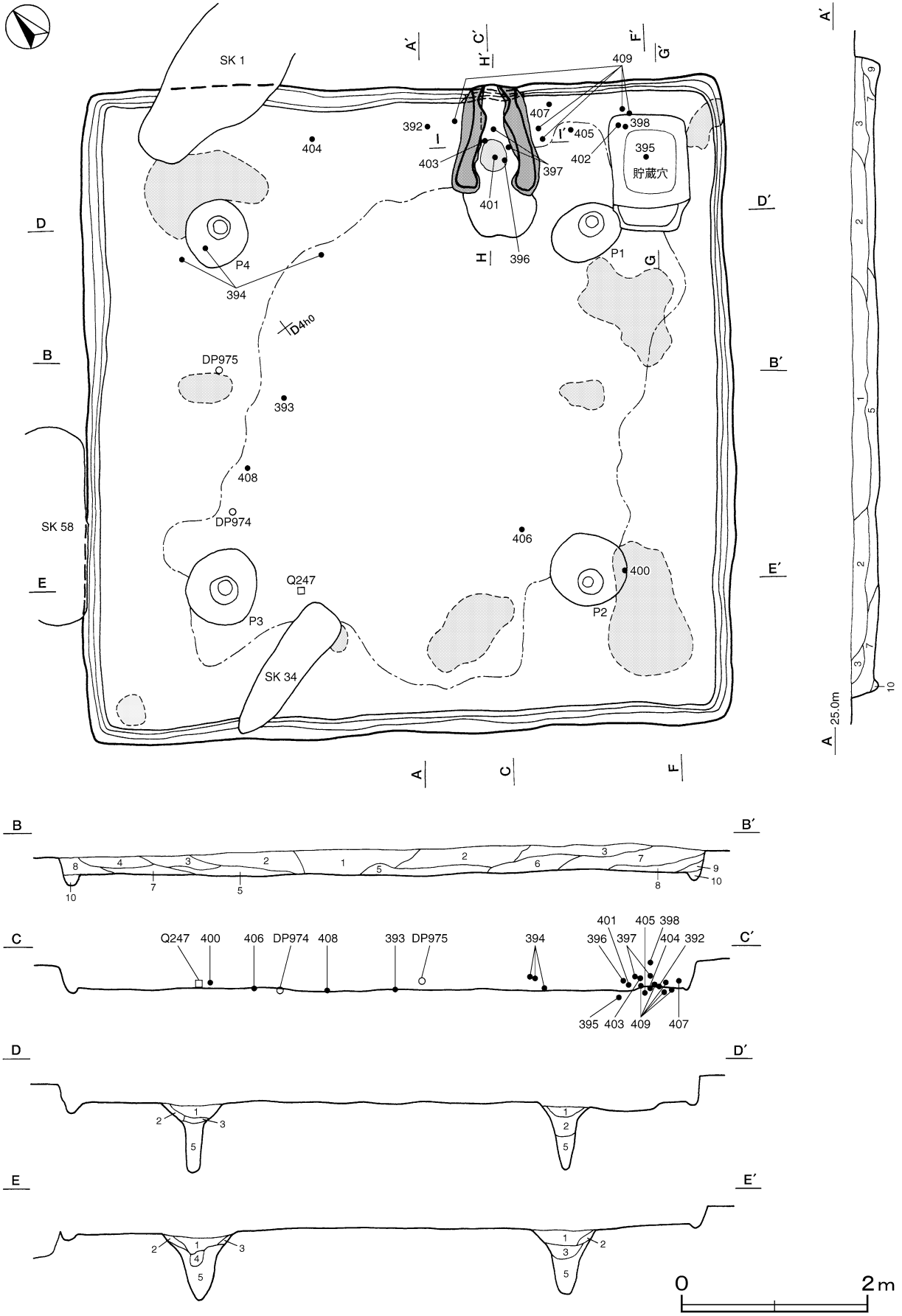
竈土層解説

1 黒褐色	砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	7 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量
2 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック中量、ローム粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・砂質粘土ブロック少量、炭化物微量
3 赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	9 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量
4 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・砂質粘土ブロック・炭化粒子微量	10 赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒中量
5 暗褐色	ロームブロック少量、砂質粘土ブロック微量	11 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量	12 暗赤褐色	砂質粘土ブロック・焼土ブロック中量
		13 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量

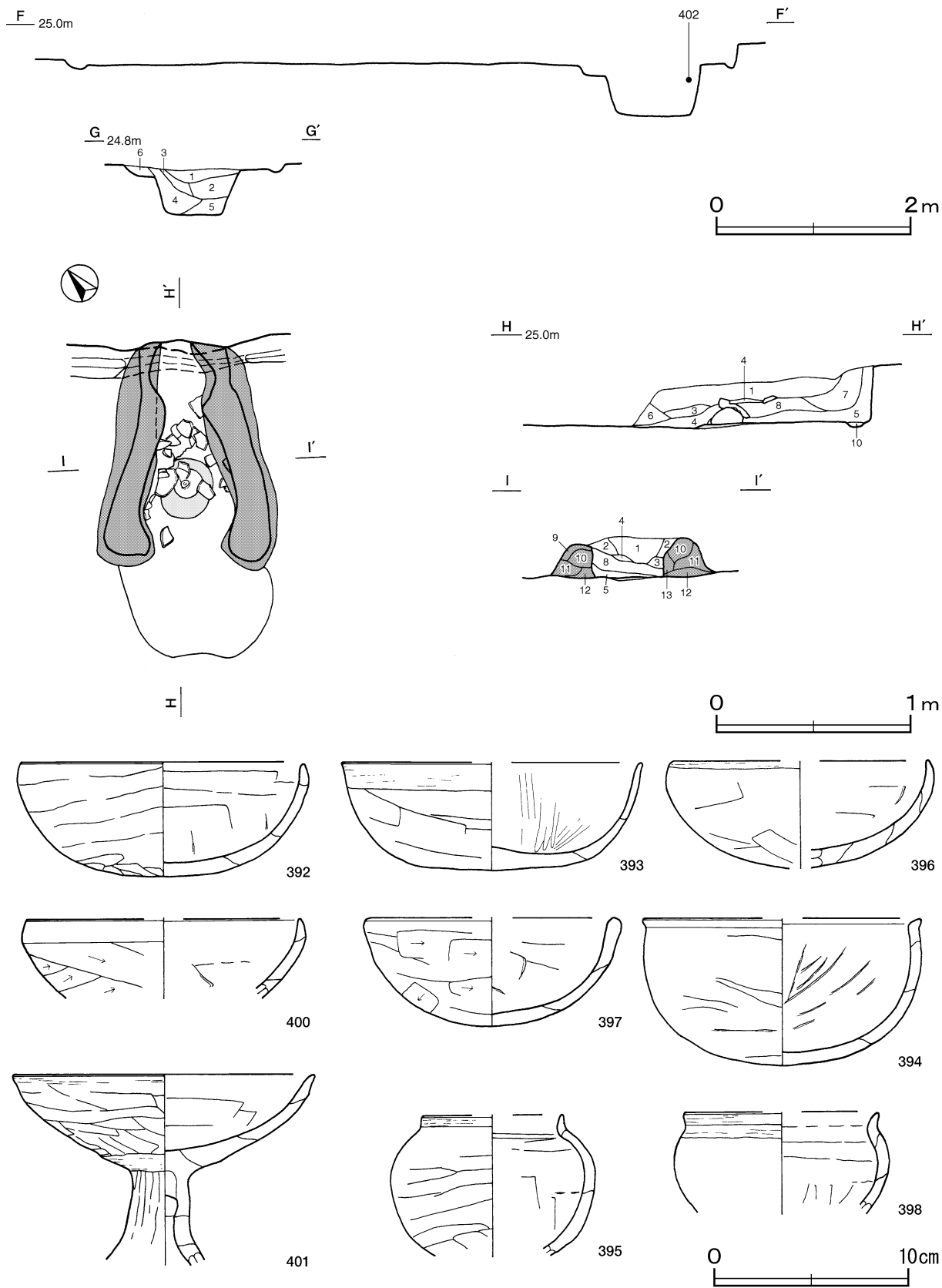
貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長軸125cm、短軸85cmの長方形で、深さは50cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立し、南西側に深さ5cmの浅いテラス状の段を有している。

貯蔵穴土層解説

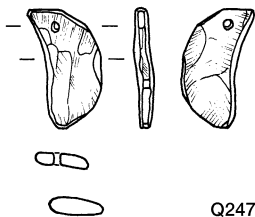
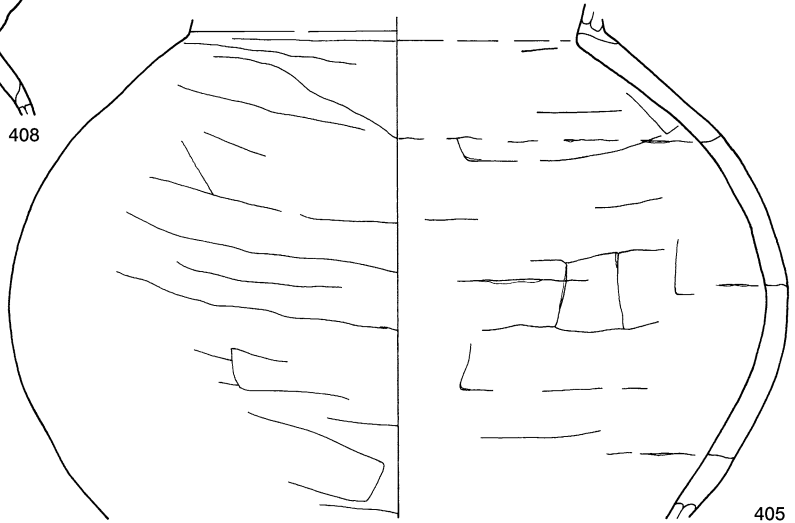
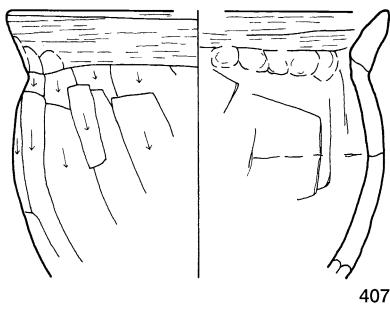
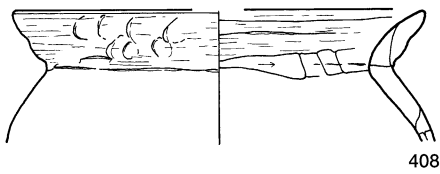
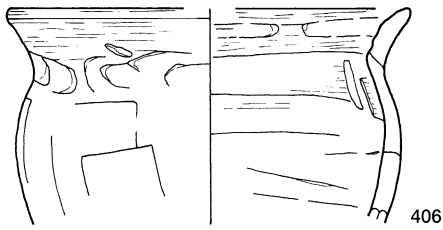
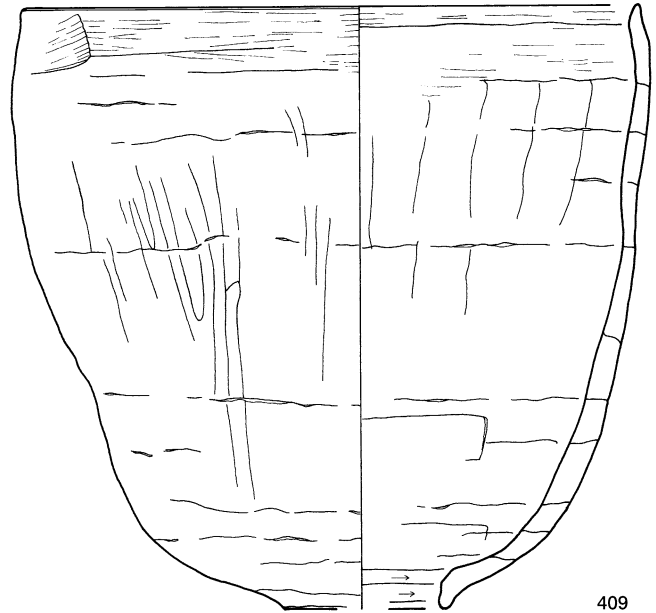
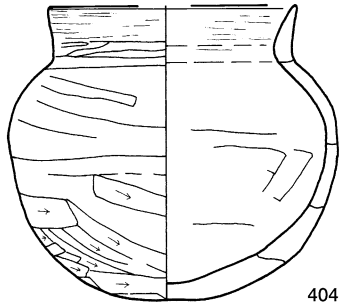
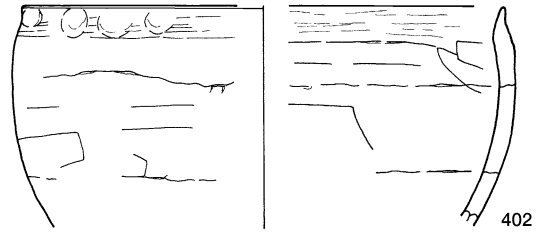
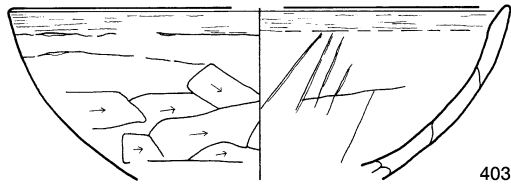
1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック少量



第349图 第2号住居跡実測图



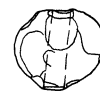
第350图 第2号住居跡・出土遺物実測図



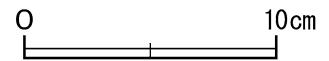
Q247



DP974



DP975



第351图 第2号住居跡出土遺物実測図

覆土 10層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量	6	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量	7	暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
5	黒褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1264点(椀157, 高坏5, 鉢4, 甕1072, 甌26), 土製品2点(球状土錘), 石製品1点(勾玉)が, 覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他, 流入した縄文土器片1889点, 弥生土器片228点, 土器細片846点, 土器片錘18点, 土器片円盤3点, 石鏃2点, 磨製石斧片2点, 剥片4点, 混入した土師器片1点も出土している。東コーナー部の貯蔵穴の周囲や竈内外から大形の土器片がまとまって出土している。竈内からは, 396・397・403などが逆位状態の401の上から潰れた状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から5世紀後葉である。第1号住居跡と規模や形状, 主軸方向, 内部施設などの配置に共通性が認められる。

第2号住居跡出土遺物観察表(第350・351図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
392	土師器	椀	14.6	5.9	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	床面	60% PL49
393	土師器	椀	[15.4]	5.5	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラ磨き	床面	35%
394	土師器	椀	[14.2]	7.6	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	30%
395	土師器	椀	[7.2](7.3)	-	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部ヘラナデ	貯蔵穴覆土	40%
396	土師器	椀	[13.2](5.5)	-	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ヘラナデ	竈覆土	20%
397	土師器	椀	[12.6]	5.6	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土	20%
398	土師器	椀	[9.9](5.2)	-	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部内面ヘラナデ	覆土上層	5%
400	土師器	椀	[14.1](4.1)	-	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面にヘラナデ	覆土下層	10%
401	土師器	高坏	15.6	(9.8)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	坏部, 脚部外面ヘラナデ 支脚転用 2次焼成	竈火床面	50%
402	土師器	鉢	[19.1](8.7)	-	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	指頭痕 体部ヘラナデ	貯蔵穴覆土	10%
403	土師器	椀	[19.6](6.8)	-	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	竈覆土	10%
404	土師器	甕	[9.7]	11.6	2.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部上半, 内面ヘラナデ 下半ヘラ削り	床面	70%
405	土師器	甕	-	(19.6)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部ヘラナデ	床面	40%
406	土師器	甕	[16.0](8.5)	-	-	石英・長石・雲母	橙	普通	頸部外面指頭痕 胴部ヘラナデ	床面	10%
407	土師器	甕	[13.2](10.5)	-	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 指頭痕	覆土下層	10%
408	土師器	甕	[16.0](5.2)	-	-	石英・長石	明赤褐	普通	指頭痕 胴部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
409	土師器	甌	[24.4]	24.0	(6.5)	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部ヘラナデ 孔周縁ヘラ削り 輪積み痕明瞭	床面	60% PL48

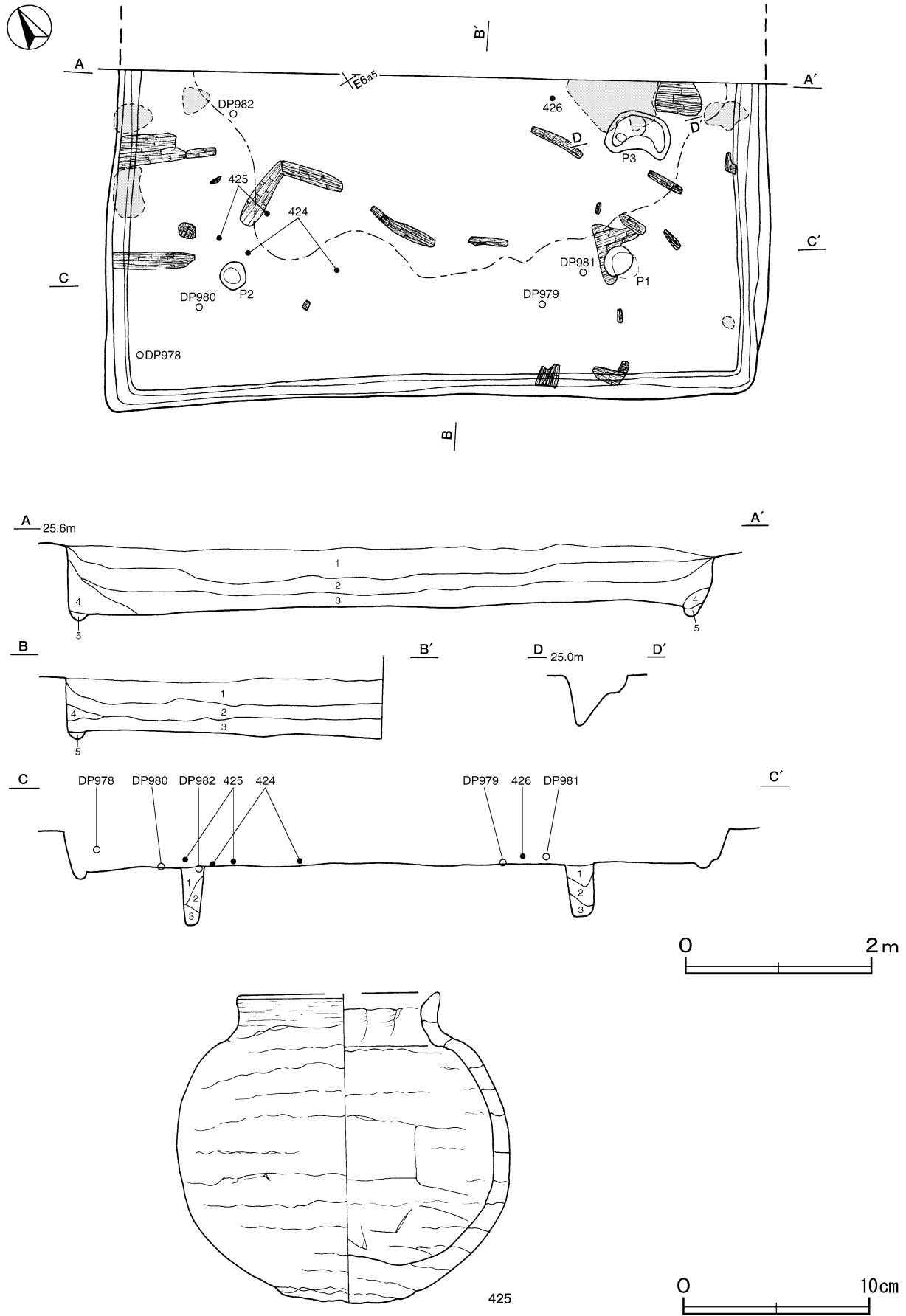
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q247	勾玉形模造品	3.1	1.9	0.5	3.4	滑石	全面研磨調整 上部穿孔 孔径0.2cm	覆土下層	PL55

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP974	球状土錘	3.6	3.5	0.8	36.5	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57
DP975	球状土錘	3.7	3.2	0.7	31.4	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57

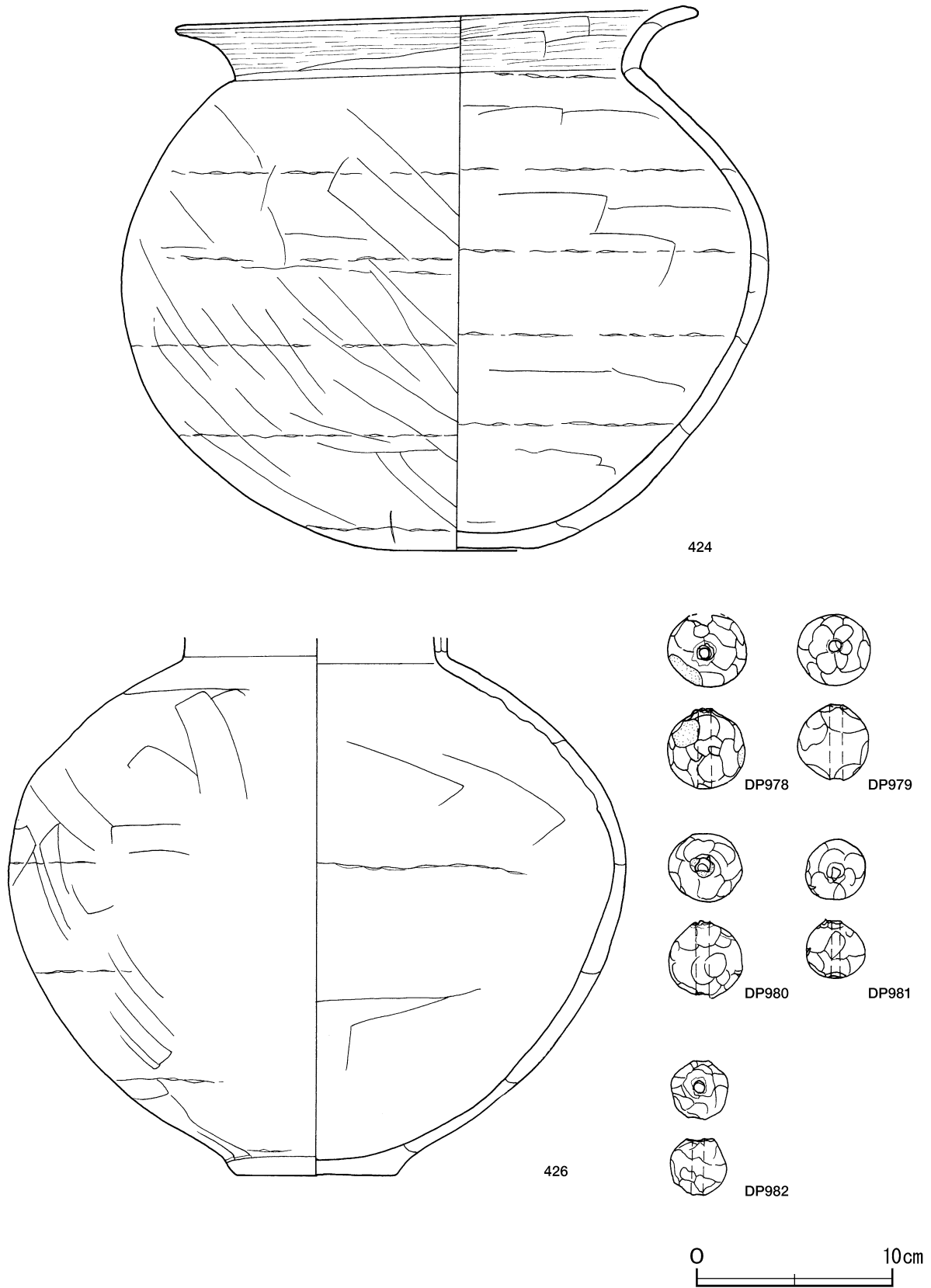
第11号住居跡(第352・353図)

位置 調査区東部のE 6 a4区で, 標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号住居跡, 第251・252・532号土坑を掘り込んでいる。北半部は調査区域外に延びている。



第352图 第11号住居跡・出土遺物実測図



第353図 第11号住居跡出土遺物実測図

規模と形状 北半部が調査区域外に延びているため、確認できた南北軸は3.41mで、本来は南北軸7.30mほど、東西軸7.20mの方形と推測できる。壁高は44～69cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が確認できた壁下に巡り、幅は16～28cm、深さ7～10cmで、断面形はU字状である。

ピット 3か所。P1・P2は深さ60cmで、主柱穴と考えられる。P3は深さ52cmで、出入口口施設に関連するピットの可能性がある。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

覆土 5層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化材少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片184点（椀47，甕137），土製品6点（球状土錘）が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片631点，弥生土器片4点，土器片錘6点，石皿1点，敲石1点，剥片1点，混入した土師器片3点，須恵器片2点も出土している。また、床面直上から焼土塊と炭化材がまとまって出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉～後葉である。床面直上から比較的多くの焼土塊と炭化材が出土しているため、上屋などが焼失した可能性がある。

第11号住居跡出土遺物観察表（第352・353図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
424	土師器	甕	[26.6]	27.6	8.4	石英・長石・雲母	灰褐	普通	胴部ヘラナデ 輪積み痕明瞭	覆土下層	85% PL48
425	土師器	甕	[10.6]	16.6	-	石英・長石	橙	普通	胴部ヘラナデ 輪積み痕明瞭	床面	80%
426	土師器	甕	-	(27.5)	8.2	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部ヘラナデ 輪積み痕明瞭	覆土下層	50%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP978	球状土錘	4.1	4.0	0.8	54.1	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土中層	PL57
DP979	球状土錘	3.8	3.7	0.7	49.3	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP980	球状土錘	3.9	3.8	0.7	46.0	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP981	球状土錘	3.3	3.2	0.4	30.6	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57
DP982	球状土錘	3.2	3.1	0.6	27.0	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57

第22号住居跡（第354図）

位置 調査区中央部のE 5 d7区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北東コーナー部付近を除いて第3号建物，第524号土坑，第1号墳に掘り込まれている。

規模と形状 第3号建物と第1号墳に掘り込まれているため、確認できた南北軸は2.20m，東西軸は1.56mで、方形ないし長方形と推測できる。壁は高さ9～11cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

炉 地床炉。南側と西側が削平されているため、確認できた長径は38cm，確認できた短径は24cmで、本来は長径60cm，短径50cmほどの楕円形と推測され、床面を皿状に6cm掘りくぼめている。火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。第1・2層が火床面，第3層は掘り方への埋土である。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック中量,炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量,ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック中量,焼土粒子微量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し,長径87cm,短径74cmの楕円形で,深さは46cmである。底面はほぼ平坦で,壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量,炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ロームブロック中量

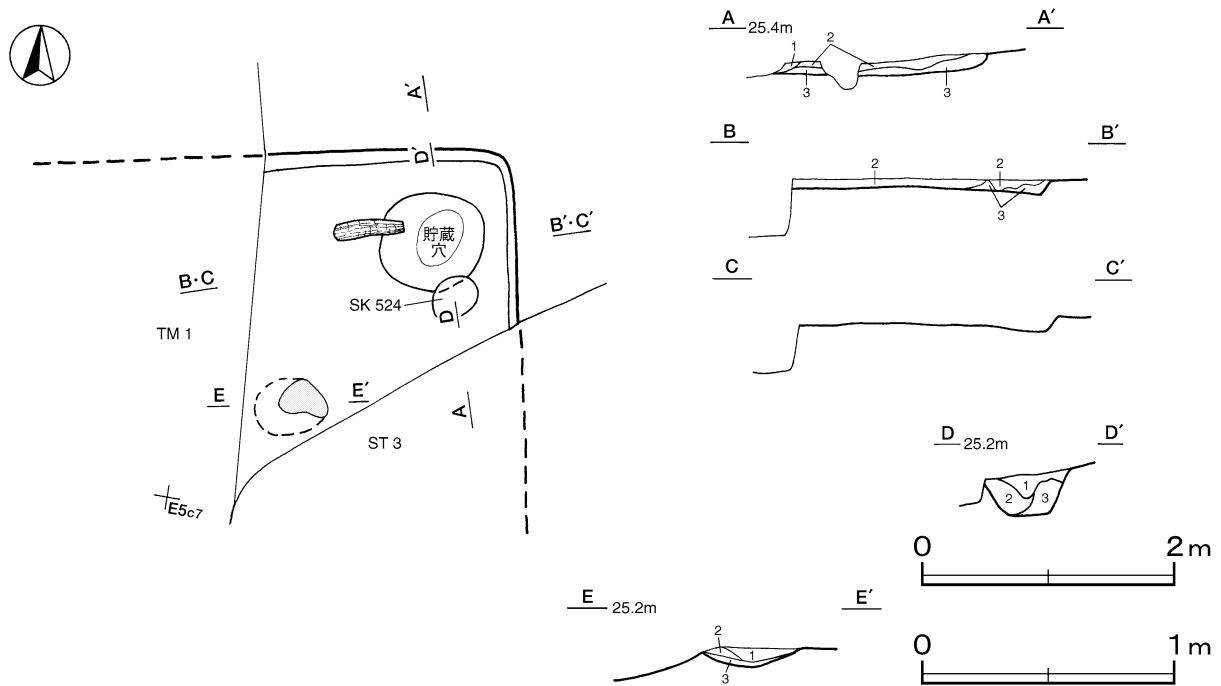
覆土 3層に分かれ,層厚が薄いため,堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 流入した縄文土器片7点,混入した土師器片1点が出土している。また,貯蔵穴の西側の床面直上から,比較的大きな炭化材が出土している。

所見 時期は,重複関係から縄文時代から古墳時代後期までと推測できるが,住居の平面形が方形ないし長方形で,内部施設として炉とコーナー部に貯蔵穴を有していること,当遺跡で確認された住居跡の様相から,古墳時代中期の可能性が高い。



第354図 第22号住居跡実測図

第24号住居跡 (第355～359図)

位置 調査区東部のE 6 d6区で,標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第41号住居跡,第271・373・385・459・465号土坑を掘り込み,第269号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.50m,短軸7.02mの方形で,主軸方向はN - 41° - Eである。壁高は31～49cmで,外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で,壁際を除いて踏み固められている。壁溝が全周し,幅は26～45cm,深さ5～10cmで,断面形はU字状である。

ピット 5か所。P1～P4は深さ84～103cmで、主柱穴と考えられる。P5は深さ64cmで、出入り口施設に関連するピットと考えられる。

ピット土層解説

1 極黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化粒子微量	4 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子中量,炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量

竈 北東壁の東寄りに位置し、煙道部は壁外まで掘り込まれていない。規模は、焚口部から煙道部まで130cm、燃烧部幅43cmである。袖部は第17層で、ロームブロック・砂質粘土ブロックの黄褐色土で構築している。燃烧部の中央部から焚口部寄りに位置する火床面は、床面をわずかに掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・砂粒中量	11 暗赤褐色	焼土ブロック中量,粘土粒子・砂粒少量,炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量,焼土粒子微量	12 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
3 暗褐色	粘土粒子・砂粒中量,ローム粒子少量,焼土粒子・炭化粒子微量	13 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量,炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量,ローム粒子・炭化粒子微量	14 極暗赤褐色	粘土粒子・砂粒中量,焼土粒子少量,ローム粒子微量
5 暗赤灰色	焼土ブロック・砂粒中量	15 極暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
6 暗赤褐色	焼土ブロック多量,砂粒中量16	16 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量,ローム粒子微量
7 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量,ローム粒子少量,炭化粒子微量	17 にぶい黄褐色	砂質粘土ブロック多量,ロームブロック・焼土ブロック少量
8 にぶい黄褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量,ローム粒子少量,炭化粒子微量	18 黒褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子少量
9 暗赤褐色	焼土ブロック中量,ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量,炭化粒子微量	19 黒褐色	ロームブロック中量,炭化物・焼土粒子少量
10 赤褐色	焼土ブロック多量,ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量	20 黒褐色	焼土粒子少量,炭化物微量

炉 中央部のやや南寄りに位置する地床炉である。長径95cm、短径38cmの楕円形で、火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長軸178cm、短軸116cmの長方形で、深さは105cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立し、上端部で外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	焼土ブロック中量,ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量,粘土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量,粘土粒子・炭化粒子微量
4 極暗褐色	ロームブロック少量,焼土ブロック微量	8 暗褐色	粘土粒子中量,ローム粒子微量

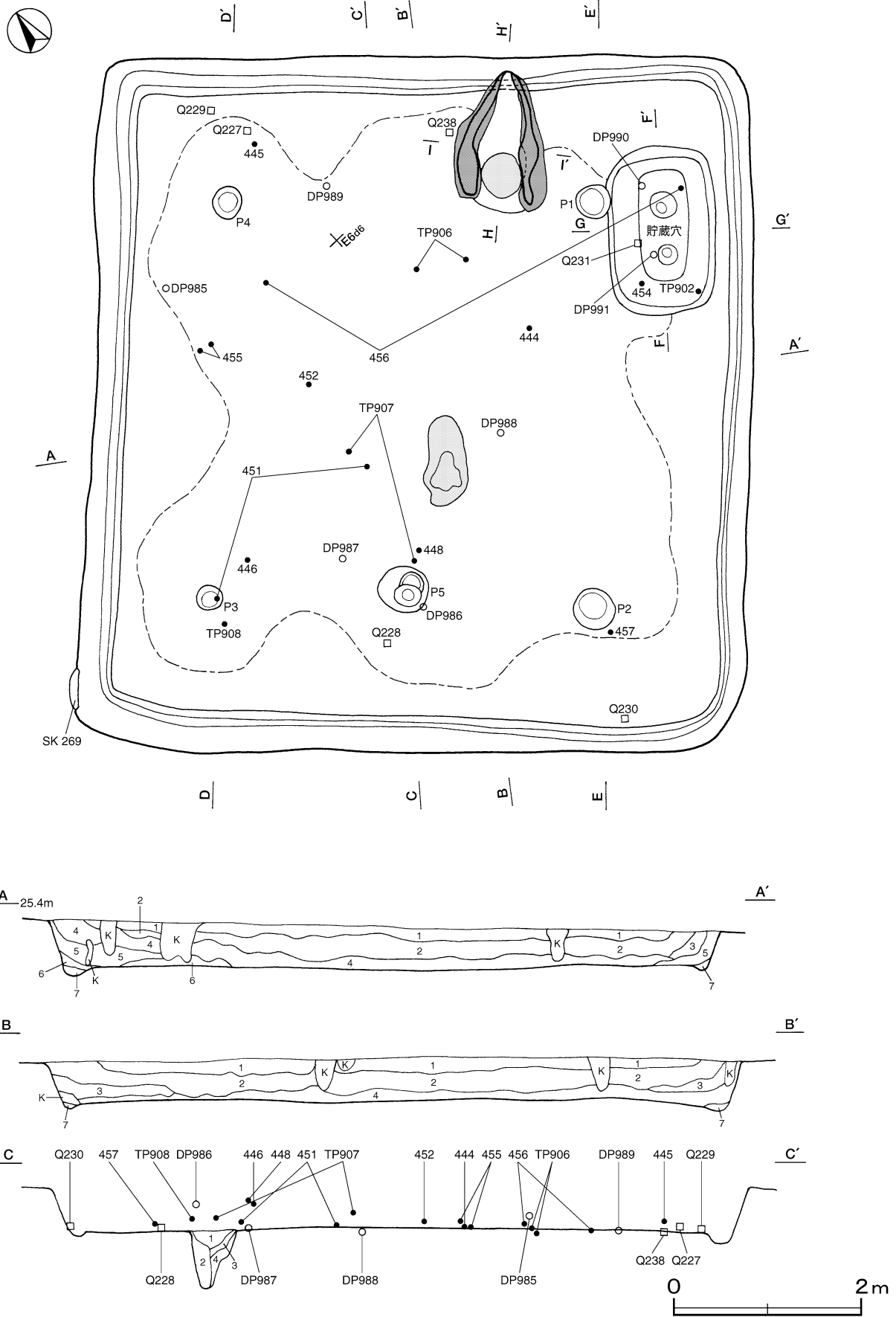
覆土 7層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

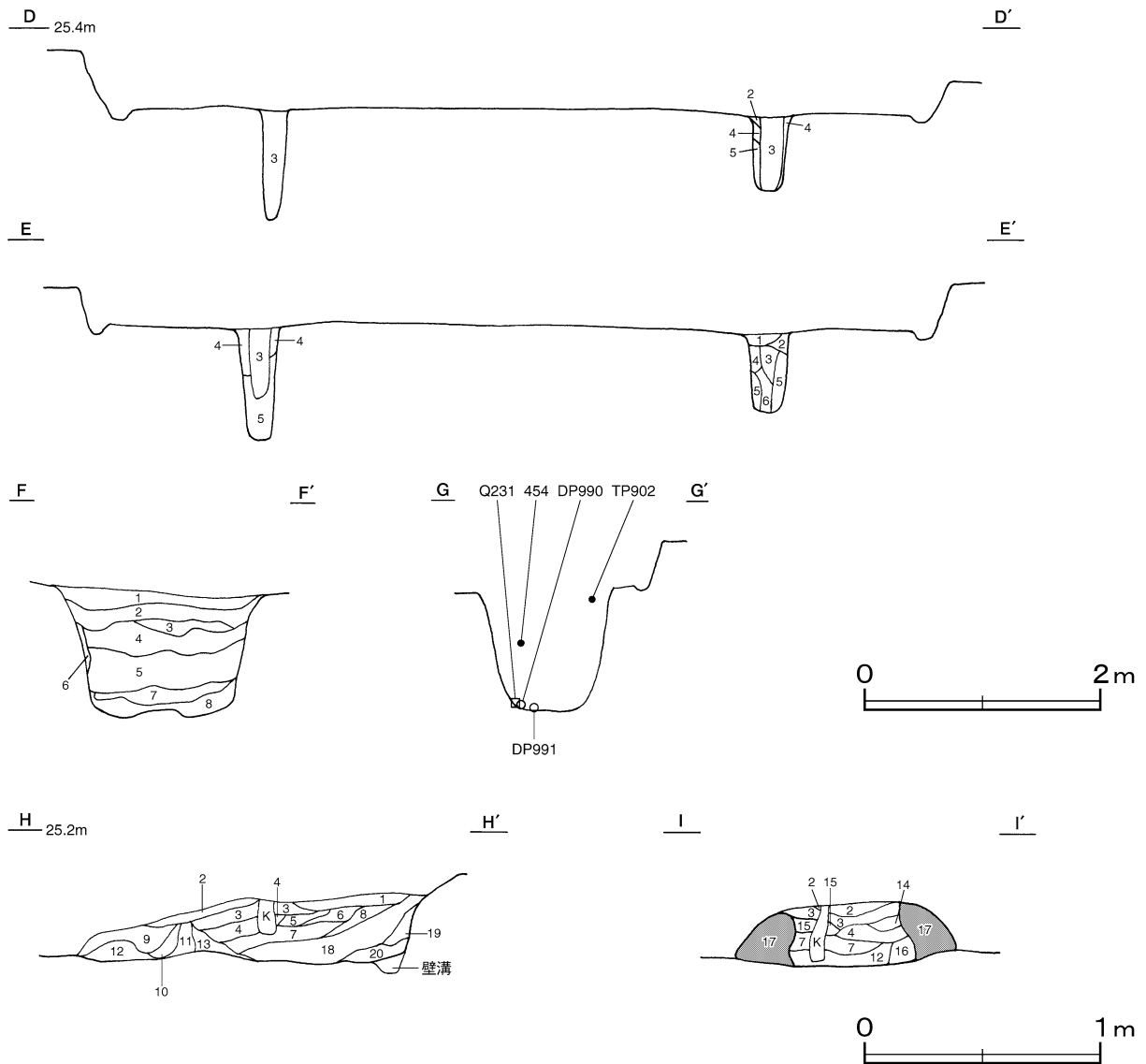
1 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化物少量	6 黒褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	7 褐色	ローム粒子少量
4 極暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片2338点(椀264,高坏8,壺4,甕2062),須恵器片28点(坏3,蓋4,壺5,甕16),土製品11点(球状土錘10,焼成粘土塊1),石製品11点(砥石1,紡錘車2,石製模造品未製品8),石器1点(台石),滑石片114点が、覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片3143点,弥生土器片22点,土器細片170点,土器片錘27点,土器片円盤2点,石鏃1点,打製石斧1点,剥片7点,混入した土師器片52点も出土している。東コーナー部の貯蔵穴や竈の内外から大形の土器片がまとまって出土している。石製模造品に関連する滑石製の未製品や剥片の大半は、床面直上や覆土下層を中心に、Q227は北コーナー部に据え置かれたような状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉である。台石をはじめ、床面直上や覆土下層を中心に石製模造品に関連する滑石製の未製品や剥片の出土が多いことから、石製模造品の製作が行われていた可能性が指摘できる。



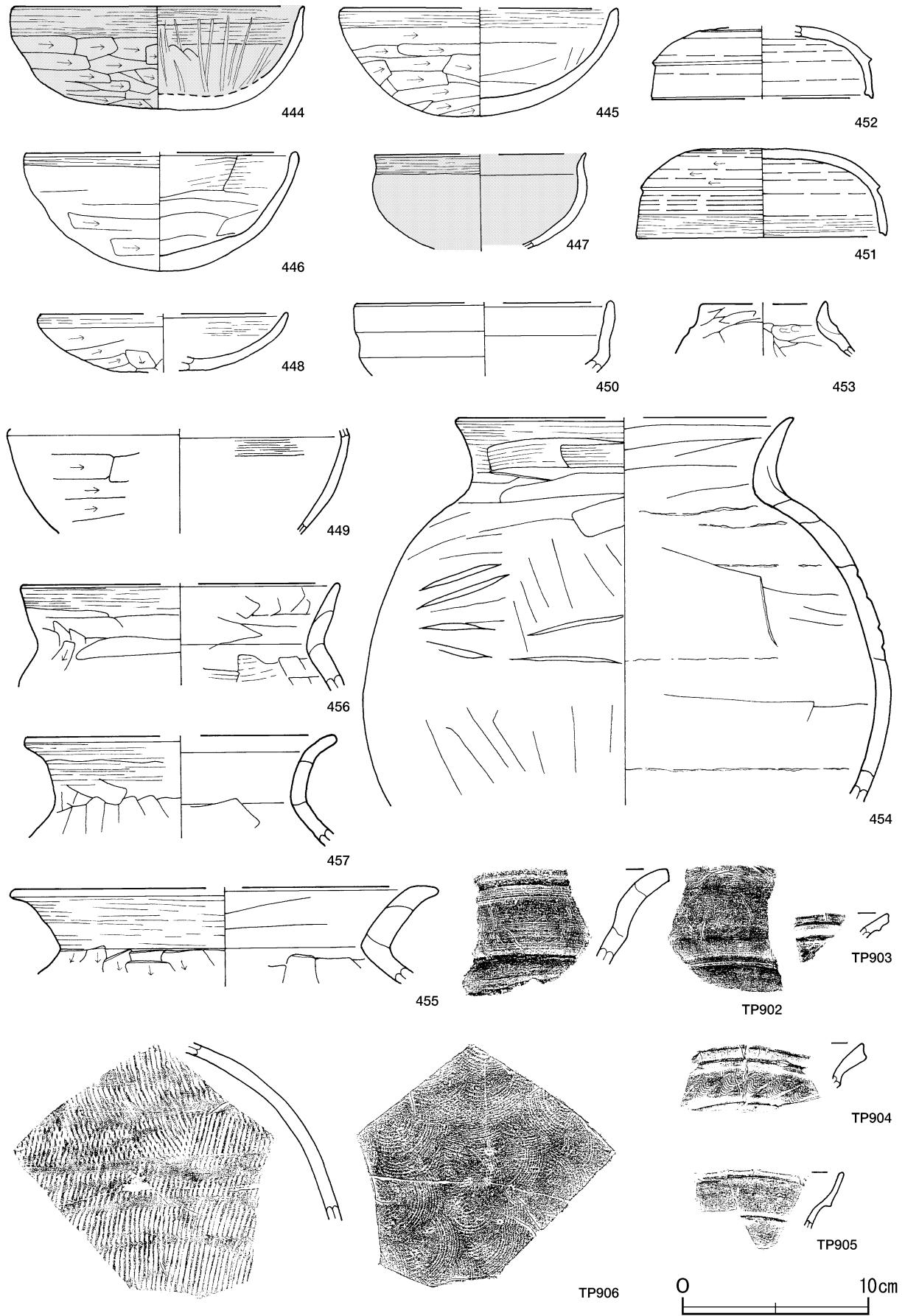
第355图 第24号住居跡実測图(1)



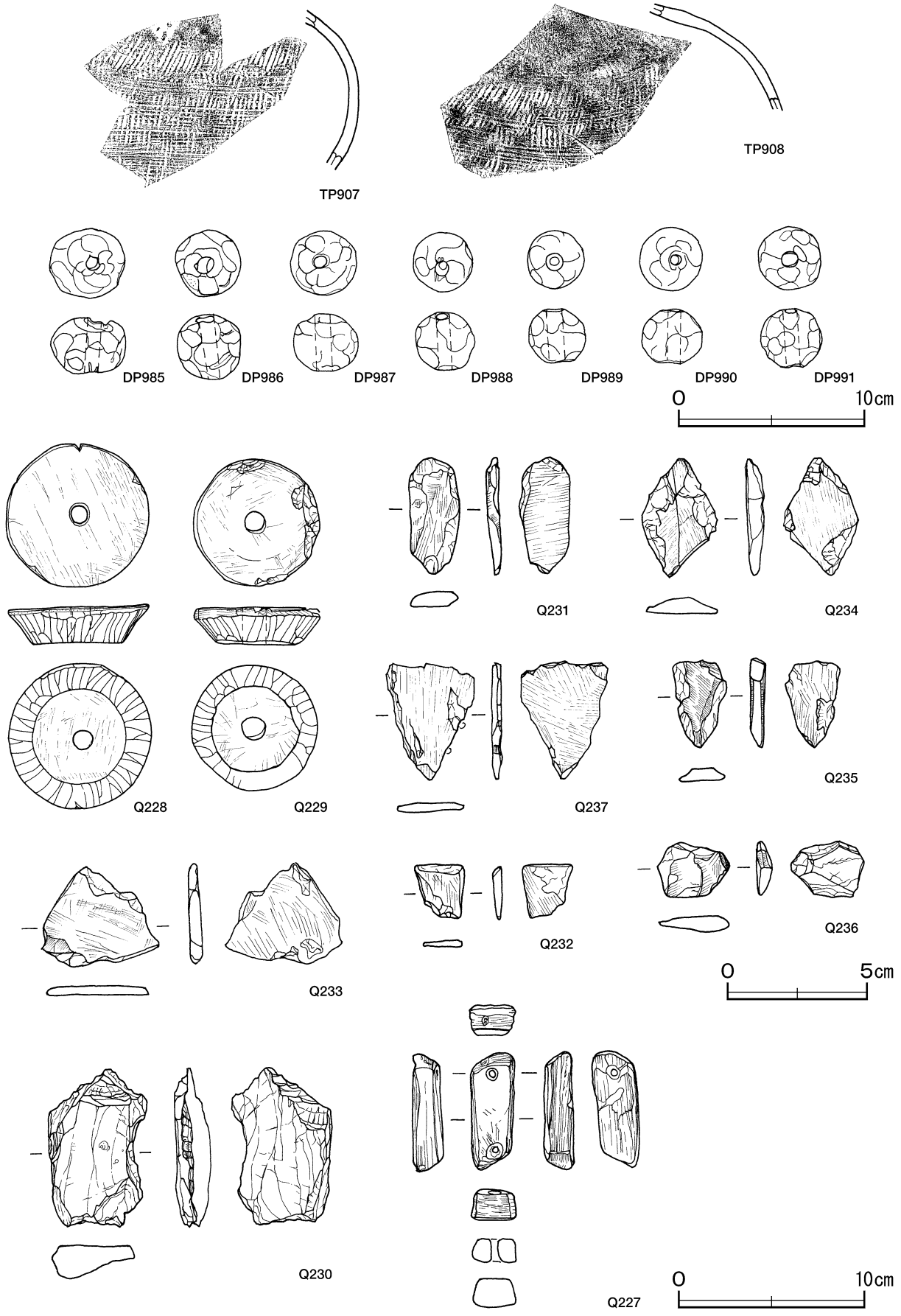
第356図 第24号住居跡実測図(2)

第24号住居跡出土遺物観察表 (第357~359図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
444	土師器	椀	15.7	5.6	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ後ヘラ磨き 赤彩	床面	90%
445	土師器	椀	[14.7]	5.8	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	60%
446	土師器	椀	[14.6]	6.3	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ後ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	30%
447	土師器	椀	[11.3](5.0)	-	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部ナデ 赤彩	覆土	10%
448	土師器	椀	[13.4](3.1)	-	-	石英・長石・雲母・赤磁子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中層	10%
449	土師器	椀	-	(5.7)	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り	覆土	10%
450	土師器	椀	[13.8](3.8)	-	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	ナデ	覆土	10%
451	須恵器	坏蓋	13.4	4.7	-	石英・長石・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	50% PL49
452	須恵器	坏蓋	[11.8](3.9)	-	-	石英・長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	10%
453	土師器	壺	[6.6](2.7)	-	-	石英・長石・雲母	橙	普通	ヘラナデ	覆土	10%
454	土師器	甕	[18.1](20.8)	-	-	長石・雲母・細礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外面ヘラナデ後、横ナデ 胴部外面ヘラナデ 金属による線条痕 胴部内面ヘラナデ 輪種み痕明瞭	貯蔵穴覆土	30%
455	土師器	甕	[22.8](5.2)	-	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ、内面ヘラナデ 胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	覆土下層	10%
456	土師器	甕	[17.2](5.4)	-	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部ヘラナデ	覆土下層	10%



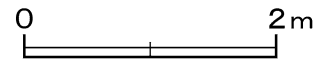
第357图 第24号住居跡出土遺物実測図(1)



第358图 第24号住居跡出土遺物実測図(2)



Q238



第359図 第24号住居跡出土遺物実測図(3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
457	土師器	甕	[16.5]	(5.4)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後,横ナデ 胴部ヘラナデ	覆土下層	10%
TP902	土師器	甕	-	(5.1)	-	石英・長石	にぶい褐	普通	横ナデ	貯蔵穴覆土	
TP903	須恵器	壺	-	(1.4)	-	石英・長石	灰	普通	櫛歯による波状文を巡らす	覆土	
TP904	須恵器	壺	-	(2.3)	-	長石	灰	普通	8本櫛歯の波状文を巡らす	覆土	
TP905	須恵器	壺	-	(3.0)	-	長石	灰	普通	8本櫛歯の波状文を巡らす	覆土	
TP906	須恵器	甕	-	(9.6)	-	長石	灰	普通	外面平行叩き目 内面同心円状の当て具痕	床面	
TP907	須恵器	甕	-	(8.6)	-	長石	灰	普通	外面櫛歯状工具によるカキ目・平行叩き目 内面ナデ	覆土下層	
TP908	須恵器	甕	-	(5.9)	-	長石	灰	普通	外面櫛歯状工具による平行叩き目後,カキ目 内面ナデ	覆土下層	

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP985	球状土錘	4.1	3.1	0.7	40.9	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57
DP986	球状土錘	3.7	3.5	0.9	44.6	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土中層	PL57
DP987	球状土錘	3.5	3.1	0.8	37.0	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP988	球状土錘	3.4	3.5	0.8	36.8	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP989	球状土錘	3.4	3.1	1.0	32.3	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP990	球状土錘	3.4	3.0	0.6	30.1	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	貯蔵穴覆土	PL57
DP991	球状土錘	3.3	3.2	0.7	30.2	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	貯蔵穴覆土	PL57

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q227	砥石	6.3	2.4	1.7	15.2	凝灰岩	全面研磨 上端部穿孔,孔径0.4cm 下端部穿孔途中	覆土下層	PL55
Q228	石製紡錘車	5.2	5.2	1.4	59.0	滑石	両面研磨調整 側縁部削り痕明瞭 中央部穿孔 孔径0.6cm	床面	PL55
Q229	石製紡錘車	4.6	4.6	1.4	38.4	滑石	両面・側縁部上端研磨調整 側縁部削り痕明瞭 中央部穿孔 孔径0.7cm	床面	PL55
Q230	石製模造品	8.5	5.3	1.9	93.2	滑石	加工痕を有する滑石 剥離痕・削り痕・研磨痕	覆土下層	
Q231	剣形模造品	4.2	1.8	0.5	4.9	滑石	未製品 両面研磨調整	貯蔵穴覆土	PL55
Q232	石製模造品	1.9	1.8	0.3	1.3	滑石	加工痕を有する滑石 剥離痕・研磨痕	覆土	
Q233	石製模造品	3.6	4.3	0.4	20.3	滑石	加工痕を有する滑石 剥離痕・研磨痕	貯蔵穴覆土	
Q234	剣形模造品	4.3	2.7	0.7	7.2	滑石	未製品 両面研磨調整 片面中央部に稜	貯蔵穴覆土	PL55
Q235	剣形模造品	3.1	1.9	0.5	3.6	滑石	未製品 両面研磨調整	貯蔵穴覆土	
Q236	石製模造品	2.0	2.6	0.5	2.7	滑石	加工痕を有する滑石 剥離痕・研磨痕	貯蔵穴覆土	
Q237	剣形模造品	4.2	3.1	0.4	6.0	滑石	未製品 両面研磨調整 穿孔痕2か所	貯蔵穴覆土	
Q238	台石	13.4	18.1	5.5	1949.4	花崗岩	片面・側縁部に痘痕状の敲打痕と研磨痕	床面	

第30号住居跡（第360～362図）

位置 調査区東部のE7f1区で、標高24.4mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第40号住居跡，第365・366・447号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.95m，短軸5.91mの方形で，主軸方向はN-48°-Eである。壁高は17～37cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，壁際を除いて踏み固められている。壁溝が南東壁の南側を除いた壁下で確認され，幅は13～32cm，深さ5～10cmで，断面形はU字またはV字状である。また，南西壁下の壁溝からP2脇に向けて，長さ100cm，幅14cm，深さ8cm，断面形がU字状の溝が認められる。

ピット 6か所。P1～P4は深さ57～74cmで，主柱穴と考えられる。P5は深さ10cm，P6は深さ14cmで，出入り口施設に関連するピットと考えられる。P6の覆土上面は踏み固められている。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子中量	7 明褐色	ロームブロック中量，粘土ブロック微量
3 褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子少量，粘土ブロック微量
4 褐色	ロームブロック少量，粘土ブロック・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
5 褐色	ロームブロック中量	10 暗褐色	ロームブロック少量

竈 北東壁のやや東寄りに位置し，煙道部は壁をわずかに掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部まで149cm，燃烧部幅56cmである。袖部は第18～22層で，ロームブロック・砂質粘土ブロックの黄褐色土で構築している。燃烧部の中央部から焚口部寄りに位置する火床面は，床面をわずかに掘りくぼめ，火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	12 暗褐色	ロームブロック少量，粘土粒子・砂粒微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	13 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
3 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒中量，焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量	14 にぶい赤褐色	焼土粒子多量，炭化粒子微量
4 暗赤褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量	15 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
5 にぶい褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量，焼土粒子微量	16 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量
6 赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒多量	17 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
7 黒褐色	ローム粒子中量，炭化物・粘土粒子・砂粒微量	18 褐色	粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子微量
8 暗褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック少量，粘土粒子・砂粒微量	19 明赤褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック中量，炭化物・粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子微量	20 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
10 にぶい褐色	ロームブロック・砂質粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	21 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
11 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	22 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉 中央部のやや東寄りに位置する地床炉である。長径32cm，短径20cmの楕円形で，火床面は床面と同じ高さで，火熱を受けて赤変硬化している。

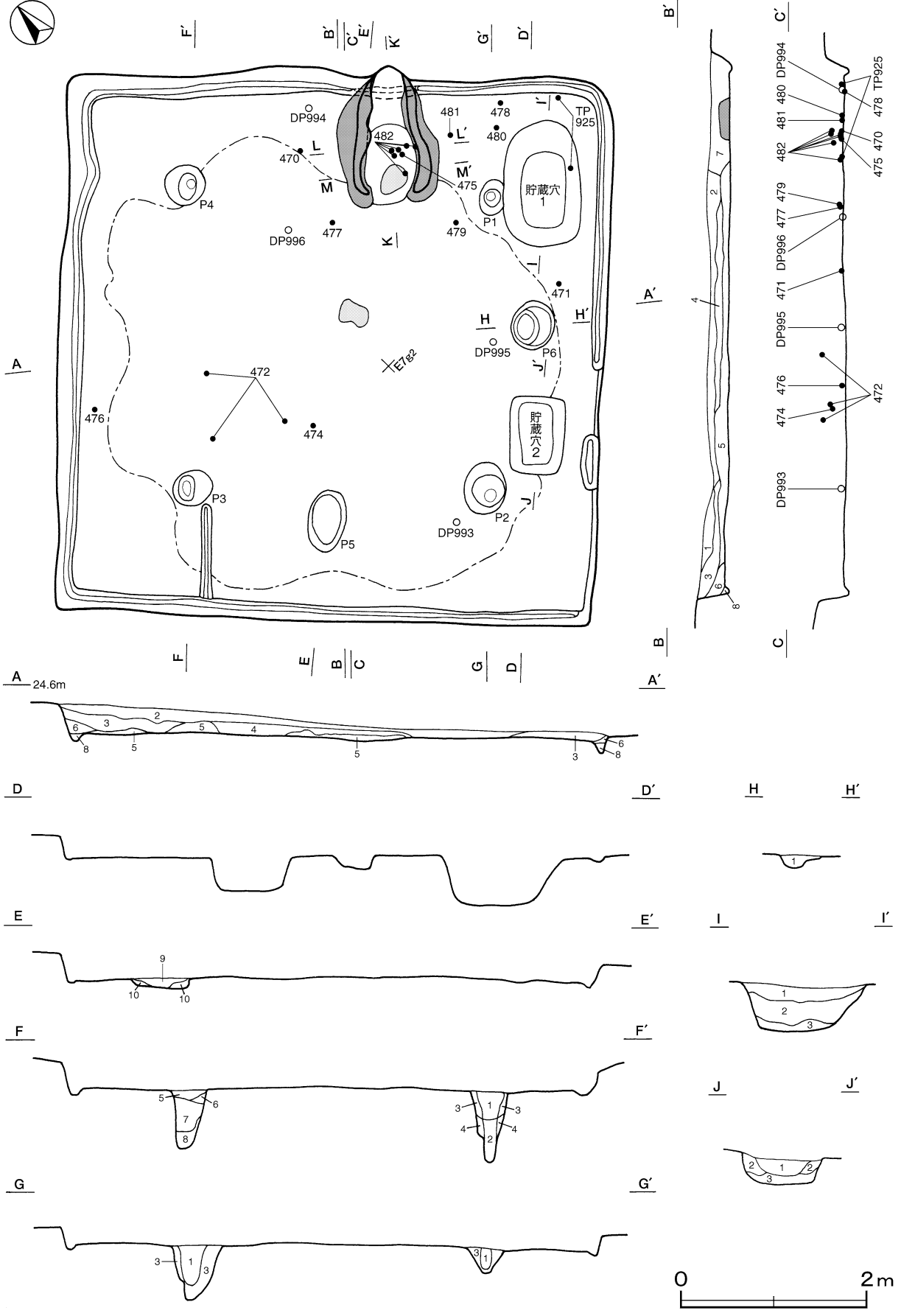
貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は，東コーナー部に位置し，長軸137cm，短軸82cmの長方形で，深さは52cmである。底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は，P6の南西側に位置し，長軸83cm，短軸60cmの長方形で，深さは34cmである。底面はほぼ平坦で，壁は直立している。覆土上面は踏み固められている。

貯蔵穴1土層解説

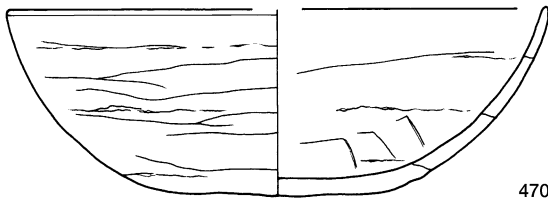
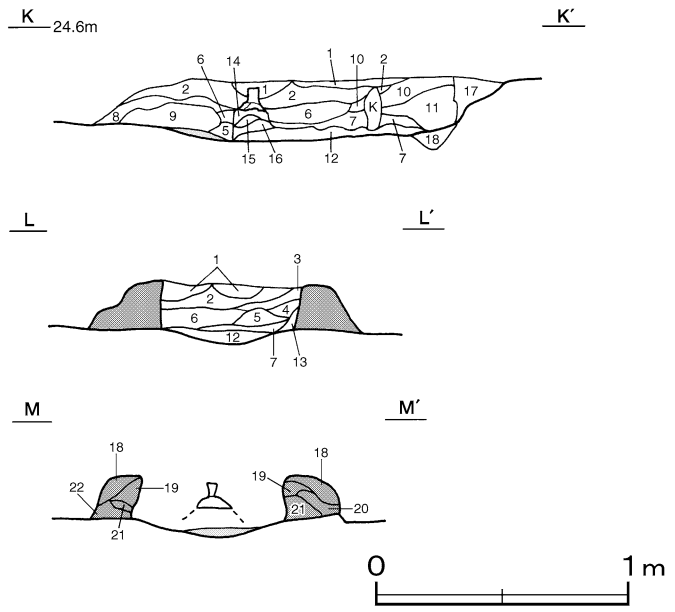
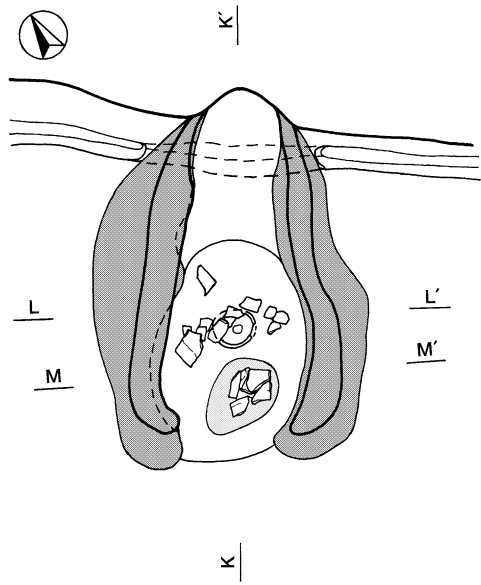
1 極暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量		

貯蔵穴2土層解説

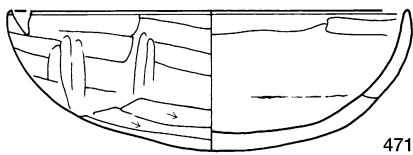
1 極暗褐色	ロームブロック多量，炭化物微量	3 暗褐色	ロームブロック中量，炭化物少量
2 暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量		



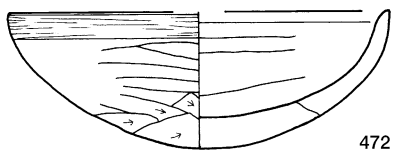
第360图 第30号住居跡実測图



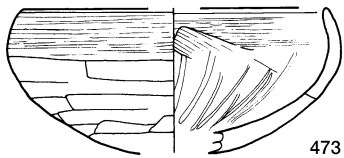
470



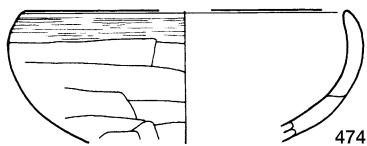
471



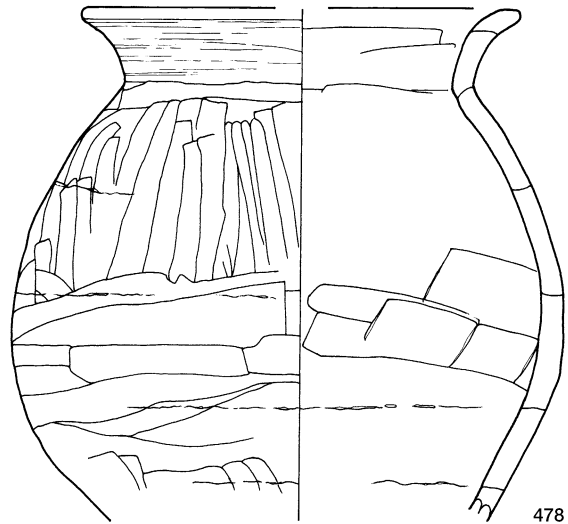
472



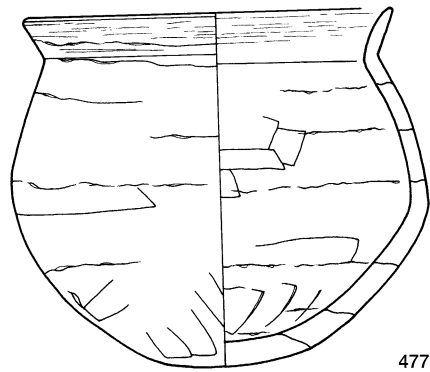
473



474



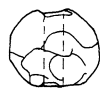
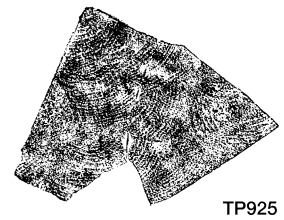
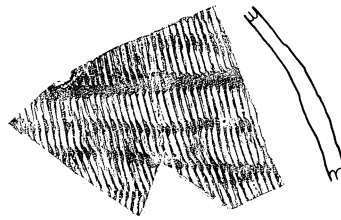
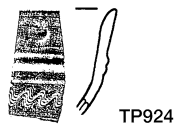
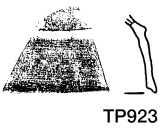
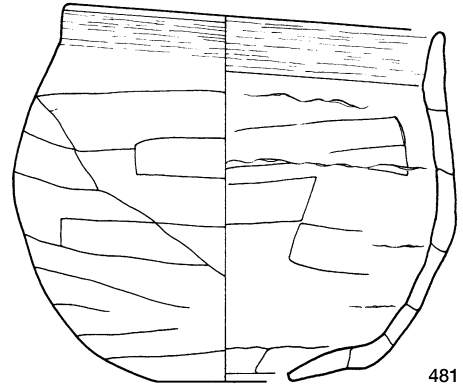
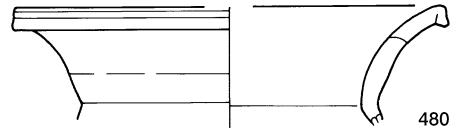
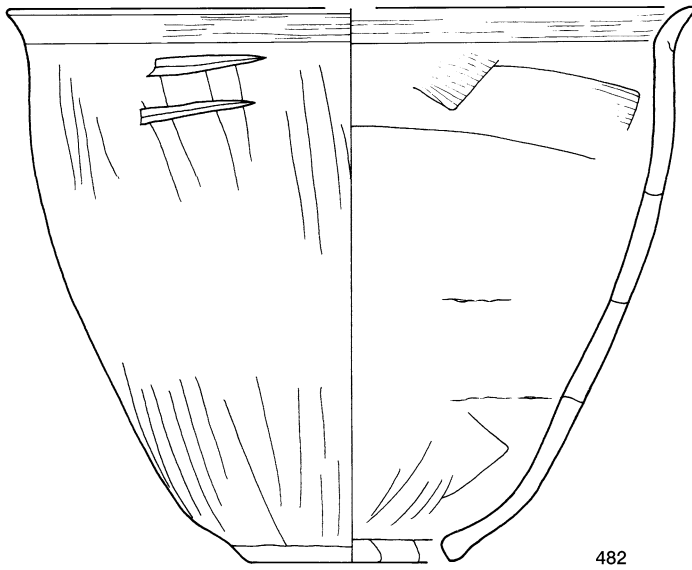
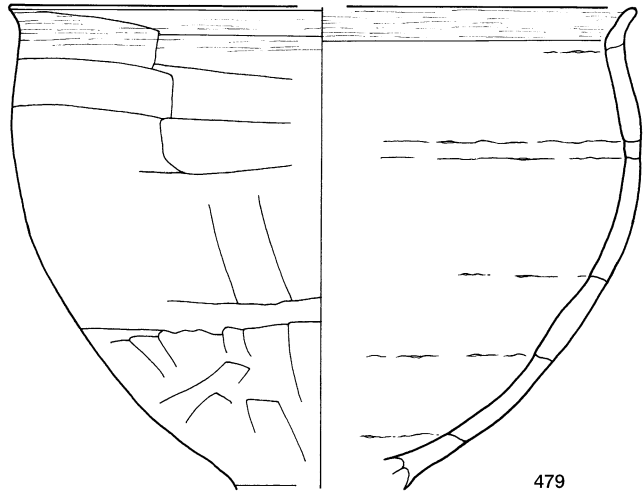
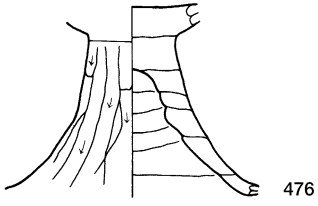
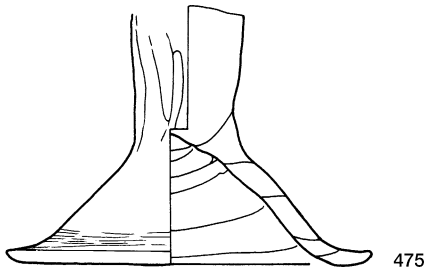
478



477



第361图 第30号住居跡・出土遺物実測图



DP993

DP994

DP995

DP996



第362图 第30号住居跡出土遺物実測図

覆土 8層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量,炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック中量,焼土ブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量,炭化粒子微量 | 7 褐色 | 粘土ブロック少量,ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量,焼土粒子・粘土粒子微量 | 8 極暗褐色 | ロームブロック少量,焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片497点(椀98, 高坏4, 甕377, 甑18), 須恵器片27点(坏身2, 坏蓋1, 壺21, 甕2), 土製品4点(球状土錘), 滑石片2点が、覆土下層を中心に散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片658点, 土器片錘2点, 土器片円盤1点, 凹石1点, 敲石1点, 剥片1点, 混入した土師器片5点も出土している。東コーナー部の貯蔵穴や竈の内外から大形の土器片がまとまって出土している。竈内からは、482を含む土器片が逆位状態の475の上から潰れた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉～末葉である。貯蔵穴と出入り口施設に関連するピットがそれぞれ2か所確認され、貯蔵穴2とP6の覆土上面が踏み固められているため、貯蔵穴2から貯蔵穴1へ、P6からP5へ造り替えられたものとみられる。

第30号住居跡出土遺物観察表 (第361・362図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
470	土師器	椀	[21.5]	7.4	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部ヘラナデ	床面	50% PL50
471	土師器	椀	15.9	5.6	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ後,ヘラ磨き 内面ヘラナデ	床面	50% PL50
472	土師器	椀	[15.2]	5.4	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部上半ヘラナデ 下半ヘラ削り	覆土上層	40%
473	土師器	椀	[12.0]	(5.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後,ヘラ磨き	覆土	30%
474	土師器	椀	[12.8]	(5.2)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	体部外面ヘラナデ	覆土中層	20%
475	土師器	高坏	-	(10.3)	14.5	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	脚部柱状 内外面ヘラナデ 脚裾部横ナデ 支脚転用 2次焼成	竈火床面	30%
476	土師器	高坏	-	(7.2)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラナデ 脚部内面輪積み痕明瞭	覆土下層	20%
477	土師器	甕	14.6	14.0	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部ヘラナデ 輪積み痕明瞭	覆土下層	90%
478	土師器	甕	[17.4]	(20.5)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部上半縦位 下半横位のヘラナデ	床面	80%
479	土師器	甕	[24.8]	(19.0)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	胴部上半横位 下半縦位のヘラナデ	覆土下層	40% PL48
480	土師器	甕	[17.0]	(4.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	10%
481	土師器	甑	14.8	14.9	5.4	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	体部ヘラナデ 孔周縁ヘラ削り	床面	85% PL48
482	土師器	甑	[27.2]	22.1	8.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部ヘラナデ	竈覆土	85%
TP923	須恵器	坏蓋	-	(3.0)	-	石英・長石	灰褐	普通	ナデ	覆土	
TP924	須恵器	高坏	-	(4.1)	-	石英・長石	灰	普通	2条の小突帯と4本櫛歯による波状文を巡らす	覆土下層	
TP925	須恵器	甕	-	(6.9)	-	石英・長石	灰	普通	外面平行叩き目 内面同心円状の当て具痕	覆土	

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP993	球状土錘	3.6	3.6	0.8	39.8	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57
DP994	球状土錘	3.6	3.1	0.8	35.5	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57
DP995	球状土錘	3.1	3.1	0.4~0.7	26.0	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土下層	PL57
DP996	球状土錘	3.5	3.2	0.9~1.1	34.8	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57

第36号住居跡 (第363・364図)

位置 調査区東部のE6e9区で、標高24.8mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第374・448・460号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.13m，短軸4.45mの長方形で，主軸方向はN - 39° - Eである。壁高は18～28cmで，直立している。

床 ほぼ平坦で，壁際を除いて踏み固められている。壁溝が全周し，幅は20～30cm，深さ5～10cmで，断面形はU字状である。

ピット 5か所。P1～P4は深さ20～48cmで，主柱穴と考えられる。P5は深さ13cmで，出入り口施設に関連するピットと考えられる。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 3 灰褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | | |

竈 北東壁の東寄りに位置し，煙道部は壁外まで掘り込まれていない。規模は，焚口部から煙道部まで112cm，燃烧部幅40cmである。袖部は第13層で，ロームブロック・砂質粘土ブロックの黄褐色土で構築している。燃烧部の中央部に位置する火床面は，床面をわずかに掘りくぼめ，火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------------|-----------|---------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量，炭化物・ローム粒子少量，粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量，粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子微量 | 9 暗褐色 | 焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | 10 極暗褐色 | ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 4 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 13 にぶい黄褐色 | 粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 | | |

焼土範囲 3か所。南西寄りに位置し，焼土範囲1は径10cm，焼土範囲2は径14cm，焼土範囲3は径26cmの円形である。いずれも掘り込みは見られない。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し，長軸90cm，短軸69cmの長方形で，深さは58cmである。底面は緩やかな凹凸を有し，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量，炭化物微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化物少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック中量，炭化物微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |

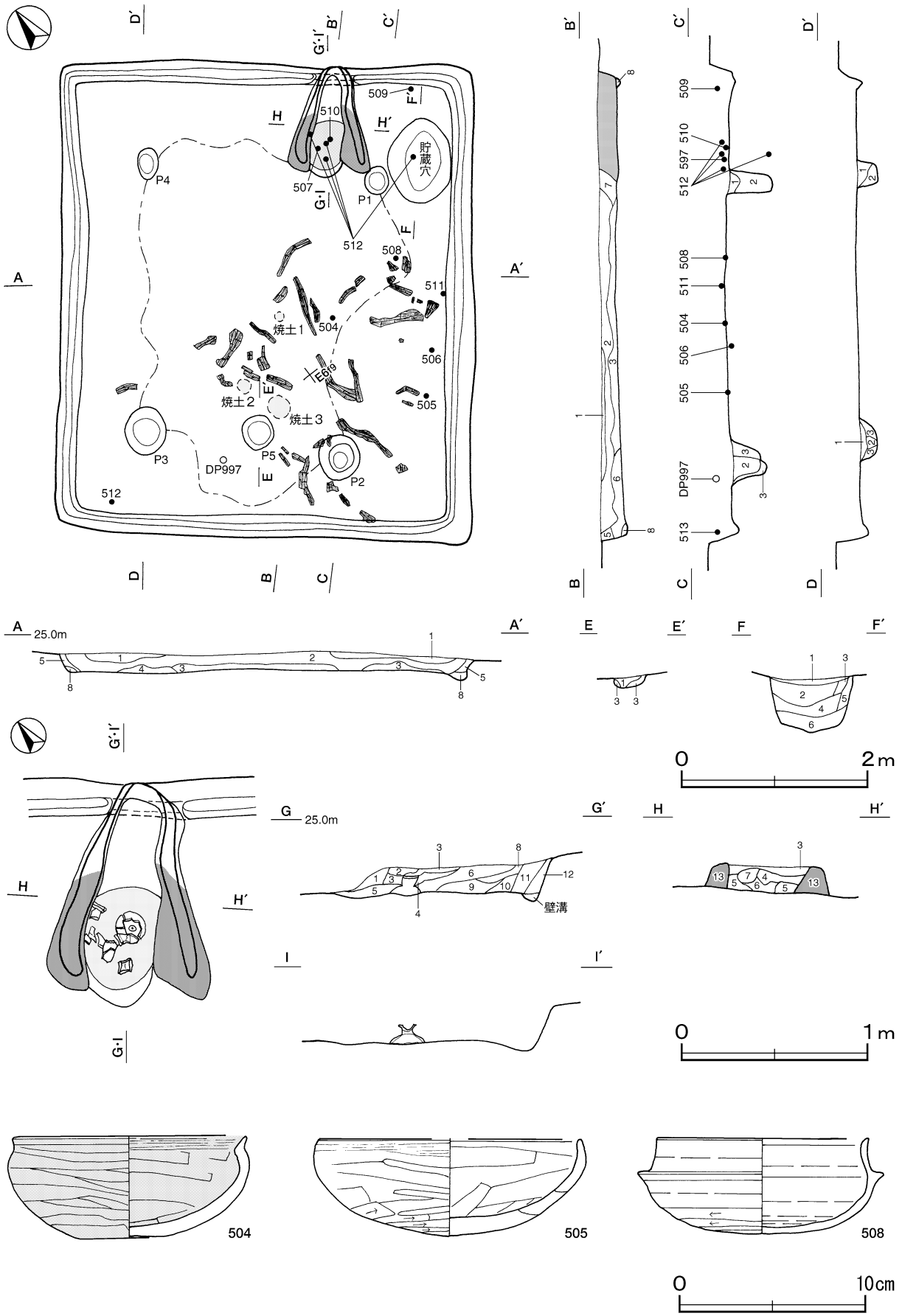
覆土 8層に分かれ，不自然な堆積状況とロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため，埋め戻されたと考えられる。

土層解説

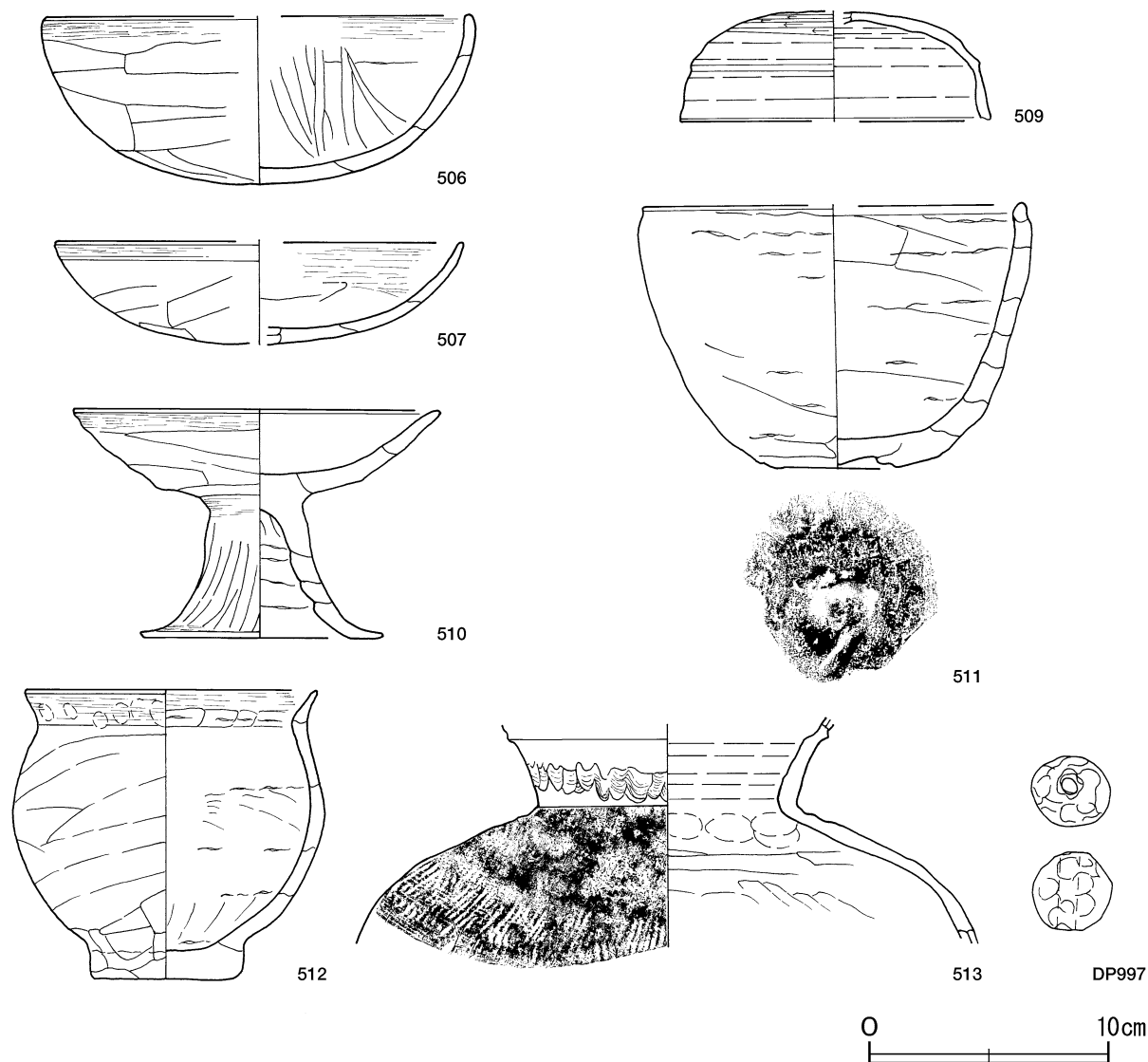
- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|----------------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化材多量，ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 炭化材多量，ローム粒子・焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物・粘土粒子・砂粒微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片131点(椀65，蓋1，高坏4，鉢25，甕35，ミニチュア土器1)，須恵器片13点(坏5，蓋6，甕2)，土製品1点(球状土錘)が，覆土下層を中心に散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片654点，土器片錘3点，磨製石斧1点，尖頭器1点，石皿1点，剥片4点も出土している。東コーナー部の貯蔵穴や竈の内外から大形の土器片がまとまって出土している。竈内からは，512を含む土器片が逆位状態の510の上から潰れた状態で出土している。また，炭化材が床面直上からまとまって出土している。

所見 時期は，出土土器から5世紀後葉である。炭化材が床面直上から出土しているため，上屋などが焼失した可能性がある。3か所の焼土範囲については，火災の火熱によって赤変した範囲とも考えられる。



第363图 第36号住居跡・出土遺物実測図



第364図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第363・364図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
504	土師器	椀	12.4	5.5	4.6	石英・長石・雲母	明褐	普通	内面横ナデ 体部ヘラナデ 赤彩	床面	100% PL49
505	土師器	椀	[14.0]	5.1	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部上半ヘラナデ 下半ヘラ削り	床面	85%
506	土師器	椀	[17.8]	7.1	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラナデ後ヘラ磨き	床面	50%
507	土師器	椀	[16.8]	(4.2)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部ヘラナデ	竈覆土	20%
508	須恵器	坏身	11.4	5.2	-	石英・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	床面	70% PL49
509	須恵器	坏蓋	[12.8]	4.5	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	60% PL49
510	土師器	高坏	15.3	9.5	[10.1]	長石・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラナデ 脚部内面輪積み痕明瞭 支脚 転用 2次焼成	竈火床面	70% PL47
511	土師器	鉢	[15.9]	11.0	5.5	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	ヘラナデ 輪積み痕明瞭 底部外面中央部に凹み	床面	50%
512	土師器	甕	12.0	12.1	6.0	石英・長石・雲母	橙	普通	指頭痕 体部ヘラナデ	竈・貯蔵穴覆土	70% PL47
513	須恵器	甕	-	(9.2)	-	石英・長石	にぶい黄褐	普通	頸部10本櫛歯による波状文を巡らす 胴部平行 叩き目 胴部内面ヘラナデ 円形の当て具痕	覆土中層	10% PL52

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質 / 胎土	特徴	出土位置	備考
DP997	球状土錘	3.2	3.3	0.7	29.0	粘土 / 石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	覆土中層	PL57

第39号住居跡 (第365・366図)

位置 調査区東部のE7d1区で、標高24.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第316号土坑を掘り込んでいる。大半が調査区域外に延びている。

規模と形状 大半が調査区域外に延びているため、東西軸は3.85mで、南北軸は1.30mしか確認できなかった。方形ないし長方形と推測できる。壁高は5～15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。壁溝が確認できた壁下に巡り、幅は11～15cm、深さ5～10cmで、断面形はU字状である。

ピット P1は深さ76cmで、主柱穴と考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

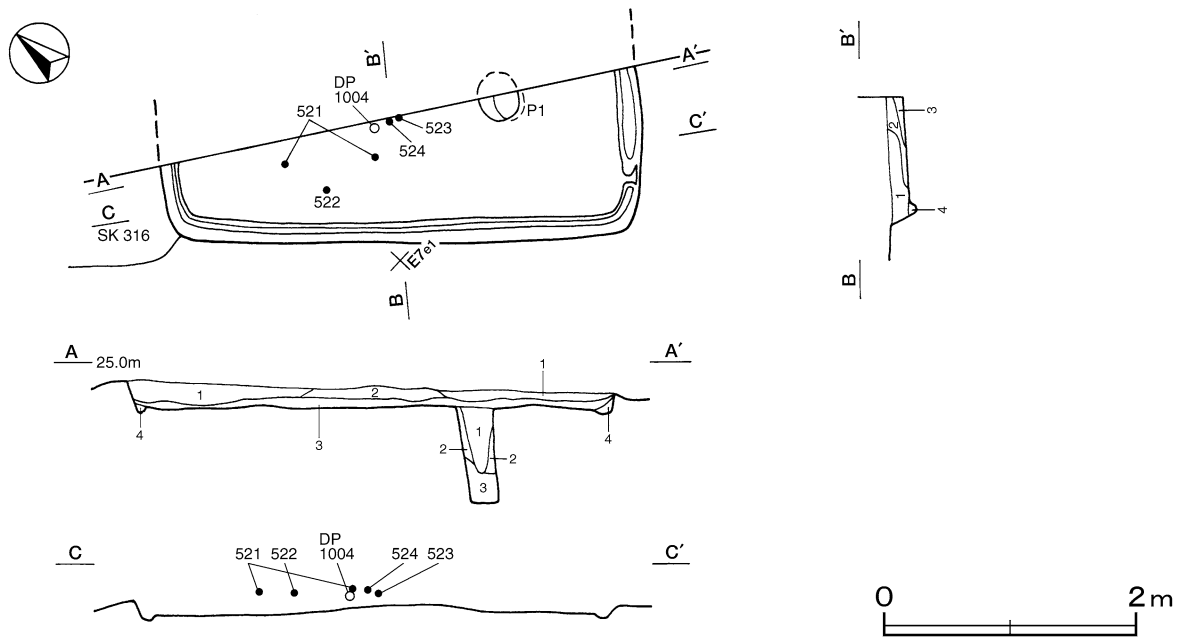
覆土 4層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化材中量
- 2 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化材少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物中量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量

遺物出土状況 土師器片167点(椀14, 鉢1, 甑1, 甕151), 土製品4点(土製支脚)が、覆土上層から中層にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片66点, 混入した土師器片1点も出土している。

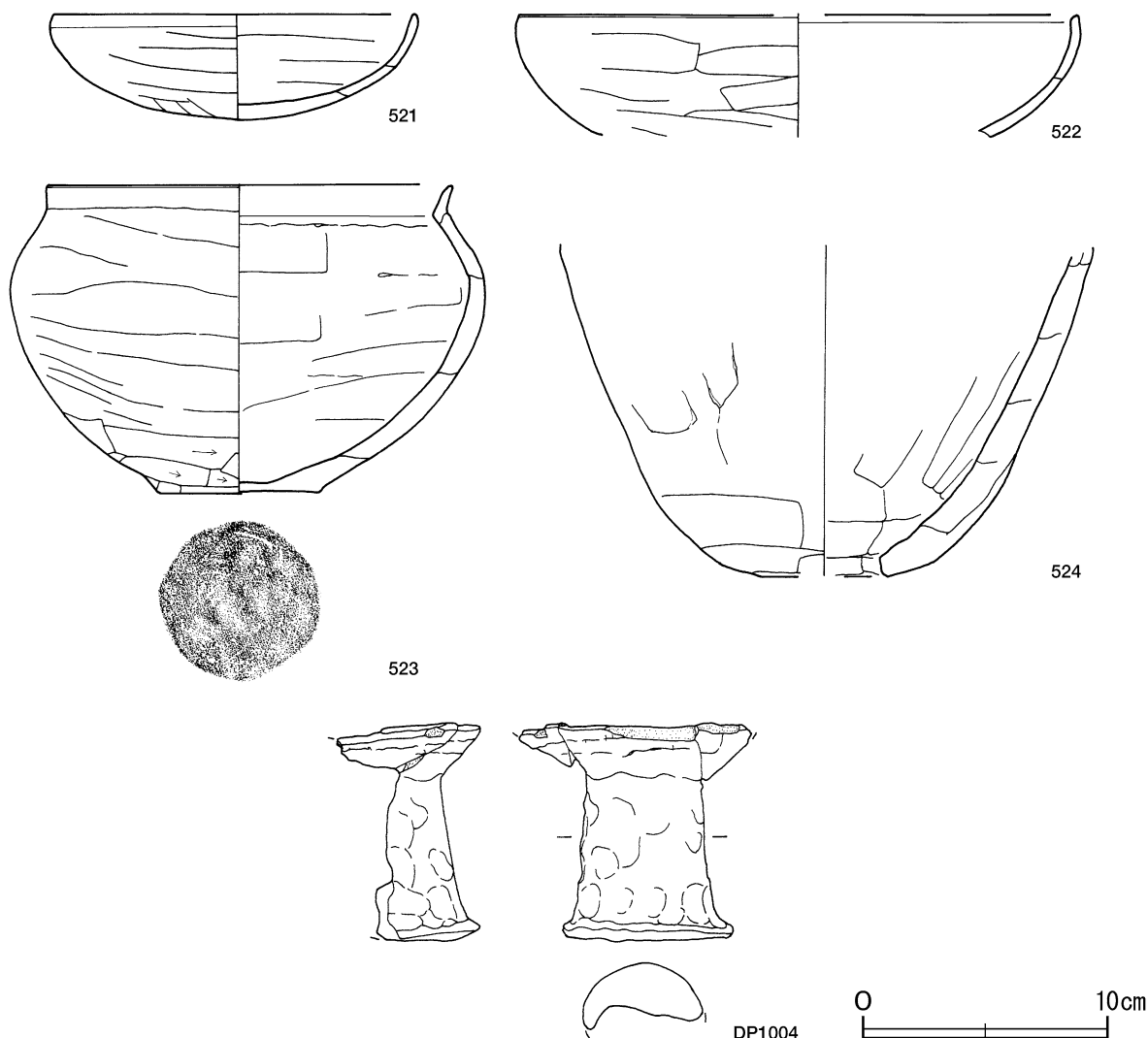
所見 時期は、出土土器から5世紀後葉である。



第365図 第39号住居跡実測図

第39号住居跡出土遺物観察表 (第366図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
521	土師器	椀	14.7	4.2	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	ヘラナデ	覆土上層	60% PL49
522	土師器	椀	[22.7]	(5.0)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	ヘラナデ	覆土上層	20%
523	土師器	椀	16.4	12.6	6.6	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ヘラナデ 外面下端ヘラ削り	覆土上層	95% PL47
524	土師器	甑	-	(13.5)	[5.0]	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部ヘラナデ 孔周縁ヘラ削り 輪積み痕明瞭	覆土上層	15%



第366図 第39号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質 / 胎土	特徴	出土位置	備考
DP1004	土製支脚	(8.8)	(9.5)	(5.9)	(163.3)	粘土 / 石英・長石	表面ナデ調整 指頭痕明瞭 2次焼成	覆土上層	PL57

表8 古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸 × 短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
								ピット				竈	炉					貯蔵 穴
								主柱穴	柱穴	出入口	不明							
1	D 4 f7	N - 45° - E	方形	6.91 × 6.46	5 ~ 26	平坦	一部	4	-	-	1	1	-	1	自然	土師器・剣形模造品	5世紀中葉	SK 2, SI 4 → 本跡
2	D 4 h0	N - 38° - E	方形	6.98 × 6.90	19 ~ 28	平坦	全周	4	-	-	-	1	-	1	自然	土師器・球状土錘・勾玉形模造品	5世紀後葉	SK31・32・57・61・81 → 本跡 → SK1・34・58・82・83
11	E 6 a4	-	[方形]	7.20 × (3.41)	44 ~ 69	平坦	(全周)	2	-	1	-	-	-	-	自然	土師器・球状土錘	5世紀中葉 ~ 後葉	SI 26, SK 251・252・532 → 本跡
22	E 5 d7	-	[方形・長方形]	(2.20) × (1.56)	9 ~ 11	平坦	-	-	-	-	-	地床炉 1	1	-	土師器	古墳中期	本跡 → ST 3, TM 1, SK524	
24	E 6 d6	N - 41° - E	方形	7.50 × 7.02	31 ~ 49	平坦	(全周)	4	-	1	-	1	地床炉 1	1	自然	土師器・須恵器・球状土錘・磁石・紡錘車・台石	5世紀末葉	SK271・373・385・459・465, SI 41 → 本跡 → SK269
30	E 7 f1	N - 48° - E	方形	5.95 × 5.91	17 ~ 37	平坦	ほぼ全周	4	-	2	-	1	地床炉 1	2	人為	土師器・須恵器・球状土錘・滑石片	5世紀後葉 ~ 末葉	SK365・366・447, SI40 → 本跡
36	E 6 e9	N - 39° - E	長方形	5.13 × 4.45	18 ~ 28	平坦	全周	4	-	1	-	1	-	1	人為	土師器・須恵器・球状土錘	5世紀後葉	SK 374・448・460 → 本跡
39	E 7 d1	-	[方形・長方形]	(3.85) × (1.30)	5 ~ 15	平坦	ほぼ全周	1	-	-	-	-	-	-	人為	土師器・土製支脚	5世紀後葉	SK316 → 本跡

(2) 古墳

第1号墳(第367～371図)

位置 調査区中央部のD5区の一部とE5区で、標高24.4～25.4mの台地平坦部に位置している。

確認状況 調査前に墳丘は認められず、表土除去後、方形に巡る周溝と墓道、埋葬施設2か所を確認した。

重複関係 第6・8・16・21・22・25・27号住居跡,第141・143・149・159・194・196・220・294～296・351・464・486・489・507・513・522号土坑を掘り込み,第2・3号建物,第1～3・6号溝,第3号道路,第2号周溝,第171・225・226・231・479号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 周溝外側で長軸37.7m,短軸34.6m,周溝内側で長軸29.0m,短軸24.5mの長方形で,長軸方向はN-12°-Wである。

墳丘 ローム層まで削平を受けており,盛土の構築状況は不明である。

周溝 方形に巡り,上幅2.65～8.90m,下幅1.20～6.15m,深さ36～92cmである。断面形は,全体的に緩やかなU字状で,底面はほぼ平坦で,部分的に皿状にくぼんでいる。東側の周溝の上幅は3.00mと狭いが,掘り込みは,90cmほどで,他よりも深い。断面形は,緩やかなU字状で,壁は外傾して立ち上がっている。北側及び西側の周溝の上幅は,2.60～5.00mと不均一で,掘り込みも50～80cmで,高低差がみられる。断面形は,緩やかなU字状である。南側の周溝の上幅は,大きく外側に広がっており,底面は他と比べて,広い。断面形は,緩やかなU字状である。

墓道 第1埋葬施設と周溝を溝状に結び,長さは4.75mである。その上幅は周溝側で3.28m,埋葬施設側で2.56m,深さは30～85cmである。周溝から4.20mの地点で階段状に立ち上がり,第1埋葬施設に連結している。断面形は,緩やかなU字状で,底面はほぼ平坦である。壁は埋葬施設側では外傾して立ち上がり,周溝側に近づくとつれて,緩やかに立ち上がっている。覆土は31層に分かれ,第1～20層が周溝部の覆土,第21～31層は墓道の覆土である。全体的にロームブロックが多く含まれているが,周囲からの土の流入を示す堆積状況から自然堆積と考えられる。

周溝・墓道土層解説

1 黒褐色	ロームブロック多量,焼土ブロック・炭化物中量	17 黒色	焼土ブロック中量,ロームブロック・炭化物微量
2 黒褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化物少量	18 黒褐色	ロームブロック少量,焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量,炭化物少量	19 暗褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ロームブロック多量,炭化物少量	20 暗褐色	ロームブロック多量,炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化物微量	21 黒色	ロームブロック中量
6 黒褐色	ロームブロック多量,炭化粒子微量	22 黒褐色	ロームブロック少量,焼土ブロック微量
7 褐色	ロームブロック中量	23 暗褐色	ロームブロック多量,炭化物微量
8 黒褐色	ロームブロック中量	24 黒褐色	ロームブロック微量
9 暗褐色	ロームブロック中量,炭化物少量	25 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量
10 褐色	ロームブロック多量	26 暗褐色	ロームブロック少量,焼土ブロック微量
11 褐色	ロームブロック多量,炭化粒子微量	27 暗褐色	粘土ブロック中量,ローム粒子少量,焼土粒子微量
12 暗褐色	ロームブロック少量	28 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
13 暗褐色	ロームブロック多量	29 褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量
14 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量,炭化物少量	30 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子微量
15 褐色	ロームブロック・炭化物中量	31 暗褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化物少量,砂粒微量
16 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量,焼土粒子少量		

埋葬施設 第1埋葬施設は,南側の周溝に寄った中央部やや東寄りに構築した横穴式石室である。第2埋葬施設は,第1埋葬施設の南西6.5mに構築した箱式石棺である。どちらも盗掘を受けており,遺存状況は極めて不良である。

第1埋葬施設

地山を掘り込んだ地下式の横穴式石室で,主軸方向はN-14°-Wである。石室を構成した板石はすべて取り除かれており,奥壁と側壁の板石を据えた溝状の痕跡がわずかに認められた。掘り方は,確認できた長軸は2.94mで,本来の長軸は3.00mほど,短軸2.20mの隅丸長方形と推測できる。確認面からの深さは44cmで,壁

は底面から中位まで外傾して立ち上がり、上位で直立している。底面はほぼ平坦で、東壁・北壁・西壁に沿って、深さ3～10cmの溝状の断続的な掘り込みと、深さ15～20cmほどの皿状の凹みを有している。本来は、この掘り方内に雲母片岩の板石を組み合わせた横穴式石室が構築されていたと考えられる。覆土は30層に分かれ、不自然な堆積状況のため、埋め戻されたと考えられる。

第1埋葬施設土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量,炭化物少量	13 黒褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化物少量
2 暗褐色	粘土ブロック中量,ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	14 暗褐色	ローム粒子中量
3 にぶい黄褐色	ロームブロック中量,粘土粒子少量	15 暗褐色	粘土ブロック多量,ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック中量	16 暗褐色	粘土ブロック中量,焼土粒子・炭化粒子少量
5 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量,焼土ブロック・炭化粒子少量	17 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子中量,炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック中量,粘土ブロック少量,焼土粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック中量,粘土ブロック・焼土粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	19 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量
8 暗褐色	粘土ブロック中量,ローム粒子少量	20 暗褐色	粘土ブロック多量,炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック中量,粘土ブロック少量,炭化粒子微量	21 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量,炭化粒子少量
10 褐色	ロームブロック多量,粘土ブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量	22 褐色	粘土ブロック・ロームブロック中量
11 褐色	ロームブロック多量,炭化粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック中量,粘土ブロック・焼土粒子少量
12 オリーブ褐色	粘土ブロック多量,ローム粒子微量	24 褐色	粘土ブロック中量,ロームブロック少量
		25 褐色	ロームブロック中量,粘土粒子少量
		26 褐色	ロームブロック多量,粘土粒子少量
		27 黒褐色	ロームブロック多量,粘土ブロック・炭化粒子中量
		28 暗褐色	ロームブロック中量,粘土粒子微量
		29 褐色	ロームブロック中量
		30 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量

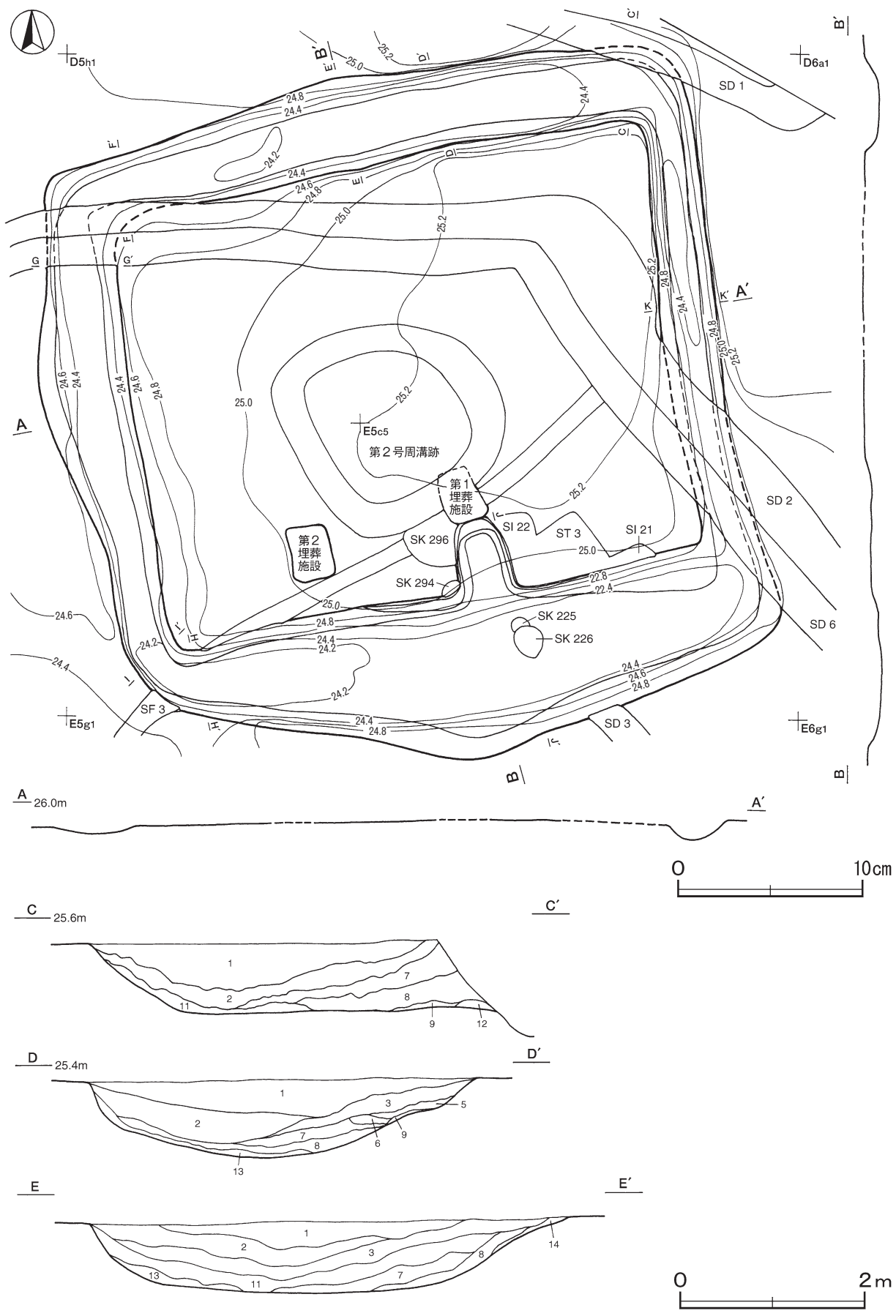
第2埋葬施設

地山を掘り込んだ地下式の箱式石棺で、主軸方向はN - 15° - Wである。石棺を構成した板石はすべて取り除かれている。掘り方は2段構造で、上段の掘り込みは、長軸3.05m、短軸2.29mの長方形で、主軸方向はN - 4° - Wである。深さ26～35cmで、壁は直立している。底面はほぼ平坦である。その内側の下段の掘り込みは、長軸2.41m、短軸1.27mの長方形で、上段の底面からの深さは8～21cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。東壁と北壁の一部に沿って、深さ4～6cmの溝状の掘り込みが認められ、石棺を構成した板石を据えた痕跡と考えられる。覆土は9層に分かれ、不自然な堆積状況のため、埋め戻されたと考えられる。第9層は黄褐色粘土ブロックで、板石の隙間やつなぎ目に施された目張り粘土の一部と推測され、上段の掘り込みの底面付近や下段の掘り込みの周囲の覆土中に多くみられた。

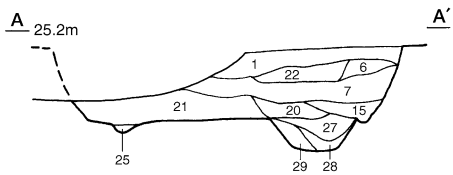
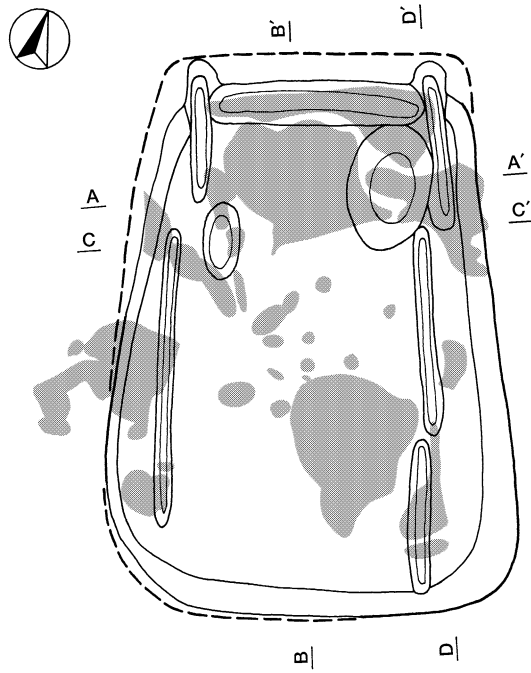
第2埋葬施設土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量,焼土ブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量,炭化粒子少量,焼土粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量,粘土ブロック少量
3 褐色	ローム粒子中量,炭化物微量	7 褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック中量,炭化粒子少量	8 褐色	ローム粒子・粘土粒子中量

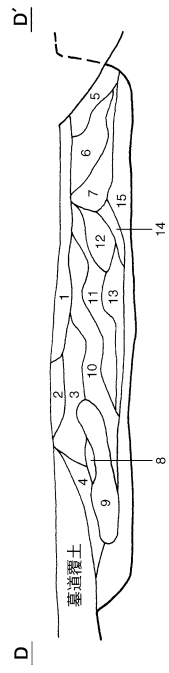
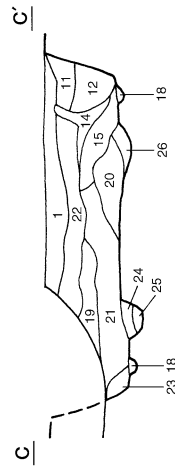
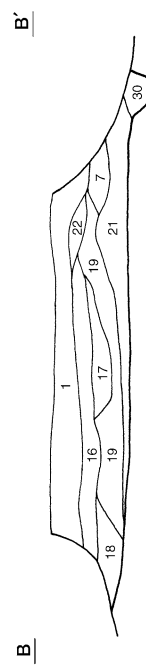
遺物出土状況 流入した縄文土器片4757点、弥生土器片193点、土器片錘28点、土器片円盤2点、球状土錘2点、打製石斧2点、磨製石斧5点、凹石2点、磨石1点、敲石1点、石皿1点、石棒1点、剥片3点、石製模造品1点、混入した土師器片254点、須恵器片87点、灰釉陶器片5点、陶器片6点、磁器片2点、青磁片1点、土師質土器片1点、砥石1点、周溝の覆土から出土している。2か所の埋葬施設の覆土からは、微細な土師器片は出土しているが、遺骸や副葬品、時期を決定できる遺物は出土していない。また、2か所の埋葬施設の覆土中や周溝の覆土下層から底面にかけて、大量の雲母片岩片が出土している。第1埋葬施設の墓道に繋がるE5e6～8・E5f6～8区を中心として、細かく破碎された雲母片岩片が敷き詰められたような状態で密集して出土している。また、E5f3・4区、E5e7・8区からは、縦60～70cm、横40～60cm、厚さ10～20cmほどの板石をはじめとする大形破片が散在して出土している。いずれも埋葬施設に使用した雲母片岩の板石と考えられる。



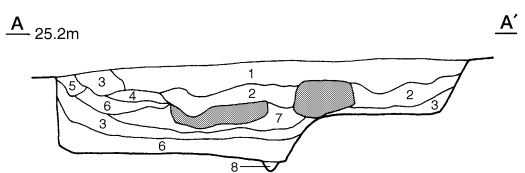
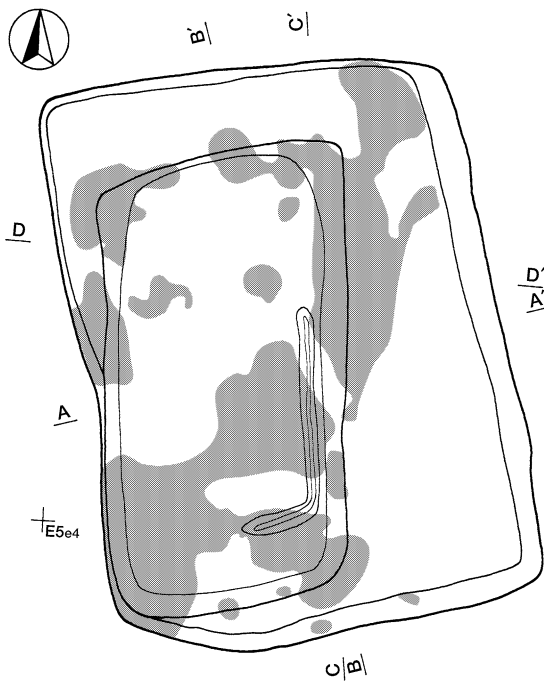
第367图 第1号墳実測図(1)



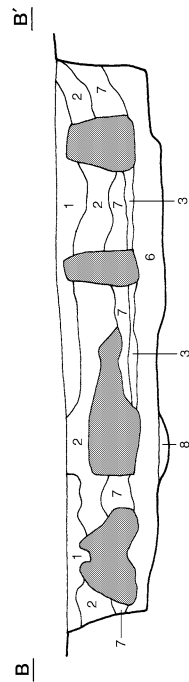
E5d7



第1埋葬施設

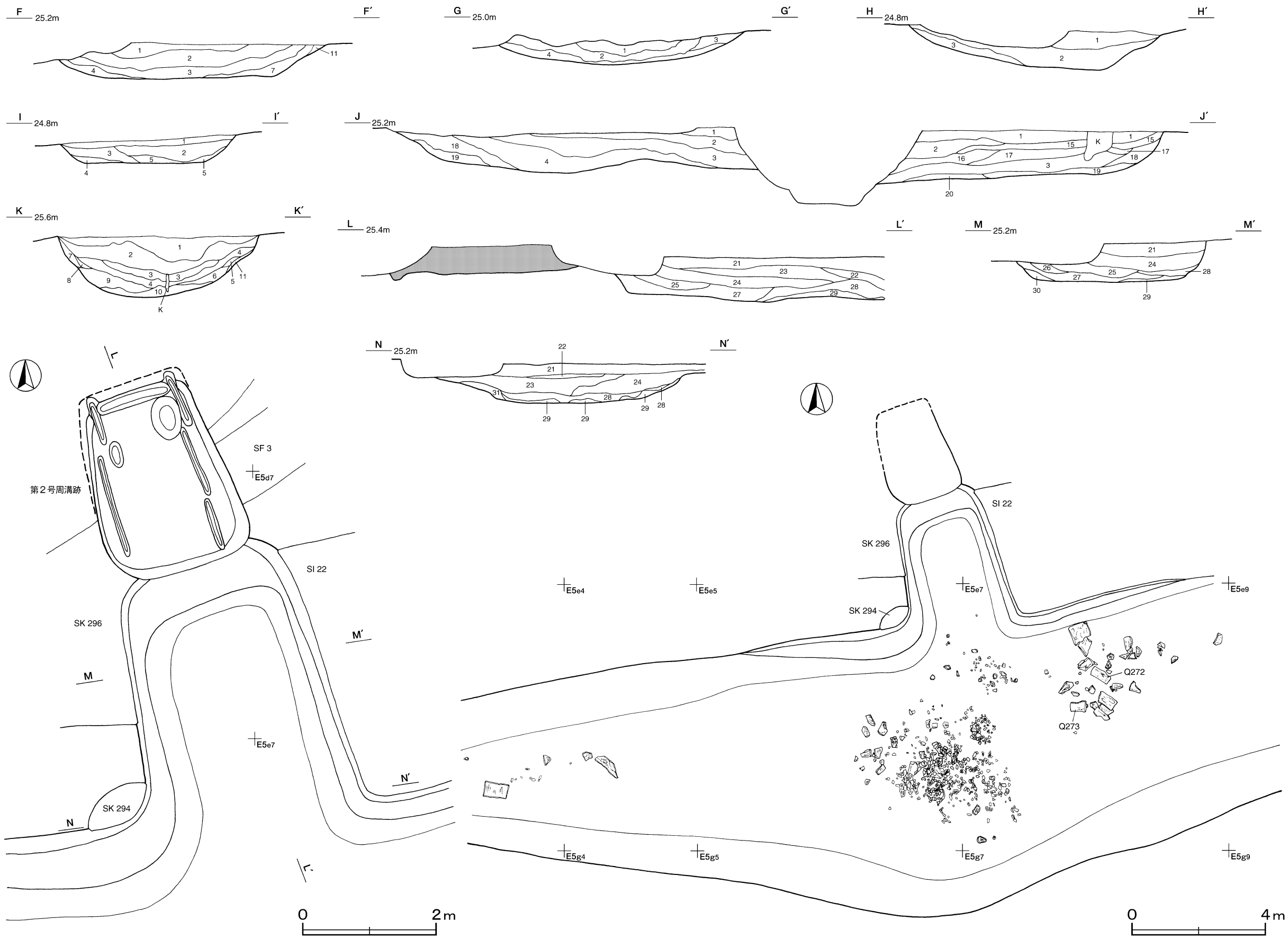


第368图 第1号墳実測图(2)



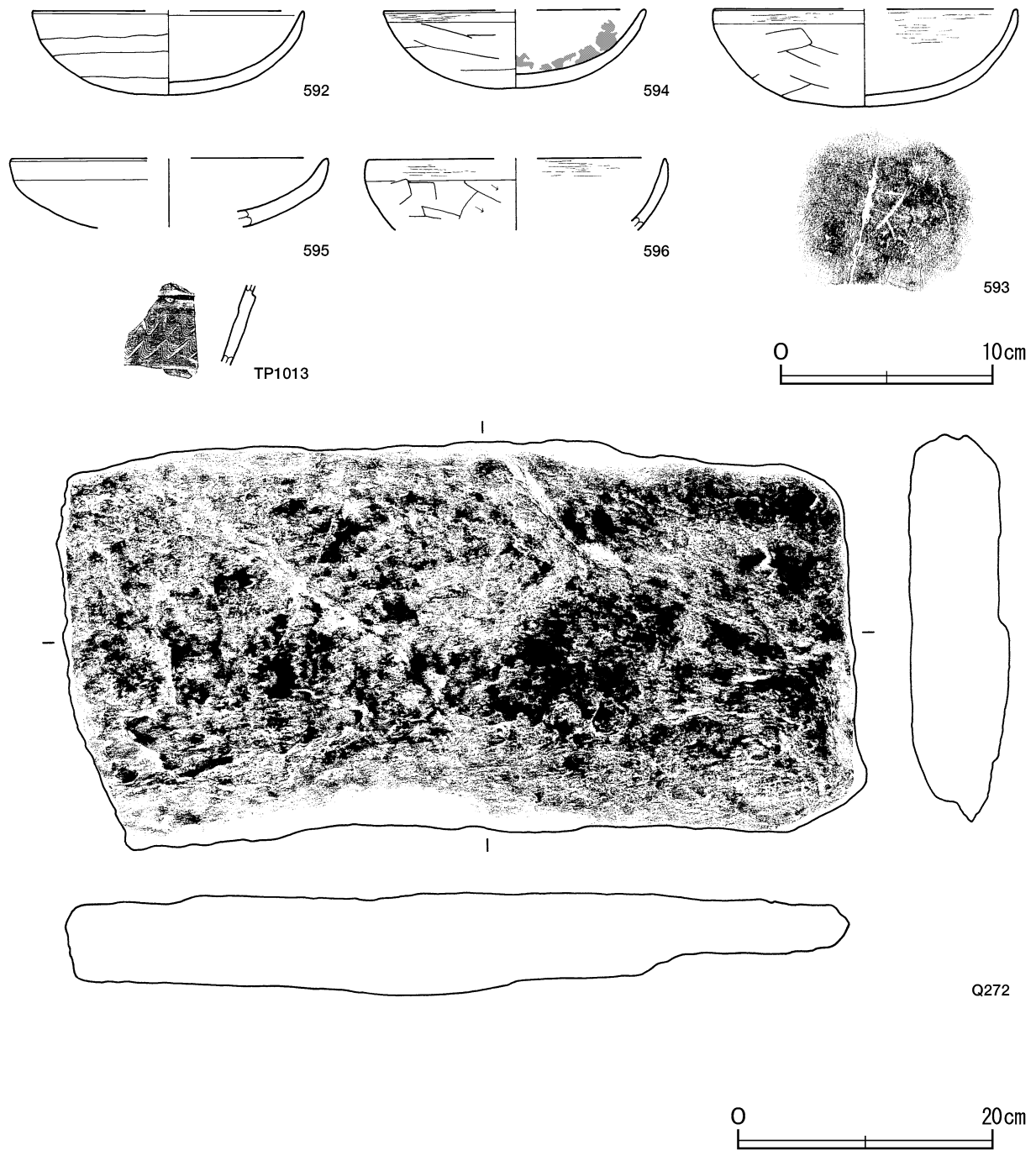
第2埋葬施設



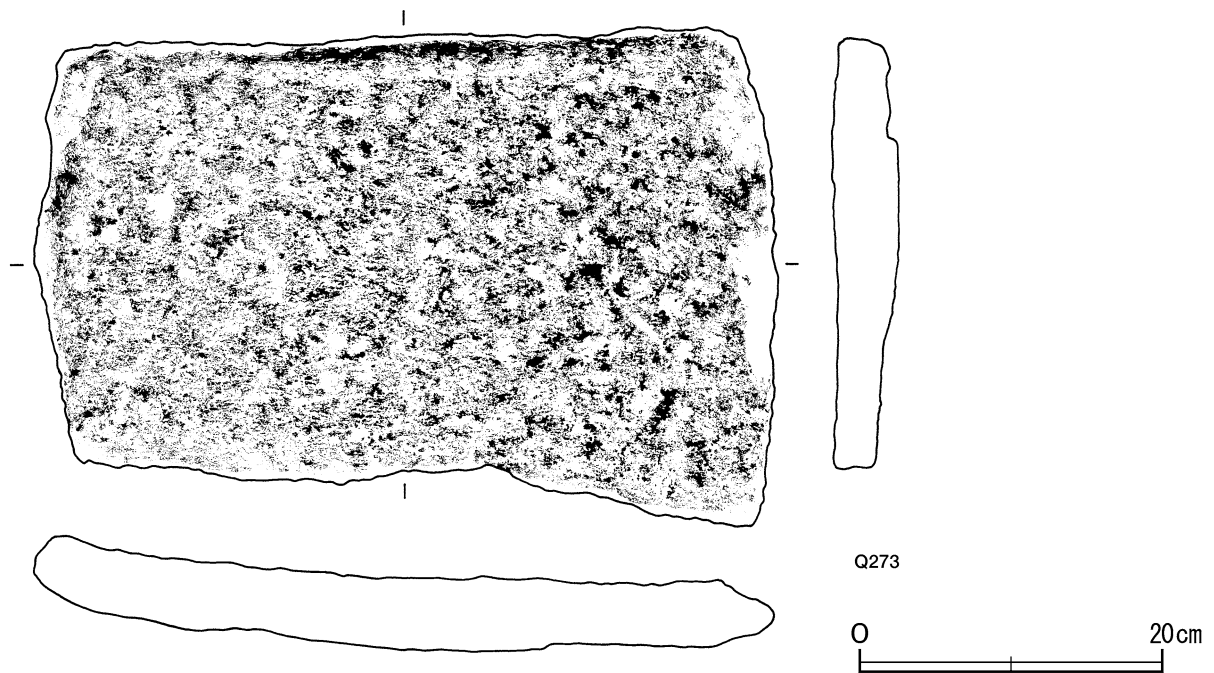


第369图 第1号墳実測图(3)

所見 第370図には、周溝の覆土などから出土した主な土師器片を掲載したが、それらの遺物から時期を判断することはできない。遺構の形状、周辺地域の類例、長方墳であることや2か所の埋葬施設の形態と、箱式石棺の位置が墳丘周縁部に位置していることなどから、築造年代は後期の7世紀後半と推測できる。大量に出土した雲母片岩片のほとんどは、周溝の底面や覆土下層から出土しているため、造墓主体による墓域の管理が終了した段階から、周溝の埋没が開始した比較的早期の段階で、盗掘に遭ったと考えられる。また、周辺地域の類例などから低墳丘であった可能性が高く、平安時代末期には、その墳丘自体も第19～22号住居などの構築によって壊されたと推測できる。



第370図 第1号墳出土遺物実測図(1)



第371図 第1号墳出土遺物実測図(2)

第1号墳出土遺物観察表(第370・371図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
592	土師器	椀	[12.8]	3.9	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラナデ	周溝南側覆土	50%
593	土師器	椀	[14.2]	4.6	-	長石・雲母	橙	普通	体部ヘラナデ	墓道覆土	30%
594	土師器	椀	[12.4]	3.7	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラナデ 内面油煙付着	墓道覆土	30%
595	土師器	椀	[14.8]	(3.2)	-	石英・長石・雲母・赤地子	橙	普通	ナデ	周溝南側底面	30%
596	土師器	椀	[14.0]	(3.4)	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラナデ	墓道覆土	10%
TP1013	須恵器	壺	-	(3.8)	-	長石	灰	普通	8本櫛歯による波状文を2段に巡らす	周溝東側覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q272	板石	63.8	31.9	7.8	2610.0	雲母片岩	長方形 両面平滑 側縁部剥離痕・切断痕	周溝南側底面	
Q273	板石	49.2	33.1	4.5	1286.0	雲母片岩	長方形 両面痘痕状の凹み 側縁部剥離痕・切断痕	周溝南側底面	

(3) 土坑

第1号土坑(第372図)

位置 調査区北部のD4g0区で、標高24.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡と第61号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.31m、短径1.10mの楕円形で、長径方向はN-78°-Eである。深さは66cmで、底面に3か所の浅い溝状のくぼみを有している。壁は外傾して立ち上がっている。

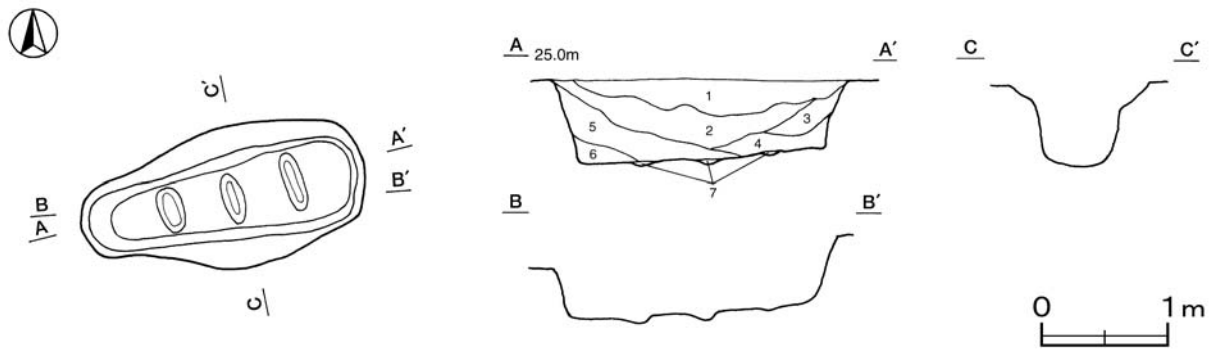
覆土 7層に分かれ、ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻された考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化物微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量,焼土ブロック少量,炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量,焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 7 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片4点(椀)が,覆土下層から出土している。その他,流入した縄文土器片261点,弥生土器片8点,土器片錘1点,楔形石器1点も出土している。

所見 出土土器は細片のため図示できない。時期は,古墳時代中期の第2号住居跡を掘り込んでいるため,それ以降である。底面に浅い溝状のくぼみを有する形状の特徴と,第1号墳の周囲に位置していることから,後期の墓坑の可能性が考えられる。



第372図 第1号土坑実測図

第34号土坑 (第373図)

位置 調査区北部のD4h9区で,標高24.6mの台地平坦部に位置している。

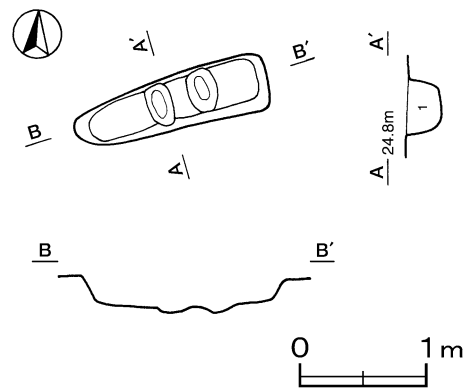
重複関係 第2号住居跡,第32号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.60m,短径0.42mの楕円形で,長径方向はN-73°-Eである。深さは24cmで,底面に2か所の浅い溝状のくぼみを有している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層。ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため,埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化物微量 |
|-------|------------------------|



第373図 第34号土坑実測図

遺物出土状況 流入した縄文土器片19点が出土している。

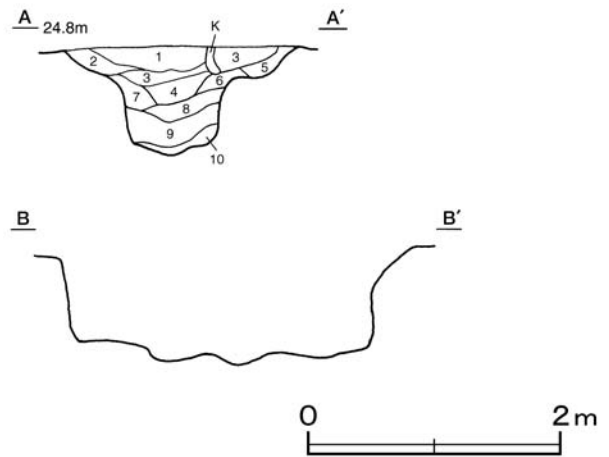
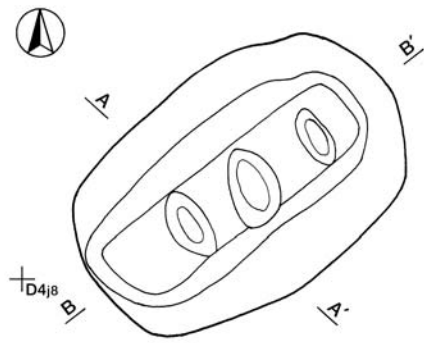
所見 時期は,古墳時代中期の第2号住居跡を掘り込んでいるため,それ以降である。底面に溝状の浅いくぼみを有する形状の特徴と,第1号墳の周囲に位置していることから,後期の墓坑の可能性が考えられる。

第35号土坑 (第374図)

位置 調査区北部のD4i8区で,標高24.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第36・39号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.78m,短径1.85mの楕円形で,長径方向はN-53°-Eである。深さは88cmで,底面に3か所の浅い溝状のくぼみを有している。壁は底面から直立し,上部で外傾して立ち上がっている。



第374図 第35号土坑実測図

覆土 10層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

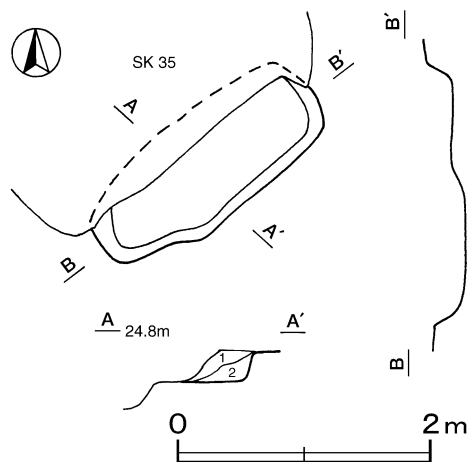
- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化物微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量 | 10 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 須恵器片1点（甕）が、覆土中から出土している。流入した縄文土器片128点，剥片1点，軽石3点も出土している。

所見 出土土器は細片のため図示できない。時期は、底面に浅い溝状のくぼみを有する形状の特徴と、第1号墳の周囲に位置していることから、古墳時代後期の墓坑の可能性が考えられる。

第39号土坑（第375図）

位置 調査区北部のD4i8区で、標高24.7mの台地平坦部に位置している。



重複関係 第35号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西側が第35号土坑に掘り込まれているため、長径2.07m，確認できた短径は0.61mで、本来は短径0.90mで、長径方向がN-52°-Eの楕円形と推測できる。深さは29cmで、底面は緩やかな凹凸を有している。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分かれ、ロームブロックを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |

遺物出土状況 流入した縄文土器片2点が出土している。

所見 時期は不明であるが、第1号墳の周囲に位置している他の土坑と形状や長径方向が類似していることから、後期の墓坑の可能性が考えられる。

第375図 第39号土坑実測図

第58号土坑 (第376図)

位置 調査区北部のD 4 h9区で、標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡，第57号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.12m，短径0.74mの楕円形で，長径方向はN - 33° - Eである。深さは45cmで，底面に2か所の浅い溝状のくぼみを有している。壁は外傾して立ち上がっている。

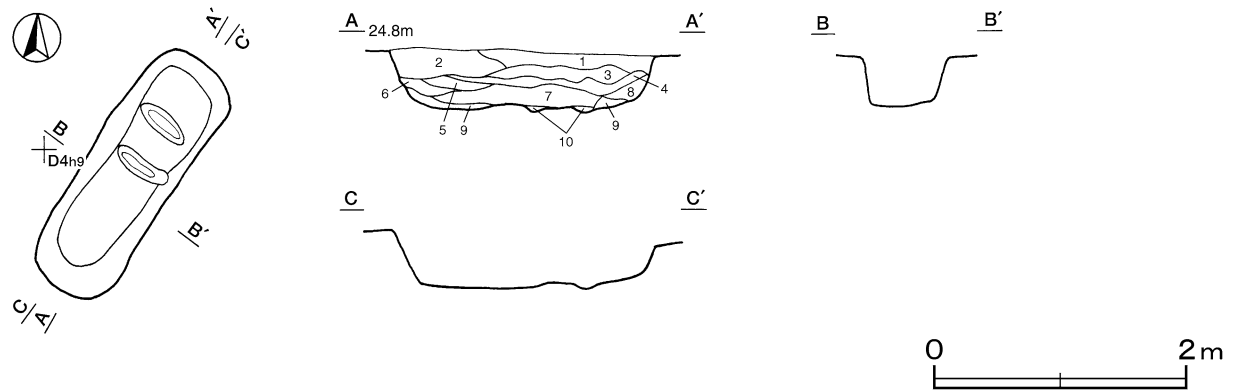
覆土 10層に分かれ，ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため，埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック中量，炭化物・焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック多量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量，炭化物微量 | 10 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 流入した縄文土器片105点，弥生土器片4点が出土している。

所見 時期は，古墳時代中期の第2号住居跡を掘り込んでいるため，それ以降である。底面に浅い溝状のくぼみを有する形状の特徴と，第1号墳の周囲に位置していることから，後期の墓坑の可能性が考えられる。



第376図 第58号土坑実測図

表9 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸	深さ (cm)							
1	D 4 g0	楕円形	N - 78° - E	2.31 × 1.10	66	外傾	凹凸	-	人為	土師器	後期	SK61, SI 2 → 本跡
34	D 4 h9	楕円形	N - 73° - E	1.60 × 0.42	24	緩斜	凹凸	-	人為	土師器	後期	本跡 → SK32, SI 2
35	D 4 i8	楕円形	N - 53° - E	2.78 × 1.85	88	外傾	凹凸	-	人為	土師器	後期	SK36・39 → 本跡
39	D 4 i8	[楕円形]	N - 52° - E	2.07 × (0.61)	29	緩斜	凹凸	-	人為	土師器	後期	本跡 → SK35
58	D 4 h9	楕円形	N - 33° - E	2.12 × 0.74	45	外傾	凹凸	-	人為	土師器	後期	SK57, SI 2 → 本跡

4 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、竪穴建物跡6棟、火葬墓1基、土坑6基、溝跡1条、周溝跡1基である。これらの遺構は標高23.8～25.4mの台地縁辺部から平坦部に位置している。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第7号住居跡(第377・378図)

位置 調査区北部のD 5 g4区で、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡を掘り込み、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北側が第1号溝に掘り込まれているため、確認できた長軸は2.72mで、本来は長軸2.80mほど、短軸2.79mで、主軸方向はN-82°-Wの方形と推測できる。壁高は11～16cmで、外傾して立ち上がっている。

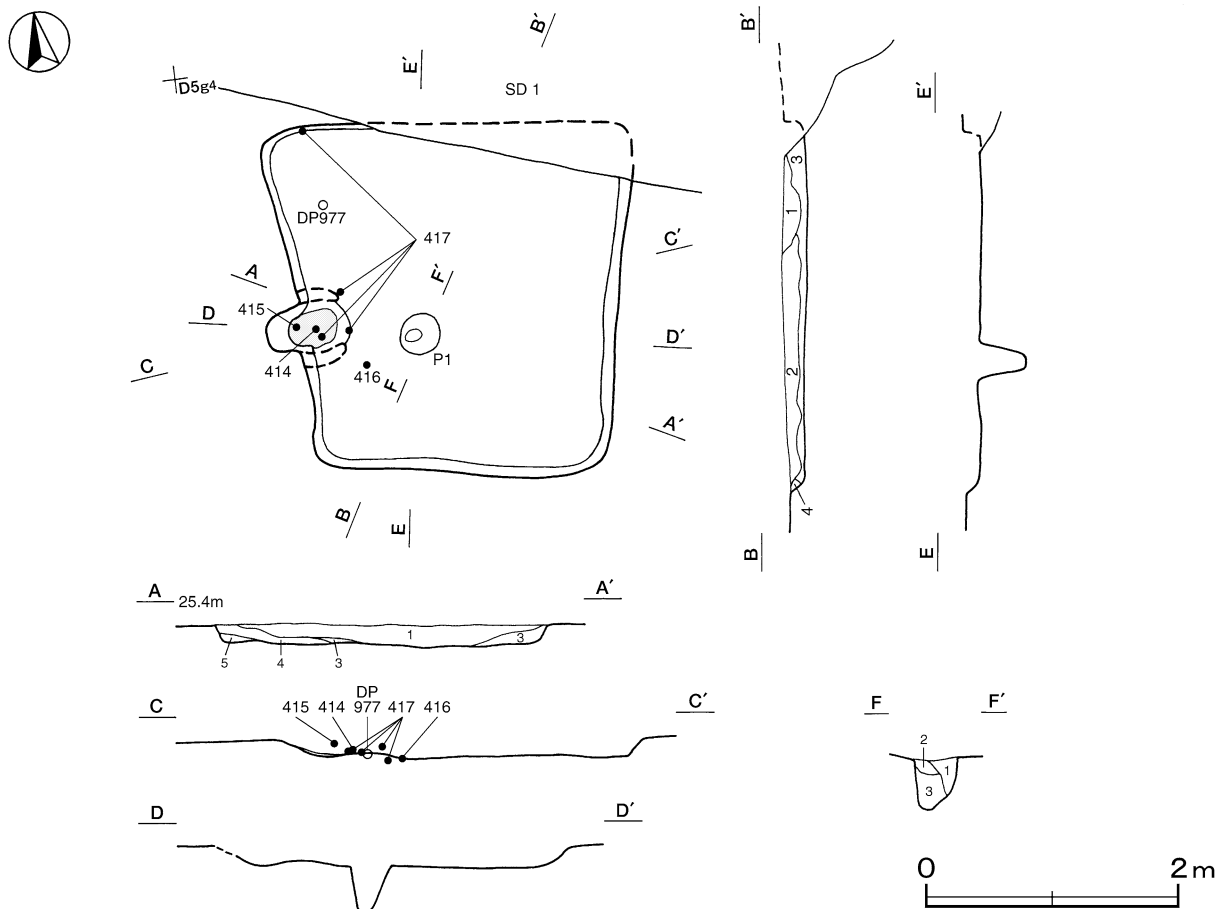
床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

ピット P1は深さ40cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|------------------------|--------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量 | |

竈 西壁の南寄りに位置し、煙道部は壁外へ30cm掘り込んでいる。規模は、焚口部から煙道部まで60cm、燃焼部幅40cmほどである。袖部は確認できず、燃焼部の中央部に位置する火床面は、床面をわずかに掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。



第377図 第7号住居跡実測図

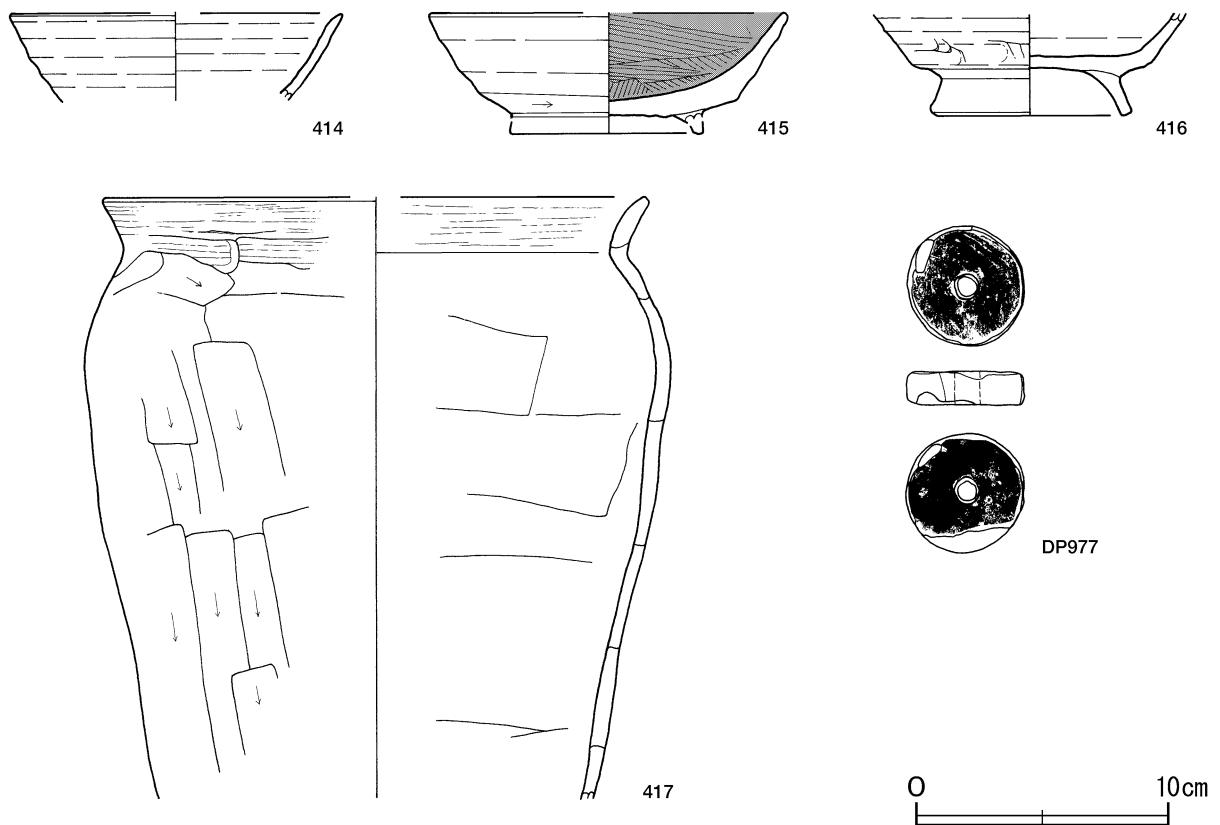
覆土 5層に分かれ，周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土ブロック・ロームブロック少量，炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片31点（坏5，高台付坏13，甕13），土製品1点（紡錘車）が，覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。北西コーナー部や竈の内外から比較的まとまって出土している。その他，流入した縄文土器片62点，弥生土器片4点も出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半である。



第378図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第378図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
414	土師器	坏	[13.2]	(3.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口クロ目明瞭	竈火床面	10%
415	土師器	高台付坏	[14.0]	(4.3)	[7.4]	石英・雲母	橙	普通	体部下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き 黒色処理	竈覆土	90% PL50
416	土師器	高台付坏	-	(4.1)	7.4	石英・長石・雲母	橙	普通	体部下端ヘラナデ	床面	40%
417	土師器	甕	[21.4]	(23.8)	-	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	15%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質 / 胎土	特徴	出土位置	備考
DP977	紡錘車	4.8	4.7	1.4	35.9	須恵器 / 石英・長石	研磨調整 中央部に穿孔 孔径0.8cm	床面	PL57

第28号住居跡（第379図）

位置 調査区東部のE 6 b6区で、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第345号土坑を掘り込んでいる。南側は攪乱で削平されている。

規模と形状 南側が攪乱で削平されているため、確認できた長軸は3.06mで、本来は、長軸3.40mほど、短軸3.39mで、主軸方向はN - 109° - Eの方形と推測できる。壁高は12~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が西壁と東壁の一部を除いた壁下で確認され、幅は15~18cm、深さ5~10cmで、断面形はU字状である。

ピット 3か所。P1は深さ16cmで、北側に不整形のテラス状の段を有している。覆土は埋め戻されており、多数の鉄滓が出土しているため、廃滓ピットの可能性もある。P2は深さ7cm、P3は深さ22cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・鉄滓中量,ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 2 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒中量,鉄滓少量 |
|-----------------------------------|------------------------------------|

竈 東壁のほぼ中央部に位置し、煙道部は壁外へ30cm掘り込んでいる。規模は、焚口部から煙道部まで97cm、燃烧部幅33cmである。袖部は第10・11層で、ロームブロックを含む暗褐色土で構築している。燃烧部のほぼ中央部に位置する火床面は、床面を12cm掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量,ローム粒子少量 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック中量,ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量,焼土粒子微量 |
| 3 黒色 焼土ブロック中量,ローム粒子少量 | 9 暗褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量 | 10 暗褐色 焼土ブロック中量,炭化物少量 |
| 5 暗褐色 ロームブロック多量 | 11 黒褐色 ロームブロック中量,焼土ブロック少量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量,ローム粒子・炭化粒子微量 | |

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長軸46cm、短軸42cmの楕円形で、深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量,焼土ブロック少量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量,焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック中量,ローム粒子少量 | |

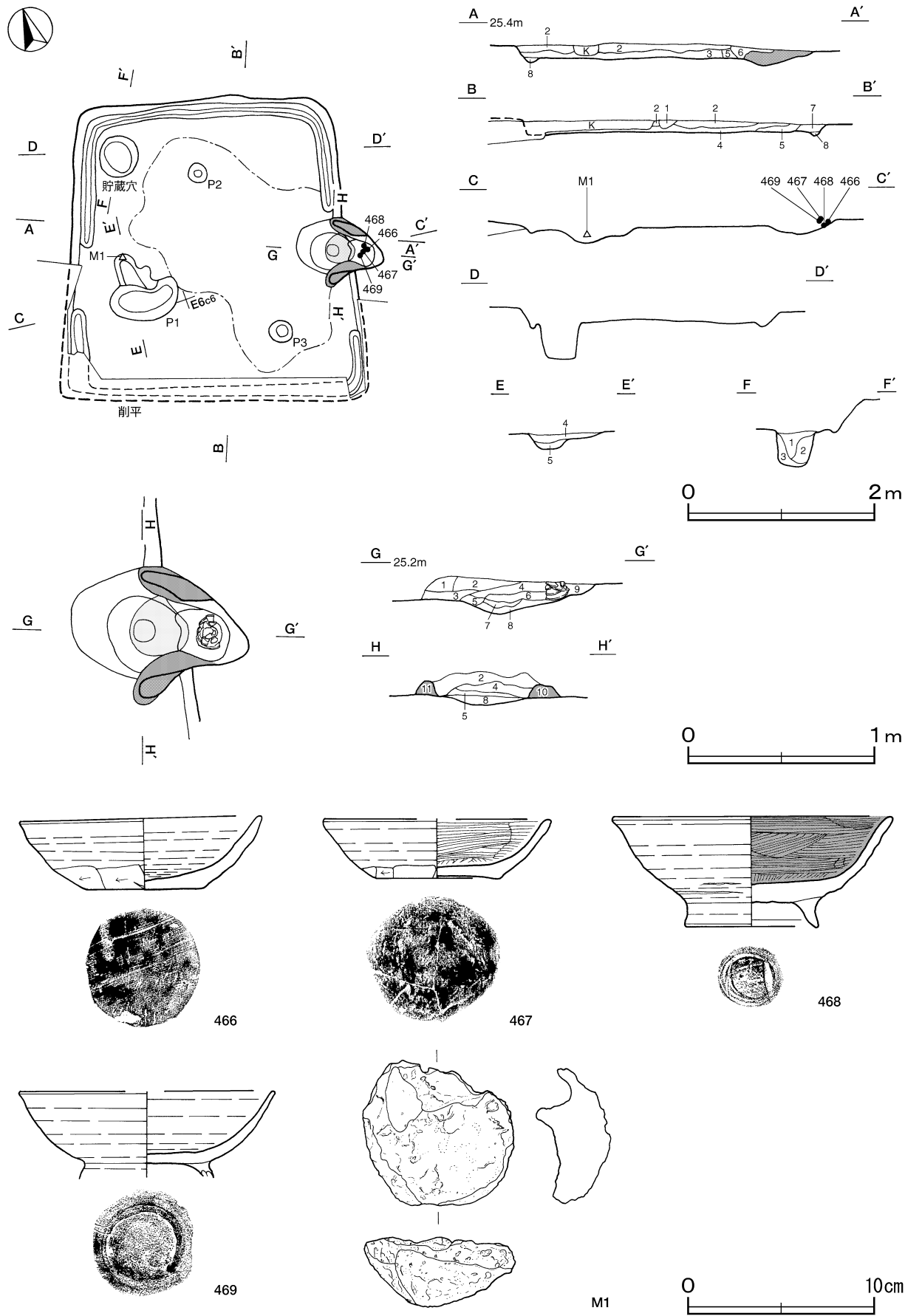
覆土 8層に分かれ、ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

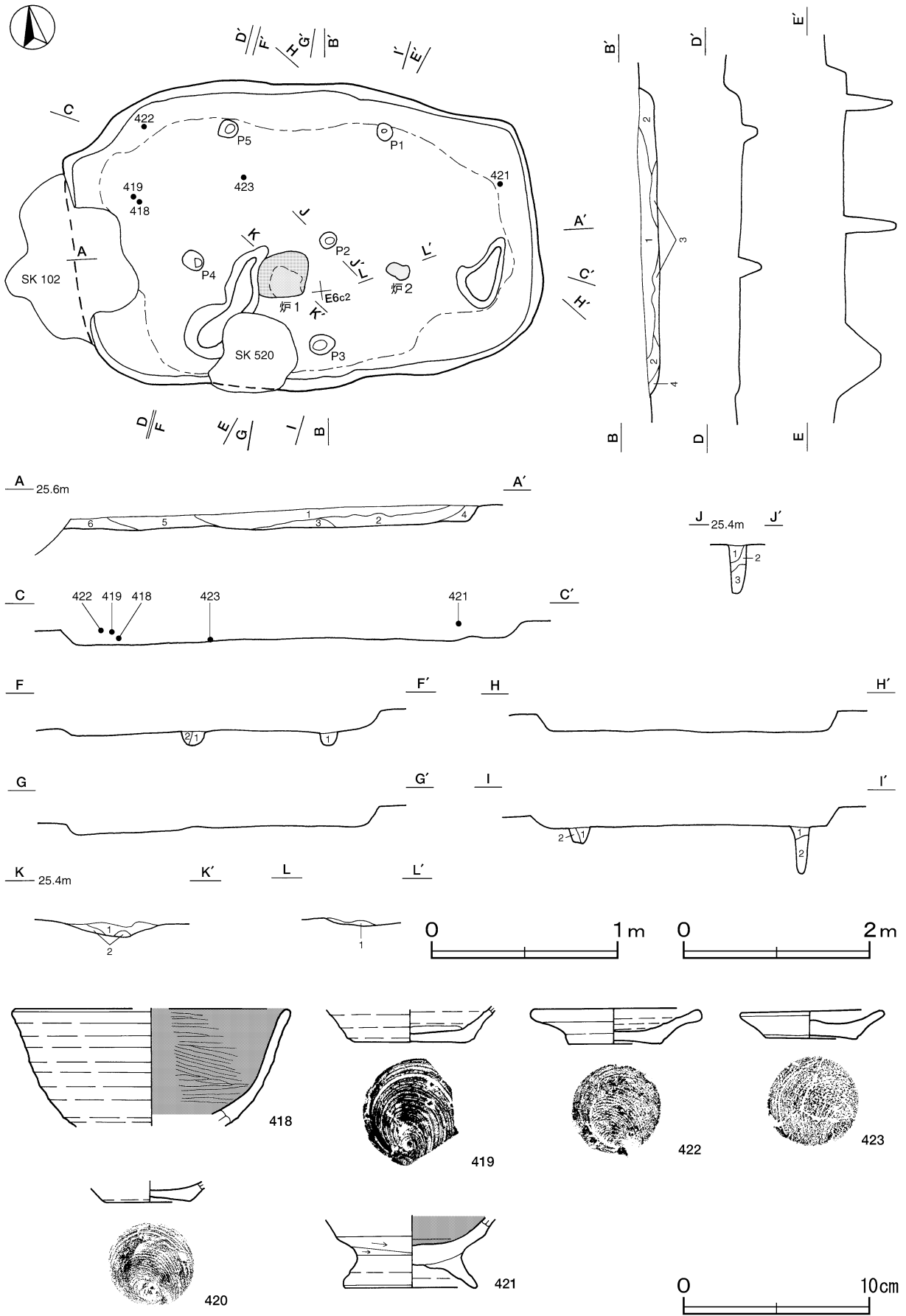
- | | |
|------------------------------|---|
| 1 褐色 焼土ブロック多量,ローム粒子・炭化粒子中量 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量,粘土粒子・砂粒少量,炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量,炭化物少量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量,炭化物少量 | 8 暗褐色 焼土ブロック多量,ロームブロック中量,炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック多量,炭化物中量 | |
| 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量 | |

遺物出土状況 土師器片82点（坏39、高台付坏15、甕28）、鉄滓11点が、竈内やP1の覆土中から出土している。その他、流入した縄文土器片77点、弥生土器片178点、古墳時代の須恵器片1点も出土している。竈内からは、466~469が竈の煙道部のほぼ中央から、逆位で重ねられた状態で出土しているため、支脚として使用されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀前半である。性格は、P1から集中して鉄滓などが出土していることから、鍛冶関連作業施設の可能性もある。



第379图 第28号住居跡・出土遺物実測図



第380图 第1号建物跡・出土遺物実測図

所見 時期は 出土土器から11世紀前半である。特徴は竈が付設されず、複数の炉を有していること、床面に地山を掘り残した高まりが築かれていることなどで、単なる居住施設ではなく、何らかの作業施設の可能性がある。

第1号建物跡出土遺物観察表（第380図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
418	土師器	坏	[14.6]	(6.3)	-	石英・長石・雲母・赤粘土	浅黄橙	普通	内面ヘラ磨き、黒色処理	覆土下層	5%
419	土師器	坏	-	(1.7)	6.0	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	内面見込に粘土貼付 底部回転糸切り離し	覆土中層	50%
420	土師器	坏	-	(1.1)	4.6	長石・雲母	黄橙	普通	底部回転糸切り離し	覆土	10%
421	土師器	高台付坏	-	(3.8)	[7.1]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端ヘラ削り 内面黒色処理	覆土上層	20%
422	土師器	小皿	8.9	2.0	5.1	石英・長石・雲母	橙	普通	外面ナデ 内面ロクロ目明瞭 底部回転糸切り離し	覆土上層	100% PL50
423	土師器	小皿	7.4	1.5	5.0	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	ナデ 底部静止糸切り離し	床面	100%

第2号建物跡（第381・382図）

位置 調査区中央部のE 5 d8区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20・25号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.10m、短軸4.56mの長方形で、主軸方向はN - 29° - Eである。壁高は10～13cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

ピット 8か所。P1・P3～P6・P8は深さ43～65cmで、柱穴と考えられる。P2・P7は深さ12～23cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子中量	7 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 にぶい黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック中量
3 褐色	ロームブロック多量	9 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 にぶい黄褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	ロームブロック中量	11 にぶい黄褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	12 褐色	ロームブロック中量

炉 中央部の東寄りに位置する地床炉である。長径86cm、短径43cmの不整楕円形で、床面を皿状に5cm掘りくぼめて構築している。火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 赤褐色	焼土ブロック多量
-------	----------

屋内土坑 2か所。屋内土坑1は北コーナー部に位置し、長径100cm、短径96cmの円形で、深さは38cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。屋内土坑2は東コーナー部に位置し、長径90cm、短径71cmの楕円形で、深さは11cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

屋内土坑土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒色	ロームブロック中量
2 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子中量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化物中量、焼土ブロック少量	10 黒褐色	ロームブロック多量
5 黒褐色	ロームブロック中量	11 黒褐色	ロームブロック中量
6 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物少量		

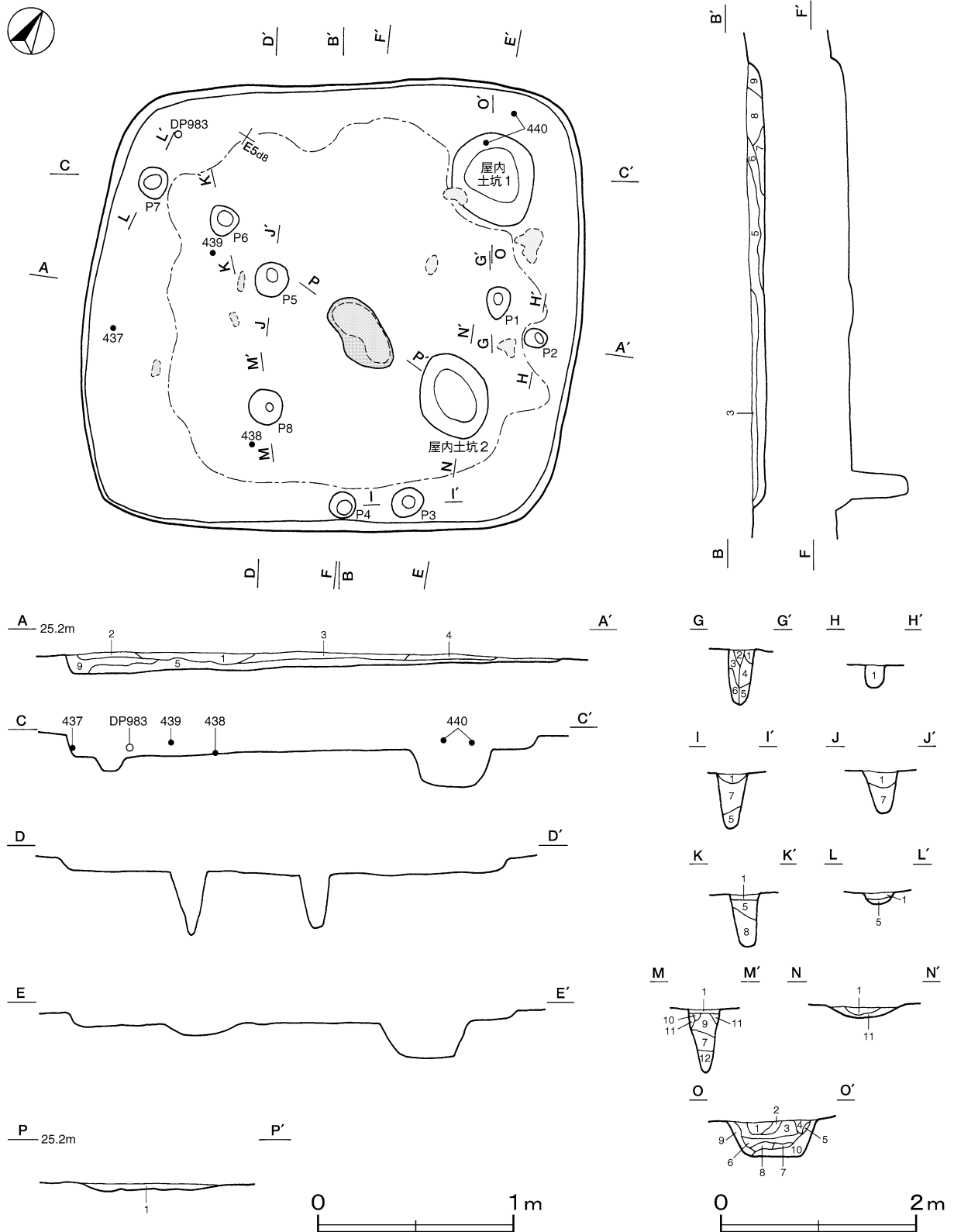
覆土 9層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

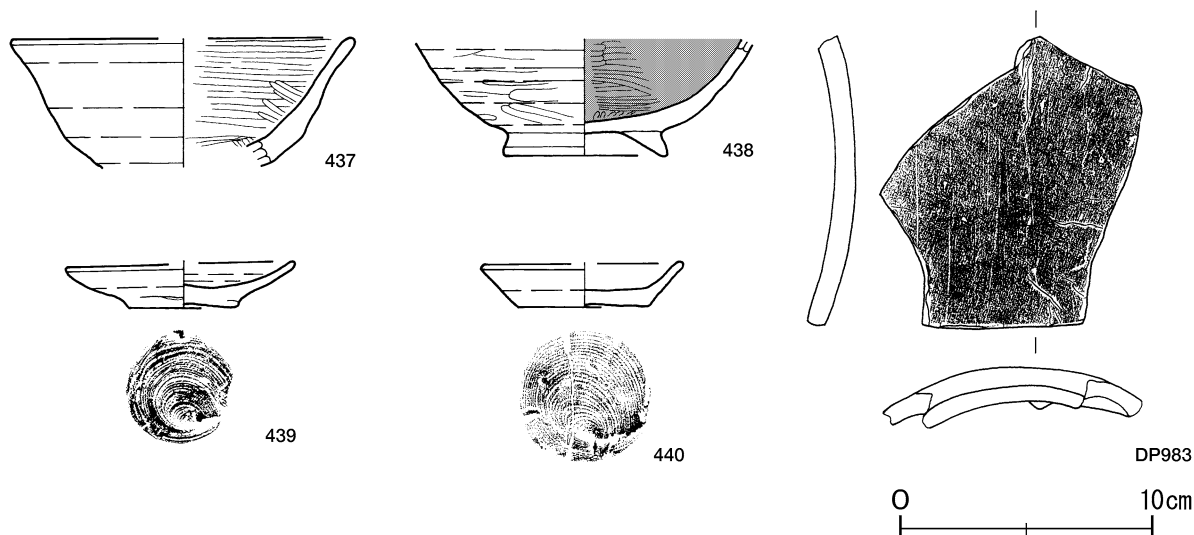
1 暗褐色	焼土ブロック・ロームブロック中量、炭化物少量	6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
3 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	8 黒褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	9 暗褐色	ロームブロック中量
5 黒褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物中量		

遺物出土状況 土師器片94点（坏41，高台付坏4，小皿3，甕46）が，覆土中層から下層にかけて散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片227点，古墳時代の須恵器片3点，剣形模造品1点，土器片錘2点，混入した瓦質土器片2点も出土している。また，複数の焼土塊が床面直上から出土している。

所見 時期は，出土土器から11世紀前半である。特徴は竈が付設されず，炉を有していることなどで，単なる居住施設ではなく，何らかの作業施設の可能性もある。



第381図 第2号建物跡実測図



第382図 第2号建物跡出土遺物実測図

第2号建物跡出土遺物観察表(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
437	土師器	坏	[13.6]	(5.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	外面口口目明瞭 内面ヘラ磨き	覆土下層	20%
438	土師器	高台付坏	-	(4.6)	6.4	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面雑なヘラ磨き 内面ヘラ磨き 黒色処理	覆土下層	20%
439	土師器	小皿	[9.0]	1.9	4.4	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面ナデ 内面口口目明瞭 底部回転糸切り離し	覆土中層	70% PL50
440	土師器	小皿	[7.7]	1.7	5.2	長石・雲母	にぶい橙	普通	ナデ 底部回転糸切り離し	覆土中層	65%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP983	転用砥	11.5	10.4	0.8	119.5	土師器/石英・雲母	1側縁に研磨痕	覆土中層	

第3号建物跡(第383図)

位置 調査区中央部のE 5 d7区で、標高25.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第21・22号住居跡, 第1号墳を掘り込み, 第2号建物, 第231号土坑に掘り込まれている。また, 南東壁と南西壁の大半は攪乱で削平されている。

規模と形状 南東壁と南西壁の大半が攪乱で削平されているため, 確認できた長軸は5.01m, 確認できた短軸は4.59mで, 本来は長軸5.40m, 短軸4.80mほどの長方形と推測できる。壁高は10~24cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は深さ45cm, P2は深さ30cmで, 性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |

覆土 3層に分かれ, 層厚が薄いため, 堆積状況は不明である。

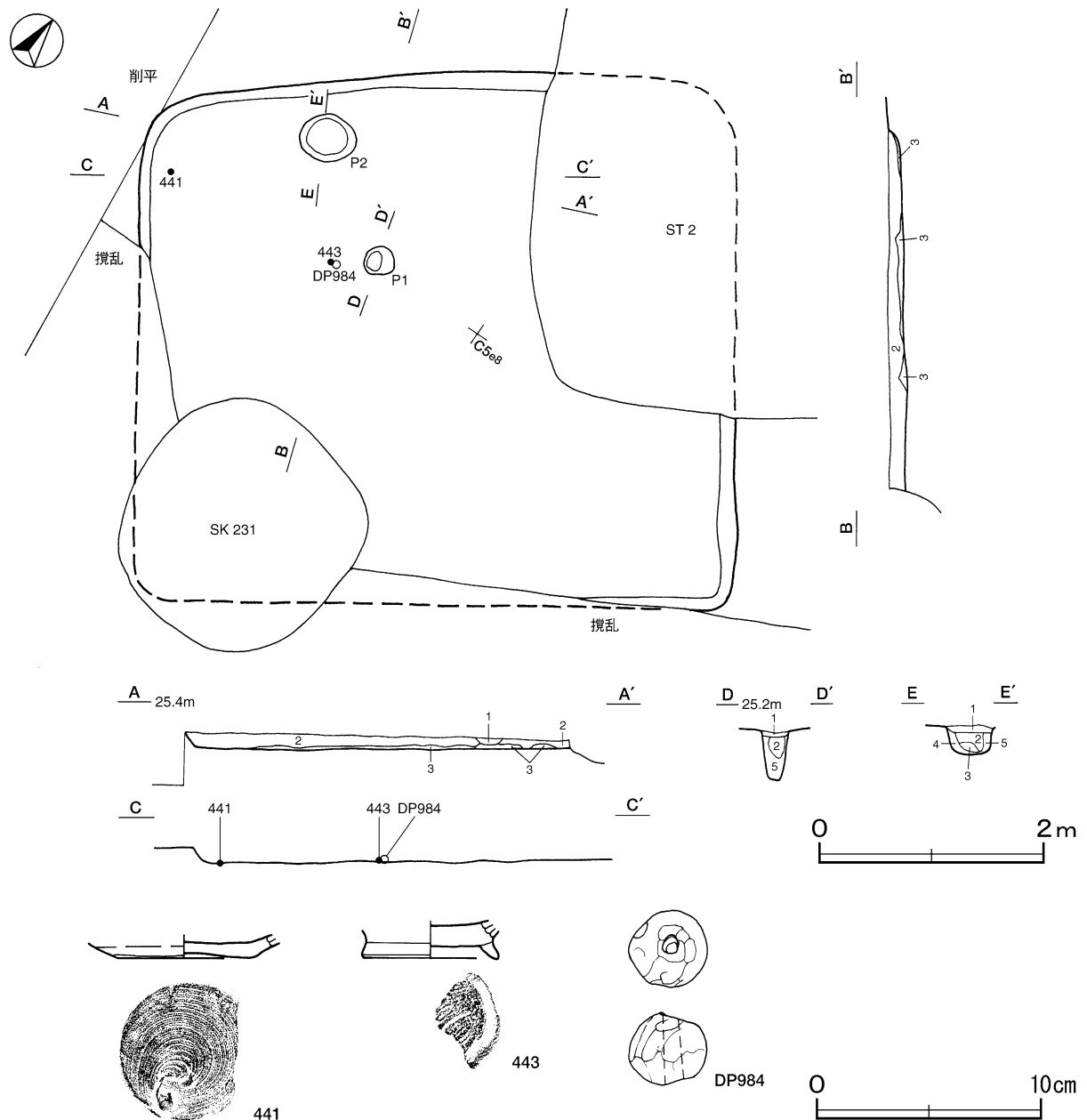
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 | 3 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片2点(坏1, 高台付坏1), 土製品1点(球状土錘)が, 西コーナー部付近の床面から散在した状態で出土している。その他, 流入した縄文土器片8点, 弥生土器片2点, 古墳時代の土師器片1

点，須恵器片 1 点も出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半である。性格は，竈や炉が付設されていなかった可能性が高いことから，住居とは断定できず，性格不明の竪穴建物である。



第383図 第3号建物跡・出土遺物実測図

第3号建物跡出土遺物観察表（第383図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
441	土師器	坏	-	(1.1)	6.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	床面	30%
443	土師器	高台付坏	-	(1.8)	6.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	ナデ	床面	10%

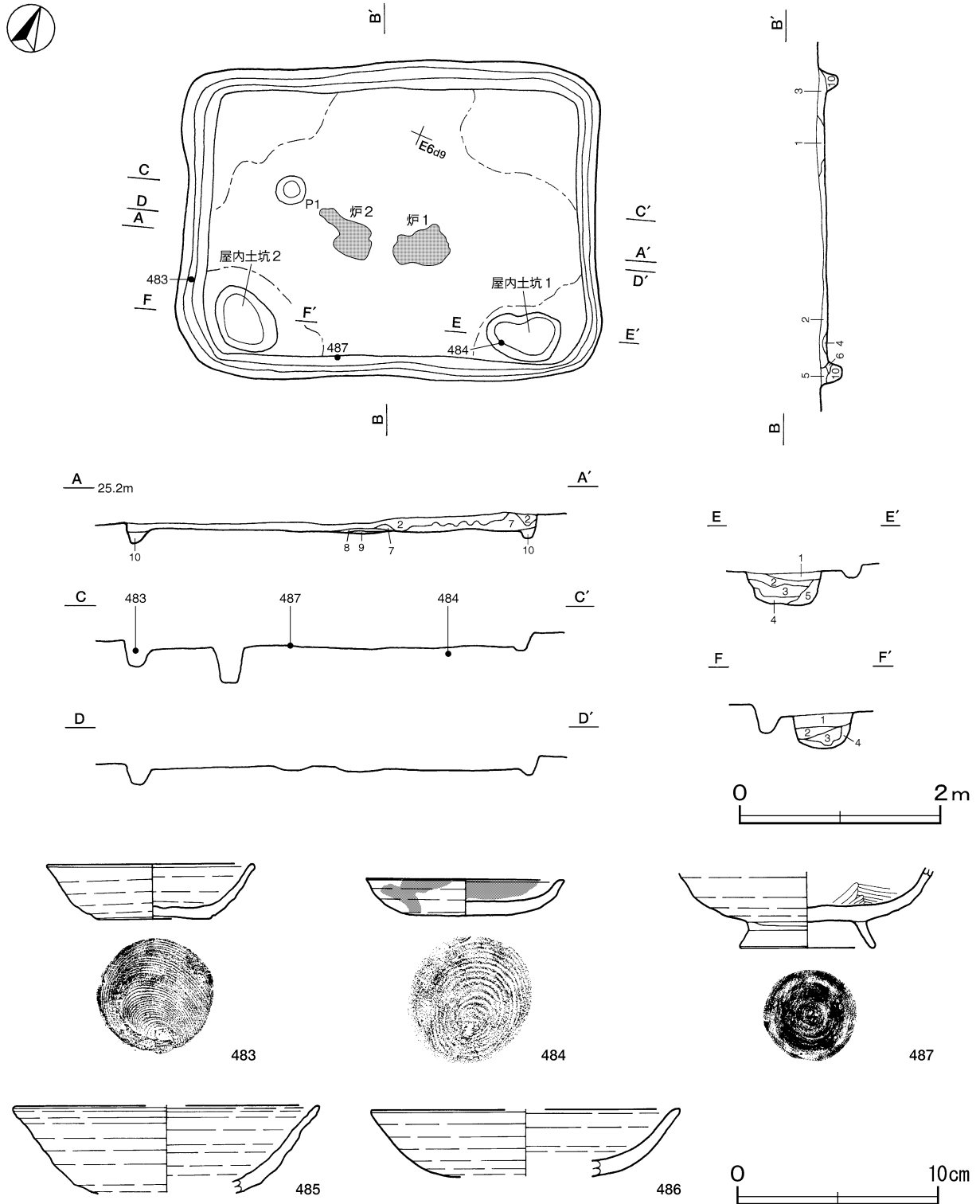
番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP984	球状土錘	3.2	3.5	0.7~0.9	33.8	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	床面	PL57

第4号建物跡 (第384図)

位置 調査区東部のE 6 d8区で、標高24.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第315・511・515・516号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.11m、短軸3.12mの長方形で、主軸方向はN - 67° - Eである。壁高は5 ~ 15cmで、直立している。



第384図 第4号建物跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、コーナー部付近を除いて踏み固められている。壁溝が全周し、幅は10～35cm、深さ5～17cmで、断面形はU字状である。

ピット P1は深さ28cmで、性格は不明である。

炉 2か所。炉1は中央部の東寄りに位置する地床炉である。長径56cm、短径35cmの不整楕円形である。炉2は炉1の西側20cmに位置する地床炉である。長径67cm、短径35cmの不定形である。両者とも火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

屋内土坑 2か所。屋内土坑1は東コーナー部に位置し、長径81cm、短径57cmの楕円形で、深さは29cmで、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。屋内土坑2は南コーナー部に位置し、長径73cm、短径54cmの楕円形で、深さは33cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

屋内1土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

屋内2土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

覆土 10層に分かれ、層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック・ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 淡赤橙色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック多量 | 9 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片292点（坏98、高台付坏9、小皿5、甕180）、土製品4点（球状土錘1、焼成粘土塊3）が、覆土下層から床面にかけて散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片92点、弥生土器片2点、古墳時代の須恵器片1点も出土している。

所見 時期は、出土土器から11世紀前半である。特徴は竈が付設されず、炉を有していることなどで、単なる居住施設ではなく、何らかの作業施設の可能性もある。

第4号建物跡出土遺物観察表（第384図）

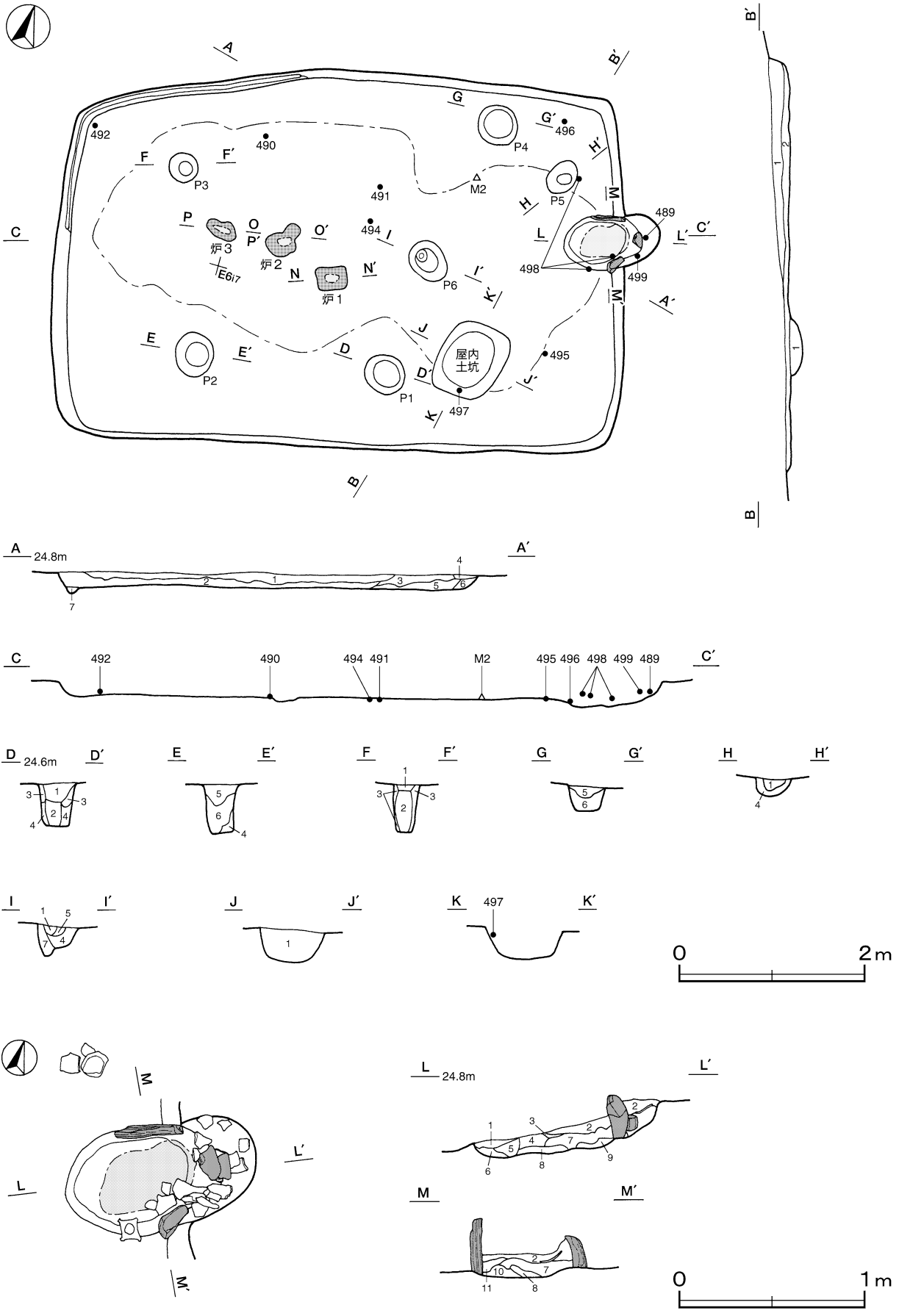
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徵ほか	出土位置	備考
483	土師器	小皿	10.3	2.8	5.6	石英・長石・雲母	橙	普通	ロクロ目明瞭 底部回転糸切り離し	床面	90% PL50
484	土師器	小皿	9.8	1.8	6.0	石英・長石・雲母	橙	普通	内面ナデ 煤付着 底部回転糸切り離し	貯蔵穴1覆土	70%
485	土師器	坏	[15.2]	(4.3)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	ロクロ目明瞭	覆土	30%
486	土師器	坏	[15.4]	(3.3)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ目明瞭	覆土	20%
487	土師器	高台付坏	-	(3.8)	6.6	石英・長石・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き 底部回転ヘラ削り後、ナデ	床面	40%

第5号建物跡（第385・386図）

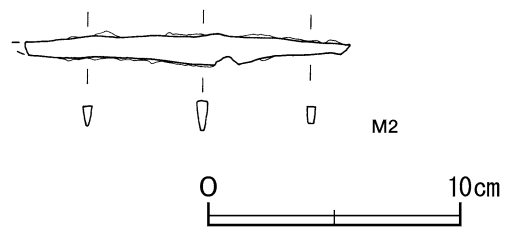
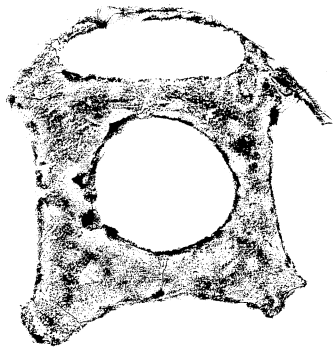
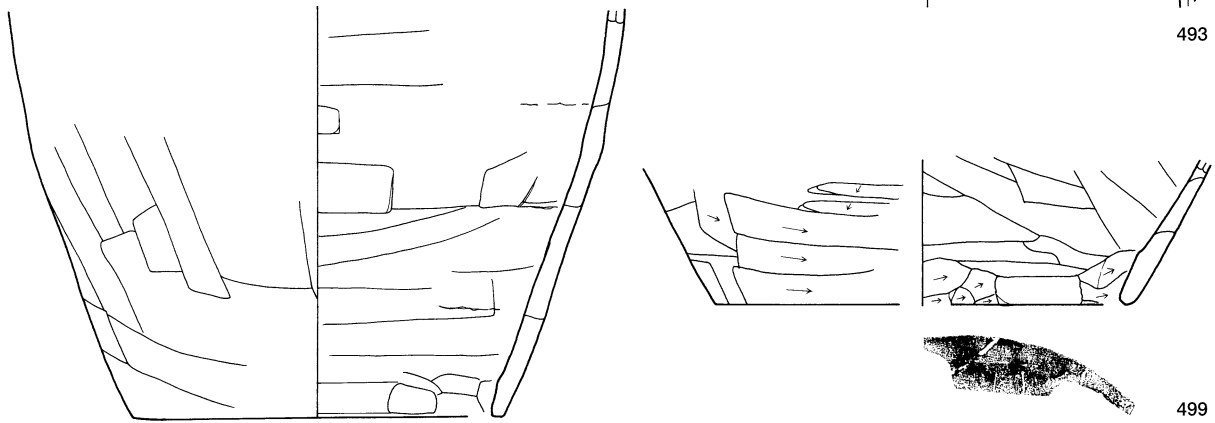
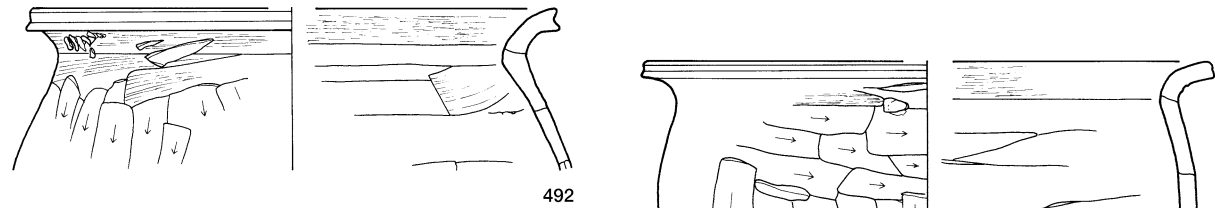
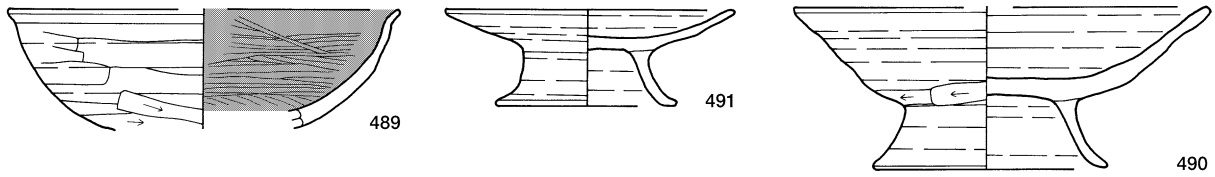
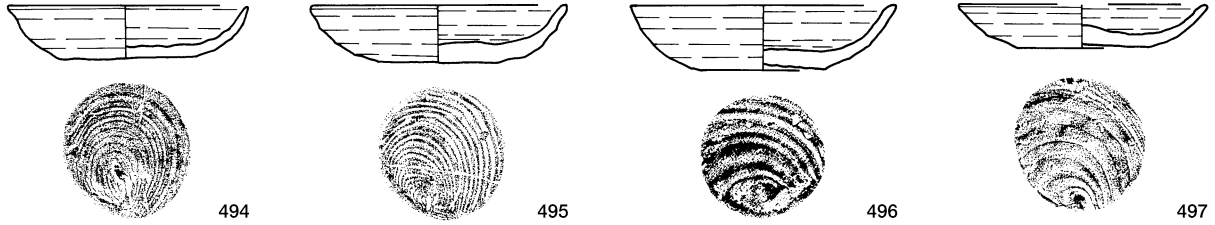
位置 調査区東部のE6h7区で、標高24.7mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第6号建物跡、第222・347・498号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.54m、短軸4.11mの長方形で、主軸方向はN-73°-Eである。壁高は10～27cmで、外傾して立ち上がっている。



第385图 第5号建物跡実測图



第386图 第5号建物跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が北西コーナー部付近の壁下で確認され、幅は10～15cm、深さ6cmで、断面形はV字状を呈している。

ピット 6か所。P1～P3は深さ45～52cmで、柱穴と考えられる。P4～P6は深さ23～31cmで、性格は不明である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

竈 東壁のやや北寄りに位置し、煙道部は壁を40cm掘り込んでいる。規模は、焚口部から煙道部まで105cm、燃烧部幅55cmである。袖部及び奥壁は板状の雲母片岩片をコの字状に組み合わせて構築している。燃烧部のほぼ中央部に位置する火床面は、床面を14cm掘りくぼめ、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 灰褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 9 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | | |

炉 3か所。炉1は中央部のやや西寄りに位置する地床炉である。長径32cm、短径24cmの隅丸長方形で、床面を皿状に23cm掘りくぼめて構築している。炉2は炉1の西側30cmに位置する地床炉である。長径41cm、短径14cmの不定形で、床面を皿状に10cm掘りくぼめて構築している。炉3は炉2の西側30cmに位置する地床炉である。長径35cm、短径16cmの不定形で、床面を皿状に9cm掘りくぼめて構築している。いずれも火床面は床面と同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 2 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
|-------|------------------------|--------|------------------------|

屋内土坑 中央部の南東寄りに位置し、長軸82cm、短軸68cmの長方形で、深さは31cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

屋内土坑土層解説

- | | |
|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|-----------|

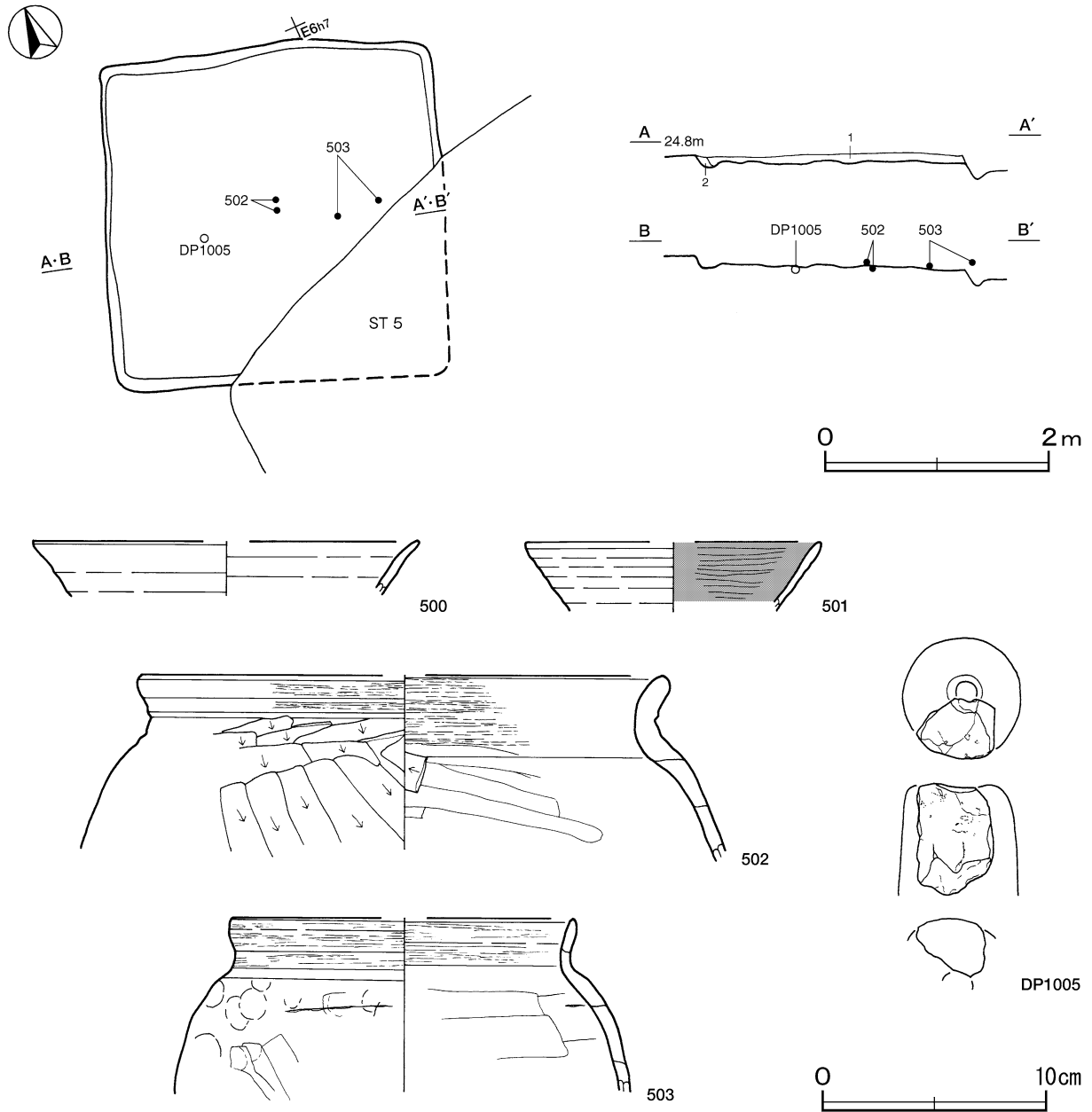
覆土 7層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片171点(坏76, 高台付坏2, 高台付碗7, 小皿11, 高台付皿6, 甕59, 甑10), 金属製品1点(刀子), 雲母片岩片7点が、覆土下層から床面に掛けて散在した状態で出土している。その他, 流入した縄文土器片317点, 弥生土器片1点, 古墳時代の須恵器片34点, 土器片錘1点, 剥片1点も出土している。498・499や雲母片岩片は竈の内外から, M2は北東コーナー部付近の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から11世紀前半である。竈の覆土中に砂粒や粘土粒子, 粘土ブロックなどが含まれていないため, 天井部を含めて石組みの竈であったと考えられる。また, 大半の雲母片岩片は, 住居の廃棄時に抜き取られ, 竈の破壊行為が行われたと推測できる。その他の特徴は, 平面形が長方形で, 複数の炉を有していることである。建物の形態としては, 竈の有無を除いて第1号建物跡や第4号建物跡と類似している。



第387図 第6号建物跡・出土遺物実測図

表11 平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設						土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
								ピット				竈	炉					屋内 土坑
								主柱穴	柱穴	出入口	不明							
1	E 6 b1	N - 86° - W	不整長方形	4.92 × 3.34	5 ~ 20	平坦	-	5	-	-	-	-	地床 炉 2	-	自然	土師器	11世紀 前半	SK521→本跡→ SK102・520
2	E 5 d8	N - 29° - E	長方形	5.10 × 4.56	10 ~ 13	平坦	-	6	-	-	2	-	地床 炉 1	2	人為	土師器	11世紀 前半	SI20・25→本跡
3	E 5 d7	-	[長方形]	(5.01)×(4.59)	10 ~ 24	平坦	-	-	-	-	2	-	-	-	-	土師器・球状 土錘	10世紀 後半	SI21・22・TM1→ 本跡→ST2・SK231
4	E 6 d8	N - 67° - E	長方形	4.11 × 3.12	5 ~ 15	平坦	全周	-	-	-	1	-	地床 炉 2	2	-	土師器	11世紀 前半	SK315・511・515・ 516→本跡
5	E 6 h7	N - 73° - E	長方形	6.54 × 4.11	10 ~ 27	平坦	一部	3	-	-	3	1	地床 炉 3	1	自然	土師器・刀子・ 雲母片岩片	11世紀 前半	SI6・SK222・347・ 498→本跡
6	E 6 h6	-	方形	3.03 × 2.95	10	凹凸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器・鞆羽 口	10世紀 後半	本跡→ST 5

(3) 火葬墓

第1号火葬墓 (第388図)

位置 調査区南部のF 5 b5区で、標高24.2mの台地平坦部に位置している。

確認状況 南東側は調査区域外に延びている。上部は耕作により削平されている。遺存状況は不良である。

規模と形状 南東側が調査区域外に延びているため、確認できた長径は0.95m、確認できた短径は0.87mで、本来は径1.00mほどの円形と推測できる。深さは21cmで、底面は皿状にくぼんでいる。壁は緩やかに立ち上がっている。

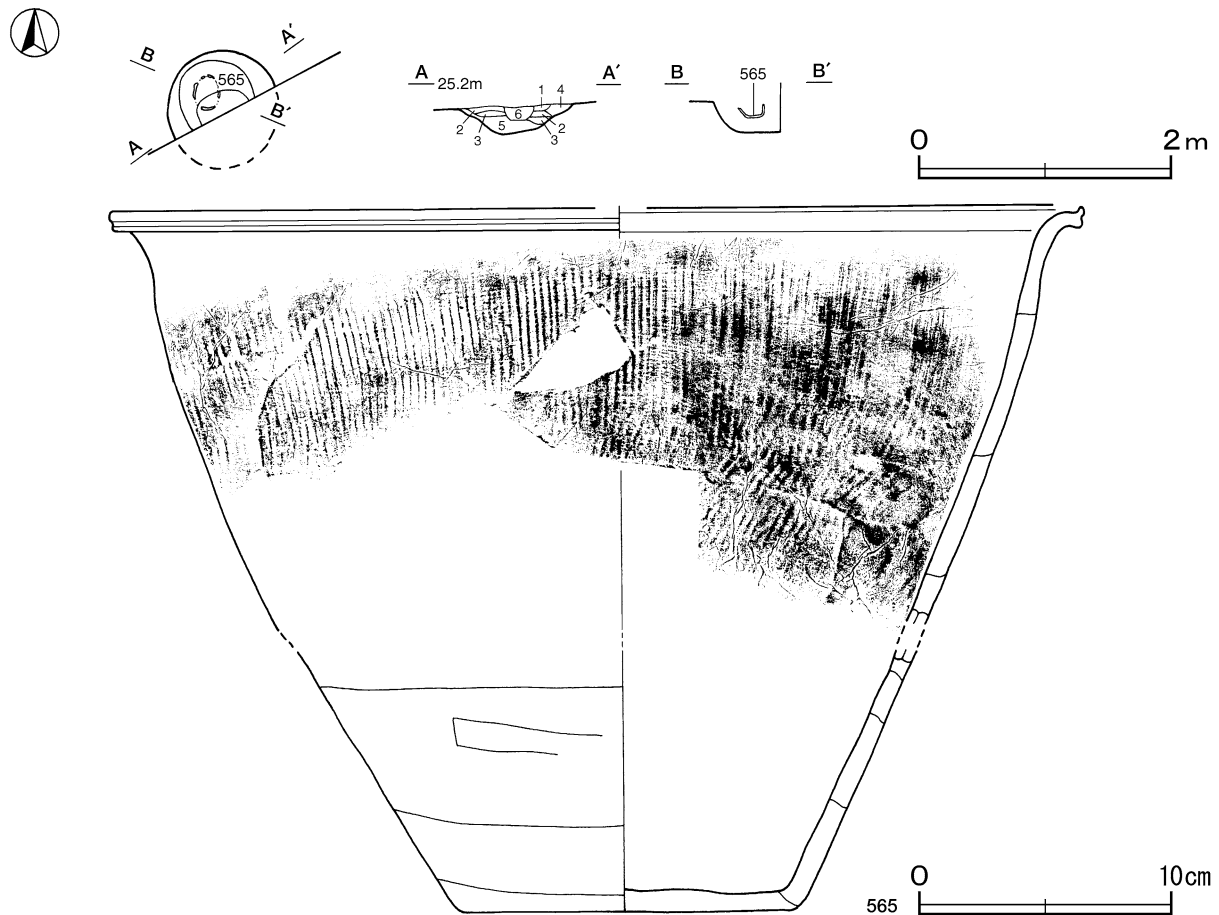
覆土 6層に分かれ、第1～5層は埋め戻された土層で、第6層は須恵器鉢の内部に堆積した焼骨と炭化材を多く含む黒褐色土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|-------|------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 6 黒褐色 | 炭化材・微細骨片多量, ロームブロック少量 |

遺物出土状況 須恵器1点(鉢)が、53片に割れた状態で出土している。その他、流れ込んだ縄文土器片28点も出土している。565の底部付近は、掘り込みのやや北よりの位置から、正位の状態で出土している。

所見 須恵器鉢を蔵骨器とし、正位で埋設していたと推測できる。内部からは、焼けた微細骨片と炭化材が多量に出土している。時期は、出土土器から9世紀前葉である。



第388図 第1号火葬墓・出土遺物実測図

第1号火葬墓出土遺物観察表 (第388図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
565	須恵器	鉢	[38.5]	[27.8]	13.3	長石・雲母	灰褐	普通	体部縦位の平行叩き目 内面へラナデ	埋土上層	20%

(4) 土坑

第78号土坑 (第389図)

位置 調査区北部のD 5 d2区で 標高24.9mの台地平坦部,平安時代の第7号住居跡の北西側に位置している。
規模と形状 長径0.91m,短径0.74の楕円形で,長径方向はN - 78° - Wである。深さは37cmで,底面はほぼ平坦である。壁は直立している。

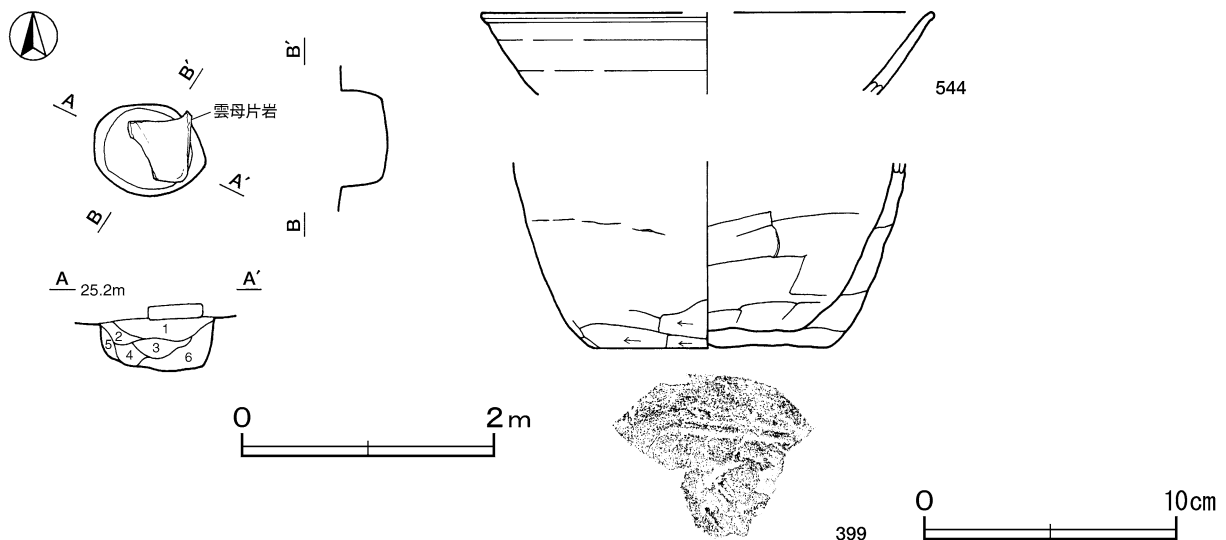
覆土 6層に分かれ,ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため,埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|----------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片10点(坏2,甕8)が,覆土中から出土している。確認面から,土坑を覆う状態で板状の雲母片岩が出土している。その他,流入した縄文土器片11点,古墳時代の土師器片2点も出土している。

所見 時期は,出土土器から10世紀後半である。覆土が埋め戻されていることや,板状の雲母片岩が土坑を覆うように出土しているため墓坑の可能性も考えられるが,性格は不明である。



第389図 第78号土坑・出土遺物実測図

第78号土坑出土遺物観察表 (第389図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
399	土師器	甕	-	(7.3)	[9.5]	雲母	にぶい橙	普通	胴部下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土	10%
544	土師器	坏	[18.1]	(3.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面口く口目明瞭 内面ナデ	覆土	5%

第171号土坑 (第390図)

位置 調査区中央部のE 5 g7区で,標高25.1mの台地平坦部,平安時代の第2・3号建物跡の南側に位置している。

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.77m,短径1.65の円形である。深さは67cmで,底面はほぼ平坦である。壁は底面から中位にかけて直立し,上部で外傾して立ち上がっている。

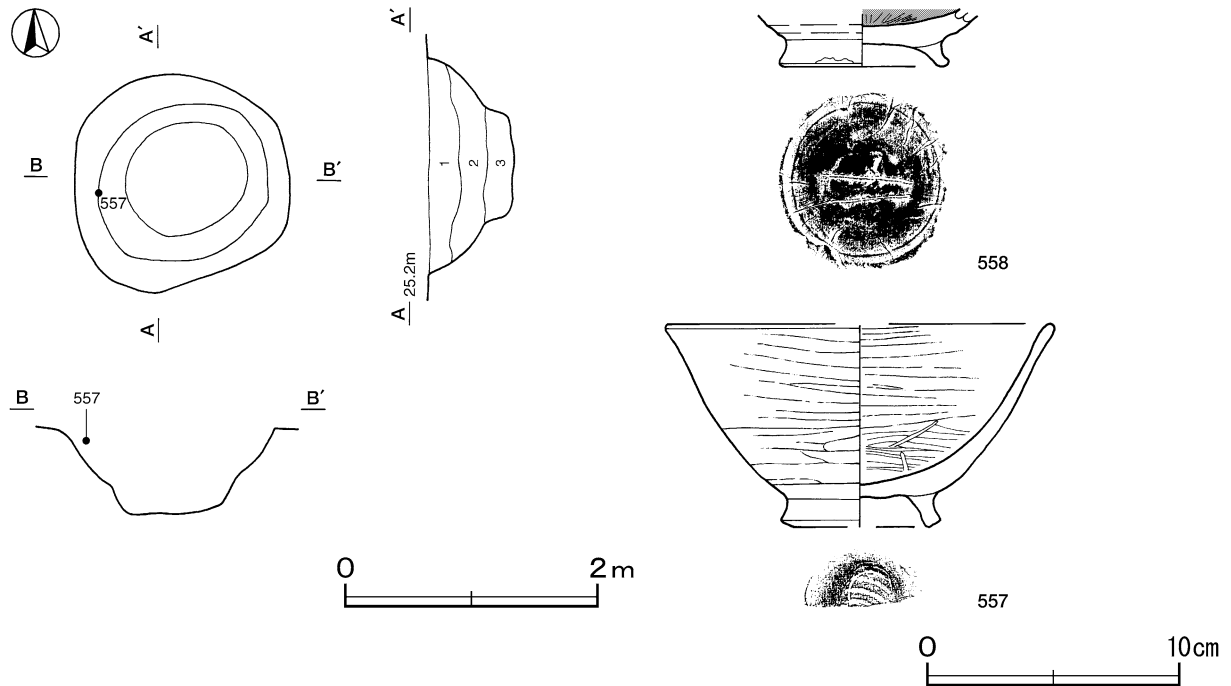
覆土 3層に分かれ、ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片55点（坏50，高台付坏2，甕3）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片41点，古墳時代の須恵器片3点も出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半である。墓坑の可能性も考えられるが，性格は不明である。



第390図 第171号土坑・出土遺物実測図

第171号土坑出土遺物観察表（第390図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
557	土師器	高台付碗 [15.2]	8.0	[5.4]		雲母	にぶい橙	普通	体部上半ヘラナデ 内面粗いヘラ磨き 底部 静止糸切り難し	覆土上層	30%
558	土師器	高台付坏 -	(2.1)	6.4		石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 黒色処理 底部2条の線刻	覆土	10%

第299号土坑（第391図）

位置 調査区東部のE 6 g6区で，標高24.9mの台地縁辺部，平安時代の第5・6号建物跡の北側に位置している。

重複関係 第320・321号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.40m，短径1.18の楕円形で，長径方向はN - 29° - Wである。深さは55cmで，底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

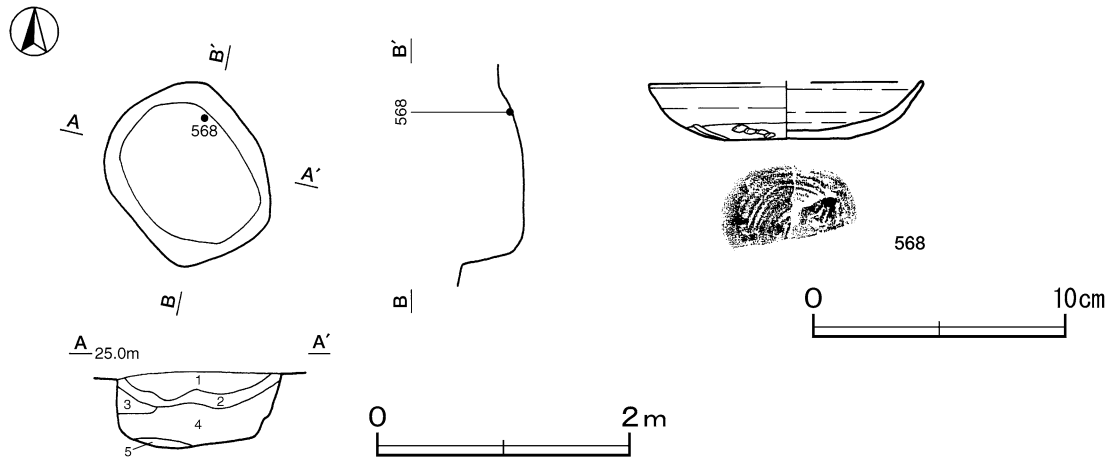
覆土 5層に分かれ，ロームブロックなどを比較的多く含んでいるため，埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 8 点（坏 6，小皿 2）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片 26 点も出土している。

所見 時期は，出土土器から 11 世紀前半である。墓坑の可能性も考えられるが，性格は不明である。



第391図 第299号土坑・出土遺物実測図

第299号土坑出土遺物観察表（第391図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
568	土師器	小皿	[10.8]	2.2	[5.0]	雲母	橙	普通	体部下端ヘラナデ 底部回転系切り離し	覆土下層	50%

第300号土坑（第392図）

位置 調査区東部の E 6 j 8 区で，標高 23.8m の台地縁辺部，平安時代の第 5・6 号建物跡の南側に位置している。

規模と形状 長径 1.90m，短径 1.75 の円形である。深さは 26cm で，底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

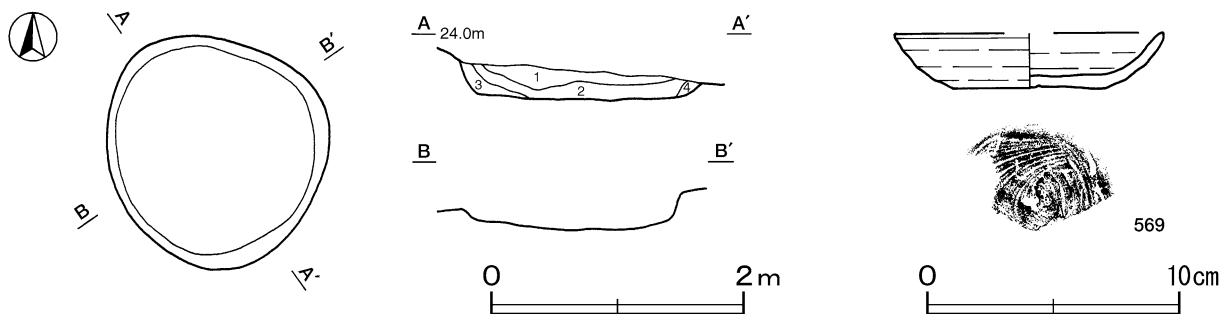
覆土 4 層に分かれ，ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため，埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 焼土ブロック多量

遺物出土状況 土師器片 62 点（坏 26，小皿 21，甕 15）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片 158 点，古墳時代の須恵器片 42 点，土器片錘 1 点も出土している。

所見 時期は，出土土器から 11 世紀前半である。墓坑の可能性も考えられるが，性格は不明である。



第392図 第300号土坑・出土遺物実測図

第300号土坑出土遺物観察表（第392図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
569	土師器	小皿	[10.6]	2.2	[6.0]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	覆土	30%

第399号土坑（第393図）

位置 調査区東部のE 6 h9区で、標高24.5mの台地縁辺部、平安時代の第5・6号建物跡の東側に位置している。

重複関係 第37号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.20m、短径0.65の楕円形で、長径方向はN - 66° - Eである。深さは34cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

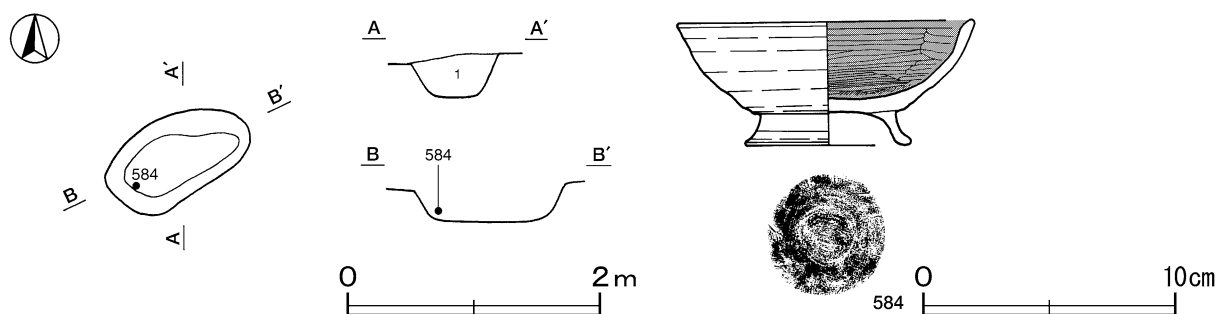
覆土 単一層。埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1点（高台付坏）が、覆土中から出土している。その他、流入した縄文土器片8点も出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半である。墓坑の可能性も考えられるが、性格は不明である。



第393図 第399号土坑・出土遺物実測図

第399号土坑出土遺物観察表（第393図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
584	土師器	高台付坏	11.6	4.8	6.6	石英・長石・雲母	橙	普通	内面へら磨き 黒色処理 底部回転糸切り離し	覆土下層	95%

第511号土坑（第394図）

位置 調査区東部のE 6 d9区で、標高24.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第510・516号土坑を掘り込み、第4号建物に掘り込まれている。

規模と形状 西側が第4号建物に掘り込まれているため、確認できた長径は0.93mで、本来は長軸1.00mほど、短径0.75で、長径方向がN - 66° - Eの楕円形と推測できる。深さは22cmで、底面は皿状にくぼんでいる。壁は緩やかに立ち上がっている。底面は皿状にくぼんでいる。

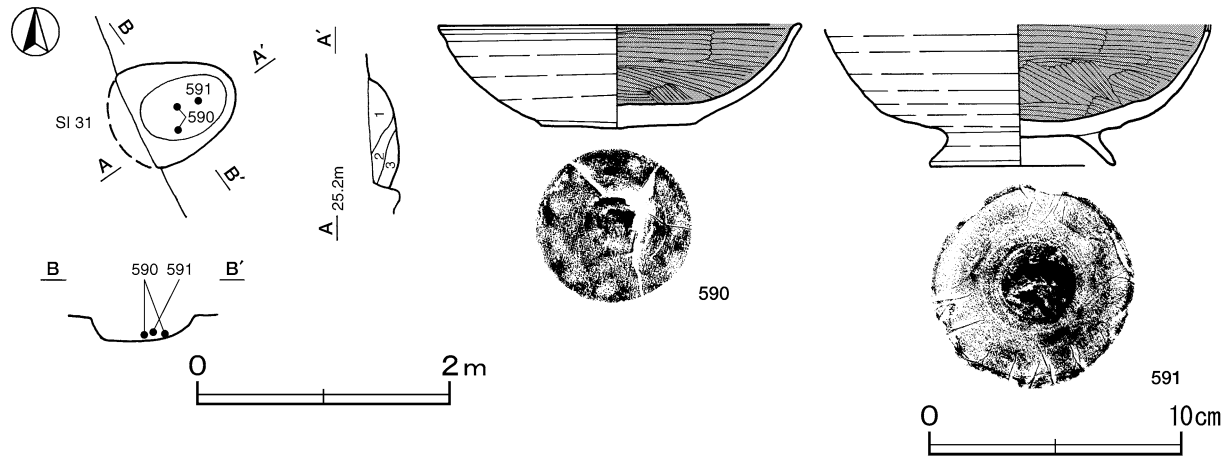
覆土 3層に分かれ、ロームブロックや焼土ブロックなどを比較的多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量 炭化粒子微量 3 暗 褐 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 黒 褐 色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片11点（坏3，高台付坏2，甕6）が，覆土中から散在した状態で出土している。その他，流入した縄文土器片13点，磨石1点も出土している。

所見 時期は，出土土器から10世紀後半である。墓坑の可能性も考えられるが，性格は不明である。



第394図 第511号土坑・出土遺物実測図

第511号土坑出土遺物観察表（第394図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか			出土位置	備考
590	土師器	坏	14.3	4.2	6.3	長石・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	黒色処理	底部回転ヘラ削り	覆土下層	60%
591	土師器	高台付坏	-	(5.5)	7.3	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	内面ヘラ磨き	黒色処理	底部回転ヘラ削り	覆土下層	50%

表12 平安時代土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸(m)	深さ (cm)							
78	D 5 d2	楕円形	N - 78° - W	0.91 × 0.74	37	直立	平坦	-	人為	土師器	10世紀後半	-
171	E 5 g7	円形	-	1.77 × 1.65	67	直立 外傾	平坦	-	人為	土師器	10世紀後半	第1号墳→本跡
299	E 6 g6	楕円形	N - 29° - W	1.40 × 1.18	55	外傾	平坦	-	人為	土師器	11世紀前半	SK320・321→本跡
330	E 6 j8	円形	-	1.90 × 1.75	26	外傾	平坦	-	人為	土師器	11世紀前半	-
399	E 6 h9	楕円形	N - 66° - E	1.20 × 0.65	34	緩斜	平坦	-	人為	土師器	10世紀後半	SI37→本跡
511	E 6 d9 [楕円形]	[楕円形]	N - 66° - E	(0.93) × 0.75	22	緩斜	皿状	-	人為	土師器	10世紀後半	SK510・516→本跡→ST4

(5) 周溝跡

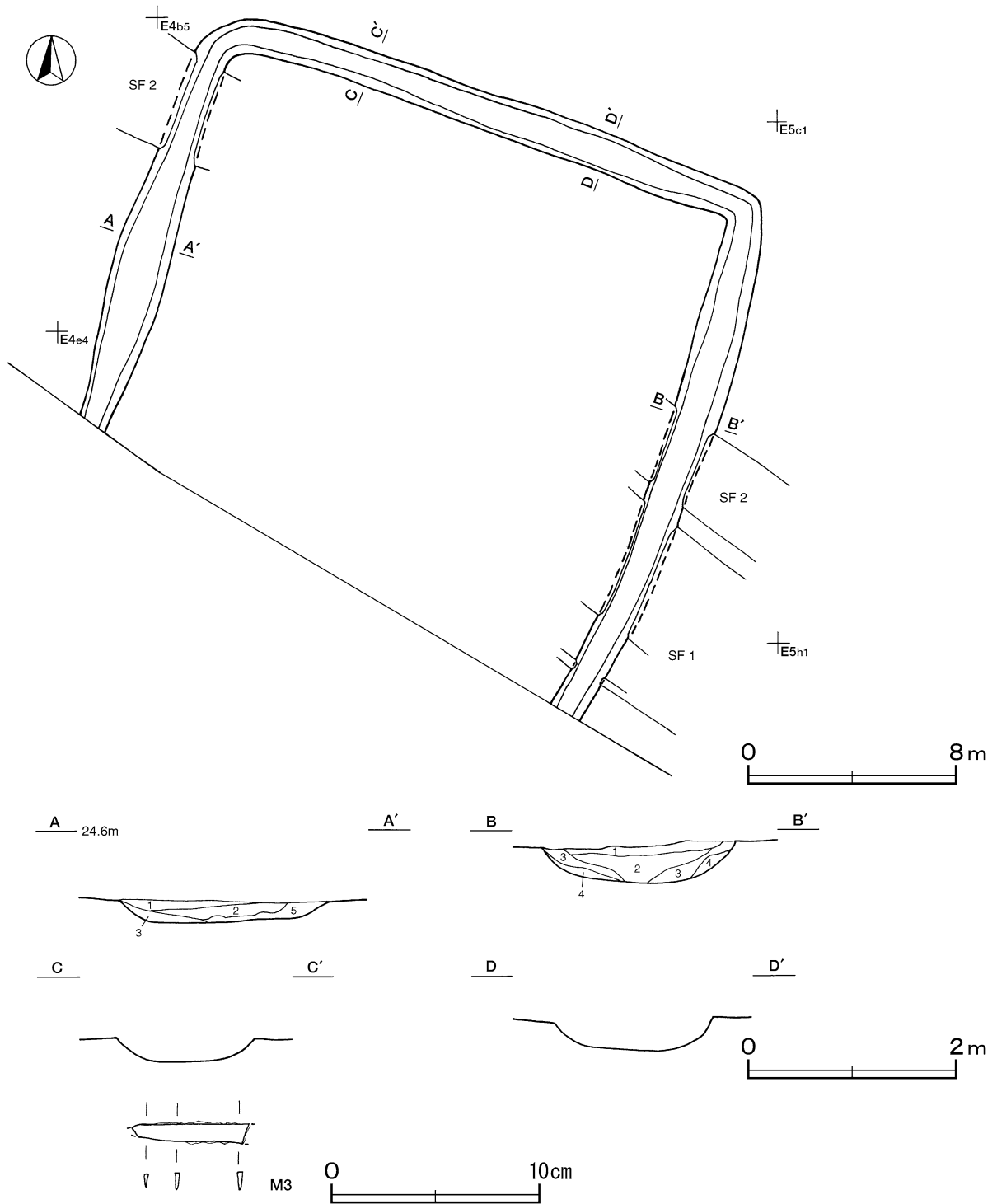
第1号周溝跡（第395図）

位置 調査区西部の大グリッドE4区（E4 b5～b8，E4 c5～c0，E4 d4～d0，E4 e4～e0，E4 f5～f0，E4 g6～g9，E4 h8・h9区）で，標高23.5～25.0mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第15号住居跡，第131・138・139・145・152号土坑を掘り込み，第1・2号道路に掘り込まれている。南側は調査区域外に延びている。

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため，周溝外側で東西軸24.0m，確認できた南北軸は21.4mで，周溝内側で東西軸は20.0m，確認できた南北軸は20.0mである。本来は一辺20mほどの方形と推測できる。封

土や内部施設などは確認されなかった。コーナー部はほぼ直角に屈曲し、北側から西側は掘り込みが浅く、北東コーナーから東側の北半分が比較的深く掘り込まれている。上幅1.20~2.02m、下幅0.80~1.44m、深さ15~40cmで、断面形は、緩やかな弧状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。



第395図 第1号周溝跡・出土遺物実測図

覆土 5層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | |
|-------|------------------|-------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | | | |

遺物出土状況 金属製品1点(刀子)が、覆土中から出土している。その他、流入した縄文土器片201点、弥生土器片9点、土師器片3点、須恵器片1点、土器片円盤1点も出土している。

所見 時期は、重複関係から近世以前で、中世以降の遺物が出土していないことから、古代の区画溝と推測できる。

第1号周溝跡出土遺物観察表(第395図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	刀子	(5.6)	(1.2)	(0.3)	(3.7)	鉄	両端欠損 刃部断面三角形	覆土	

(6) 溝跡

第1号溝跡(第396図)

位置 調査区北部から東部のD4b9~D5h0区で、標高24.1~25.0mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第1・3・5・7・8号住居跡、第24・67・99号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 L字状で、D5h0区付近から北西方向(N-66°-W)へ延び、D4c8区付近ではほぼ北方向(N-15°-E)へ屈曲している。両端は調査区域外に延びている。確認できた長さは59.0m、上幅2.28m~2.92m、下幅0.36~0.76m、深さ34cm~74cmである。底面はほぼ平坦で、部分的に皿状にくぼんでいる。底面の標高は23.8~24.1mで、緩やかに北西方向に傾斜している。断面形は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

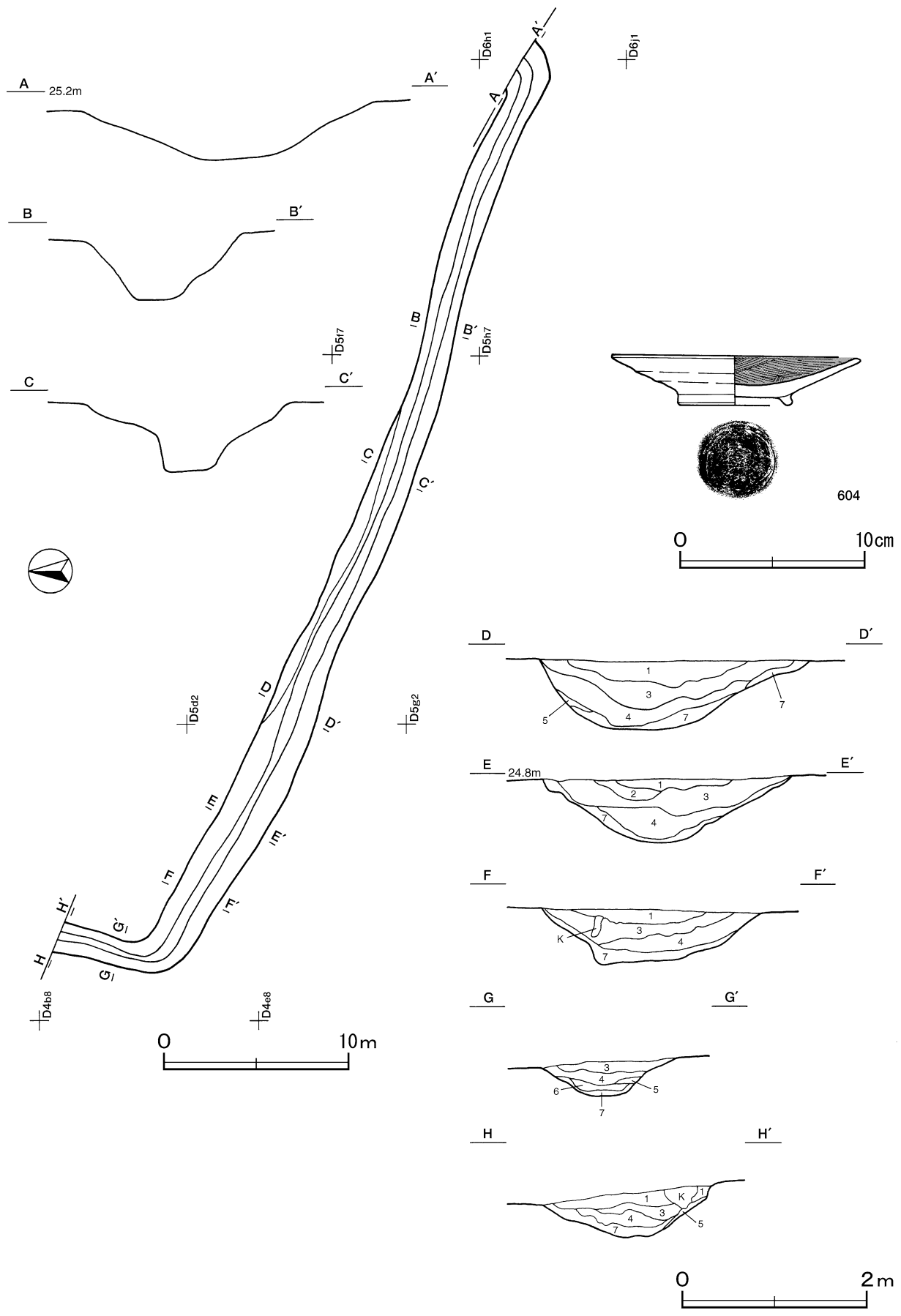
- | | | | | |
|-------|----------------------|--------------|-----------|--------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化材中量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 | 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 炭化物少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | 焼土ブロック・炭化物少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 | 炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片5点(高台付坏)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片6610点、弥生土器片363点、須恵器片109点、土器片錘38点、土器片円盤6点、球状土錘1点、ナイフ形石器1点、石鏃2点、磨石3点、打製石斧1点、磨製石斧1点、剥片4点、蛇紋岩製小玉1点、混入した陶磁器片3点も出土している。

所見 10世紀後半の第7号住居跡を掘り込んで構築しているため、時期は、11世紀前半以降で中世以前と考えられる。性格は、北西方向に緩やかに傾斜していること、両端で屈曲していることから、排水溝や区画溝と考えられる。

第1号溝跡出土遺物観察表(第396図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
604	土師器	高台付皿	13.4	2.8	6.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面へラ磨き 黒色処理	覆土	70% PL60



第396图 第1号沟迹・出土遗物实测图

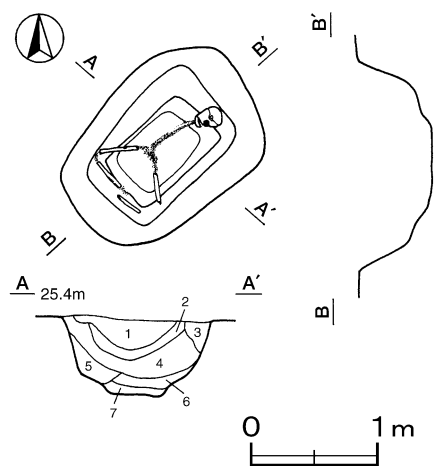
5 中世・近世の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、土坑墓2基、周溝跡1基、塚1基、溝跡6条、道路跡3条である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 土坑墓

第2号土坑墓（第397図）

位置 調査区東部のE 6 d4区で、標高25.2mの台地平坦部に位置している。



第397図 第2号土坑墓実測図

重複関係 第355号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.65m、短軸1.20mの隅丸長方形で、長軸方向はN - 52° - Eである。深さは60cmで、底面はほぼ平坦である。壁は底面から中位まで直立し、中位から上位は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分かれ、ロームブロックや炭化物などを多く含み、締めりの弱い土質から、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック多量，炭化物少量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック中量，炭化物少量，骨片微量 |
| 5 | 黒褐色 | 炭化物中量，ロームブロック少量，骨片微量 |
| 6 | 黒褐色 | ロームブロック多量，骨片中量，炭化粒子少量 |
| 7 | 黒褐色 | ロームブロック・骨片中量，炭化粒子少量 |

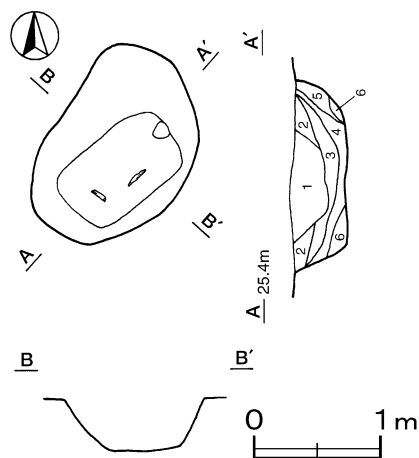
人骨出土状況 第6・7層から、頭部を北東方向に向けて、仰向けで両足を組んだ状態の人骨が出土している。

遺物出土状況 流入した縄文土器片104点、土師器片37点、須恵器片1点、石鏃1点が出土している。

所見 時期は、出土した人骨や覆土の様相から、近世である。

第3号土坑墓（第398図）

位置 調査区東部のE 6 d3区で、標高25.2mの台地平坦部、第349号土坑の南西側約1.70mに位置している。



第398図 第3号土坑墓実測図

規模と形状 長径1.63m、短径1.10mの楕円形で、長径方向はN - 58° - Eである。深さは45cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分かれ、ロームブロックや炭化物などを多く含み、締めりの弱い土質から、埋め戻されたと考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量，焼土ブロック・骨粉少量，炭化粒子微量 |
| 4 | 極暗褐色 | ロームブロック・骨粉少量，炭化粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |

人骨出土状況 第3・4層から、頭部を北東方向に向けた状態の人骨が出土している。遺存状況は極めて不良で、頭蓋骨や大腿骨の一部を確認した。

遺物出土状況 流入した縄文土器片30点、土師器片3点が出土している

所見 時期は，出土した人骨や覆土の様相から，近世である。

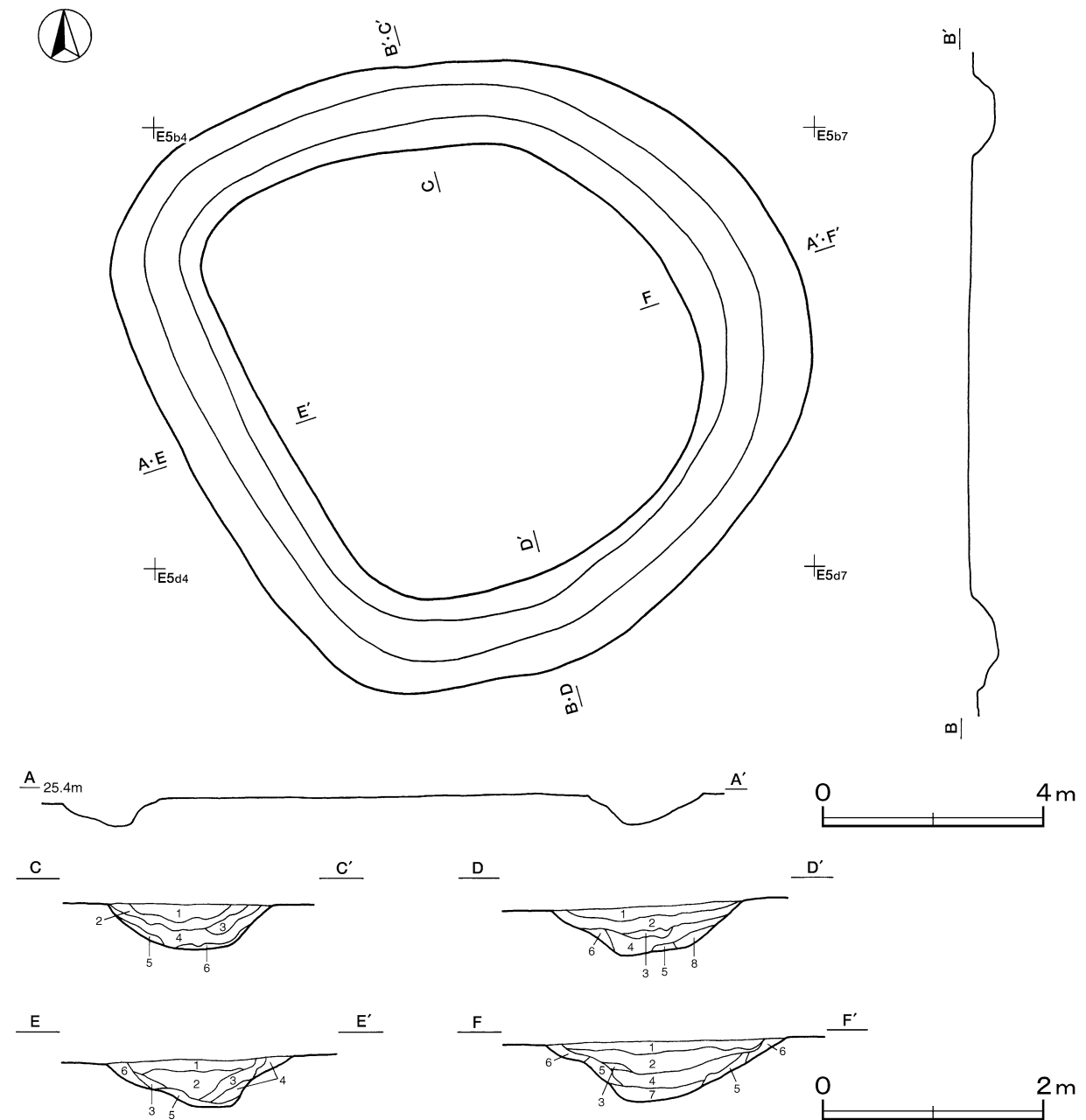
表13 中世・近世土坑墓一覧表

番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸	深さ (cm)							
2	E 6 d4	隅丸長方形	N - 52° - E	1.65 × 1.20	60	外傾	平坦	-	人為	人骨	近世	SK355→本跡
3	E 6 d3	楕円形	N - 58° - E	1.63 × 1.10	45	外傾	平坦	-	人為	人骨	近世	-

(2) 周溝跡

第2号周溝跡 (第399・400図)

位置 調査区中央部の大グリッドE 5区 (E 5 a4~ a6, E 5 b3~ b6, E 5 c3~ c6, E 5 d4~ d6区) で，
標高25.3mの台地平坦部に位置している。



第399図 第2号周溝跡実測図

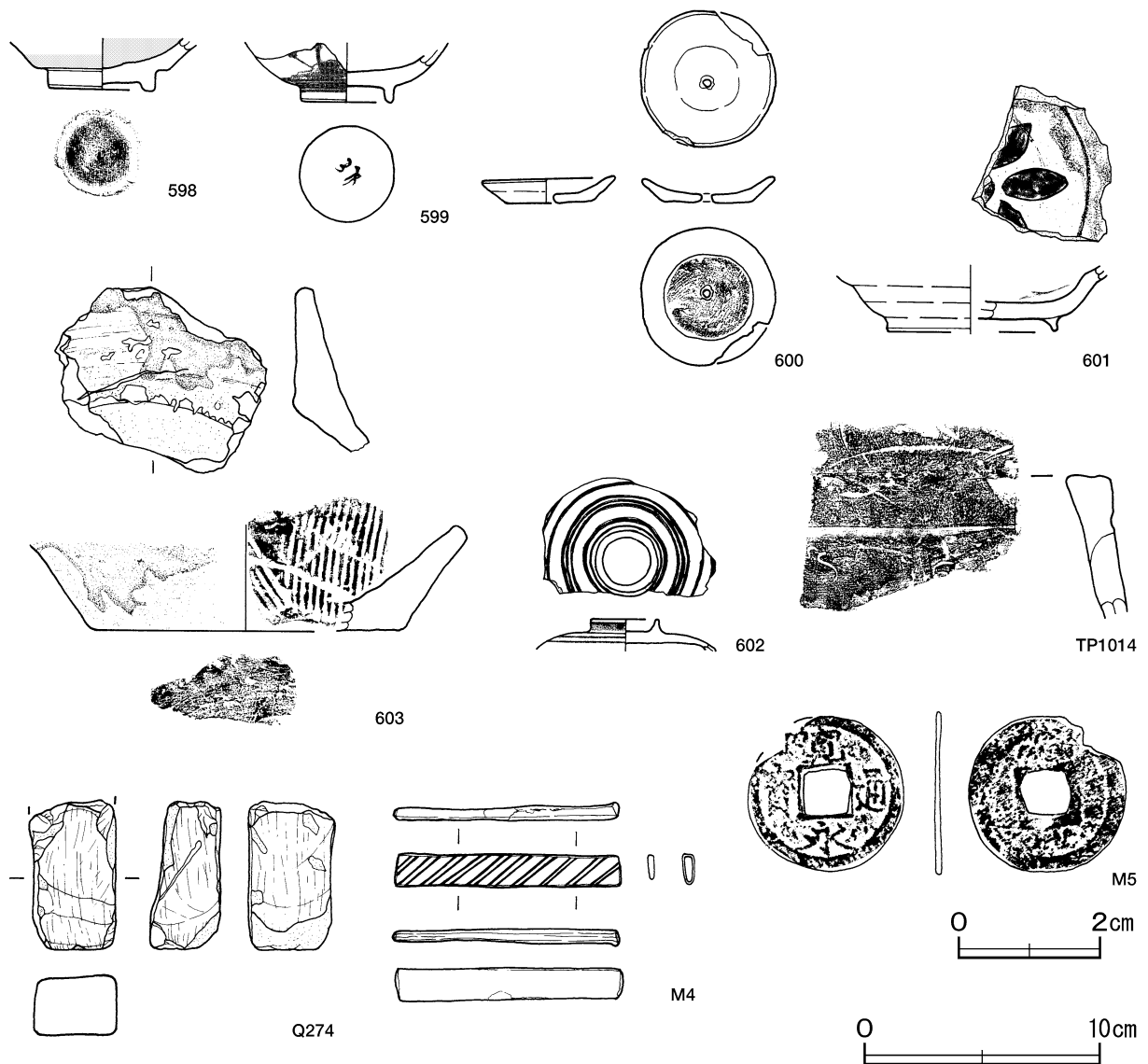
重複関係 第1号墳，第27・29号住居跡，第275・286・319・326号土坑を掘り込み，第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 周溝外側で長径11.6m，短径11.4mの略円形で，周溝内側の径は8.00～8.50mである。封土や内部施設などは確認されなかった。南西側は直線的である。北側は掘り込みが浅く，北西側のコーナー部分付近が最も深く掘り込まれている。上幅1.64～2.14m，下幅0.50～0.68m，深さ40～55cmである。底面はほぼ平坦で，部分的に皿状にくぼんでいる。断面形はU字状で，壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 8層に分かれ，周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量，焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |



第400図 第2号周溝跡出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片11点(碗2, 天目茶碗3, 徳利1, 搦り鉢4, 鉢1), 磁器片1点(蓋), 瓦質土器片1点(内耳鍋), 石製品2点(砥石), 金属製品2点(銭貨, 小柄)が, 覆土中から散在した状態で出土している。その他, 流入した縄文土器片111点, 弥生土器片17点, 土師器片4点, 須恵器片1点, 土器片錘4点, 石製模造品1点も出土している。

所見 時期は, 出土遺物から近世である。規模と形状から, 塚に伴う周溝の可能性が高い。

第2号周溝跡出土遺物観察表(第400図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
598	陶器	天目茶碗	-	(2.3)	4.4	長石	胎土/淡黄釉/黒	普通	内外面鉄釉 体部下端露胎 削り高台	覆土	瀬戸・美濃系10%
599	磁器	碗	-	(2.6)	3.9	緻密	灰白	普通	染付 草木文・重圏文 高台見込に崩し「福」	覆土	瀬戸・美濃系10%
600	土師質土器	かわらけ	5.1	1.2	3.7	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口クロ成形 底部回転糸切り離し 中央部に焼成後の穿孔 孔径0.4cm	覆土	90%
601	陶器	皿	-	(2.8)	[7.2]	長石	灰白	普通	内面鉄絵 重ね焼き痕	覆土	瀬戸・美濃系10%
602	磁器	蓋	-	(1.3)	-	緻密	灰白	普通	染付 重圏文	覆土	50%
603	陶器	搦り鉢	-	(4.5)	[13.0]	長石	胎土/淡黄釉/暗赤灰	普通	外面鉄釉 内面12本以上の櫛歯による搦り目 底部回転糸切り離し 転用砥	覆土	10%
TP1014	瓦質土器	鉢	-	(6.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部平坦 外面に1条の沈線 棒状工具による髭状のモチーフを施す 内面ナデ	覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q274	砥石	(6.4)	(3.7)	(3.0)	(102.6)	凝灰岩	4面使用 断面長方形 欠損	覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	材質	特徴	出土位置
M4	小柄	9.6	1.6	0.5~0.6	24.5	銅	片面に彫り込みの斜め縞模様	覆土	PL60
M5	銭貨	2.3	2.3	0.1	1.9	銅	「寛永通寶」 新寛永 輪側一部欠損	覆土	PL60

(3) 塚

第1号塚(第401図)

位置 調査区南端部のF5 b6区付近を中心に, 標高25.0~26.2mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第5号溝跡の覆土の上に構築されている。南東部は現代の土取りによって大きく抉り取られている。

規模と形状 平面形は径9.5mほどの円形と推測され, 現地表面からの高さは60cmほどで, 塚頂部の標高は26.2mである。

構築状況 旧表土を基底部とし, ロームブロック・粘土粒子・砂粒を中量から多量に含んだ黒褐色土や暗褐色土, 灰黄褐色土の混土で構築している。低丘で盛土の締まりは弱い。

覆土 9層に分かれ, 第1層は表土, 第2~5層は盛土, 第6層は旧表土, 第7~9層は縄文時代の遺物包含層である。

土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------|-------|-----------------------------|
| 1 褐灰色 | ロームブロック中量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子・砂粒少量 | 8 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック中量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

所見 時期は, 重複関係から近世から近代と推測できる。人工的な盛土は確認できたが, 高さ60cmほどの低丘で, 出土遺物もないことから, 性格は不明である。



第401图 第1号塚实测图

(4) 溝跡

第2号溝跡 (第402・404図)

位置 調査区西部から東部のE 4 a6～F 6 a6区で、標高23.8～25.3mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第18号住居跡，第1号墳，第5号溝跡を掘り込み，第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 く字状で、F 6 a6区付近から北西方向(N - 42° - W)へ伸び、D 5 j7区付近で、ほぼ西方向(N - 89° - E)へ大きく屈曲し、E 4 j0区付近で南西方向へ緩やかに屈曲している。南東端は調査区域外に伸び、西端は先細りで途切れている。確認できた長さは112mで、上幅1.10～6.30m、下幅0.20～1.00m、深さ15cm～77cmである。底面は緩やかにくぼみ、標高は22.8～24.8mである。大きく屈曲するD 5 j7区付近が標高24.8mと最も高く、そこから西方向に45.6mで0.80mほど、南東方向に55.6mで2.00mほど下っている。断面形は全体的に緩やかな弧状で、部分的に逆台形である。壁の大半は外傾して立ち上がっている。

覆土 23層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

第2層下面及び第11～13層は、踏み固められており、道路として使用されていたと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック微量	13 黒褐色	ロームブロック中量，焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量 炭化粒子少量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量 炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量	15 灰褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量	16 暗褐色	ロームブロック中量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量	17 明褐色	ローム粒子多量，炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量	18 褐色	ロームブロック中量，炭化物微量
7 褐色	ロームブロック多量	19 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量，ローム粒子微量
8 褐色	ロームブロック・砂粒中量，焼土粒子少量	20 暗褐色	ロームブロック中量，炭化材微量
9 暗褐色	ロームブロック中量 焼土ブロック・炭化粒子少量	21 暗褐色	ロームブロック少量，炭化材微量
10 暗褐色	ロームブロック多量，焼土ブロック中量	22 黄褐色	粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
11 暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
12 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量		

遺物出土状況 陶器片7点(甕)，土師質土器片6点(かわらけ1，内耳鍋5点)，陶製品1点(転用砥)，金属製品1点(釘)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した縄文土器片518点、弥生土器片46点、土師器片40点、須恵器片23点、土器片錘2点、球状土錘1点、剥片1点、混入した磁器片2点(碗、紅皿)も出土している。

所見 第2層下面及び第11～13層は踏み固められているため、埋没過程の末期には、道路として使用されていたと考えられる。その時期は、路面上層の第1・2層から出土した磁器片から近世である。本来の性格は、底面が中央部を境にして西方向と南東方向にかなり傾斜していることから排水溝と考えられる。また、小規模な城館などに関連する溝の可能性もある。時期は、出土遺物から15世紀後半～16世紀代である。

第3号溝跡 (第403図)

位置 調査区南部のE 5 f2～E 5 j0区で、標高24.1～24.6mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第1号墳，第5号溝跡，第223～226・486・489号土坑を掘り込んでいる。第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 く字状で、E 5 j0区付近から北西方向(N - 46° - W)へ伸び、E 5 e7区付近でほぼ西方向(N - 79° - E)へ緩やかに屈曲している。南東端は調査区域外に伸び、西端はE 5 f2区付近で第3号道路によって削平されている。確認できた長さは39.0mで、上幅0.73～1.92m、下幅0.22～0.64m、深さ12～24cmである。底面はほぼ平坦で、標高は24.0～24.3mである。緩やかに屈曲するE 5 e7区付近が標高24.9mと最も高く、そこから西方向に18.0mで0.30mほど、南東方向に21.0mで0.30mほど下っている。断面形は緩やかな

弧状を呈している。

覆土 2層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物 | 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | 微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 流入した縄文土器片111点, 土師器片19点, 須恵器片2点が出土している。

所見 時期は、重複関係から近世から近代と推測できる。性格は、規模と形状から排水溝や道路に関連する溝などが考えられる。

第4号溝跡 (第403図)

位置 調査区南部のE 5 h8～E 5 j9区で、標高24.5～24.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第239・452号土坑を掘り込み、第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 走行方向はN - 19° - Wで、直線的に延びている。北側が第5号溝に掘り込まれ、南側が調査区域外に延びているため、確認できた長さは5.54mで、上幅0.86～1.20m、下幅0.36～0.92m、深さ20～24cmである。底面はほぼ平坦で、標高は24.1～24.3mである。第5号溝に掘り込まれている地点から、南方向に5.54mで0.20mほど下っている。断面形は緩やかな弧状を呈している。

覆土 5層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 流入した縄文土器片19点, 土師器片1点が出土している。

所見 時期は、重複関係から中世である。性格は、規模と形状から排水溝と考えられる。

第5号溝跡 (第403図)

位置 調査区南部から東部のE 5 j4～E 6 f1区で、標高24.3～24.8mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第4号溝跡, 第230・247・439号土坑を掘り込み、第2・3・6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 走行方向はN - 55° - Eで、直線的に延びている。北東側が第2・6号溝に掘り込まれ、南西側が斜面で削平されているため、確認できた長さは33.50mで、上幅1.70～4.60m、下幅0.60～2.00m、深さ50～56cmである。底面はほぼ平坦で、標高は24.0～24.2mである。E 6 f1区付近から南西方向に緩やかに下っている。断面形は緩やかな弧状を呈している。

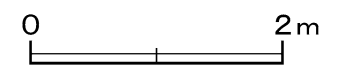
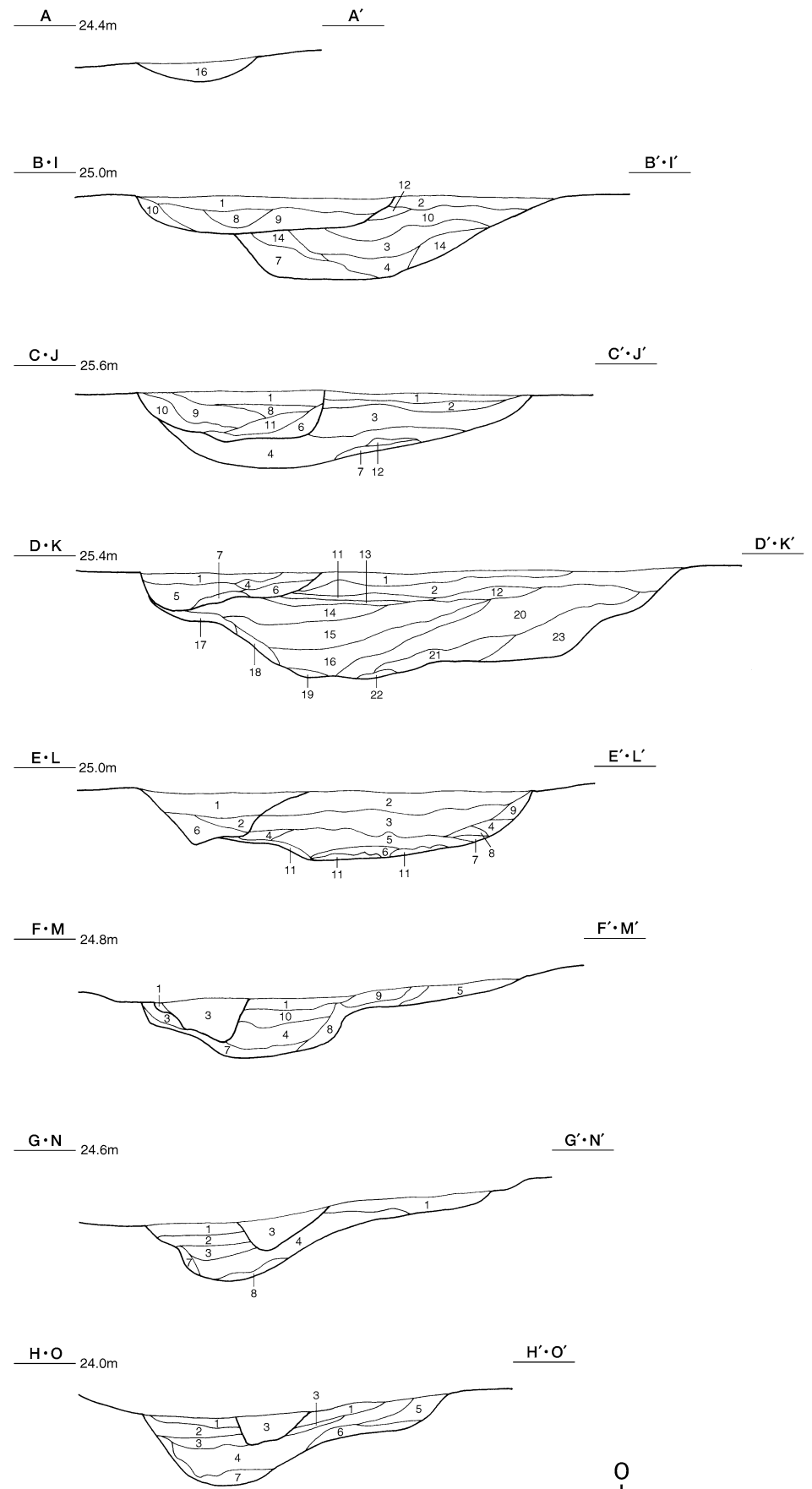
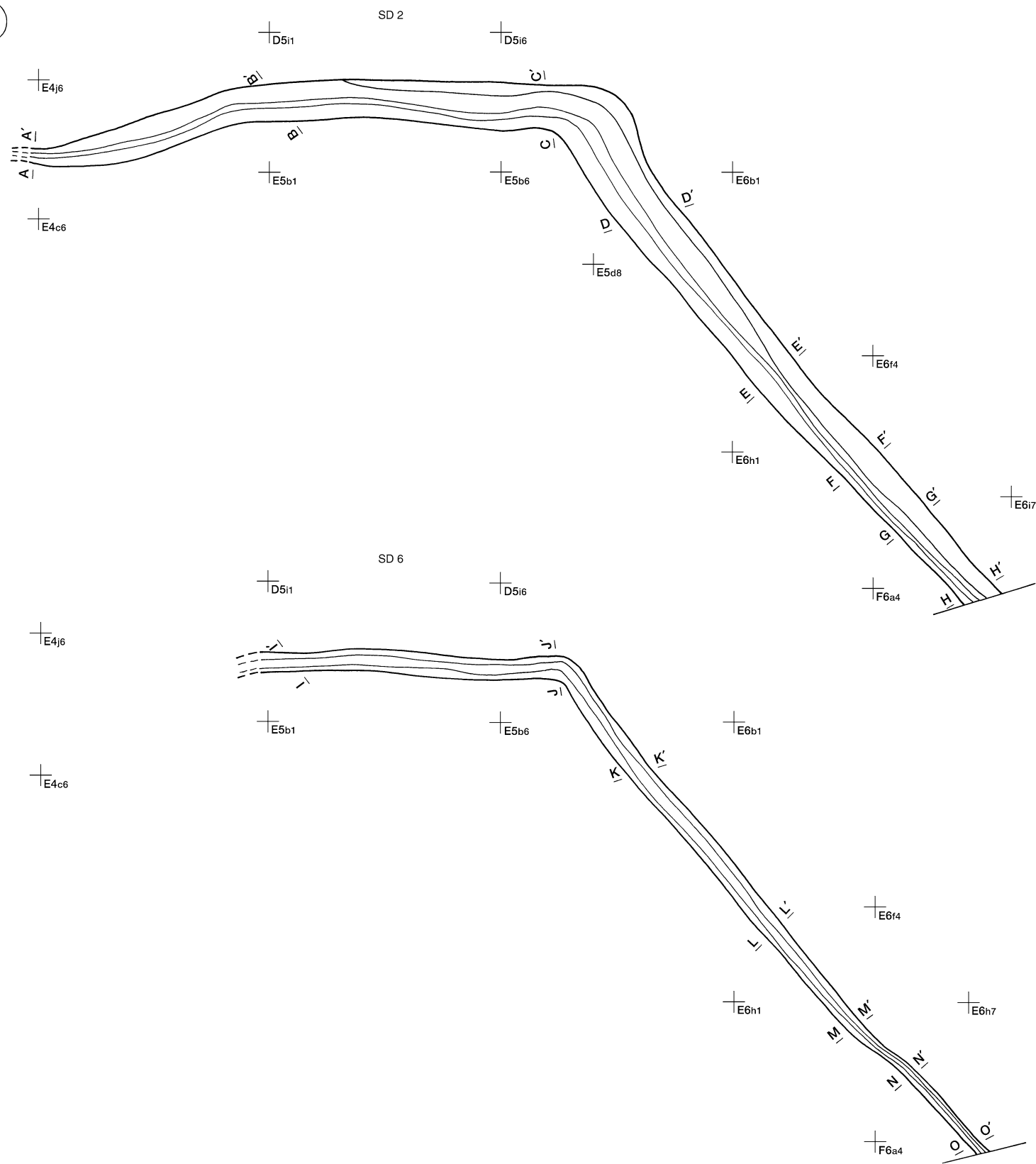
覆土 3層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

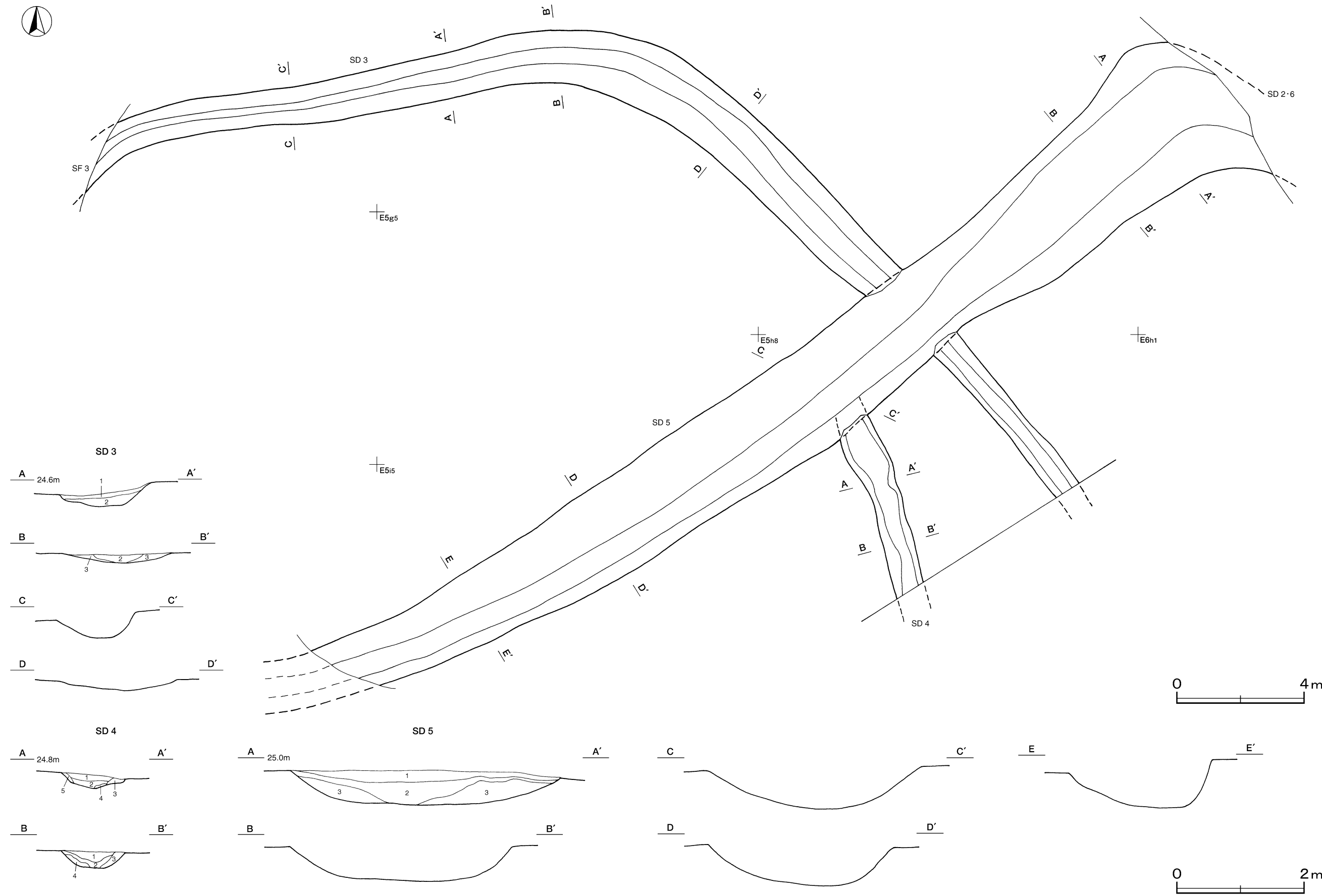
- | | | | |
|-------|--------------------------|------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 | | |

遺物出土状況 流入した縄文土器片165点, 土師器片6点, 土器片錘2点, 打製石斧1点, 剥片2点, 混入した陶磁器片2点が出土している。

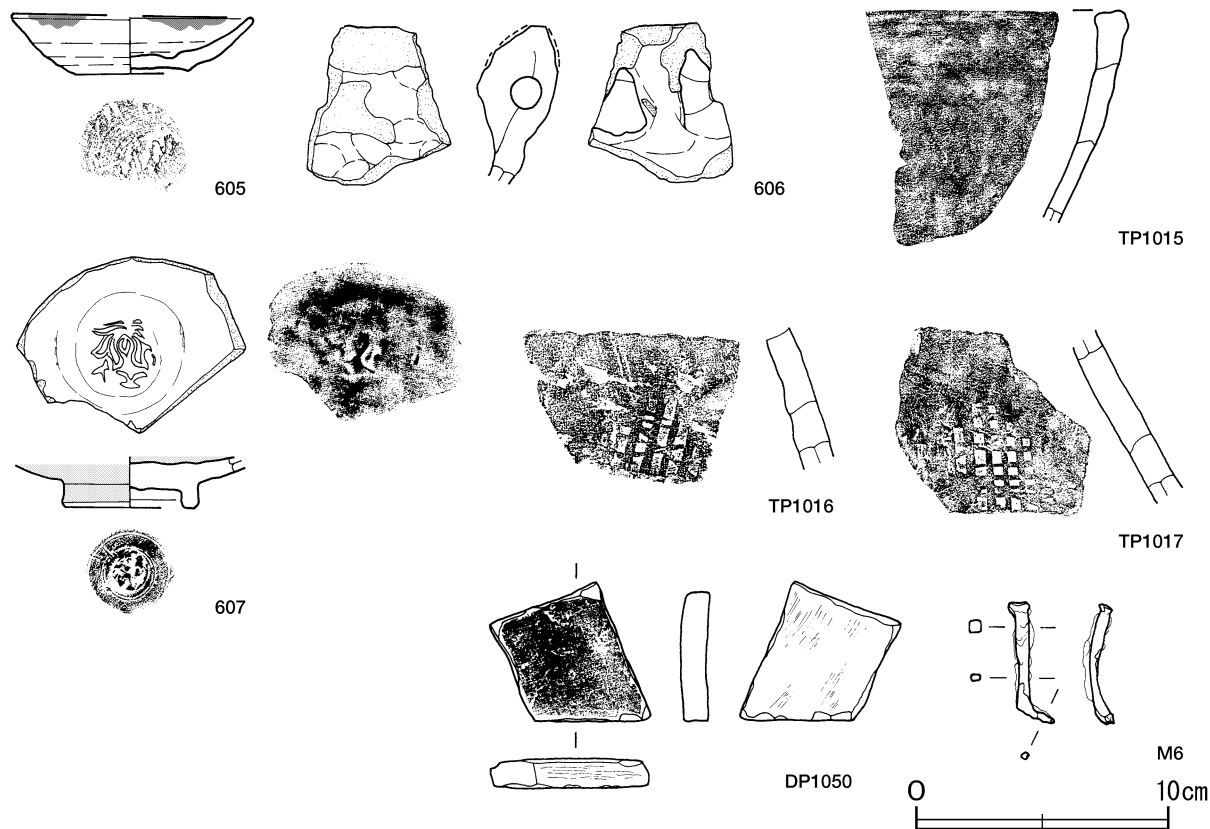
所見 時期は、重複関係から中世である。性格は、地形の傾斜方向に沿って構築されていることから排水溝と考えられる。また、小規模な城館などに関連する溝の可能性もある。



第402图 第2·6号沟迹实测图



第403图 第3·4·5号沟迹实测图



第404図 第2・6号溝跡出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第404図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
605	土師質土器	かわらけ	[9.5]	2.1	[4.5]	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し 敷物痕 口唇部煤付着	覆土	50%
606	土師質土器	内耳鍋	-	(6.2)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	外面ナデ 指頭痕	覆土	5%
TP1015	土師質土器	内耳鍋	-	(8.5)	-	長石・雲母	褐	普通	ナデ	覆土	
TP1016	陶器	甕	-	(5.6)	-	長石	灰黄	普通	胴部外面格子目の叩き 内面ナデ	覆土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP1050	転用砥	5.5	6.4	1.0	43.9	陶器/石英・長石	片面 1側縁に研磨痕	覆土中層	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	釘	4.7	0.5~0.8	0.3~0.5	7.5	鉄	頭部平坦 先端部屈曲 断面方形	覆土	PL60

第6号溝跡出土遺物観察表(第404図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
607	青磁	碗	-	(2.0)	3.2	長石	オリ・灰	普通	内面見込に花卉のモチーフのスタンプ文 削り高台	覆土	10%
TP1017	陶器	甕	-	(6.9)	-	長石	灰黄	普通	胴部外面格子目の叩き 内面ナデ	覆土	

第6号溝跡 (第402・404図)

位置 調査区西部から東部のD4j0～F6a6区で、標高23.8～25.3mの台地縁辺部から平坦部にかけて位置している。

重複関係 第18号住居跡、第1号墳、第2・5号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 く字状で、F6a6区付近から北西方向(N-41°-W)へ伸び、D5j7区付近でほぼ西方向(N-90°-E)へ大きく屈曲している。南東端は調査区域外に伸び、西端はD4j0区付近で途切れている。確認できた長さは81.0mで、上幅0.70～2.00m、下幅0.20～1.10m、深さ25～49cmである。底面は緩やかな凹凸を有し、標高は23.2～24.9mである。大きく屈曲するD5j7区付近が標高24.9mと最も高く、そこから西方向に25.4mで0.50mほど、南東方向に55.6mで1.70mほど下っている。断面形はD5j7区以東は逆三角形ないし逆台形、D5j7区以西は緩やかな弧状を呈している。

覆土 11層に分かれ、周囲からの土の流入を示す堆積状況と均質な含有物の様相から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量,炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
3 黄褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量,炭化物少量
4 暗褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量	10 明褐色	ロームブロック多量,炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量,焼土ブロック・炭化粒子微量	11 にぶい褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量		

遺物出土状況 陶器片1点(甕),青磁片1点(碗)が、覆土中から散在した状態で出土している。その他、流入した紡錘車1点も出土している。

所見 時期は、重複関係から近世から近代と推測できる。本跡は、第2号溝跡がほぼ埋没した段階で、その南西壁及び南壁に沿う状態で掘り込まれていることから、両者の関連が指摘できる。性格は規模と形状から排水溝や道路に関連する溝などが考えられる。

表14 中世・近世溝跡一覧表

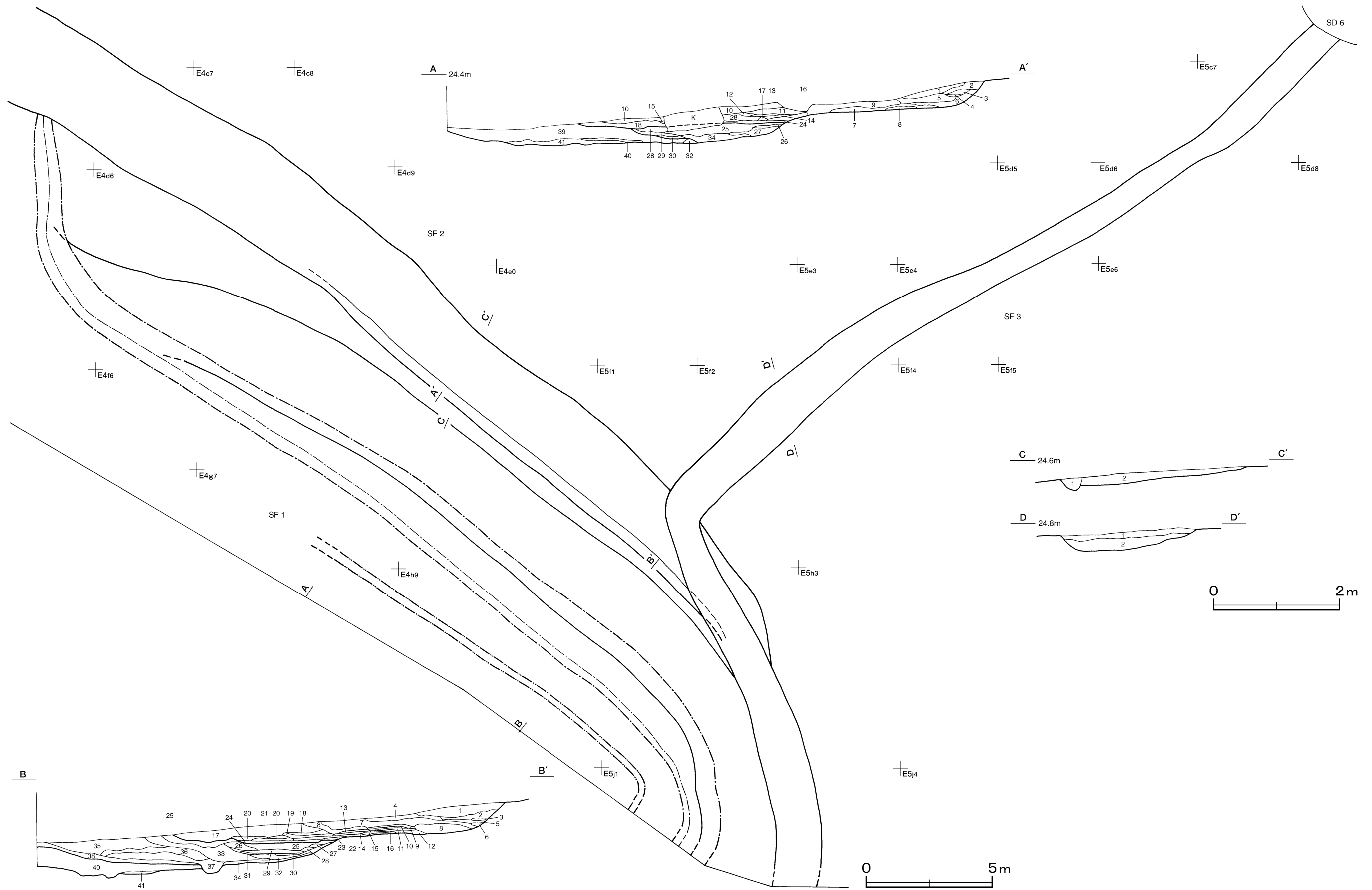
番号	位置	走行方向	形状	断面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
					長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
2	E4a6～ F6a6	N-42°-W・ N-89°-E	くの字状	弧状・ 逆台形	112.0	110～ 630	20～ 100	15～ 77	外傾	U字状	自然	陶器・土師質土器・かわらけ・内耳鍋・転用砥・釘	15世紀後半～16世紀代 S118,TM1→本跡→SD5・6
3	E5f2～ E5j0	N-46°-W・ N-79°-E	くの字状	弧状	39.0	73～ 192	22～ 64	12～ 24	緩斜・ 外傾	ほぼ 平坦	自然	縄文土器・土師器・須恵器	近世～近代 SK223～226・486・489,TM1 →本跡→SD5,SF3
4	E5h8～ E5j9	N-19°-W	直線状	弧状	5.54	86～ 120	36～ 92	20～ 24	緩斜・ 外傾	ほぼ 平坦	自然	縄文土器・土師器	中世 SK239・452→本跡→SD5
5	E5j4～ E6f1	N-55°-E	直線状	弧状	33.5	170～ 460	60～ 200	50～ 56	緩斜・ 外傾	ほぼ 平坦	自然	縄文土器・土師器・土器片・打製石斧・剥片・陶磁器	中世 SK230・247・439,SD4→ 本跡→SD2・3・6
6	D4j0～ F6a6	N-41°-W・ N-90°-E	くの字状	弧状・ 逆台形	81.0	70～ 200	20～ 110	25～ 49	外傾	凹凸	自然	陶器・青磁	近世～近代 S118,SD2・5,TM1→本跡

(5) 道路跡

第1号道路跡 (第405図)

位置 村道1551号線の位置した調査区南部から西部のE4c5～E5j2区で、標高23.1～24.5mの台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。

重複関係 第1号周溝跡を掘り込み、第2・3号道路に掘り込まれている。



第405图 第1·2·3号道路迹实测图

規模と形状 Sの字状で、E 5 j1区付近から北西方向に延び、E 4 e5区付近で緩やかなカーブを描きながら北方向に延びている。主な走行方向はN - 55° - Wである。南東端が調査区域外に延び、北西端が第2号道路に掘り込まれ、また、斜面で削平されているため、確認できた長さは40.6mで、幅は5.50～7.00mほどである。路面は3面まで確認でき、掘り込みを伴う3段階の変遷が認められた。いずれの段階の掘り込みも、断面形は緩やかな弧状で、第1次路面は、斜面部で最も標高の低い位置に構築されている。路面はほぼ平坦で踏み固められている。路面の南側に、幅20～25cm、深さ8～10cmの側溝が掘り込まれ、断面形はU字状である。第2次路面は、第1次路面よりも10cm上位に構築されている。路面はほぼ平坦で踏み固められている。路面の南側には、幅30～35cm、深さ10～16cmの側溝が掘り込まれ、断面形はU字状である。第3次路面は、第2次路面よりも35cm上位に構築されている。路面はほぼ平坦で踏み固められている。第1・2次路面で認められたような側溝は確認できなかった。

覆土 41層に分かれ、不自然な堆積状況とロームブロックや焼土ブロックなどを多く含んでいるため、埋め戻されたと考えられる。第24層上面が第3次路面、第34層上面が第2次路面、第41層上面が第1次路面である。

土層解説

1 褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量,炭化粒子微量	22 暗褐色	炭化物少量,ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量	23 黄褐色	ローム粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量	24 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
4 にぶい黄褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量	25 黒褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック少量,炭化粒子微量
5 褐色	ロームブロック中量	26 黒褐色	ロームブロック多量
6 暗褐色	ロームブロック中量	27 明褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子少量
7 にぶい黄褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック少量,炭化粒子微量	28 黒褐色	炭化粒子中量,ローム粒子少量
8 褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量	29 暗褐色	焼土ブロック少量,ローム粒子・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック中量,炭化物微量	30 黒褐色	ロームブロック少量
10 暗褐色	ロームブロック少量	31 暗褐色	焼土粒子中量,ローム粒子微量
11 褐色	ローム粒子少量,炭化粒子微量	32 黒褐色	ロームブロック少量,炭化物微量
12 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量	33 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
13 暗褐色	ローム粒子多量,炭化粒子微量	34 黒褐色	ローム粒子・砂粒少量
14 黒褐色	ロームブロック中量,炭化粒子微量	35 極暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子・炭化粒子微量
15 暗褐色	ロームブロック中量,焼土粒子少量,炭化粒子微量	36 暗褐色	ロームブロック中量,焼土ブロック少量,炭化粒子微量
16 黄褐色	ロームブロック少量,炭化粒子微量	37 暗褐色	ロームブロック少量,焼土ブロック微量
17 暗褐色	焼土ブロック少量,ロームブロック・炭化粒子微量	38 黒褐色	ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量
18 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	39 褐色	ロームブロック少量
19 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	40 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量,炭化粒子微量
20 黒褐色	ローム粒子微量	41 灰褐色	ロームブロック中量,砂粒微量
21 褐色	ローム粒子多量		

遺物出土状況 陶器片1点(甕),縄文土器片132点,弥生土器片4点,土師器片4点が,覆土中から出土している。

所見 時期は,出土した陶器と重複関係から近世である。調査前まで使用されていた村道1551号線の真下に位置しているため,その前身的な道路と考えられる。

第2号道路跡(第405図)

位置 村道1551号線の位置した調査区南部から西部のE 4 b5～E 5 h2区で,標高23.8～24.5mの台地縁辺部から斜面部にかけて位置している。

重複関係 第1号道路,第1号周溝跡,第165号土坑を掘り込み,第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 走行方向はN - 55° - Wで,直線的に延びている。南東端が第3号道路に掘り込まれ,北西端が斜面で削平されているため,確認できた長さは40.0mで,幅は2.15～3.84mである。路面はほぼ平坦で踏み固められている。E 4 f9区付近の路面の南側には,幅43～45cm,深さ15～20cmの側溝が掘り込まれ,断面形はU字状である。全体的に浅く,断面形は極めて緩やかな弧状を呈している。

第36号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第94号土坑土層解説

- 1 黒色 焼土ブロック多量, ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック多量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック微量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子少量

第96号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第97号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第102号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第104号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物微量

第105号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量

第109号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量

第128号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 4 黒色 ロームブロック多量, 焼土ブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量

第139号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第158号土坑土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 5 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第186号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量

第202号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第223号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第224号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 にぶい褐色 ローム粒子少量

第225号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量

第226号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化材少量, 粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化材中量, 粘土ブロック微量
- 4 黒褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量
- 5 黒褐色 粘土ブロック少量, ロームブロック微量
- 6 黒色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 8 黒色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 9 黒色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量, 焼土ブロック微量

第231号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土ブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量

第241号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック多量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子中量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック少量

第272号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第283号土坑土層解説

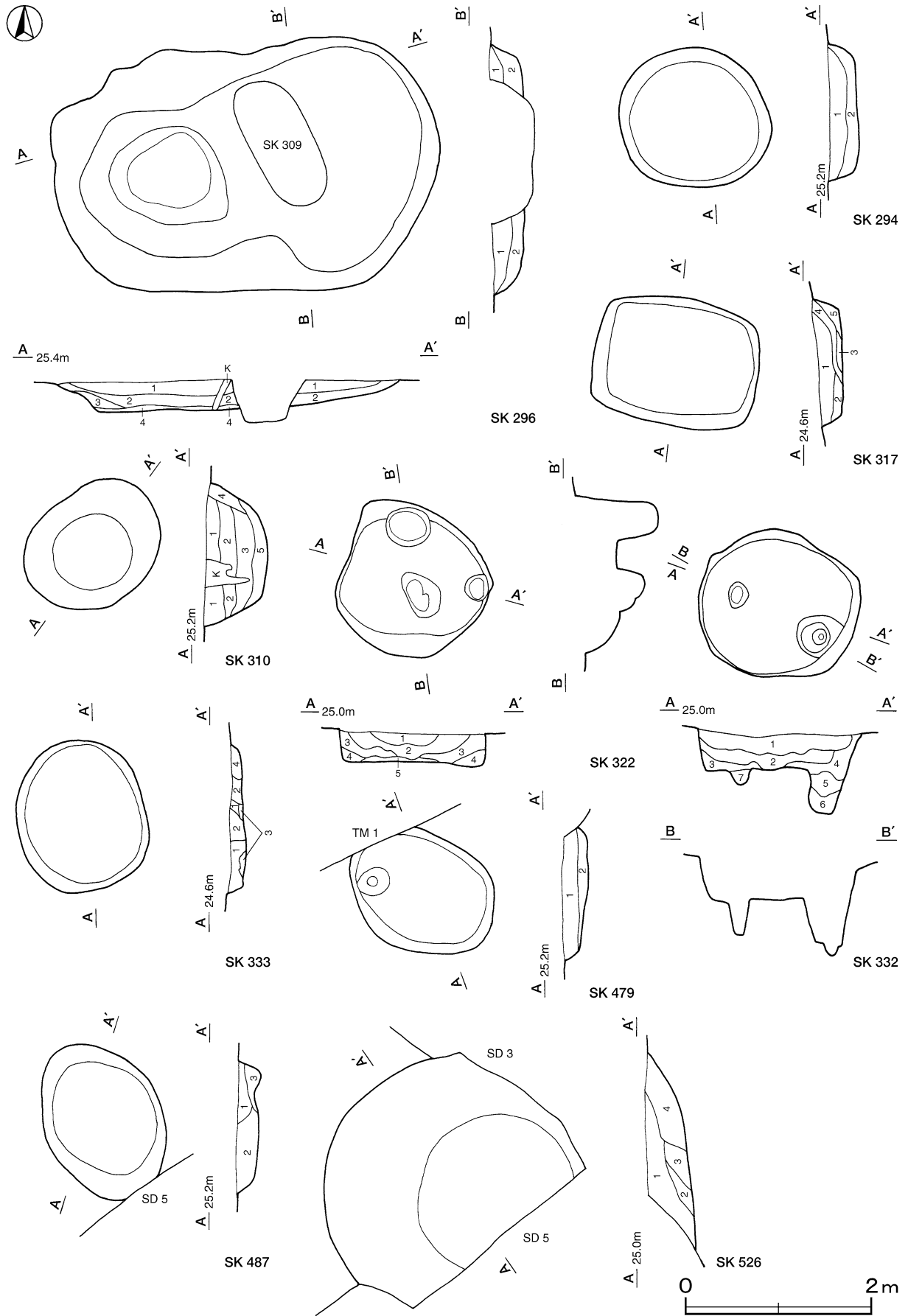
- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第294号土坑土層解説

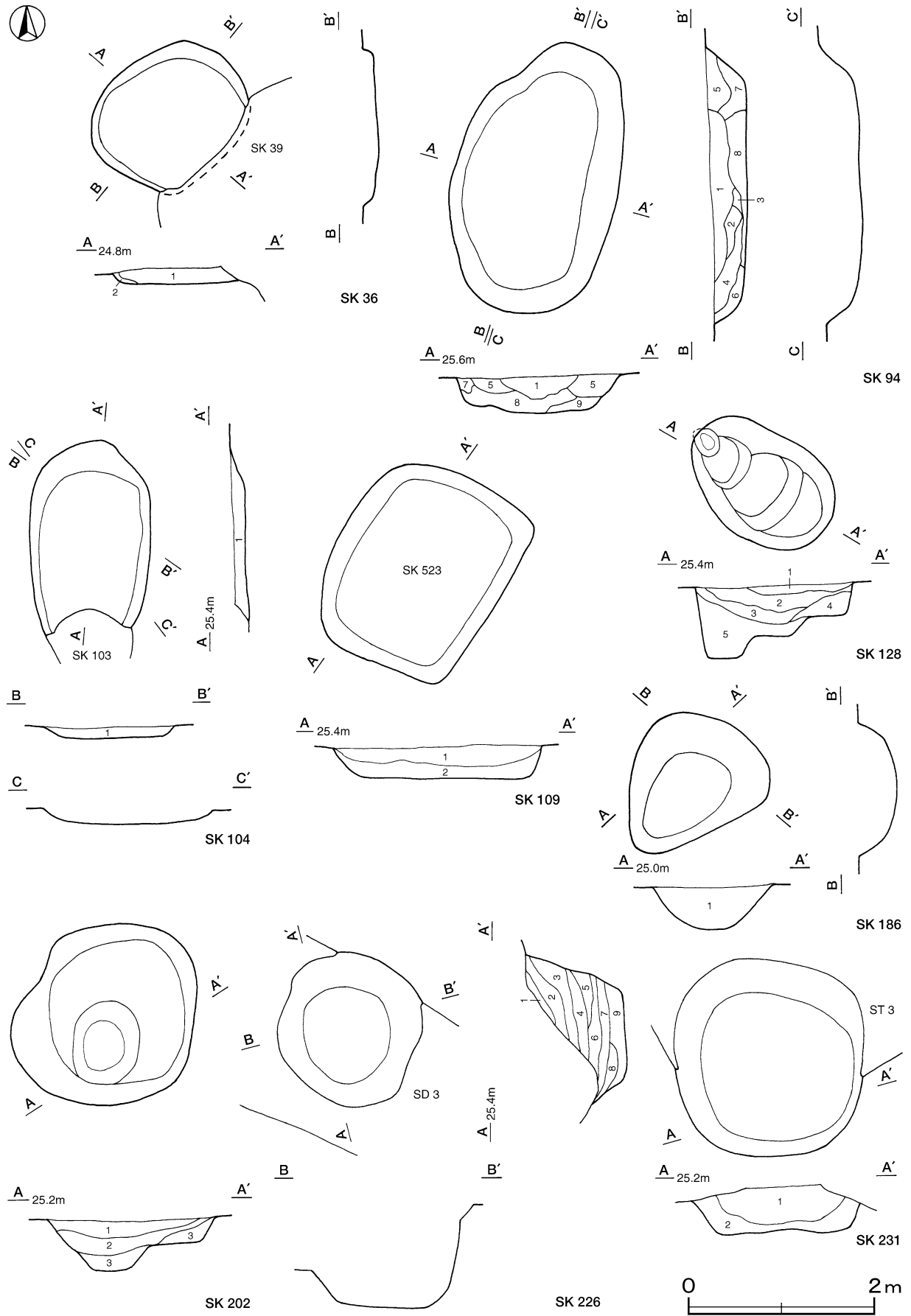
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

第296号土坑土層解説

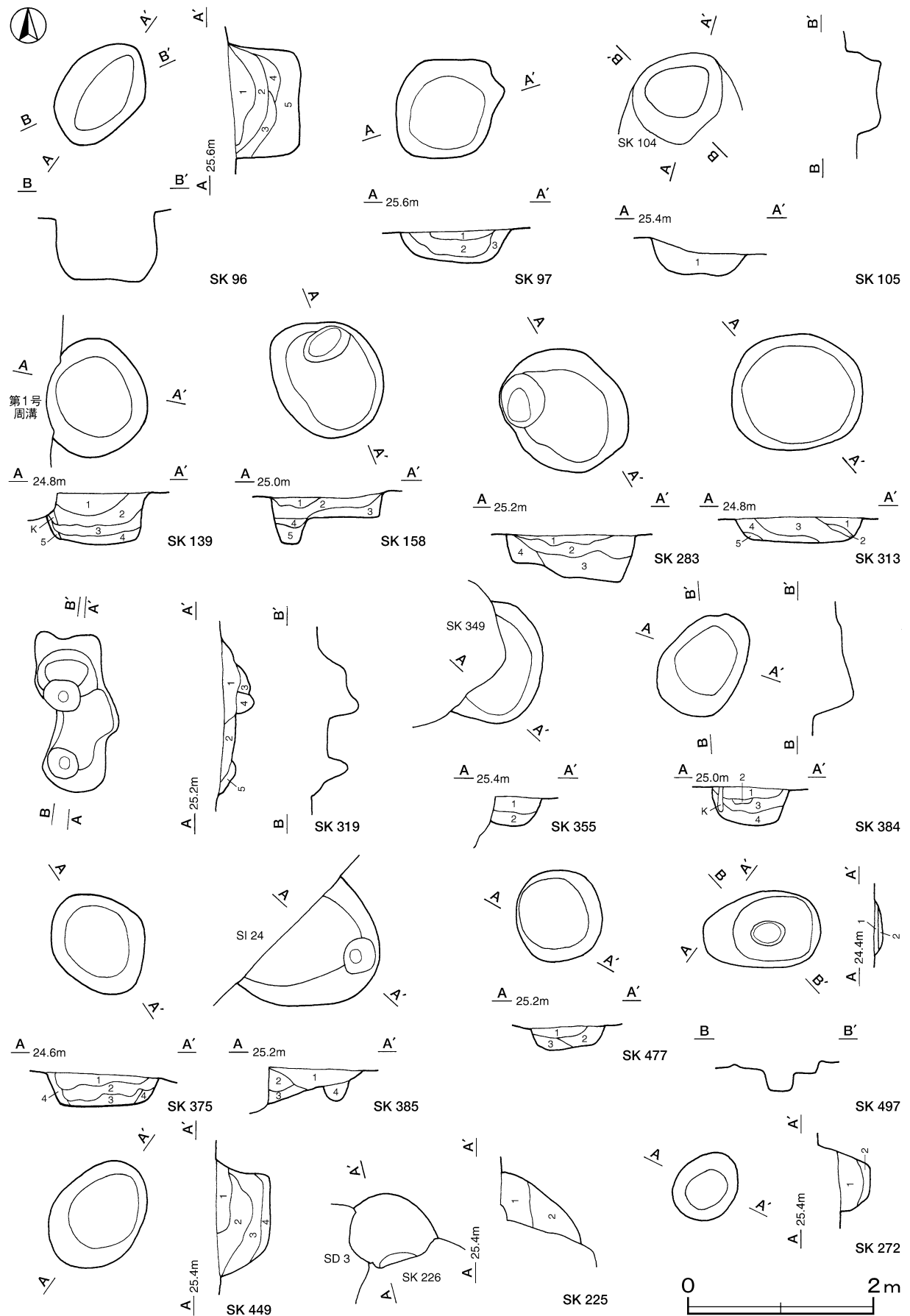
- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化材少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量



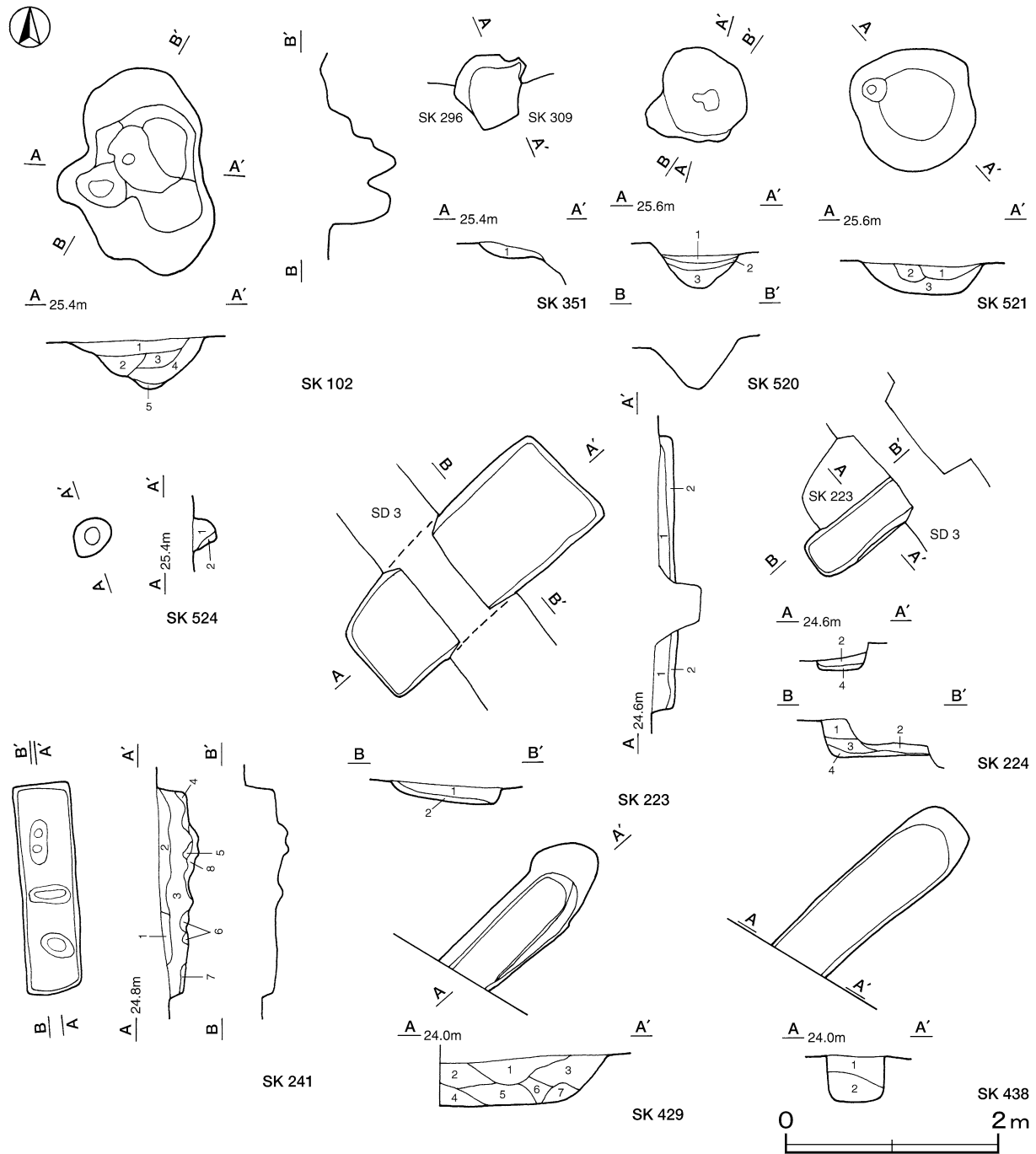
第406図 その他の土坑実測図(1)



第407図 その他の土坑実測図(2)



第408図 その他の土坑実測図(3)



第409図 その他の土坑実測図(4)

第310号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 4 灰褐色 ロームブロック中量
- 5 灰褐色 ロームブロック少量

第313号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第317号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量

第319号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック中量

第322号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 にぶい褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

第332号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ローム粒子少量, 焼土物微量
- 6 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第333号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第351号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第355号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量

第375号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第384号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第385号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子少量
- 2 明褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第429号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量, 粘土粒子微量

第438号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量

第449号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量, 焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量, 焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第477号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

第479号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第487号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 明褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第497号土坑土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第520号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化物中量

第521号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量

第524号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量

第526号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量
- 3 褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

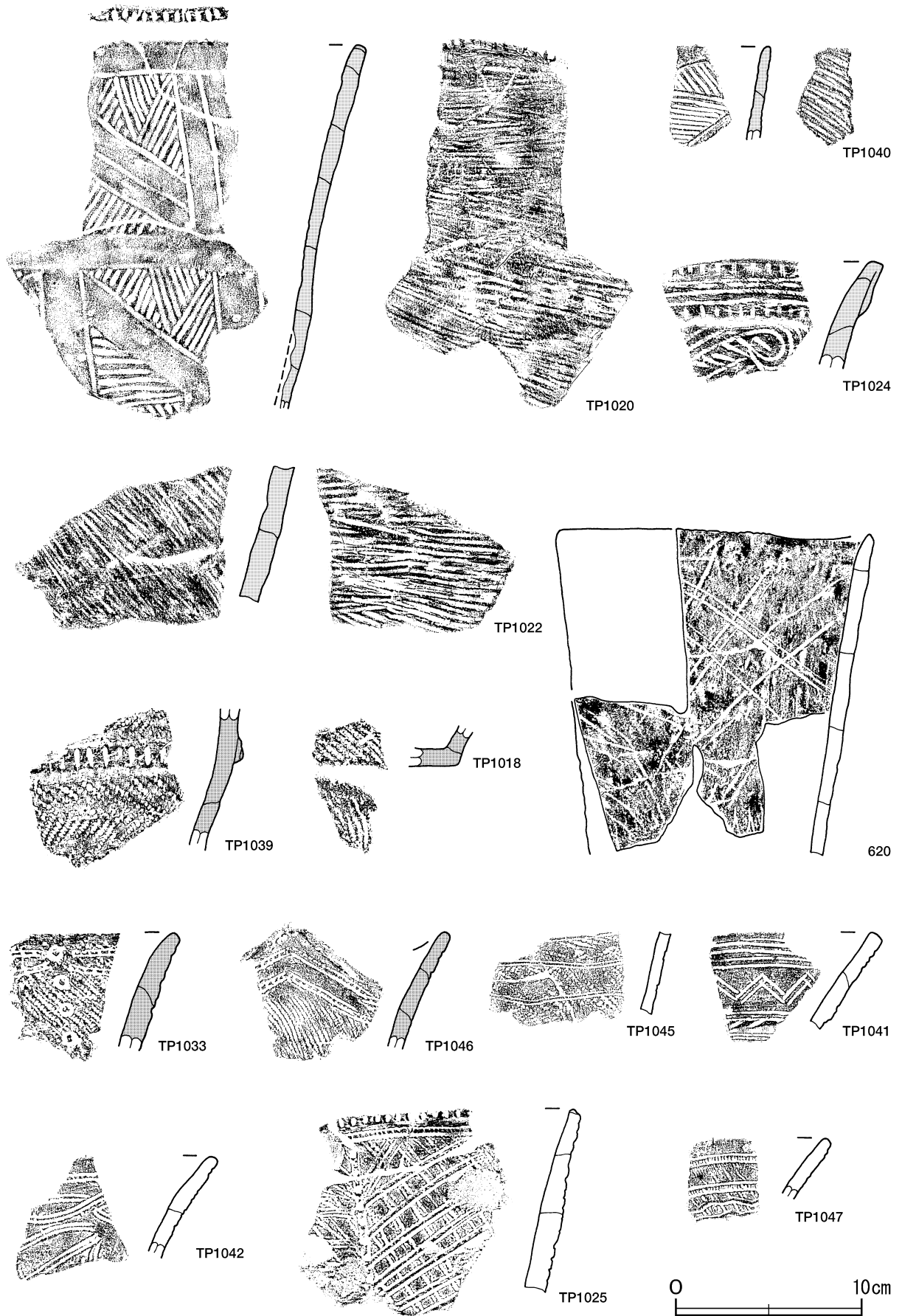
表16 その他の土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	分類	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸(m)	深さ (cm)						
36	D 4 i 8	楕円形	N - 47° - E	2.97 × 1.77	40	緩斜	皿状	自然	縄文土器・弥生土器・須恵器	A	本跡→SK35
94	E 6 a 1	不整楕円形	N - 17° - E	0.91 × 0.74	37	緩斜	平坦	自然	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土器片鍾	C	-
96	E 5 b 0	楕円形	N - 35° - E	1.24 × 0.80	72	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器	B	-
97	E 6 c 2	円形	-	1.07 × 1.04	32	緩斜	皿状	自然	縄文土器・土師器・打製石斧	B	-
102	E 6 b 1	不定形	N - 12° - W	1.96 × 1.37	69	緩斜 外傾	凹凸	自然	縄文土器・須恵器	A	ST 1→本跡
104	E 6 d 2	[楕円形]	N - 16° - E	(1.53) × 1.30	14	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器	A	SK105・106→本跡→SK103

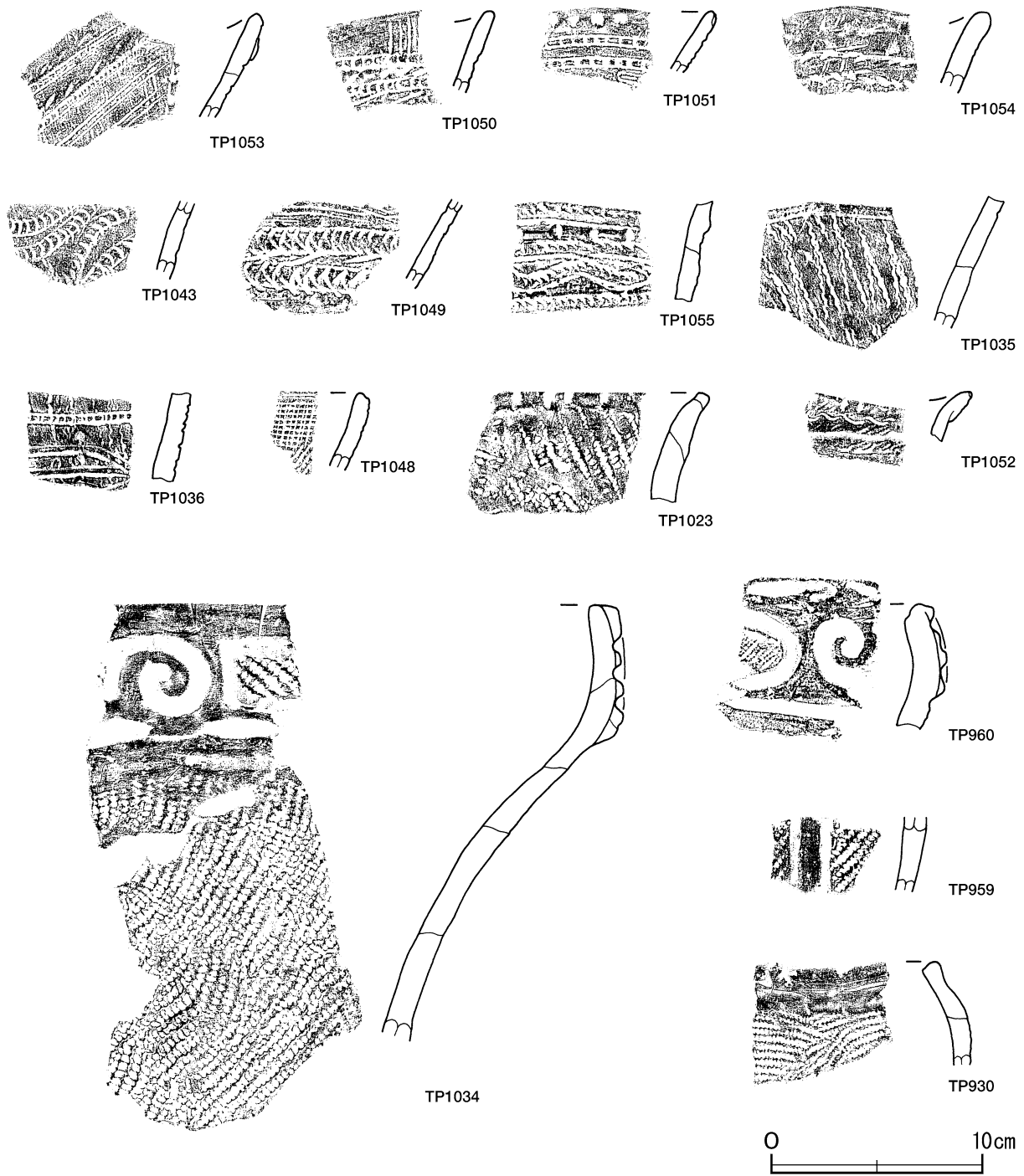
番号	位置	平面形	長径方向 長軸方向	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	分類	備考 重複関係 (古→新)
				長径×短径(m) 長軸×短軸(m)	深さ (cm)						
105	E 6 d2	隅丸長方形	N - 42° - E	1.07 × 0.89	45	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器・土器片 片錘・軽石	B	SK106→本跡→SK104
109	E 6 d3	隅丸方形	N - 31° - E	2.22 × [1.84]	38	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器・須恵器 ・土器片錘・剥片	D	本跡→SK449・523
128	D 6 i1	楕円形	N - 55° - W	1.70 × 1.13	56	外傾	凹凸	自然	縄文土器・弥生土器・土師器 ・須恵器・土器片錘	A	SK142・151→本跡
139	E 4 d0	楕円形	N - 4° - E	1.29 × 1.13	55	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器	B	本跡→第1号周溝
158	E 5 e3	楕円形	N - 33° - W	1.31 × 1.16	29	外傾	平坦	自然	縄文土器・須恵器・礫	B	-
186	E 5 d2	不整楕円形	N - 39° - E	1.50 × 1.05	56	緩斜	皿状	自然	縄文土器・土師器・土器片錘	A	SK185・195・525→本跡
202	F 5 a6	不定形	N - 17° - E	1.98 × 1.78	38	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器・土器片錘	A	SK201・246→本跡
223	E 5 h0	長方形	N - 46° - E	2.61 × 1.00	22	緩斜	平坦	自然	縄文土器	D	SK223・224, SD3→本跡
224	E 5 h0	長方形	N - 52° - E	[1.15]× 0.46	34	緩斜	平坦	自然	-	D	SK223・224, SD3→本跡
225	E 5 e7	-	-	(1.00)×(0.82)	80	-	-	自然	-	B	第1号墳 本跡 SK226
226	E 5 e7	円形	-	1.70 × 1.60	100	緩斜 外傾	平坦	自然	縄文土器・須恵器	A	第1号墳 SK225→本跡→SD3
231	E 5 e7	円形	-	2.10 × 2.03	53	外傾	凹凸	自然	縄文土器・土師器・須恵器 ・釘	A	第1号墳, ST3→本跡
241	E 5 g3	長方形	N - 4° - W	1.98 × 0.54	28	外傾	凹凸	自然	縄文土器	D	-
272	E 6 c4	楕円形	N - 31° - E	0.78 × 0.65	38	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器	C	SK273→本跡
283	E 6 f7	楕円形	N - 36° - W	1.38 × 1.23	51	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器・剥片	B	-
294	E 5 e6	円形	-	1.64 × 1.52	30	外傾	平坦	自然	縄文土器・土器片錘	A	第1号墳, SK295→本跡
296	E 5 d6	不定形	N - 81° - E	4.18 × 2.59	32	緩斜	平坦	人為	縄文土器・弥生土器・土師器 ・須恵器	A	第1号墳 SK351→本跡→SK309
310	E 6 b7	楕円形	N - 51° - E	1.55 × 1.24	65	緩斜	皿状	自然	縄文土器・土師器	A	SK311→本跡
313	E 6 d0	楕円形	N - 77° - W	1.41 × 1.28	27	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・須恵器	B	-
317	E 7 e1	長方形	N - 80° - E	1.78 × 1.36	28	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・土器片錘	D	-
319	E 5 c6	不整楕円形	N - 5° - W	1.65 × 0.65	14	緩斜	凹凸	自然	縄文土器	A	本跡→SI27
322	E 6 g5	円形	-	1.57 × 1.55	41	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器	A	SK321→本跡
332	E 6 f5	円形	-	1.70 × 1.63	69	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・剥片	A	SK321→本跡
333	E 6 h9	楕円形	N - 4° - E	1.63 × 1.40	15	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器	A	SK484, SI38→本跡
351	E 5 d6	-	N - 85° - E	0.63 ×(0.24)	19	緩斜	凹凸	自然	-	C	第1号墳→本跡→SK296
355	E 6 d4	[円形]	-	1.27 ×(0.37)	33	外傾	皿状	自然	縄文土器・土師器	B	本跡→SK349
375	E 6 h0	楕円形	N - 33° - W	1.20 × 0.98	33	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器	B	-
384	E 6 f6	楕円形	N - 33° - E	1.18 × 0.84	41	外傾	皿状	自然	縄文土器・土師器	B	SK388・400→本跡
385	E 6 d6	[楕円形]	N - 43° - E	1.58 ×(1.00)	40	緩斜	傾斜	自然	縄文土器・土師器	A	SK386→本跡→SI24
429	E 6 j4	隅丸長方形	N - 46° - E	(1.70)× 0.62	45	緩斜	平坦	自然	縄文土器	D	SK201・246→本跡
438	E 6 j3	隅丸長方形	N - 49° - E	(2.00)× 0.61	43	直立	平坦	自然	縄文土器	D	-
449	E 6 e3	楕円形	N - 35° - E	1.26 × 0.96	58	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器・磨石	B	SK109・523→本跡
477	E 5 f0	円形	-	0.99 × 0.93	25	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器	C	-
479	E 5 f9	[不整楕円形]	N - 67° - W	1.63 × 1.25	27	外傾	凹凸	自然	縄文土器・土師器	A	本跡→第1号墳
487	E 5 h8	[楕円形]	N - 27° - W	(0.73)× 1.30	25	緩斜	平坦	自然	縄文土器・土師器	C	本跡→SD5
497	E 7 h1	楕円形	N - 83° - E	1.27 × 0.85	14	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・須恵器	B	SK496・514→本跡
520	E 6 c1	不定形	N - 65° - E	1.00 × 0.94	42	緩斜	皿状	自然	-	B	ST1→本跡
521	E 6 b2	円形	-	1.21 × 1.17	27	緩斜	平坦	自然	-	B	本跡→ST1
524	E 5 d7	楕円形	N - 34° - E	0.40 × 0.30	20	外傾	皿状	自然	-	C	SI22→本跡
526	E 5 g8	[円形]	-	(2.82)×(2.12)	47	緩斜	平坦	自然	-	A	本跡→SD3・5

(2) 遺構外出土遺物 (第410～426図)

遺構に伴わない旧石器時代から近世に至る遺物について、各時代の特色ある遺物を抽出し、実測図と拓影図を掲載する。第410～414図は早期から晩期の縄文土器で、早期後葉の鶴が島台式土器、前期初頭の花積下層式土器、前期後葉の浮島式土器、前期末葉の粟島台式土器、中期後葉の加普利E式土器、後期の称名寺式土器、

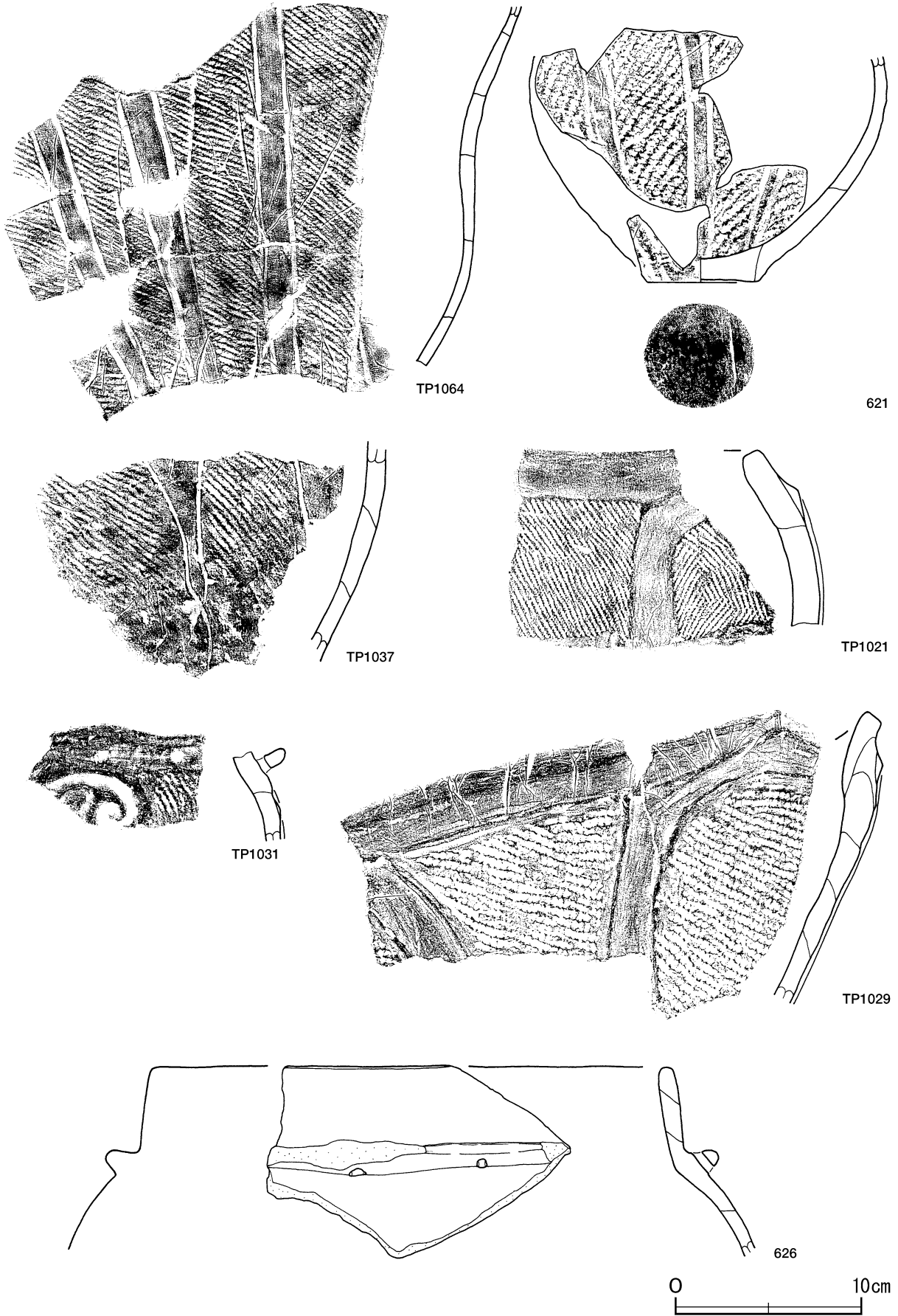


第410图 遺構外出土遺物実測図(1)

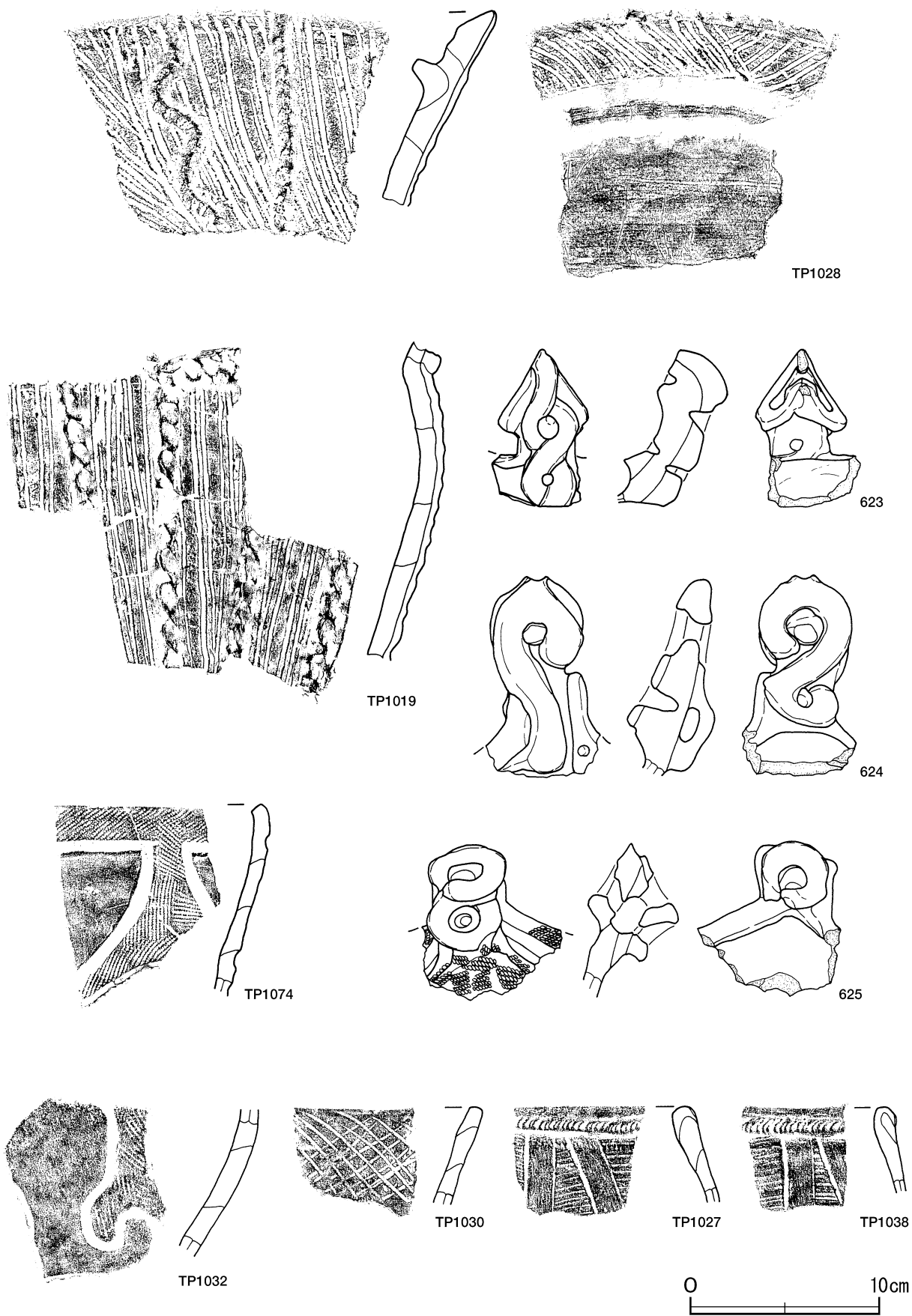


第411図 遺構外出土遺物実測図(2)

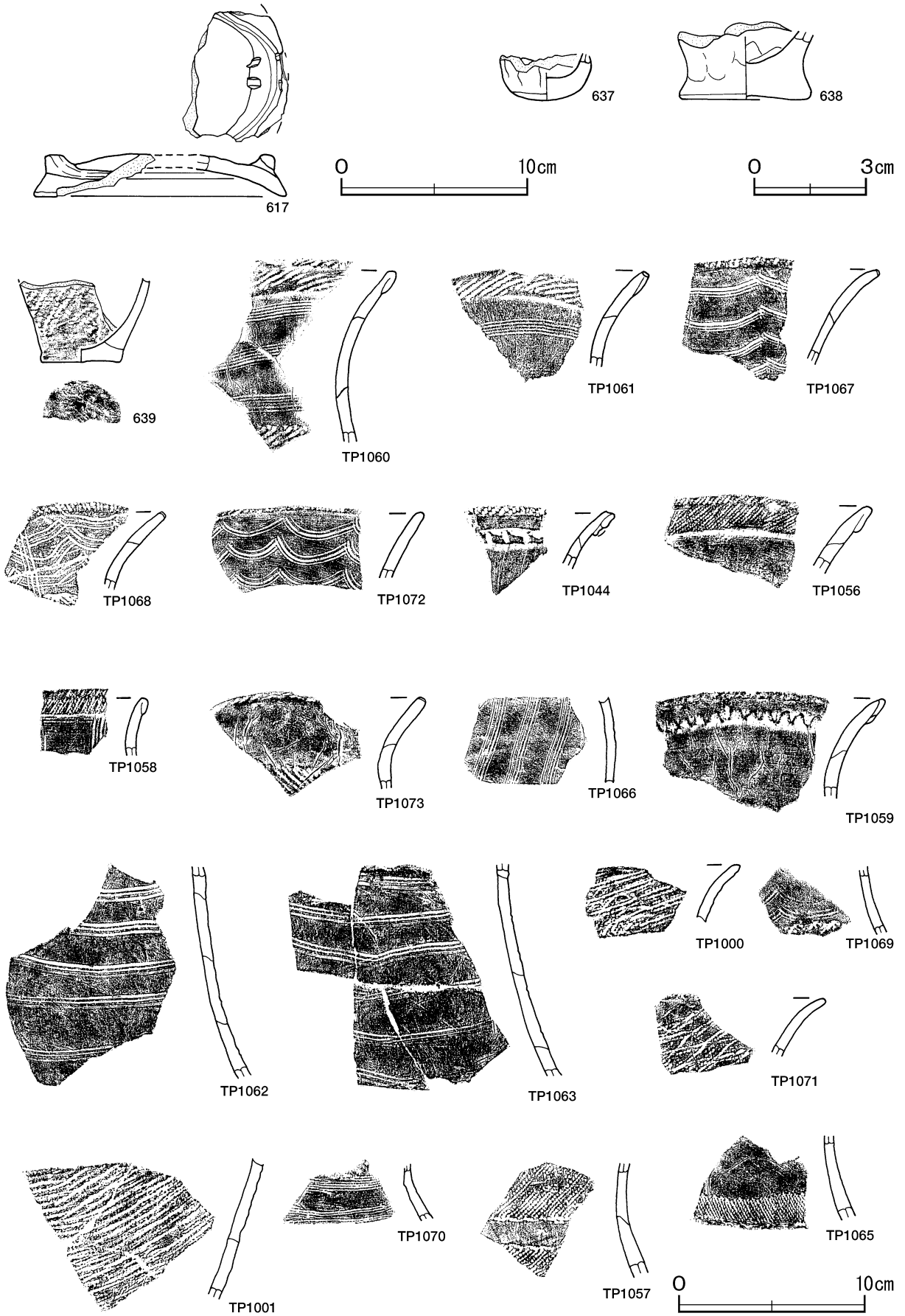
加曾利B式土器，晚期前葉の安行3d式土器など，各時期のものが出土している。第414・415図は中期から後期の弥生土器で，口唇部及び口縁部に縄文及びび付加条縄文が施文され，頸部は3・4本単位の櫛歯状工具による平行沈線文や連弧状のモチーフなどが施文されている。胴部には縄文及びび付加条縄文，底部には木葉痕や布目痕が認められる。第415・416図は古墳時代から中世の土器や陶磁器，第416～418図は縄文時代から近世の土製品と，中世・近世の金属製品である。第419～424図は旧石器時代と縄文時代の石器，第425・426図は縄文時代，古墳時代，中世・近世の石製品である。



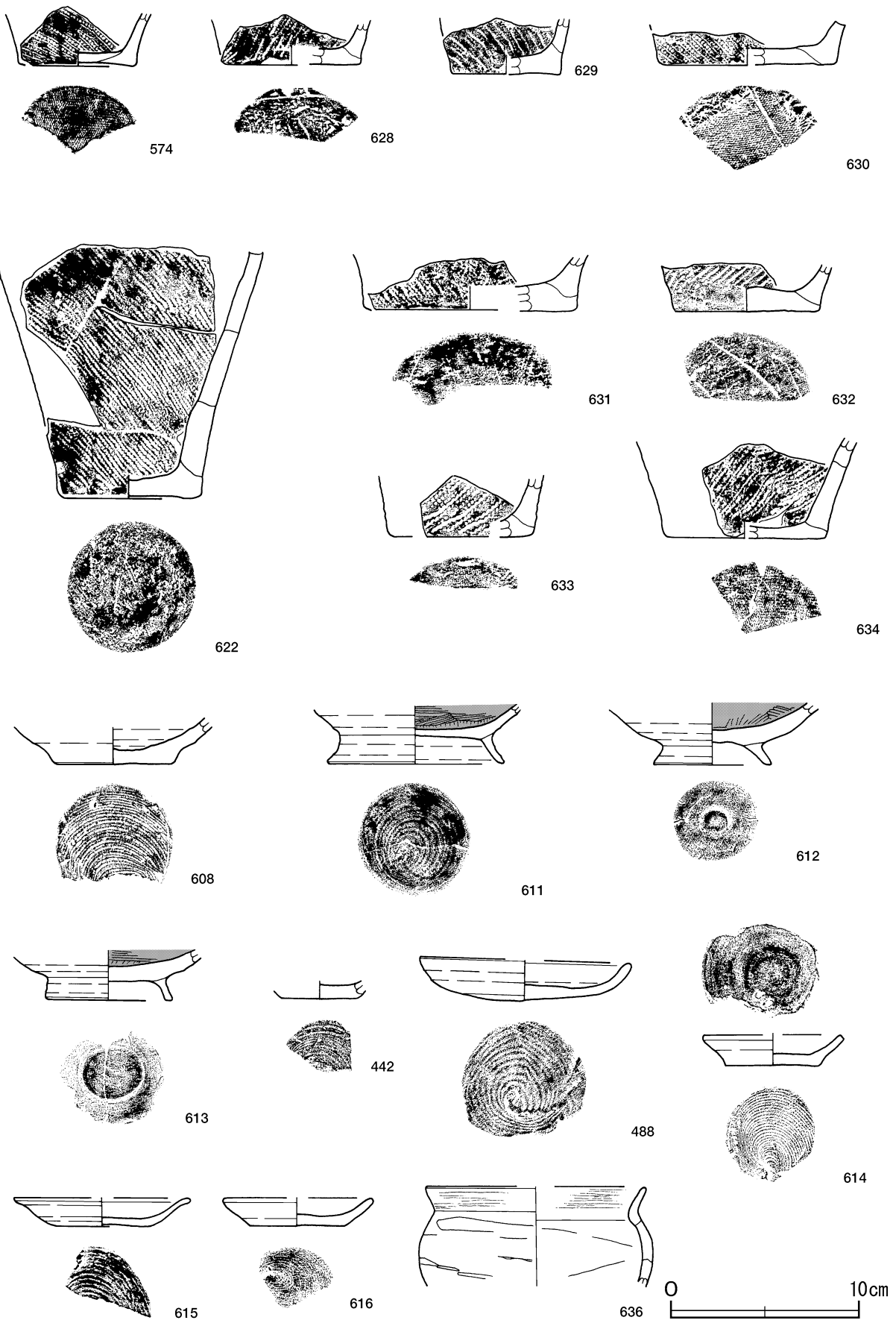
第412図 遺構外出土遺物実測図(3)



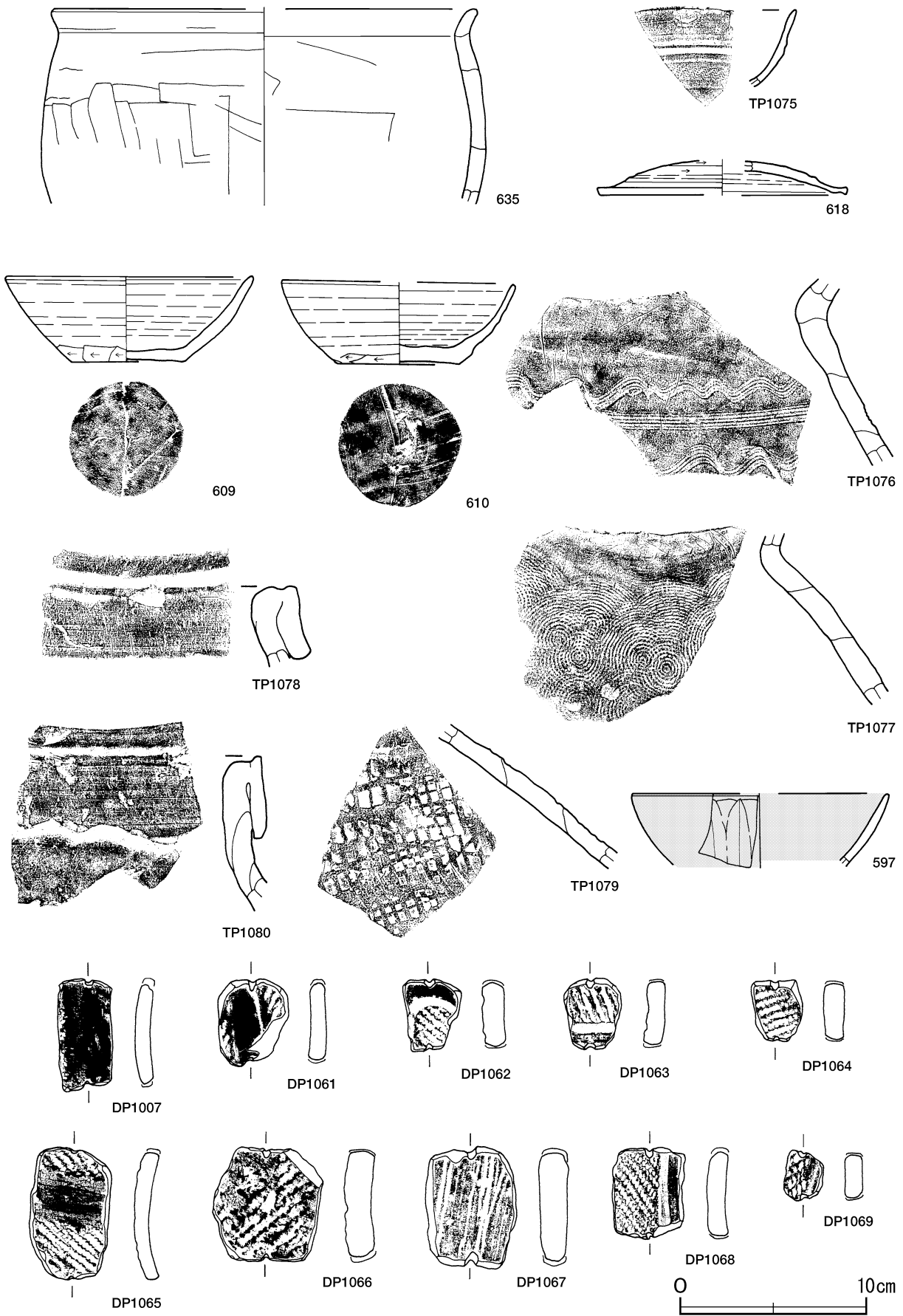
第413図 遺構外出土遺物実測図(4)



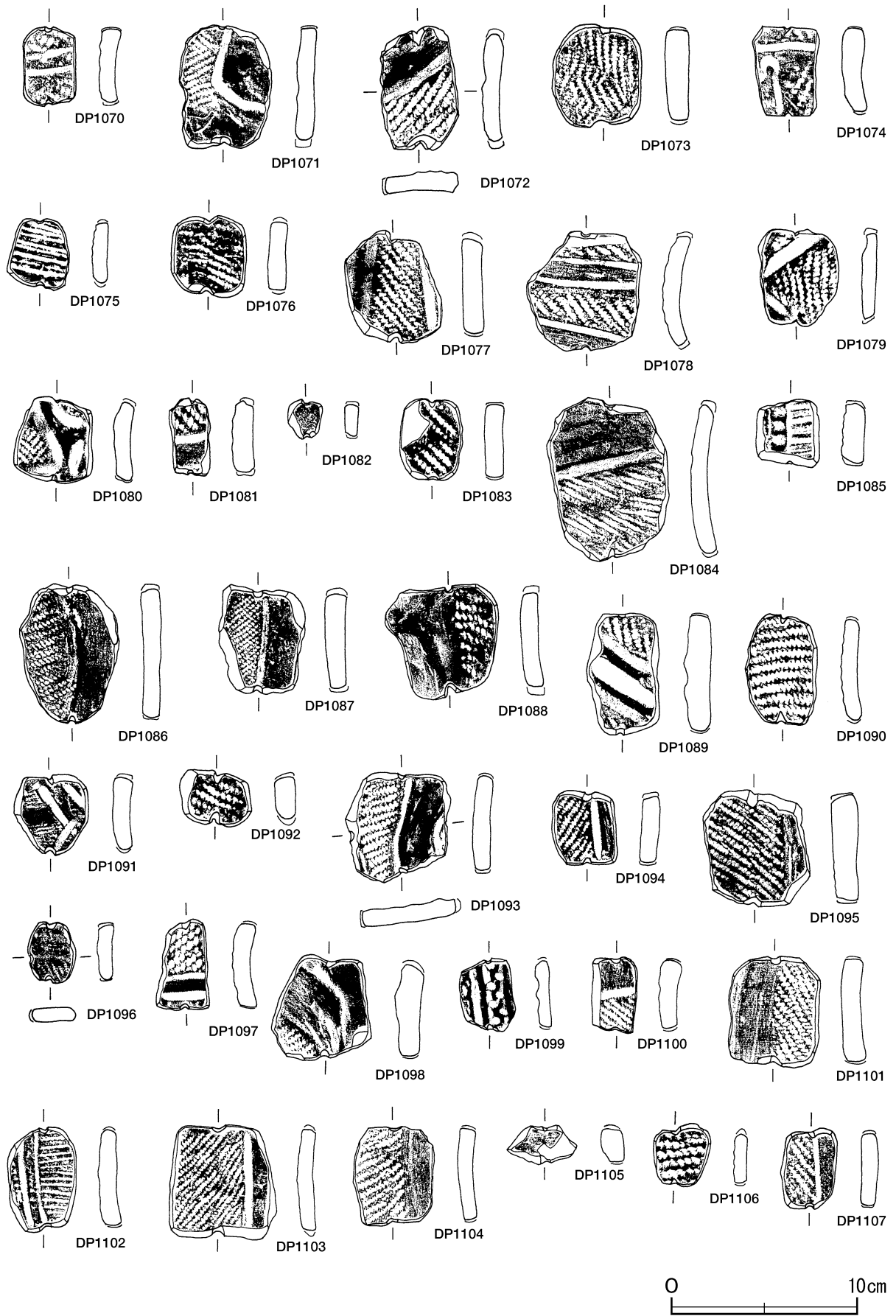
第414图 遺構外出土遺物実測図(5)



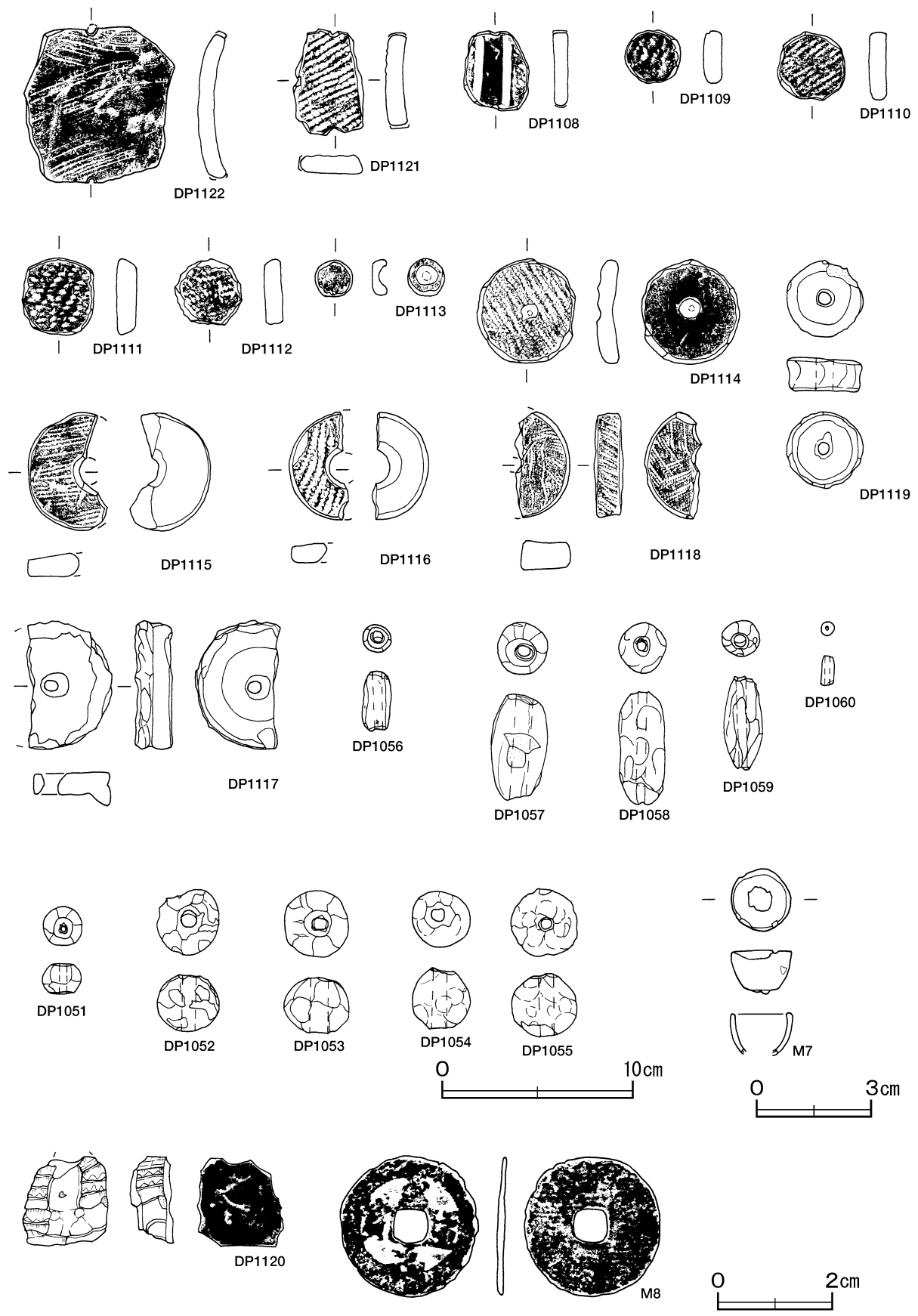
第415図 遺構外出土遺物実測図(6)



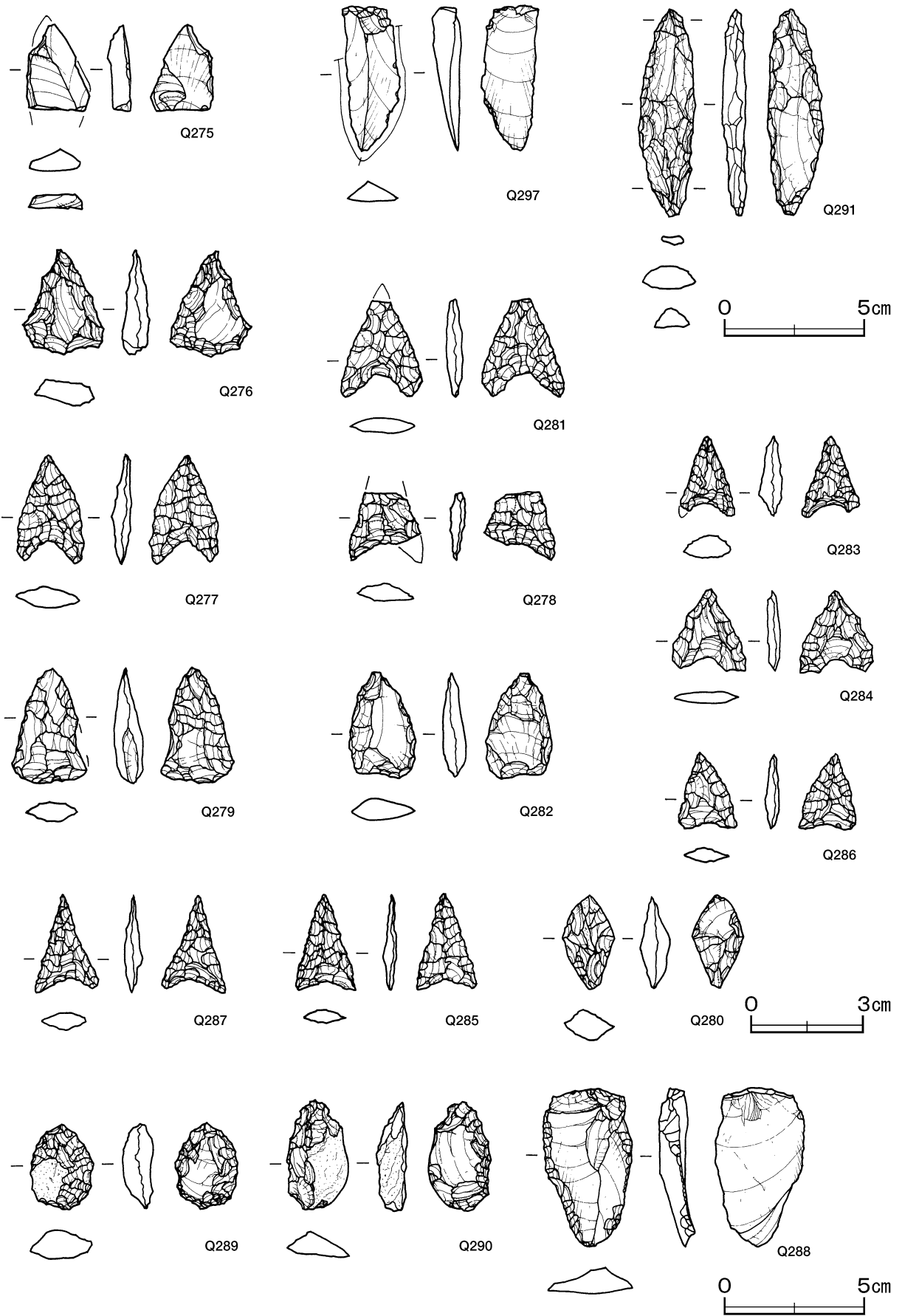
第416図 遺構外出土遺物実測図(7)



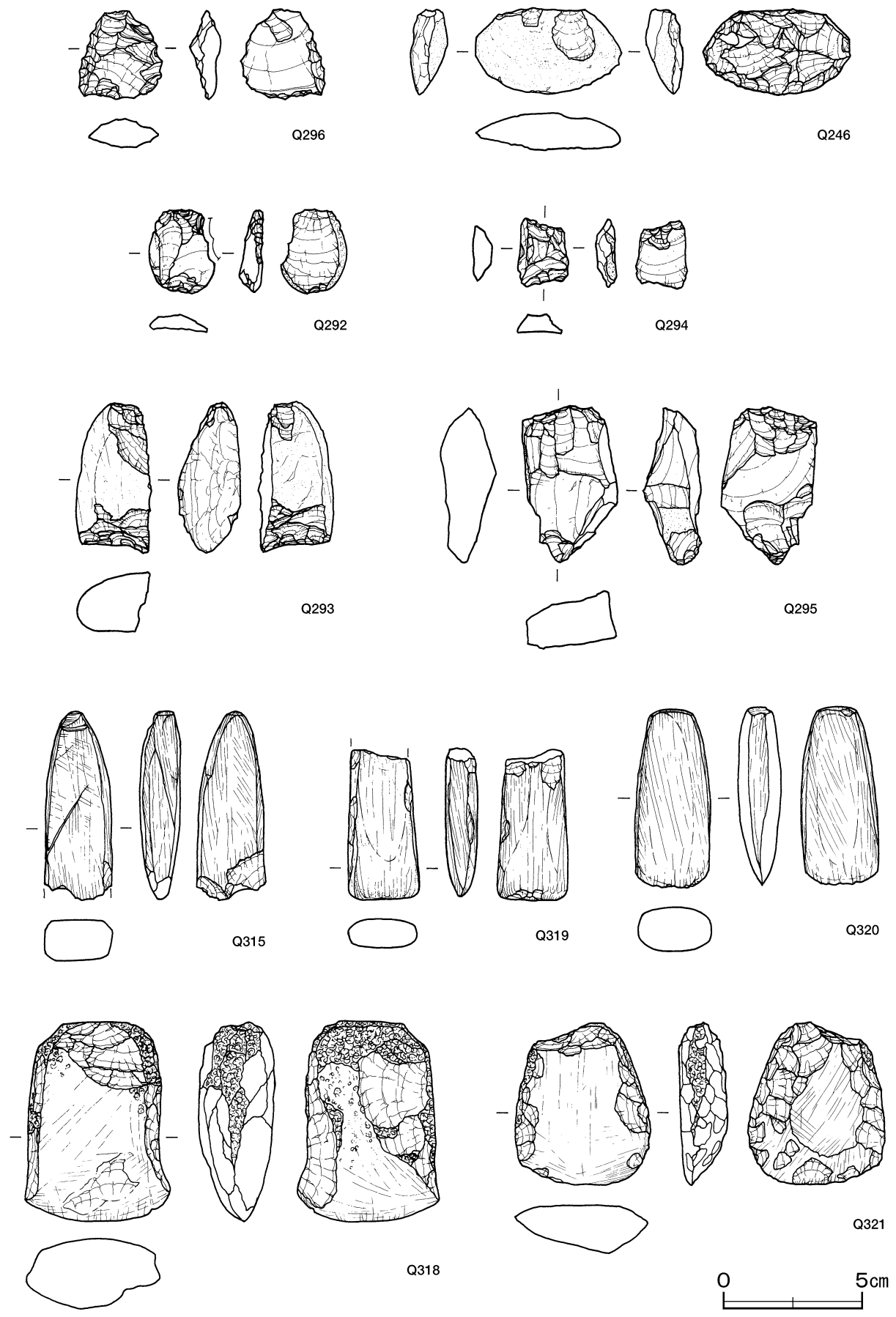
第417图 遺構外出土遺物実測図(8)



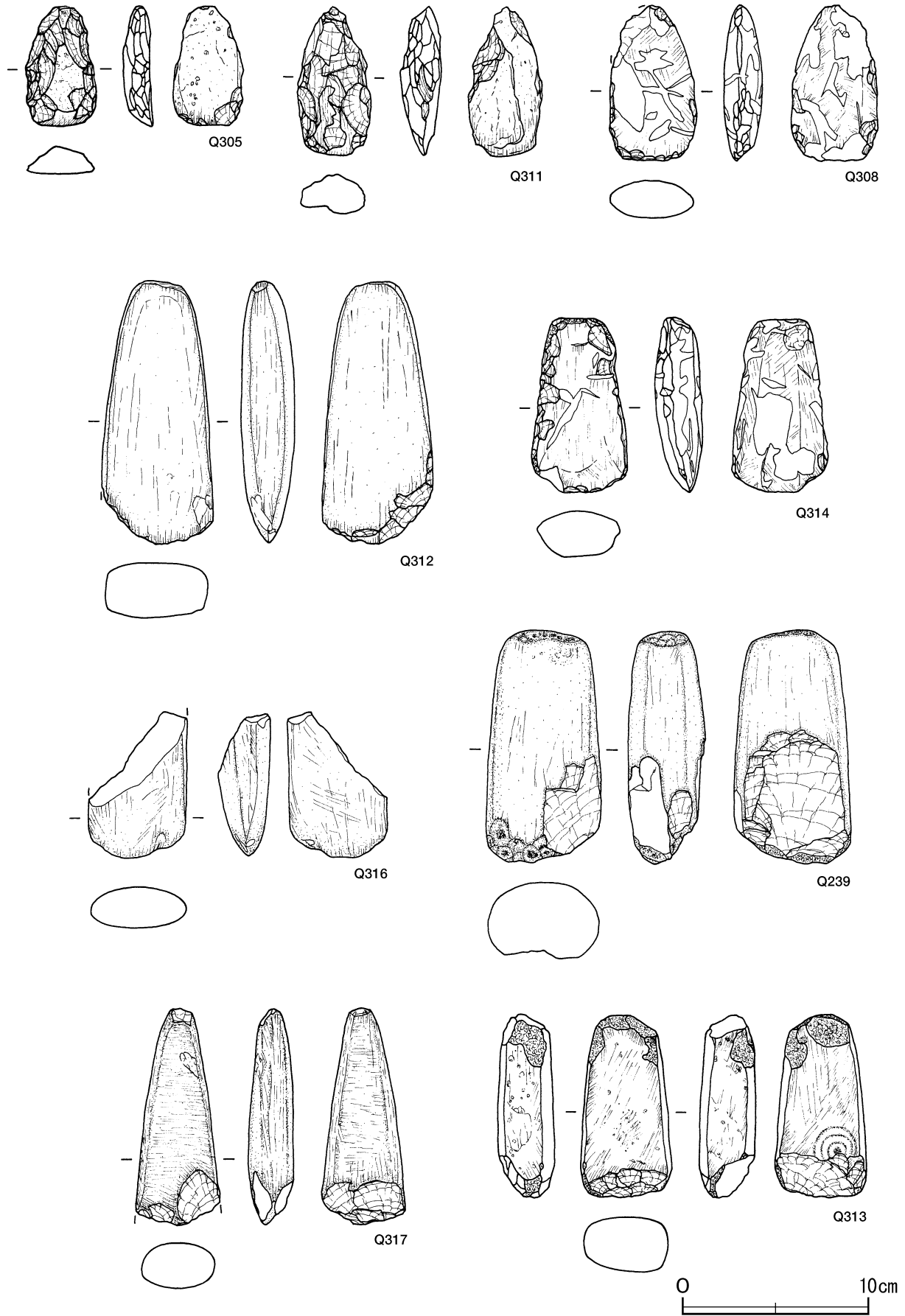
第418圖 遺構外出土遺物実測図(9)



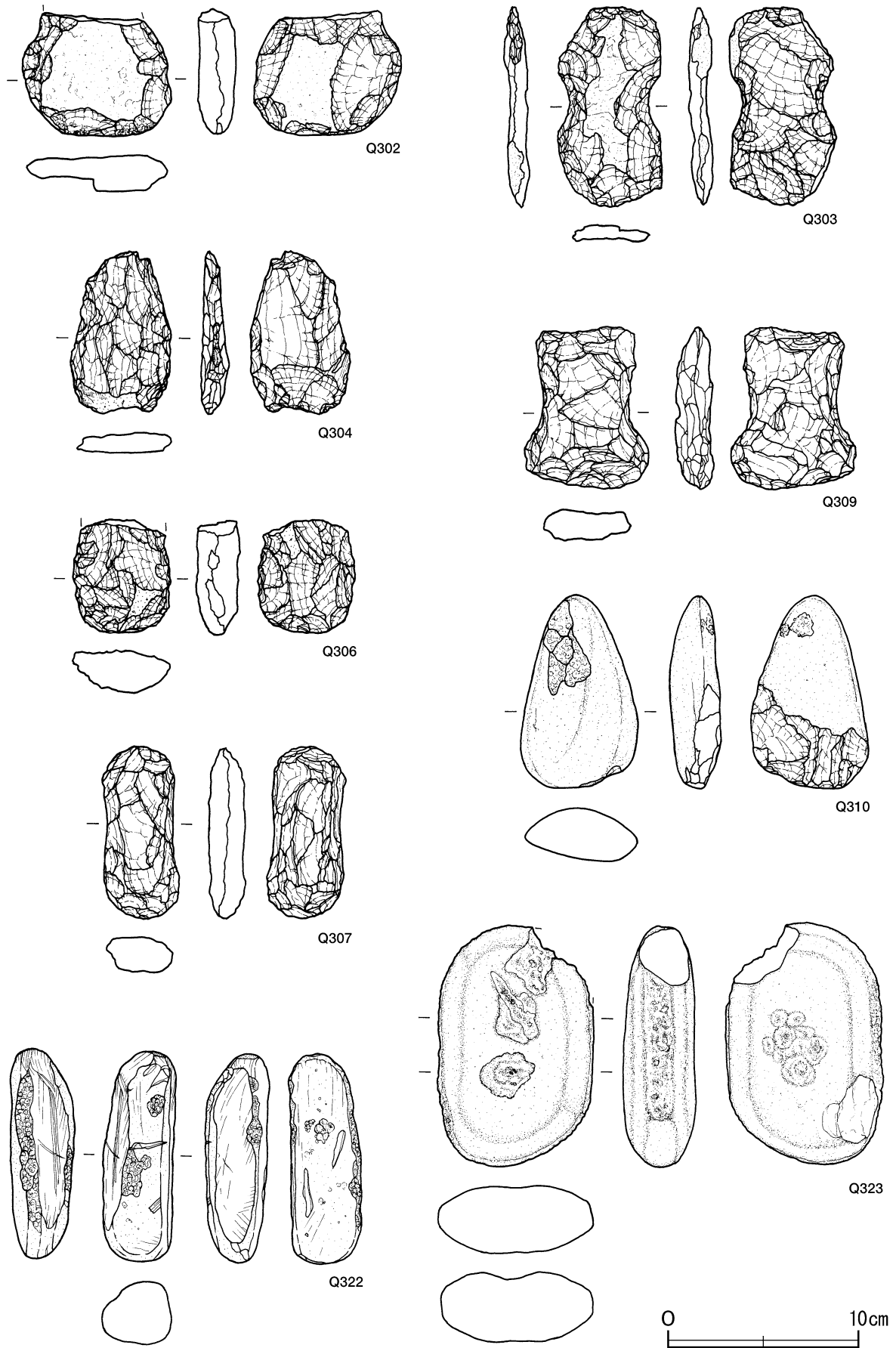
第419圖 遺構外出土遺物実測図(10)



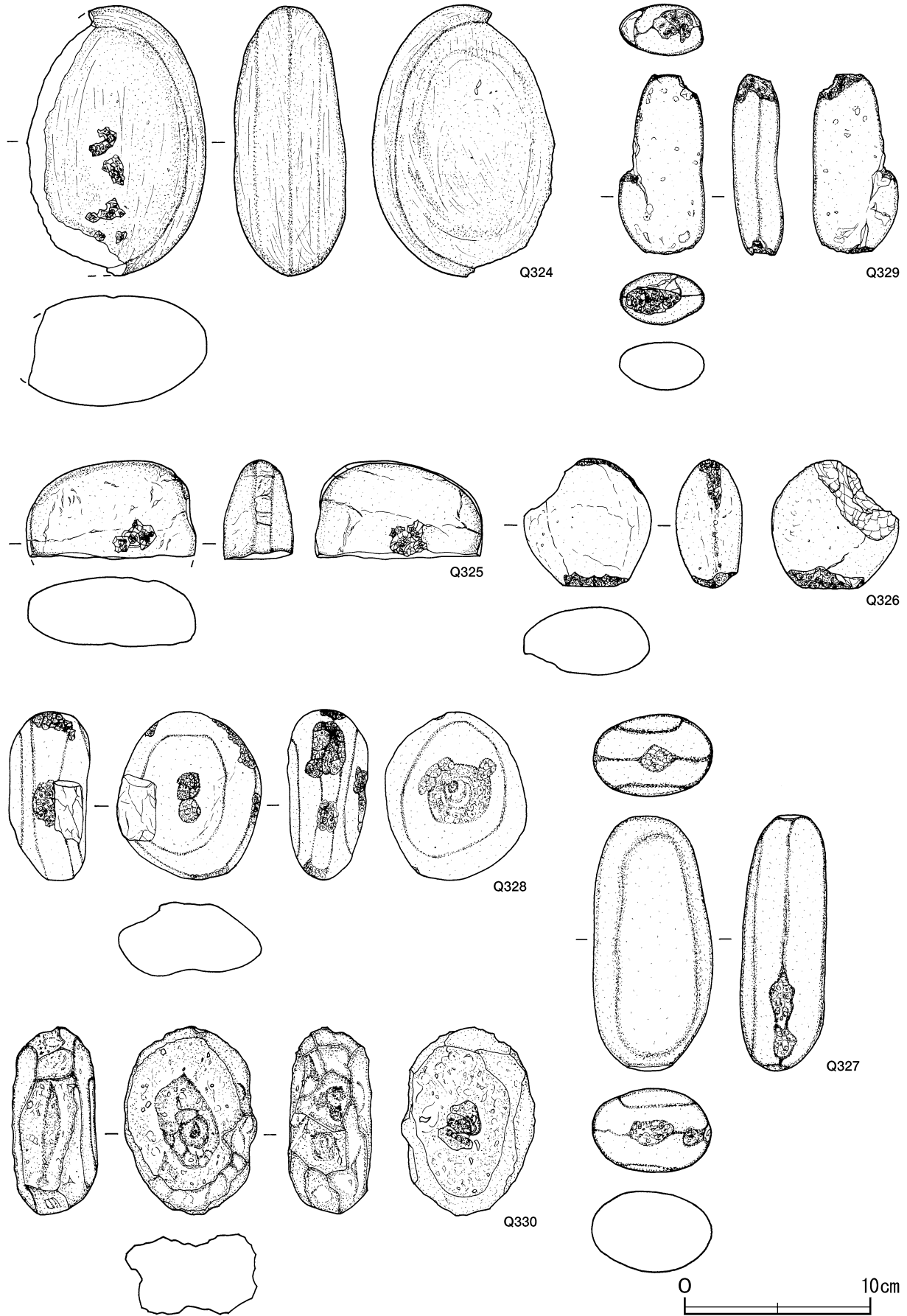
第420図 遺構外出土遺物実測図(11)



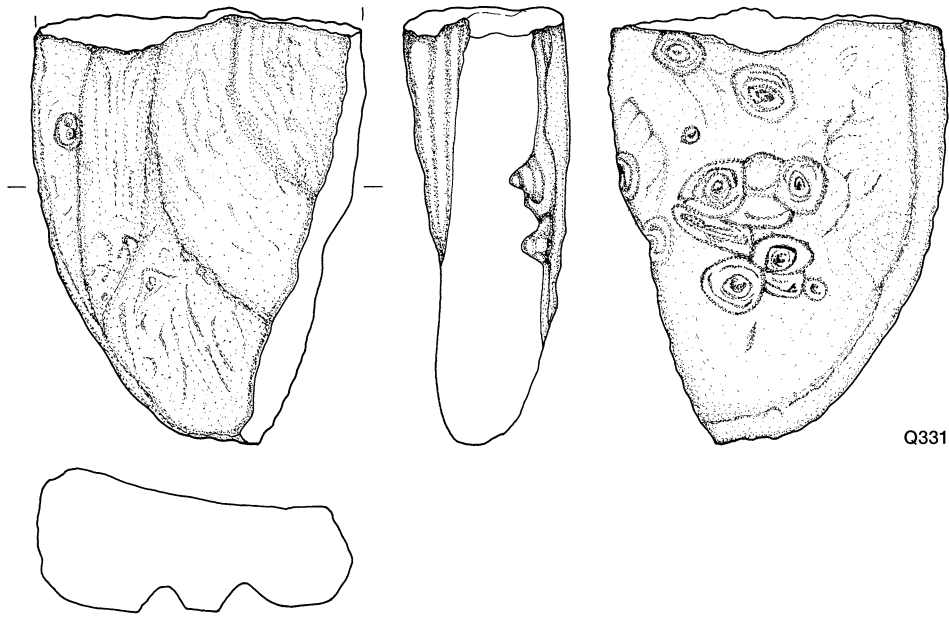
第421图 遺構外出土遺物実測図(12)



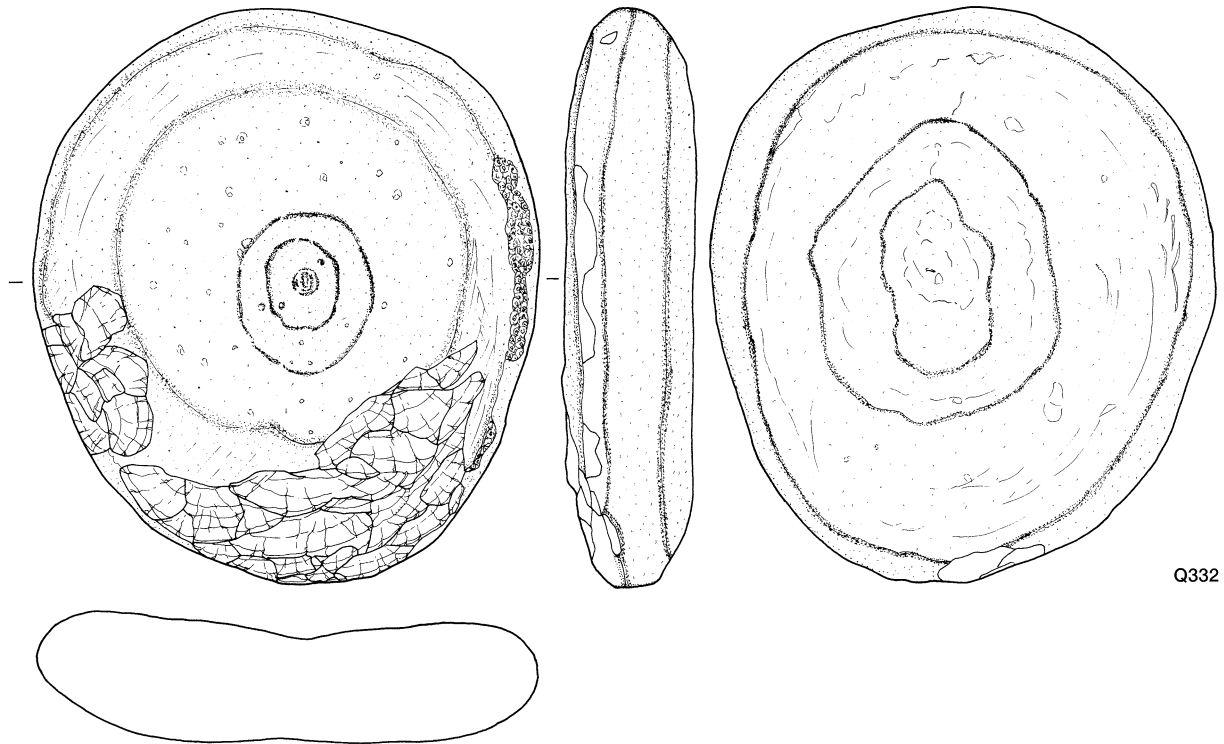
第422図 遺構外出土遺物実測図(13)



第423図 遺構外出土遺物実測図(14)



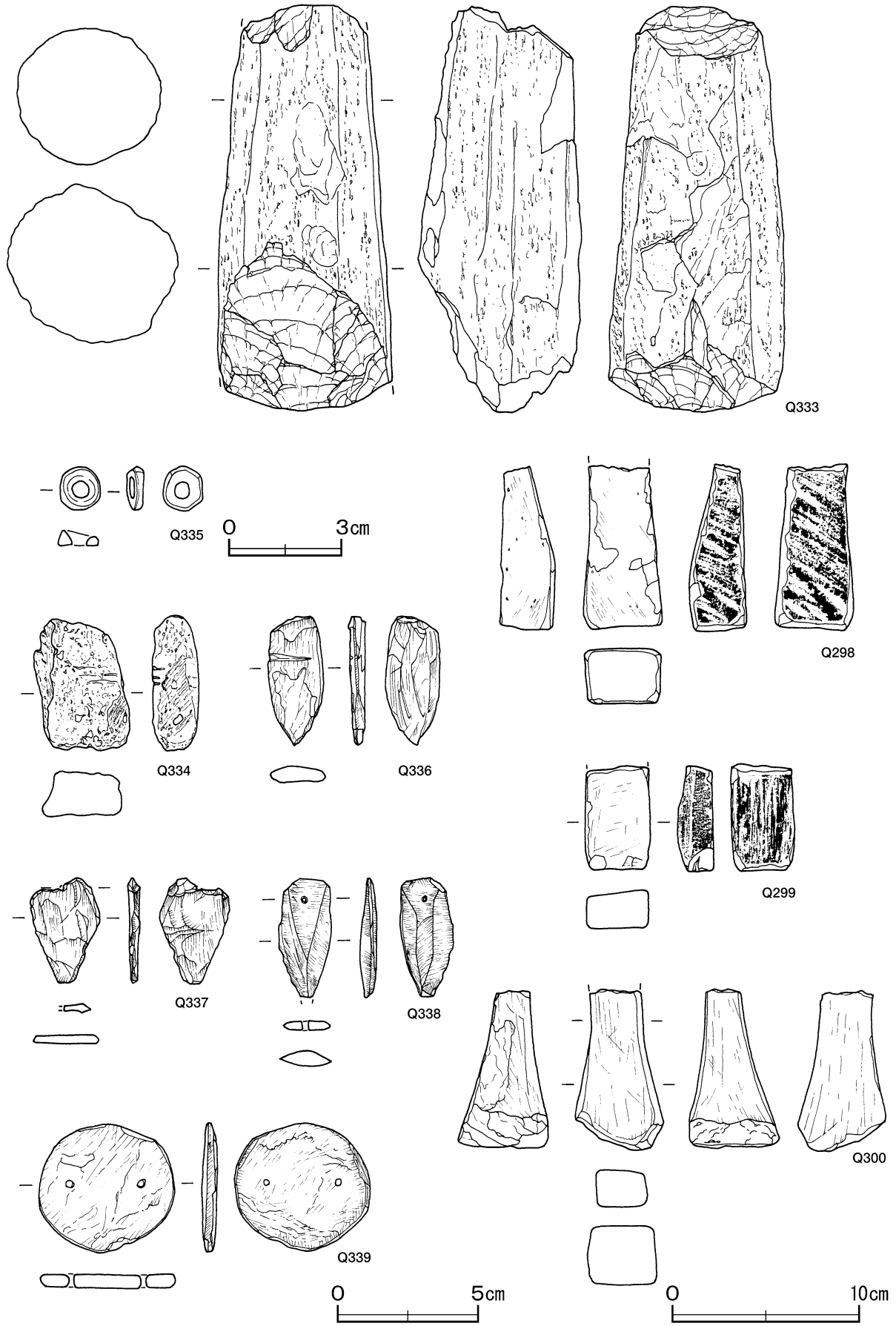
Q331



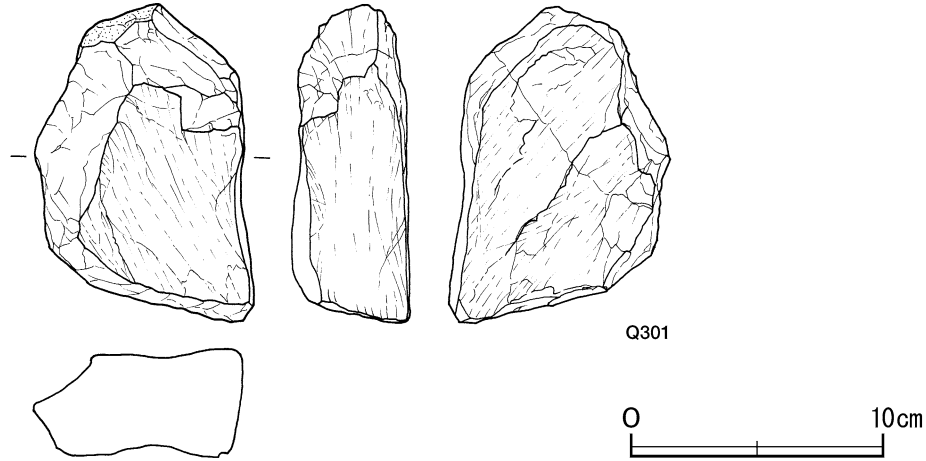
Q332



第424図 遺構外出土遺物実測図(15)



第425図 遺構外出土遺物実測図(16)



第426図 遺構外出土遺物実測図(17)

遺構外出土遺物観察表 (第410~426図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
574	弥生土器	甕	-	(2.9)	[6.2]	石英・長石	にぶい赤褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部布目痕	表土	
597	青磁	碗	[13.8]	(3.9)	-	緻密	胎土/灰白 釉/オリ-ブ灰	普通	外・内面青磁釉 蓮弁文	表土	
442	土師器	坏	-	(0.9)	[4.0]	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
488	土師器	皿	[11.0]	2.2	7.2	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
608	土師器	坏	-	(2.0)	[6.0]	石英・長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
609	須恵器	坏	13.2	4.6	6.0	石英・長石・雲母	灰黄	普通	ロクロ目明瞭 体部外面下端ヘラ削り 底部ヘラ切り	表土	
610	須恵器	坏	12.4	4.5	6.6	長石・雲母・白色針状物	灰黄	普通	ロクロ目明瞭 体部外面下端ヘラ削り 底部ヘラ切り	表土	
611	土師器	高台付坏	-	(2.9)	9.3	石英・長石・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き 黒色処理 底部回転糸切り離し	表土	
612	土師器	高台付坏	-	(3.2)	6.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 黒色処理	表土	
613	土師器	高台付坏	-	(2.2)	6.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 黒色処理	表土	
614	土師器	小皿	[7.2]	1.6	5.0	石英・長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
615	土師器	小皿	[9.3]	1.6	[5.0]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
616	土師器	小皿	[7.8]	1.6	[5.0]	雲母・細礫	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	表土	
617	縄文土器	蓋	[13.6]	(2.2)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	体部湾曲 外面の周縁部に隆帯を沿わせ、一部が肥大して把手となり、2か所の円孔を有する	表土	
618	須恵器	蓋	[13.2]	(1.9)	-	長石・雲母	褐灰	普通	ロクロ目明瞭 天井部回転ヘラ削り	表土	
620	縄文土器	深鉢	-	(17.3)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	半截竹管による斜格子目状のモチーフを描く 下方に波状貝殻文 口唇部刻み	表土	
621	縄文土器	深鉢	-	(12.2)	6.0	石英・長石・雲母	黒褐	普通	2本単位の沈線を伴う磨り消し帯を垂下 地文は縦位回転の3段R L R複節縄文を施文 底部丁寧なナデ	表土	
622	弥生土器	甕	-	(13.0)	7.0	石英・長石	橙	普通	縦位回転の2段L R単節縄文を施文 底部ヘラ削り	表土	
623	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	突起部 隆帯による「8」の字状のモチーフを貼付	表土	
624	縄文土器	深鉢	-	(10.5)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	突起部 隆帯による「S」字状のモチーフを貼付	表土	
625	縄文土器	深鉢	-	(8.2)	-	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	突起部 隆帯による「8」字状のモチーフを貼付 2段L R単節縄文を施文	表土	
626	縄文土器	有孔罎付土器	[27.7]	(9.8)	-	石英・長石・雲母	明黄褐	普通	突帯状の孔を有する罎を巡らす 孔径0.5~0.7cm	表土	
628	弥生土器	甕	-	(2.4)	[7.4]	長石・雲母	にぶい橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部布目痕	表土	
629	弥生土器	甕	-	(3.0)	[5.8]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	表土	
630	弥生土器	甕	-	(2.4)	[9.4]	長石・雲母	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部布目痕	表土	
631	弥生土器	甕	-	(3.0)	[11.0]	石英・長石・雲母	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	表土	
632	弥生土器	甕	-	(2.5)	7.6	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部木葉痕	表土	
633	弥生土器	甕	-	(3.3)	[7.4]	石英・長石・雲母	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部布目痕	表土	
634	弥生土器	甕	-	(5.2)	[8.4]	石英・長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文 底部布目痕	表土	
635	土師器	甕	[22.8]	(10.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ	表土	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
636	土師器	小形甕	11.5	(5.3)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ 体部ヘラナデ	表土	
637	縄文土器	ミチユ ア土器	-	(1.3)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	指頭ナデ 丸底	表土	
638	縄文土器	ミチユ ア土器	-	(2.0)	3.4	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	指頭ナデ	表土	
639	縄文土器	ミチユ ア土器	-	(4.3)	4.4	石英・長石・雲母	橙	普通	縦位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP930	縄文土器	深鉢	-	(4.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	縦位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP959	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	石英・長石・雲母	黄橙	普通	沈線を伴う磨り消し帯を垂下 地文は2段R L単節縄文を施文	表土	
TP960	縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	隆帯と沈線によって渦巻状のモチーフと楕円形区画を形成 区画内に縦位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP1000	縄文土器	深鉢	-	(3.0)	-	石英・長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	表土	
TP1001	縄文土器	深鉢	-	(7.5)	-	石英・長石	橙	普通	横位回転の付加条一種付加1条を施文	表土	
TP1018	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	-	石英・長石・繊維	にぶい橙	普通	胴部外面・底部外面に横位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP1019	縄文土器	深鉢	-	(16.6)	-	石英・長石	灰褐	普通	連続して押捺された隆帯を垂下 地文は棒状工具による平行沈線で条線文を縦位に描く	表土	
TP1020	縄文土器	深鉢	-	(19.5)	-	石英・長石・繊維	明赤褐	普通	直線的な区画内に沈線を充填 竹管状の工具による円形刺突文 口唇部刻み 内面に貝殻条痕文を施文	表土	
TP1021	縄文土器	深鉢	-	(9.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部は無文で微隆帯を巡らす 微隆帯間は磨り消す 斜位・横位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP1022	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	-	石英・長石・雲母・繊維	明赤褐	普通	外面斜位方向、内面横位方向の貝殻条痕文を施文	表土	
TP1023	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	長石	橙	普通	横位回転の2段R L単節縄文を施文 口唇部刻み	表土	
TP1024	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	-	長石・繊維	にぶい橙	普通	上下両端に刻みを有する折り返し口縁 外面に捺糸側面圧痕による蕨手状文を施文	表土	
TP1025	縄文土器	深鉢	-	(9.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口唇部直下に半截竹管による結節沈線文を巡らし、以下に肋骨文を描く 口唇部刻み 地文は捺糸文	表土	
TP1027	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	縦位・斜位の沈線間を磨り消す 地文は横位の条線文 口唇部刻み	表土	
TP1028	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	-	石英・長石	灰褐	普通	連続して押捺された隆帯を垂下 地文は棒状工具による平行沈線で条線文を縦位に描く 口唇部内面に突帯を巡らす	表土	
TP1029	縄文土器	深鉢	-	(15.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部は無文で微隆帯を巡らす 微隆帯間は磨り消す 斜位・縦位回転の2段L R単節縄文を施文	表土	
TP1030	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	斜格子目文を施す	表土	
TP1031	縄文土器	有孔罎 付土器	-	(4.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	突帯状の孔を有する罎を巡らす 以下に沈線で渦巻状のモチーフを描く 地文は縦位回転の2段L R単節縄文 孔径0.6cm	表土	
TP1032	縄文土器	深鉢	-	(7.9)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	曲線的なモチーフの沈線内に捺糸文を充填	表土	
TP1033	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	石英・長石・繊維	にぶい橙	普通	口唇部直下に半截竹管による結節沈線文を巡らす 竹管状工具による円形刺突文を垂下 地文は付加条線文	表土	
TP1034	縄文土器	深鉢	-	(20.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	隆帯と沈線によって渦巻状のモチーフと方形区画を形成 区画内に斜位・縦位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP1035	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	半截竹管による結節沈線文を巡らす 地文は波状貝殻文	表土	
TP1036	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	半截竹管による結節沈線文と平行沈線文を巡らす 地文は波状貝殻文	表土	
TP1037	縄文土器	深鉢	-	(11.8)	-	石英・長石・雲母・繊維	赤褐	普通	沈線によって楕円形のモチーフを描く 区画内に縦位回転の1段L無節縄文を施文	表土	
TP1038	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・雲母	橙	普通	縦位・斜位の沈線間を磨り消す 地文は横位の条線文 口唇部刻み	表土	
TP1039	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	-	石英・長石・雲母・繊維	にぶい褐	普通	刻みを有する隆帯を巡らす 地文は羽状構成の2段R Lと2段L R単節縄文を横位回転施文	表土	
TP1040	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・繊維	明赤褐	普通	直線的な区画内に沈線を充填 内面に貝殻条痕文を施文	表土	
TP1041	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	半截竹管による平行沈線文と鋸歯状文を巡らす	表土	
TP1042	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・雲母	橙	普通	口唇部直下に半截竹管による結節沈線文を巡らす 以下に半截竹管による木の葉状のモチーフを描く	表土	
TP1043	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	半截竹管による平行沈線を加えた爪形文で曲線的なモチーフを描く	表土	
TP1044	弥生土器	甕	-	(3.0)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁の下端に隆帯を巡らし、刻みを施す 口唇部に横位回転の2段L R単節縄文を施文 頸部無文	表土	
TP1045	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	半截竹管による平行沈線文を巡らす 地文は捺糸文	表土	
TP1046	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	石英・長石・雲母・繊維	灰褐	普通	口唇部直下に半截竹管による結節沈線文を巡らす 以下に横位回転の2段R L単節縄文を施文	表土	
TP1047	縄文土器	深鉢	-	(3.3)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	半截竹管による結節沈線文と鋸歯状文を巡らす 地文は捺糸文	表土	
TP1048	縄文土器	深鉢	-	(3.6)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	鋭い先端の棒状工具による沈線で斜格子目文を描く 三角形の挟り込みを加える	表土	
TP1049	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石	褐	普通	半截竹管による平行沈線文と変形爪形文を巡らす	表土	
TP1050	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石	橙	普通	半截竹管による平行沈線文を縦位に施文 以下に平行沈線を加えた爪形文を巡らす	表土	
TP1051	縄文土器	深鉢	-	(2.9)	-	石英・長石	橙	普通	口唇部直下に円形刺突文を巡らす 以下に平行沈線を加えた爪形文を巡らす	表土	
TP1052	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	折り返し口縁 横位回転の2段L R単節縄文と結節回転文を施文 口唇部縄文原体圧痕による刻み	表土	
TP1053	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	半截竹管による結節沈線文を垂下させ、結節沈線と平行沈線による肋骨文を施す 地文は捺糸文	表土	
TP1054	縄文土器	深鉢	-	(3.8)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	半截竹管による変形爪形文を巡らす 地文は捺糸文	表土	
TP1055	縄文土器	深鉢	-	(4.7)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	半截竹管による変形爪形文を巡らす	表土	
TP1056	弥生土器	甕	-	(3.2)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	折り返し口縁部と口唇部に横位回転の2段L R単節縄文を施文 頸部無文	表土	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1057	弥生土器	甕	-	(6.2)	-	長石・雲母	灰黄褐	普通	無文帯を挟んで横位回転の2段LR単節縄文を施文	表土	
TP1058	弥生土器	甕	-	(3.2)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁部と口唇部に横位回転の付加条一種付加1条を施文 頸部に4本以上の櫛歯で平行沈線を縦位に施文	表土	
TP1059	弥生土器	甕	-	(5.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁部下端に刻み 口唇部に縄文施文 頸部無文	表土	
TP1060	弥生土器	甕	-	(9.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	折り返し口縁部と口唇部、胴部に横位回転の1段L無節縄文を施文 頸部無文で、6本櫛歯の平行沈線を3段に巡らす	表土	
TP1061	弥生土器	甕	-	(5.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	折り返し口縁部と口唇部に横位回転の1段L無節縄文を施文 頸部無文地 5本櫛歯の平行沈線を巡らす	表土	
TP1062	弥生土器	甕	-	(11.3)	-	長石・雲母	橙	普通	頸部無文地 3本櫛歯の平行沈線を5段以上巡らす	表土	
TP1063	弥生土器	甕	-	(11.5)	-	長石	橙	普通	頸部無文地 3本櫛歯の平行沈線を6段以上巡らす	表土	
TP1064	縄文土器	深鉢	-	(19.3)	-	長石・雲母	黒褐	普通	2本単位の沈線を伴う磨り消し帯を垂下 地文は縦位回転の1段L無節縄文を施文	表土	
TP1065	弥生土器	甕	-	(4.6)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	頸部無文 以下に横位回転の2段RL単節縄文を施文	表土	
TP1066	弥生土器	甕	-	(4.1)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	頸部無文地 5本櫛歯の平行沈線を縦位に3列以上施す	表土	
TP1067	弥生土器	甕	-	(5.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部に単節縄文を施文 口縁部無文地 3本櫛歯の連続弧線文を4段以上巡らす	表土	
TP1068	弥生土器	甕	-	(4.2)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	口唇部と胴部に横位回転の付加条一種付加1条を施文 口縁部無文地 3本櫛歯の平行沈線を縦位に、連続弧線文を3段に施す	表土	
TP1069	弥生土器	甕	-	(3.7)	-	長石・雲母	橙	普通	頸部無文地 3本櫛歯の連続弧線文を2段以上施す 以下に縄文の結節部	表土	
TP1070	弥生土器	甕	-	(3.1)	-	長石・雲母	橙	普通	頸部無文地 3本櫛歯による集合沈線を無文帯を挟んで巡らす	表土	
TP1071	弥生土器	甕	-	(3.1)	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部と口唇部に網目状糸文を施文	表土	
TP1072	弥生土器	甕	-	(3.5)	-	長石・雲母	橙	普通	口唇部に単節縄文を施文 口縁部無文地 3本櫛歯の連続弧線文を3段以上巡らす	表土	
TP1073	弥生土器	甕	-	(4.9)	-	長石	浅黄橙	普通	口唇部に単節縄文を施文 口縁部無文 胴部に横位回転の2段RL単節縄文を巡らす	表土	
TP1074	縄文土器	深鉢	-	(10.1)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部直下を帯状に巡って垂下する曲線的なモチーフの沈線内に2段LR単節縄文を充填	表土	
TP1075	須恵器	壺	-	(4.1)	-	長石	黄灰	普通	4本櫛歯による波状文を巡らす	表土	
TP1076	須恵器	甕	-	(9.9)	-	石英・長石・雲母	灰白	普通	5・6本櫛歯による平行沈線文と波状文を巡らす	表土	
TP1077	須恵器	甕	-	(9.2)	-	石英・長石・雲母	灰白	普通	外面同心円状の叩き目 内面ナデ	表土	
TP1078	陶器	甕	-	(3.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部肥厚 N字状に折り返す 内外面ナデ	表土	
TP1079	陶器	甕	-	(7.6)	-	石英・長石・雲母	褐灰	普通	胴部外面格子目の叩き 内面ナデ	表土	
TP1080	陶器	甕	-	(8.3)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部肥厚 N字状に折り返す 内外面ナデ	表土	

番号	種別	長さ/径	幅/厚さ	厚さ/孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP1007	土器片錘	6.0	2.9	0.8	22.8	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.3cm	表土	
DP1051	球状土錘	2.1	1.5	0.4	6.0	粘土/石英	表面ナデ調整 1方向からの穿孔 穿孔方向の両側は平坦	表土	
DP1052	球状土錘	3.4	3.0	0.7~0.8	20.0	粘土/石英	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	表土	
DP1053	球状土錘	3.5	2.9	0.9	20.0	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	表土	
DP1054	球状土錘	3.1	3.0	0.7	28.6	粘土/石英	表面ナデ調整 1方向からの穿孔 穿孔方向の両側は平坦	表土	
DP1055	球状土錘	3.4	3.3	0.7~0.8	38.5	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 1方向からの穿孔	表土	
DP1056	管状土錘	1.5	3.1	0.4~0.7	5.7	粘土/長石	表面ナデ調整	表土	
DP1057	管状土錘	2.8	5.5	0.9	35.1	粘土/石英・長石	表面ナデ調整 穿孔方向の両側は平坦	表土	
DP1058	管状土錘	2.5	5.8	0.4	40.0	粘土/石英	表面ナデ調整	表土	
DP1059	管状土錘	2.0	4.8	0.4~0.5	28.5	粘土/石英・長石	表面ナデ調整	表土	
DP1060	管状土錘	0.7	(1.5)	0.3	(0.7)	粘土/石英	表面ナデ調整	表土	
DP1061	土器片錘	4.2	3.8	0.9	19.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.5cm	表土	
DP1062	土器片錘	3.5	3.1	1.2	15.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.0cm	表土	
DP1063	土器片錘	3.4	3.1	1.2	15.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.9cm	表土	
DP1064	土器片錘	3.0	2.8	1.1	13.8	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.5cm	表土	
DP1065	土器片錘	7.0	4.4	1.4	34.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間6.8cm	表土	
DP1066	土器片錘	6.1	5.8	1.7	77.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.6cm	表土	
DP1067	土器片錘	6.5	4.9	1.6	65.8	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.8cm	表土	
DP1068	土器片錘	4.8	3.8	1.1	27.0	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.4cm	表土	
DP1069	土器片錘	2.7	2.2	1.0	6.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.3cm	表土	
DP1070	土器片錘	4.2	2.9	1.2	16.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.9cm	表土	

番号	種別	長さ/径	幅/厚さ	厚さ/孔径	重量	材質 / 胎土	特徴	出土位置	備考
DP1071	土器片錘	6.6	5.0	1.1	43.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間6.0cm	表土	
DP1072	土器片錘	6.6	4.2	1.2	37.4	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.8cm	表土	
DP1073	土器片錘	5.5	4.9	1.4	45.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.9cm	表土	
DP1074	土器片錘	4.8	3.6	1.4	25.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.6cm	表土	
DP1075	土器片錘	3.9	3.3	1.0	14.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.4cm	表土	
DP1076	土器片錘	4.4	4.1	1.1	20.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.7cm	表土	
DP1077	土器片錘	6.0	5.2	1.2	35.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.2cm	表土	
DP1078	土器片錘	6.3	6.2	1.6	47.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.9cm	表土	
DP1079	土器片錘	5.1	4.4	0.8	24.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.7cm	表土	
DP1080	土器片錘	4.6	4.3	1.1	24.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.3cm	表土	
DP1081	土器片錘	4.1	2.3	1.3	14.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.8cm	表土	
DP1082	土器片錘	2.1	1.8	1.8	2.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間1.8cm	表土	
DP1083	土器片錘	4.3	3.4	1.1	19.2	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.0cm	表土	
DP1084	土器片錘	8.7	6.5	1.3	71.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間8.0cm	表土	
DP1085	土器片錘	3.6	3.4	1.3	21.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.3cm	表土	
DP1086	土器片錘	7.3	5.4	1.1	46.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間6.9cm	表土	
DP1087	土器片錘	5.7	4.6	1.2	40.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.1cm	表土	
DP1088	土器片錘	6.1	6.0	1.4	48.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.0cm	表土	
DP1089	土器片錘	6.5	4.0	1.6	41.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間6.3cm	表土	
DP1090	土器片錘	5.9	3.9	1.3	24.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.4cm	表土	
DP1091	土器片錘	4.4	4.1	1.2	22.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.8cm	表土	
DP1092	土器片錘	3.0	4.0	1.2	16.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.4cm	表土	
DP1093	土器片錘	5.9	5.6	1.1	38.4	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.1cm	表土	
DP1094	土器片錘	4.0	3.5	1.1	19.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.7cm	表土	
DP1095	土器片錘	6.2	5.7	1.5	64.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.6cm	表土	
DP1096	土器片錘	3.3	2.5	0.9	8.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.9cm	表土	
DP1097	土器片錘	4.9	2.9	1.4	17.7	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.5cm	表土	
DP1098	土器片錘	5.6	5.4	1.6	43.4	縄文土器	周縁打ち欠き・研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.9cm	表土	
DP1099	土器片錘	3.9	3.0	0.9	13.7	縄文土器	周縁打ち欠き・研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.6cm	表土	
DP1100	土器片錘	4.2	2.5	1.3	12.9	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.8cm	表土	
DP1101	土器片錘	6.6	5.0	1.4	52.5	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.5cm	表土	
DP1102	土器片錘	5.6	3.7	1.3	27.3	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.2cm	表土	
DP1103	土器片錘	6.1	5.8	1.1	40.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間5.4cm	表土	
DP1104	土器片錘	5.4	4.4	1.1	27.4	縄文土器	周縁打ち欠き・研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.9cm	表土	
DP1105	土器片錘	2.1	3.8	1.4	9.4	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間1.7cm	表土	
DP1106	土器片錘	3.3	3.1	0.8	10.8	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間2.7cm	表土	
DP1107	土器片錘	4.3	3.0	1.0	15.8	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間3.9cm	表土	
DP1108	土器片錘	4.2	3.5	0.9	16.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.0cm	表土	
DP1109	土器片円盤	2.8	2.9	1.0	8.8	縄文土器	周縁研磨調整	表土	
DP1110	土器片円盤	3.6	3.6	1.0	14.2	縄文土器	周縁研磨調整	表土	
DP1111	土器片円盤	3.9	3.7	1.1	21.2	縄文土器	周縁研磨調整	表土	
DP1112	土器片円盤	3.4	3.5	1.0	13.9	縄文土器	周縁打ち欠き調整	表土	
DP1113	土器片円盤	1.9	2.0	0.8	2.9	縄文土器	周縁研磨調整 片面中央部穿孔（未貫通）	表土	
DP1114	土器片円盤	5.4	5.1	1.2	34.4	縄文土器	周縁研磨調整 両中央部穿孔（未貫通）	表土	
DP1115	土器片円盤	6.2	(4.2)	1.2	(29.5)	縄文土器	周縁研磨調整 中央部に2方向からの穿孔 孔径(1.4)cm	表土	
DP1116	土器片円盤	5.6	(3.0)	1.0	(15.6)	縄文土器	周縁研磨調整 中央部に2方向からの穿孔 孔径(1.7)cm	表土	
DP1117	紡錘車	6.7	(4.4)	2.0	(47.7)	土師器	高台付坏の底部片を転用 中央部に2方向からの穿孔 孔径0.7cm	表土	

番号	種別	長さ/径	幅/厚さ	厚さ/孔径	重量	材質/胎土	特徴	出土位置	備考
DP1118	紡錘車	(5.5)	(2.9)	1.5	(27.8)	粘土/長石	表面に付加条一種付加1条を施文 孔径(0.7)cm	表土	
DP1119	紡錘車	3.9	4.0	1.8	30.5	粘土/長石	指頭ナデ 孔径0.9cm	表土	
DP1120	泥面子	(1.5)	1.4	0.7	(1.5)	粘土/緻密	型押し 人形 頭部欠損	表土	
DP1121	土器片錘	5.5	3.6	1.0	27.1	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間4.7cm 直交方向に1か所の切り込み	表土	
DP1122	土器片錘	8.0	7.8	0.9	88.2	縄文土器	主に周縁研磨調整 1方向の切り込み 切り込み間7.6cm	表土	

番号	種別	長さ/径	幅/厚さ	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	煙管	(1.6)	1.6	-	2.6	銅	火皿冠 雁首部欠損	表土	
M8	銭貨	2.4	0.6	0.1	2.5	銅	「至道元寶」 北宋 初鑄年995年 行書体	表土	PL60

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q239	磨製石斧	12.5	6.2	4.1	481.9	安山岩	研磨調整 敲石に転用 両端部痕痕状の敲打痕	表土	
Q246	搔器	3.0	5.2	1.3	21.7	チャート	背面に礫面を大きく残し、主要剥離面の下部側縁に背面側から連続した調整を施す	表土	
Q275	ナイフ形石器	(2.3)	1.7	0.7	(1.9)	黒曜石	2側縁加工 急角度のブランティングを施す 先端部・基部欠損	表土	
Q276	石鏃	2.8	2.2	0.8	3.8	チャート	両面調整 急角度の細かい周辺調整で尖頭部を作出する 未製品	表土	
Q277	石鏃	2.9	1.8	0.5	1.8	チャート	凹基無茎鏃 両面調整 狭長な剥離面が連続する	表土	
Q278	石鏃	(1.8)	1.9	0.4	(1.2)	チャート	凹基無茎鏃 両面調整 先端部・脚部一部欠損	表土	
Q279	石鏃	3.1	2.0	0.5	3.9	チャート	凸基無茎鏃 両面調整 側縁部一部欠損	表土	
Q280	石鏃	2.5	1.4	0.8	2.1	頁岩	凸基無茎鏃 両面調整	表土	
Q281	石鏃	2.6	2.2	0.5	1.8	チャート	凹基無茎鏃 両面調整 先端部欠損	表土	
Q282	石鏃	2.8	1.8	0.6	3.6	安山岩	両面調整 急角度の細かい周辺調整で尖頭部を作出する 未製品	表土	
Q283	石鏃	2.2	1.5	0.6	1.2	黒曜石	凹基無茎鏃 両面調整 細かい狭長な剥離面が連続する 脚部一部欠損	表土	
Q284	石鏃	2.2	1.9	0.4	1.2	チャート	凹基無茎鏃 両面調整	表土	
Q285	石鏃	2.6	1.6	0.4	0.8	チャート	凹基無茎鏃 両面調整 細かい狭長な剥離面が連続する	表土	
Q286	石鏃	2.6	1.6	0.4	0.8	蛋白石	凹基無茎鏃 両面調整 細かい狭長な剥離面が連続する 挟り込みが弱い	表土	
Q287	石鏃	2.6	1.7	0.5	1.0	チャート	凹基無茎鏃 両面調整 細かい狭長な剥離面が連続する	表土	
Q288	削器	5.6	3.2	1.3	16.0	頁岩	素材は縦長剥片 打面は複剥離面打面 両側縁に主要剥離面側から急角度の加工を施す	表土	
Q289	搔器	3.0	2.3	1.17.3	3.6	チャート	背面は礫面と主要剥離面側からの狭長な剥離面からなる 主要剥離面は細かい周辺調整が巡る	表土	
Q290	搔器	3.9	2.2	1.1	7.9	チャート	1側縁に両面からの急角度の加工を施す 背面に礫面、腹面に主要剥離面を大きく残す	表土	PL53
Q291	尖頭器	7.3	2.0	0.9	20.0	安山岩	素材は横長剥片 両面調整 背面中央部に稜を有する 腹面に主要剥離面を残す 横断面は三角形	表土	
Q292	楔形石器	3.0	2.4	0.9	5.6	チャート	両面に上下方向からの剥離面が交錯 両極打法 礫面を残す 縦断面は不整な菱形 1側縁にノッチ状の加工を施す	表土	PL54
Q293	楔形石器	5.4	2.7	2.3	39.0	チャート	両面に上下方向からの剥離面が交錯 両極打法 礫面を残す 縦断面は不整な菱形	表土	
Q294	楔形石器	2.4	1.8	0.7	3.3	チャート	両面に上下方向からの剥離面が交錯 両極打法 縦断面は不整な菱形	表土	
Q295	楔形石器	5.6	3.4	2.1	36.8	頁岩	両面に上下方向からの剥離面が交錯 両極打法 礫面を残す 縦断面は不整な菱形	表土	
Q296	削器	3.1	3.0	1.0	6.5	蛋白石	素材は縦長剥片 側縁に急角度の加工を施す	表土	
Q297	石刃	3.7	1.5	0.8	2.7	黒曜石	縦長剥片 打面は複剥離面打面 両側縁に微細剥離痕	表土	
Q298	砥石	(8.7)	4.2	3.0	(140.0)	凝灰岩	2面使用 3面削り痕 断面長方形 上部欠損	表土	
Q299	砥石	(5.4)	3.4	1.9	(60.0)	凝灰岩	2面使用 3面削り痕 断面長方形 上部欠損	表土	
Q300	砥石	(8.6)	4.6	4.8	(174.7)	凝灰岩	4面使用 断面長方形 上部欠損	表土	
Q301	砥石	12.5	8.8	4.7	694.2	雲母片岩	3面使用	表土	
Q302	打製石斧	(6.5)	7.8	2.0	(120.7)	砂岩	分銅形 素材は扁平な礫 両面に礫面を残し、周縁部に階段状の調整を巡らす 上半部欠損	表土	
Q303	打製石斧	(6.5)	7.8	2.0	(120.7)	砂岩	分銅形 素材は扁平な礫 両面に礫面を残し、平坦・階段状剥離を施す 両側からノッチ状の加工で両側縁中央部が括れる	表土	PL53
Q304	打製石斧	8.6	5.2	1.5	71.6	ホルンフェルス	撥形 素材は扁平な礫 片面に礫面を残し、平坦・階段状剥離を施す 刃部付近に使用に伴う擦痕	表土	PL53
Q305	磨製石斧	6.5	3.8	1.5	44.6	ホルンフェルス	素材は扁平な礫 両面に礫面を残す 裏面の平坦な礫面から急角度の加工で撥状に整形 刃部は急角度の片刃で丁寧に研磨	表土	
Q306	打製石斧	(5.9)	5.1	2.6	(94.3)	安山岩	撥形 素材は扁平な礫 片面に礫面を残し、平坦・階段状剥離を施す 上半部欠損	表土	
Q307	打製石斧	9.0	4.1	2.0	91.3	雲母片岩	撥形 平坦・階段状剥離を施す	表土	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q308	磨製石斧	8.3	4.7	2.2	102.4	安山岩	研磨調整 刃部は片刃状 後世の削痕多数	表土	
Q309	打製石斧	8.4	6.5	2.0	120.9	ホルンフェルス	分銅形 平坦・階段状剥離を施す 両側からノッチ状の加工で両側縁中央部が括れる	表土	
Q310	礫器	10.0	6.1	2.7	203.6	ホルンフェルス	素材は扁平な礫 両面に礫面を残す 下部側縁に片側からの平坦剥離で刃部を作出 上半部の一部に痘痕状の敲打痕	表土	
Q311	磨製石斧	8.0	3.9	2.1	63.5	泥岩	素材は扁平な礫 両面に礫面を残す 裏面の平坦な礫面から急角度の加工で撥状に整形 刃部は急角度の片刃で丁寧に研磨	表土	PL55
Q312	磨製石斧	14.1	6.0	2.9	460.0	緑色凝灰岩	定角式 研磨調整 刃部の一部に2次的な調整を施す	表土	
Q313	磨製石斧	9.9	4.9	3.2	242.5	変質安山岩	研磨調整 凹石・敲石に転用 片面に皿状の凹み 両端部痘痕状の敲打痕	表土	
Q314	磨製石斧	9.3	5.3	2.6	160.0	輝緑凝灰岩	研磨調整 後世の削痕多数	表土	
Q315	磨製石斧	(6.7)	2.4	1.5	(40.0)	粘板岩	定角式 研磨調整 刃部欠損後に2次的な調整を施す	表土	PL55
Q316	磨製石斧	(7.7)	(5.3)	(2.7)	(125.7)	緑色凝灰岩	定角式 研磨調整 上半部欠損	表土	
Q317	磨製石斧	(11.5)	(4.5)	2.5	(177.7)	緑色凝灰岩	乳棒状 研磨調整 刃部欠損後に2次的な調整を施す	表土	
Q318	磨製石斧	7.1	5.2	2.7	(165.4)	輝緑凝灰岩	磨製石斧を再加工 側縁部から頭部にかけて剥離調整後の痘痕状の敲打痕	表土	PL55
Q319	磨製石斧	(5.3)	2.5	1.1	(30.9)	輝緑凝灰岩	定角式 研磨調整 刃部付近使用に伴う線条痕多数 頭部欠損後に2次的な調整を施す	表土	PL55
Q320	磨製石斧	6.4	2.8	1.5	46.2	輝緑凝灰岩	定角式 研磨調整 刃部付近使用に伴う線条痕多数	表土	PL55
Q321	磨製石斧	5.8	5.0	1.8	(61.5)	砂岩	磨製石斧を再加工 片刃状 側縁部に剥離調整後の痘痕状の敲打痕	表土	
Q322	磨石	10.1	3.8	3.4	202.6	安山岩	全面擦り面 側縁部を中心に痘痕状の敲打痕	表土	
Q323	磨石	12.4	8.2	3.8	508.9	安山岩	全面擦り面 両面の中央部に皿状の凹み 両側面に痘痕状の敲打痕	表土	
Q324	磨石	14.5 (9.7)	5.9	(1166.8)	砂岩	全面擦り面 片面の中央部付近を中心に痘痕状の敲打痕	表土		
Q325	敲石	(5.3)(9.1)	(3.8)	(275.3)	安山岩	両面の中央部に皿状の凹み	表土		
Q326	敲石	6.9	6.9	3.5	211.4	石英	上下端に痘痕状の敲打痕	表土	
Q327	敲石	13.7	6.4	4.5	618.2	硬砂岩	上下端と側縁の一部に痘痕状の敲打痕	表土	
Q328	凹石	8.9	7.7	4.3	422.3	花崗岩	両面の中央部に断面形が皿状の凹み 側縁部に痘痕状の敲打痕	表土	
Q329	敲石	9.6	4.5	2.8	171.6	石英斑岩	上下端に痘痕状の敲打痕	表土	
Q330	凹石	10.0	7.3	4.5	256.0	安山岩	両面の中央部に断面形が皿状の凹み	表土	
Q331	石皿	(16.3)(13.3)	(6.6)	(1540.0)	安山岩	片面に皿状の擦り面 裏面に複数の断面形がV字状の凹み	表土		
Q332	石皿	22.9	20.0	5.3	4039.9	安山岩	両面に皿状の擦り面	表土	
Q333	石棒	(21.7)(9.5)	(8.5)	(2573.3)	緑泥片岩	敲打・研磨調整 頭部・基部欠損	表土		
Q334	軽石製品	4.7	3.4	1.6	6.3	軽石	砥石か 3面使用 断面長方形	表土	
Q335	玉	1.2	1.1	0.5	0.7	蛇紋岩	1方向からの穿孔 孔径0.4cm	表土	
Q336	剣形模造品	4.5	2.0	0.6	6.9	滑石	全面研磨調整 削り痕明瞭 未製品	表土	PL55
Q337	剣形模造品	(3.7)	2.5	0.5	(4.7)	滑石	全面研磨調整 上部穿孔 孔径0.2cm 上部欠損	表土	
Q338	剣形模造品	4.2	2.0	0.6	6.1	滑石	全面研磨調整 両面両刃状 中央部に稜 上部穿孔 孔径0.2cm	表土	PL55
Q339	双孔円板	4.6	4.9	0.5	19.4	滑石	全面研磨調整 長径方向に2か所穿孔 孔間2.3cm 孔径0.15~0.2cm	表土	PL55



写真⑦ 斜面貝層の調査（遺物の出土状況 / 縄文土器）

第4節 ま と め

大谷貝塚は、今回の調査で縄文時代から近世までの、多様な遺構群が複合した遺跡であることを確認した。ここでは、縄文時代の集落及び斜面貝層の時期的変遷と、出土した主な遺物を中心として、各時代ごとの土地利用のあり方について概要を記述する。

1 大谷貝塚における土地利用の変遷

1) 旧石器時代

調査区北西部の小規模な谷に形成された斜面貝層中から、黒曜石製の石刃1点と頁岩製のナイフ形石器1点が出土している。台地部のローム層中や後世の遺構覆土などからは、当時代の石器群はまったく出土していない。こうしたことから、今回の調査区域には、後期旧石器時代後半の極めて小規模な活動痕跡は認められるものの、大規模な石器集中地点は、存在していなかった。

2) 縄文時代

当時代の遺構は、標高20~24mの台地部全域から、竪穴住居跡7軒、炉穴2基、炉跡2基、土坑435基、標高17~24mの斜面部から、斜面貝層1か所、土坑墓1基を確認した。遺物は、台地部の遺構群から中期後葉の土器片を主体として、早期後葉から後期前半までの土器片などが出土している。各遺構の時期は、台地部から出土した土器の様相から、炉穴は早期から前期、炉跡は中期とほぼ推測でき、竪穴住居跡とほとんどの土坑が、中期後葉の加曽利E式期、特に加曽利EⅡ式期に属するものである。各時期において、大規模な集落の形成は確認できなかった。しかし、早期後葉から後期前半までの間、断続的に土地利用が繰り返されていたことが判明し、中でも主体となる時期は中期後葉で、散在する竪穴住居跡と群集する土坑群からなる集落構造を垣間見ることができる。確認した竪穴住居跡の数は極めて少ないことから、今回の調査区域は、集落の中核部からやや外れていると考えられる。斜面部からは、小規模な谷を埋め尽くすように貝層が形成されており、多量の貝と土器片をはじめとして、土器片錘、土器片円盤、石器・石製品、土製品、骨角歯牙製品、貝製品、鳥・獣・魚骨などが膨大に出土している。出土した土器から、貝層が形成された時期は、前期中葉と中期後葉の2時期に大きく分かれ、また、貝層の基底部となる黒色土からは、早期後葉から前期初頭の土器群がまとまって出土している。前期の土坑墓は中期後葉に相当する貝層の下から確認し、中から横臥屈葬の埋葬された人骨が出土している。鑑定の結果、壮年後半の男性であることが判明した。前期の埋葬人骨は、全国的にも類例が少ないことから、貴重な資料の提供となるであろう。

3) 弥生時代

当時代の遺構は、標高20~24mの台地部中央から、竪穴住居跡14軒、土坑9基を確認した。住居跡の時期は中期末葉から後期前葉とみられる。住居跡は長径65m、短径30mほどの楕円形の狭い範囲に、重複することなく構築されている。出土した土器は少なく、詳細な住居の変遷や集落の形成過程について、多くを語れない状況にある。しかし、出土した土器はほぼ同一時期のものであることから、継続期間の比較的短い、小規模な集落であったと考えられる。

4) 古墳時代

当時代の遺構は、標高20~24mの台地部全域から、竪穴住居跡8軒、古墳1基、土坑5基を確認した。住居跡の時期は、前期中葉から末葉とみられる。これらの住居跡は、方形で北東壁に接するように竈を付設した、いわゆる初期竈を有する住居と考えられる。複数の住居跡で、竈の火床面から土師器の高杯を転用した支脚が正位の状態で出土しており、また、床面や覆土中から、石製模造品や球状土錘などが出土し

ているという、いくつかの共通点がみられる。一方、住居跡の主軸方向はN - 38°~41° - EとN - 45°~48° - Eとに大きく分かれることから、一時期2~3軒からなる集団が、数時期に渡って集落を形成したと考えられる。古墳は台地部中央に築造されており、周溝の外側で南北軸約38m、東西軸約36mの方墳である。墳丘はすでに削平されており、確認できなかった。埋葬施設は2か所で、第1埋葬施設が墓道を伴う横穴式石室、第2埋葬施設が箱式石棺である。築造時期は、長方墳であることや2か所の埋葬施設の形態、箱式石棺の位置が墳丘袖部と推測されることや、周辺地域の類例なども考慮すると、古墳時代後期の7世紀後半と推測できる。埋葬施設に使用していたと考えられる雲母片岩片は、そのほとんどが周溝の底面や覆土下層から出土していることから、造墓主体による墓域の管理が終了した段階から、周溝の埋没が開始した比較的早期の段階で、盗掘に遭ったと判断できる。

5) 平安時代

当時代の遺構は、標高20~24mの台地部中央から東側で、竪穴住居跡2軒、竪穴建物跡6棟、火葬墓1基、土坑6基、溝跡1条、方形周溝跡1基を確認した。住居跡の時期は10世紀後葉から11世紀前葉を中心としている。第9号建物跡のように、竈を持たずに複数の地床炉を設け、平面形が長方形の建物は、一般的な居住施設と断定することができず、工房施設をはじめ、集落内における特殊な用途のための施設の可能性がある。出土した遺物では、土師器の小皿が比較的多いほかに目立った特徴もなく、その性格を断定することは困難である。その他の住居跡についても、主軸方向や竈の位置、規模などに規則性や共通する特徴などを見出すことはできない。全体としては、個々の住居や建物が疎らに距離をおいて構築されており、一時期2~3軒の集団が数時期に渡って集落を形成したと考えられる。

6) 中世・近世

当時代の遺構は、標高20~24mの台地部中央から南側で、塚1基、溝跡5条、道路跡3条、土坑墓2基、円形周溝跡1基を確認した。それらは、土坑墓や塚など、葬制や信仰に関連する遺構をはじめ、道路や溝などの交通や生産・生活に関連する遺構などである。出土した遺物の大半は、中世に属する青磁片や陶磁器片などの器類で、わずかにカワラケ、泥面子、小柄、釘、煙管、銭貨などの近世に属する遺物も出土している。近世以降は、主に畑などの生産域として利用され、現在に至ったと考えられる。

2 縄文時代の集落と斜面貝層の時期的変遷

1) 早期後葉から前期前葉

約1万2千年前から地球規模の温暖化が進み、海面の上昇に伴って内陸部に海水が侵入していった。いわゆる縄文海進である。霞ヶ浦沿岸の周辺地域に、広大な内海が形成されたのは、今から約6千年前の縄文時代早期後半から前期前半と考えられている。内海の拡大とそれに連動した自然環境の変化によって、霞ヶ浦沿岸の周辺地域には、多くの貝塚がつくられはじめ、縄文人と海とのかかわりが深く密接になると言われている¹⁾。早期後葉から前期初頭は縄文海進のピーク時にあたり、当貝塚の台地縁辺部には炉穴が構築され、内海へと降っていく谷の窪地には、不要になった土器片などが投棄されている。これらのことから、小規模な集落の形成ないし、キャンプサイト的な土地利用が開始されたことがうかがえる。しかし、次期の前期前葉に属する明確な遺構と遺物は確認できず、縄文人の活動の痕跡は一旦途絶えてしまう。

2) 前期中葉から前期後葉

前期中葉になると再びアサリやハイガイ、ハマグリなどからなる多量の貝と土器片が、小規模な谷の窪地に投棄され、本格的な土地利用が開始される。それらの貝層からは、前期後葉の土器片などもわずかに出土しているが、中心となる時期は、前期中葉の植房式土器の時期である。しかし、台地部で確認した前

期に属する遺構はわずかで、住居跡については未確認である。調査区域外に当該期の集落の中心が存在している可能性も否定できないが、それにしても、大規模な集落が形成されていた痕跡はみられない。中期以降の土地利用によって、前期に属する遺構の多くが消滅した可能性もあるが、台地部から出土した前期に属する土器片の大半は、前期後葉の浮島式土器で、植房式土器は皆無に等しい状況である。このように、前期中葉の居住域を確認することができなかったことは、前期中葉における当貝塚の性格を考える上での大きな課題の一つとなる。つまり、集落は斜面貝層と離れた別の場所に存在していたのか、または、大地に痕跡を残さない構造の建物、例えば平地式住居などからなる集落を形成していたのか、いくつかの想定はできるが、いずれも想像の域を出ない。この問題は、縄文時代前期の集落構造と生業を軸とした居住パターンなどの問題にも大きく関係している。

3) 中期前葉及び中葉

当期に属する土器片は、台地部と斜面貝層を含めても数十点を数えるだけで、遺構や貝層は確認していない。集落の形成が開始されるのは中期中葉の中峠式期前後と推測され、斜面貝層の形成が本格的に始まる前段階の大きな出来事として、台地部における集落の形成と、それに伴う様々な土地利用があったと考えられる。その手がかりは、前期貝層と中期貝層を分ける暗褐色の混貝土層の存在が上げられる。その土層からは、いわゆる中峠式や加曽利E I（古）式期に属する完形品を含めた土器片がまとまって出土している。また、ロームブロックや焼土ブロック、炭化材などが多量に含まれており、それらの供給源の多くは、やはり、標高の高い台地部側に求められる。集落の形成が本格化し、それに伴う土地の開墾や燃料となる木材の伐採などが、急速に始まったことが推測できる。斜面貝層の形成も、当該期以降、加速的に進んでいくことになる。

4) 中期後葉

加曽利E II式期になると、斜面貝層の形成がピークを迎え、台地上には住居や土坑が急速に広がり、集落の成長がうかがえる。確認できた住居跡は8軒と少ないが、土坑は約430基である。それらの明確な配置形態は不明であるが、調査区域外を含め、環状集落の一部である可能性が高い。斜面貝層では、膨大な量のハマグリ、サルボウ、オキシジミなどを主体とする純貝層が短期間に形成され、また、貝層形成の直前や直後に、多量の土器片などを投棄していることが明らかとなった。この時期に、小規模な谷の窪地のほとんどは埋め尽くされ、1361点を超える土器片錘が出土していることから、集中的な貝の採集活動が繰り広げられ、漁労、特に網漁の発達が指摘できる。加曽利E III・IV式期になると、急速に集落は衰退し、斜面貝層の形成も基本的には停止したとみられる。当該期の土器片は、その大半が斜面部低所の2次堆積によって形成された混貝土層から出土している。そこからは、遊離した人骨なども出土しており、前時期までに投棄された白い貝殻の広がった窪地は、埋葬地や物送りの儀礼の場としての役割を担っていたとも推測できる。

5) 後期以降

調査区域内における後期・晩期の明確な活動痕跡は確認していない。台地部からは、加曽利E IV式土器の系統を引く土器群や、称名寺式、堀之内式などに属する土器片がわずかに出土しているだけで、集落は形成されなかったとみられる。

3 大谷貝塚と周辺の貝塚 - 興津貝塚と虚空蔵貝塚 -

1) 貝塚群としての動態について

当貝塚の西側約1300mの位置には、前期後葉の興津式土器の標識遺跡である興津貝塚²⁾、そして、南側

約600mの位置には、前期前葉と中期の虚空蔵貝塚³が存在している。両貝塚は、現在の高橋川を挟んだ対岸の小支谷の台地縁辺部から斜面部に貝層が形成されており、美浦村内における斜面部を利用した代表的な貝塚として知られている。これらの貝塚は、谷を挟んで近接しているという地理的な要因とともに、集落や斜面貝層の形成における時期的な変遷過程についても、注目すべき点がある。そこで、当貝塚と興津・虚空蔵貝塚における集落や斜面貝層の形成過程について、簡単にまとめると以下の通りとなる。ただし、両貝塚の調査はトレンチ調査によるもので、かなり限定的な情報であることを断っておく。

貝塚名	項目	時 期						
		早期後葉	前期前葉	前期中葉	前期後葉	中期前葉	中期中葉	中期後葉
大谷貝塚	集落		×		×	×		
	斜面貝層	×	×		×	×		
虚空蔵貝塚	斜面貝層			×	×			
興津貝塚	斜面貝層	×	×	×		×	×	×

この集落や貝層形成の消長から明らかのように、今から約6千年前の縄文海進によって形成された内海に面した3か所の貝塚では、それぞれでは一型式期、もし数型式期にまたがっていても、連続しているわけではなく、集落や貝層形成にはいくつかの断絶が認められる。しかし、約1km圏内に存在する貝塚群の動態として観察してみると、帰属する集団の問題は別として、内海に面した台地を、転々と移動しながら、集落や斜面貝層などを形成していったことが浮かびあがってくる。

2) 斜面部を利用した貝層形成について

これらの3か所の貝塚の特徴は、いずれも斜面部や小規模な谷の窪地の中に貝層が形成されている点である。興津貝塚と虚空蔵貝塚は、部分的な発掘のため全貌は明らかではないが、斜面部を中心として貝層が形成されていることはほぼ間違いない。大谷貝塚の場合は、斜面部というよりは小規模な谷の窪地に貝層が形成されており、茨城県石岡市の地蔵窪貝塚⁴や同県行方市の於下貝塚⁵、千葉県千葉市の有吉北貝塚⁶、福島県いわき市の大畑貝塚⁷などと、貝層の形成場所の共通性がみられる。それらは、早期後葉から中期にかけての環境の変動や、特に海進・海退による海水面の移動とともに、侵食作用の影響による谷や崖などの発達と無関係ではないと推測できる。自然環境の変化を含めた総合的な検討が必要である。

3 貝層から出土した主な遺物について

1) 土器について

斜面貝層から出土した、前期中葉に属する土器群の主体は、植房式土器である。この土器群は、西村正衛氏によって型式名⁸を与えられて以来、約四半世紀の間、実態の不明な型式として知られてきた。型式内容とその定義、地理的な分布傾向、型式の細分などについても、まだまだ未開拓の状況で、型式としての存在を否定する立場や、前期中葉を代表する黒浜式に内包されるべき地域的な類型の一つと理解する立場など、型式学的研究においては、大きな課題を抱えた土器群である。そうした中で、1998年、鈴木素行氏は、茨城県日立市泉原貝塚の報告の中で、西村氏の型式内容を整理して植房式土器の再定義を行った。そして、植房式土器に「植房1式」と「植房2式」という、型式学的に新旧の変遷過程が認められ、また、泉原貝塚の調査において、貝層としての新旧関係を把握した中で、その変遷が正しいことを述べられている⁹。

以下では、大谷貝塚の斜面貝層から出土した植房式土器とその周辺の土器群について、特にその対応関係について焦点をあて、当貝塚出土の植房式土器の簡単な位置づけを試みたい。西村氏の型式内容を再定義した鈴木氏の見解によれば、『「植房1式」とする5個体の土器の「櫛歯文」については、櫛歯文A・Bと記号化して2つに分類する。比較すると、櫛歯文Aは、同時施文の沈線が2・3本と少なく、各沈線は太く、間隔が広い。一方、櫛歯文Bは、同時施文の沈線が6本と多く、各沈線は細く、間隔が狭い。…「植房2式」における櫛歯文Aの系統は、同時施文の沈線が3・4本であり、4本の中には半截竹管状工具の施文具を2本同時に使用したと考えられるものが含まれている。櫛歯文Bの系統は報告の中にはない。文様の形象を比較すると、上下を区画された鋸歯状文は、「植房1式」に1段構成、「植房2式」に2段構成がある。横位に重層する「櫛歯文」は、「植房1式」が直状、「植房2式」が微波状を呈する。コンパス状の「櫛歯文」は、「植房1式」「植房2式」ともにある』¹⁰⁾という。

以上の鈴木氏の見解によると、当貝塚から出土した植房式土器の主体は、「植房2式」に比定することができる。また、注目すべき土器としては、KB3c2の前期貝層下位から出土したTP551と、KA2e4の前期貝層中から出土したTP28を上げることができる。TP551は突起のある注口部が付けられた土器で、3・4本の櫛歯状工具で注口部の下側左右に曲線的なモチーフを描き、地文には羽状構成の単節縄文を施している。このような土器は、福島県福島市宇輪台遺跡の第4号住居跡の覆土から出土した、櫛歯文を有する土器の中に類例を見出すことができる¹¹⁾。TP28は、波状口縁下に鏢状の隆帯が巡る土器で、鏢状の隆帯が途切れる波頂部の下位に、注口部が付けられていた可能性がある。同様な土器は、千葉県流山市若葉台遺跡の第2号竪穴住居跡の覆土から出土している¹²⁾。鈴木氏の研究によれば、それらは、「植房2式」に並行する土器群であり、当貝塚の斜面貝層から出土した前期中葉の土器群が、「植房2式」の土器群を主体とすることとも相容れる。まだまだ、植房式土器に残された課題は多いが、貝層の形成過程と出土した土器の様相を丁寧に観察していくことで、「植房1式」と「植房2式」との境界をさらに鮮明にすることが可能になるかもしれない。今後の課題としておきたい。

2) 石器・石製品について

斜面貝層から出土した石器・石製品は多様で、石鏃13点、磨製石斧25点、打製石斧11点、石皿21点、磨石45点、敲石42点、楔形石器55点、剥片265点、軽石製品21点である。狩猟具の石鏃などの出土量が少なく、食料加工具の石皿や磨石、敲石の出土が目立っている。石斧も比較的多いが、剥片以外の石器で他を圧倒しているのは、楔形石器である。その主要な石材はチャートで、5cm程度の円礫を素材としている。一方、台地部の遺構などから出土した石器・石製品は、石鏃4点、磨製石斧4点、打製石斧5点、石皿11点、磨石16点、敲石15点、凹石4点、石棒2点、楔形石器1点などである。基本的な石器の組成は、中期的な様相を呈しているが、楔形石器だけが斜面部と台地部とで、大きな相違が認められる。この数量的な相違が何に起因しているものなのかは、個々の楔形石器の所属時期の検討や用途の問題が立ちはだかり、簡単に説明することができない。ここでは、出土した楔形石器は前期的な様相が強く、また、獣骨や鹿角などの加工に深く関係した石器である可能性を指摘しておきたい。

3) 骨角歯牙製品について

斜面貝層から出土した骨角歯牙製品は、鹿角製、骨製の刺突具をはじめとして、髪針、釣り針、磨製刃器、弭形角器、垂飾り、線刻を有する獣骨、切断痕を有する獣骨など、生活道具や漁労具などを中心にし、多くの種類を確認することができた。まず、前期と中期を通じて、刺突具の多さが目立つことから、内海の干潟や浅瀬で突き漁を主体とした漁が、積極的に選択されていたことを物語っている。片側に返刺

の付く刺突具の大半はは前期中葉の貝層中から、返刺のない刺突具と両側に返刺の付く刺突具の大半は、中期後葉の貝層中から出土している。

4) 貝製品について

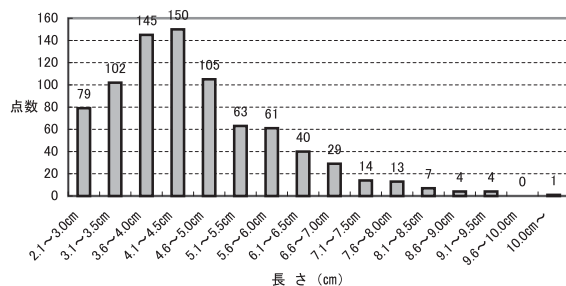
斜面貝層から出土した貝製品の代表は、貝輪と貝刃であるが、確認できたものは量的に極めて少ない。貝輪は、サルボウやアカガイなどを素材にした前期中葉及び中期後葉に属するものがそれぞれ出土している。貝輪の素材として搬入されたと考えられるベンケイガイや、中期後葉に属するタカラガイ加工品、ツノガイ加工品、化石と推測できる大形のミルクイガイなどは、あえて加工しない貝器として、当貝塚に外洋や遠方の地から、交易などによってもたらされたと考えられる。

5) 装飾品について

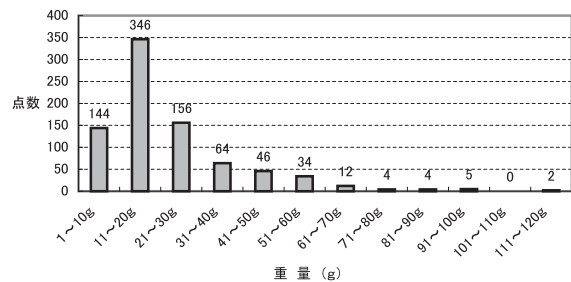
斜面貝層から出土した装飾品としては、石製、土製、骨角歯牙製、貝製のものが確認できた。石製垂飾りと骨角歯牙製の大半は前期中葉に属し、中でもツキノワグマ、オオカミ、イノシシ、バンドウイルカ、キツネ、サメなどを素材とした歯牙製垂飾りは質量ともに注目される。土製では、大珠形土製品をはじめ、耳栓や環状土製品、スプーン形土製品、垂飾りなど、類例の少ない形態のものが出土し、いずれも中期後葉に属すると考えられる。

6) 土器片錘について

斜面貝層から出土した土器片に次いで多量に出土している人工遺物は、土器片錘である。全体として、1593点、斜面貝層から1361点、台地部の遺構などから232点が出土している。圧倒的に斜面貝層から出土していることが分かる。用途については網の錘とする説が最も広く知られている。斜面貝層から出土した1361点の中で、約6割が完形品であることから、簡単に廃棄されてしまうが多かったとも考えられる。考えられる理由としては、網漁の季節的な盛衰に連動し、また、土器片を再利用した身近な道具であるため、網の補修などの際に、比較的容易く廃棄されてしまう性質を内包していたと推測できる。それらの大半は中期後葉に属するもので、打ち欠きによって、土器片を粗く四角に整形した後、周縁の2～4辺を研磨して、1方向に切り込みを施したものである。規模と重量について、完形品の817点を対象とした分析の結果はグラフ①・②の通りである。規模別分布では、長さ3.1～5.0cmのものが502点で全体の6割を占め、重量別分布では、11～20gのものが全体の4割を占めている。ちなみに、行方市の於下貝塚¹³⁾での同様な分析(グラフ③・④)と比較すると、大局的には、両貝塚の土器片錘は同様な数値の傾向を示しており、中期後葉における霞ヶ浦沿岸の周辺地域の一般的なあり方として理解できる。

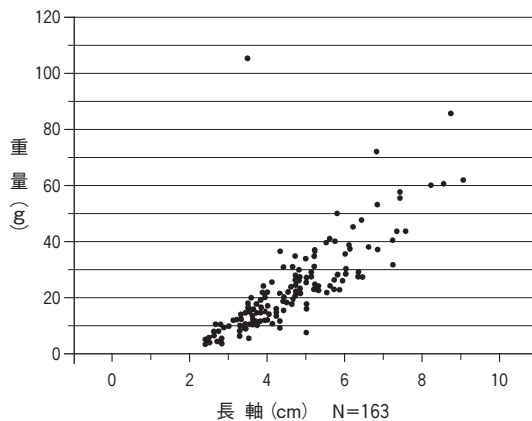


グラフ 土器片錘の規模別分布 (大谷貝塚の斜面貝層)



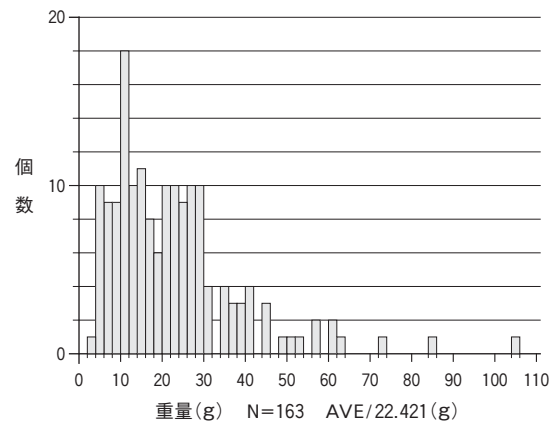
グラフ 土器片錘の重量別分布 (大谷貝塚の斜面貝層)

(加曾利E式期)



グラフ 土器片錘の長軸・重量の相関(於下貝塚)
註5)より転載・一部加除筆

(加曾利E式期)



グラフ 土器片錘の重量別分布(於下貝塚)
註5)より転載・一部加除筆

4 おわりに

以上、当貝塚の縄文時代から江戸時代までの土地利用の変遷と、当貝塚の中心となる斜面貝層と出土した主な遺物について、その成果と課題について述べてきた。斜面貝層の全体を調査した事例は県内では稀少である。また、将来的な分析や検証のために、貝層のすべてをサンプルの対象として取り上げることができたことは、奇跡的な出来事である。これは、貝塚の密集地域として知られ、1879(明治12)年、東京大学の佐々木忠二郎氏と飯島魁氏によって、日本人初の学術調査が実施された陸平貝塚を、国指定史跡として整備・保存している美浦村の関係者による、深いご理解と惜しみないご協力のお陰であることは言うまでもない。当然ながら、今回の報告では、調査成果のすべてが網羅できたわけではなく、主要な事実の報告を軸として、できるだけ多くの出土遺物を掲載することに重点を置いた。当地域における貝塚のあり方を知るための一助となれば幸いである。

註・参考文献

- 1) 関口満ほか 『内海の貝塚 - 縄文人と海のかかわり - 』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2000年3月
- 2) 和田哲 『縄文前期浮島系土器論』 精興社 1996年9月
- 3) 大川清ほか 『茨城県美浦村・虚空蔵貝塚』 美浦村教育委員会 1977年3月
- 4) 荒井英樹ほか 『茨城県石岡市地蔵平遺跡・地蔵窪貝塚発掘調査報告書』 石岡市教育委員会 1995年3月
- 5) 加藤晋平ほか 『於下貝塚発掘調査報告書』 麻生町教育委員会 1992年3月
- 6) 山田貴久ほか 『千葉東南部ニュータウン19 - 有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代) - 』 『千葉県文化財センター調査報告』第324集 住宅・都市整備公団 財団法人千葉県文化財センター 1998年3月
- 7) 馬目順一ほか 『大畑貝塚調査報告』 福島県 いわき市教育委員会 1975年3月
- 8) 西村正衛 『石器時代における利根川下流域の研究 - 貝塚を中心として - 』 早稲田大学出版部 1984年12月
- 9) 鈴木素行 『館山遺跡の土器 - 茨城県南部における「関山式」「森東式」「植房式」の土器群 - 』 『玉里村立史料館報』第8号 2003年3月
- 10) 佐藤政則ほか 『泉原貝塚発掘調査報告書』 『日立市文化財調査報告』第45集 日立市教育委員会 1998年5月
- 11) 丸山泰徳ほか 『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告 宇輪台遺跡』 『福島市埋蔵文化財報告書』第58集 福島市 福島市教育委員会 財団法人福島市振興公社 1993年3月
- 12) 田村隆ほか 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V - 谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・塚(2)・馬土手(1)・(2)・(3) - 』 日本道路公団 東京第一建設局 財団法人千葉県文化財センター 1986年3月
- 13) 5)に同じ。

- ・酒詰仲男 『日本貝塚地名表』 日本科学社 1959年
- ・酒詰仲男 『日本縄文時代食料総説』 土曜会 1961年5月
- ・辻武雄 『茨城県信太、河内両郡二於ケル石器時代ノ遺蹟』 『東京人類学会雑誌』9 - 92 1983年11月
- ・芹沢清八ほか 『古宿遺跡 県道藤原 - 宇都宮線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』 『栃木県埋蔵文化財調査報告』 第142集 栃木県教育委員会(財) 栃木県文化振興事業団 1994年3月
- ・西野雅人ほか 『貝塚出土資料の分析 - 重要遺跡確認調査の成果と課題2 - 』 『千葉県文化財センター研究紀要』19 財団法人千葉県文化財センター 1999年11月
- ・小玉秀成 『常総地域における弥生土器編年の大枠』 『霞ヶ浦町郷土資料館第21回特別展 霞ヶ浦沿岸の弥生文化 土器からみた弥生社会』 霞ヶ浦町郷土資料館 1998年8月

付 章

- 1 大谷貝塚出土の縄文時代前期人骨について571
明治大学・NPO法人スケルトン研究機構 谷畑美帆
- 2 大谷貝塚出土の縄文時代人骨の自然科学分析について576
東京大学総合研究博物館 吉田邦夫
- 3 大谷貝塚の土壌サンプルから得られた貝類遺体（予報）.....578
千葉県立中央博物館 黒住耐二
- 4 大谷貝塚の貝層サンプルから得られた動物遺体591
早稲田大学 樋泉岳二

大谷貝塚出土の縄文時代前期人骨について

谷畑 美帆（明治大学・NPO法人スケルトン研究機構）

大谷貝塚は、茨城県稲敷郡美浦村大字大谷881番地ほかに位置しており、平成18年4月から平成19年12月の財団法人茨城県教育財団による発掘調査時に、成人男性人骨が1体出土している。資料の一部には接合の際にレジックス（ミレア・クリエーション社製クラフト用樹脂ねんど）による補強処置を施し、接合に関してはアセトン1～10%希釈のセメダインCを用いている。本人骨資料は、縄文時代前期中葉に相当する植房式土器に伴うものと考えられている。以下、性別・年齢など人骨資料に関する基礎的な所見を述べていくこととする。

出土状態

本人骨は、左側を下にして、頭を南東方向に向け、下肢を極度に屈曲させた屈葬の姿勢で埋葬されていた。墓坑は確認されているが、副葬品と思われる遺物は伴っていない。本人骨資料は、出土時において非常に脆弱な状態であったため、ウレタン・フォームを用いた取り上げを実施し、個々の骨の取り上げは、室内（＝陸平研究所内）にて時間をかけてじっくり実施していった。発掘現場で出土した際には、人骨のほぼ全身骨格を得ることができるように思われた。しかし、実際に取り上げてみると四肢骨の関節面などが欠損しており、計測作業を実施することが難しい状態にあることが明らかとなった。

性別・年齢推定

本人骨資料の遺存状態・保存状態は比較的良好であり、頭蓋の一部である側頭骨における乳様突起が小さめであるが、骨盤の一部である大坐骨切痕がやや鋭角気味に切れ込んでいることから、この個体の性別は男性と判断している。

年齢推定にあたって、信頼性が高いとされる恥骨結合面が欠損しているため、詳細については不明である。矢状縫合は、内板では正中付近にわずかに残る以外、ほぼ終了しており、外板では癒合閉鎖がほとんどみられなかった。そのため本個体の年齢は壮年後半と推定される。

頭蓋骨と歯牙

頭蓋の保存状態はやや不良で、多数の破片に分かれている頭蓋骨片を接合することにより、頭蓋冠をかりうじて復元することができた。しかし、脳頭蓋最大長などの計測値を得るには至っておらず、頭蓋骨の形態的特徴を全体として把握することはできていない。

顔面頭蓋は、鼻根の一部や眼窩上板の一部が部分的に遺存しているのみである。そのため、詳細については不明である。眉間の発達著しいものではなく、鼻根部も平坦である。

側頭骨は左右とも乳様突起を中心とした遺存である。外耳道骨腫は左右とも確認されていない。上顎骨では歯槽の一部が遺存しており、正中付近の歯牙では歯槽退縮がみられない。

下顎骨は全体として小さく華奢である。咀嚼筋の発達と関連する下顎体及び下顎枝も薄めである。下顎骨には、釘植している歯牙が10本遺存していた。遺存歯牙の詳細は下記に示してある。咬合については、上顎歯が遺存していないため不明である。

(左) ————— / ————— (右)
 x M2 M1 P2 P1 C / P1 P2 M1 M2 M3

顎骨破損 / 歯槽開放 (死後喪失) x 歯槽閉鎖 (生前喪失?)

上下顎歯共に、虫歯及び抜歯の痕跡は確認されていない。左下顎犬歯には、エナメル質減形成の所見が確認されている。

歯牙の咬耗は、左側の歯牙(犬歯・第1小臼歯・第2小臼歯・第1大臼歯・第2大臼歯)を中心に著しく(プロカの3度)であり、右側における歯牙(第1小臼歯・第2小臼歯・第1大臼歯・第2大臼歯・第3大臼歯)とは異なっている(プロカの2度)。左歯牙の咬耗は、犬歯において最も著しく、後方に向かうにつれて咬耗の程度が緩やかになっている。

下顎骨と関節する左右側頭骨の関節面には顎関節症の所見は観察されていない。頭蓋骨と関節する下顎骨の関節面が遺存していないため、下顎骨における顎関節症の所見を観察することはできていない。

体幹骨

椎骨は保存状態がやや不良である。頸椎の椎体部分が数個体遺存している他、胸椎及び腰椎で椎弓部分及び椎体の一部が遺存しているのみである。そのため骨棘の有無等については確認できていない。しかし、遺存している一部の腰椎の椎体辺縁には軽度の変形性脊椎症(G1)の所見が確認されている。

寛骨は右のみの遺存で耳状面や大坐骨切痕など腸骨の一部分のみの遺存である。大坐骨切痕の切り込みは鋭めであり、本個体の性別は男性と考えられる。

上肢骨

左右の鎖骨は、骨幹部のみの遺存である。肩甲骨は右関節窩の一部のみの遺存となっている。

上腕骨は、左右とも骨頭を欠いており、左上腕骨では遠位端も欠いている。左右いずれも遺存している三角筋粗面の発達は弱く、骨体も華奢である。遺存している右上腕骨の遠位端における関節面には骨関節症の所見は確認されていない。

橈骨は左のみの遺存である。骨体は背掌方向に扁平で、骨間縁の発達はあまり強くない。尺骨は、左右共に遺存しているが、いずれも両骨端を欠いている。骨間縁の発達はあまり強くない。

手根骨は、左では有頭骨・第2中手骨・第3中手骨・第4中手骨・第5中手骨が遺存しており、右では有鉤骨・月状骨・小菱形骨が遺存している。遺存している右第2中手骨は遠位端を欠き、第3中手骨及び第4中手骨では両骨端が欠損している。

下肢骨

大腿骨は、左右とも両骨端を欠いているが、全体として華奢である。左右ともに細く、骨体中央断面示数(柱状示数)は、早・前期に相当する人骨としては低めの数値を示している(表1)。

脛骨及び腓骨は、左右とも遺存しているが、欠損部位が多く、今回の作業では計測を実施するにいたっていない。左右脛骨の骨幹中央付近を中心とした内側面及び外側面には軽度の骨膜炎の所見を確認している。左右の脛骨にみられる骨膜炎の所見に症状の程度の相違はないが、いずれも内側よりも外側においてやや進行した

表1 大谷貝塚出土人骨に関する計測値

	大谷 左	大谷 右	妙音寺 左	妙音寺 右 (馬場他1999)	早・前期 (小片1981)
上腕骨					
4 下端幅		50.9	53.0	53.0	54.8
5 中央最大径	20.9	20.9	17.2	16.6	20.8
6 中央最小径	15.8	15.9	13.4	14.4	14.7
7 a 中央径	61.1	61.3	60.8	53.6	61.6
6 / 5 骨体断面示数	75.6	76.0	78.1	86.8	70.6
大腿骨					
6 骨体中央矢状径	27.5	28.5	29.6	28.2	28.3
7 骨体中央横径	23.9	24.3	22.8	22.1	23.6
8 中央周	80.0	79.8	84.0	84.0	83.4
6 / 7 骨体中央断面示数		116.2		127.3	120.2

骨膜炎の所見を見て取ることができる。

膝蓋骨は左右とも約40%程度の遺存となっており、骨棘等の有無を観察することはできなかった。

左の足根骨は、距骨・踵骨・舟状骨・第1楔状骨・第2楔状骨・第3楔状骨が遺存しており、第1中足骨・第2中足骨・第3中足骨・第4中足骨・第5中足骨は遠位端を欠いた状態で遺存している。右の足根骨は、距骨・踵骨・舟状骨・第1楔状骨・第2楔状骨が遺存しており、第1中足骨・第2中足骨・第3中足骨・第4中足骨は遠位端を欠いた状態で遺存している。

踵骨は左右ともに距骨と関節する部分を中心とした遺存であり、いわゆる踵の部分は欠損している。距骨は、左ではほぼ完全な形で遺存されているが、右では全体の60%程度の遺存で、後方の大部分を欠いた状態で遺存している。中でも、右距骨の後踵骨関節面の一部には、骨関節症の所見が観察されている。

まとめ

本稿では、大谷貝塚から出土している壮年男性人骨について概観してきた。早・前期に相当する人骨は、縄文時代の中でも全体として華奢だとされてきたが、本資料においても同様の所見を提示することができる。

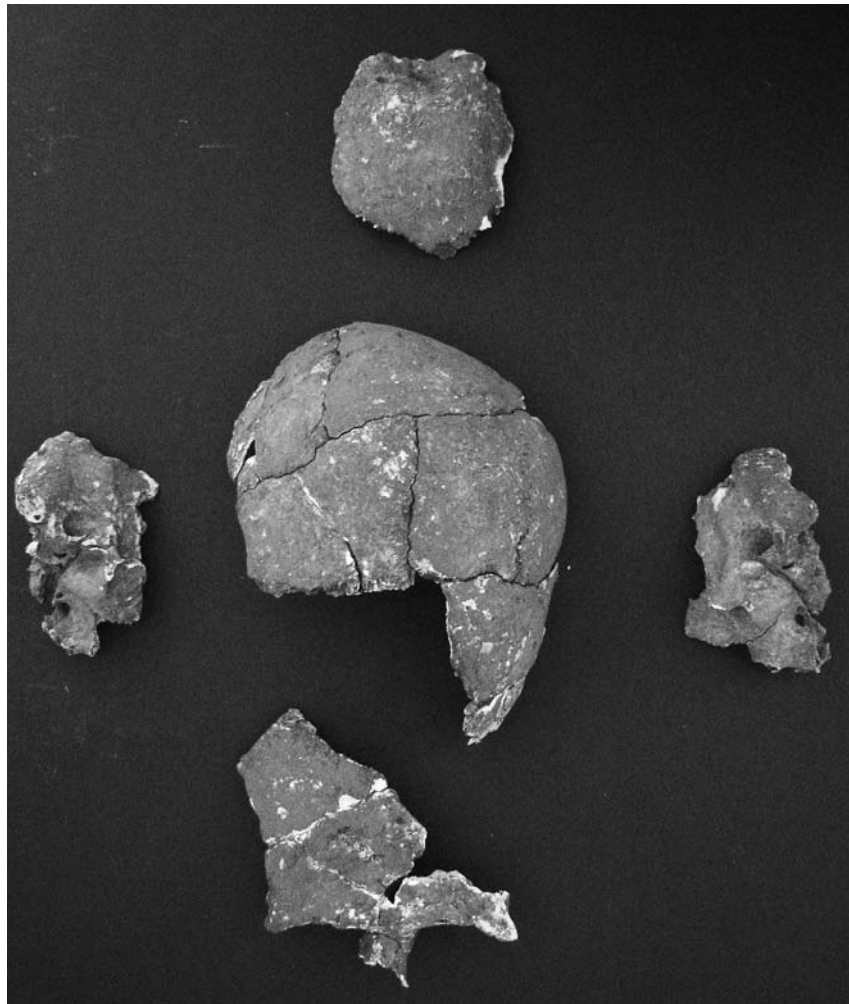
また、本人骨資料では、歯牙の咬耗が全体に進んでいるが、特に左側の下顎歯牙の咬耗は著しく、右側歯牙とは異なっている。そのため右側の歯牙を局所的に何らかの目的のために使用していた可能性を指摘することができる。縄文時代の前期に相当する個体は、総じて歯牙の咬耗が著しい(山口2003)。今回観察した当貝塚出土例においても同様の所見を看取することができる。

古病理学的所見として本個体では、ストレス・マーカーの一つであるエナメル質減形成、骨膜炎の所見を観察している。また、腰椎椎体辺縁には、変形性脊椎症の所見が確認されており、距骨の下面関節面の一部である後踵骨関節面において骨関節症の所見が確認されている。

縄文時代の葬制は複雑で地域差等も大きい。そのため詳細についてここで述べることは難しい。しかし、これまで人骨資料と埋葬姿勢の関係を検討することによって時期や地域的傾向が、ある程度明らかにされてきている（山田2001，2002）。こうしたことから、当貝塚出土例について見当してみると、本事例のように屈曲した屈葬例は、比較的古い段階に相当する埋葬事例と考えられる。

引用・参考文献

- 小片保 1981 縄文時代人骨 人類学講座第5巻『日本人Ⅰ』雄山閣：27-55
馬場悠男・坂上和弘・河野礼子・加藤久雄 1999 「妙音寺洞窟遺跡出土の縄文時代早期人骨」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第209集 秩父郡皆野町 妙音寺ノ妙音寺洞穴 一般国道140号（皆野町地内）関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』pp.281-293
山口敏 2003 『私たち日本人の祖先』イラスト・ガイド 私たちヒト3 てらぺいあ
山田康弘 2001 「縄文人の埋葬姿勢（上）」『古代文化』第53巻第11号 pp.12-31
山田康弘 2002 「縄文人の埋葬姿勢（下）」『古代文化』第53巻第12号 pp.17-35





大谷貝塚出土の縄文時代人骨の自然科学分析について

吉田 邦夫（東京大学総合研究博物館）

1. 資料と分析方法

2007年12月22日に、肋骨4資料を受領した。そのうち最も大きな長さ75mm、幅10mm（約2.2g）の資料を用いて分析を進めた。元素分析計で炭素・窒素含有量を測定してコラーゲンが残存していることを確認し、超精密グラインダーで海綿質の部分を削り取り、緻密骨の表面をクリーニングした。残った骨資料は1.51gで、やや多かったが、古い人骨であるためコラーゲン回収率が低い可能性を考え、全量使用した。年代測定室の定法に従って洗浄、溶解（透析）、ゼラチン化、精製、凍結乾燥を行い、ゼラチンコラーゲン68.0mgを得た。回収率は4.5%、コラーゲン成分のC/N比は3.22で、良好なコラーゲン成分が得られた。

得られたコラーゲン成分2.86mgを用いて、年代測定試料を調製、工学系研究科 MALT に設置されている AMS 装置で年代を決定した。

残ったコラーゲン資料について古食性分析を行った。年代測定室に設置してある質量分析計（IsoPrime EA, Micromass, GB 製）を用いて、炭素・窒素安定同位体比を測定した。コラーゲンを0.2~0.9mg用い、3回測定した。

2. 年代測定結果

第1号土坑墓人骨 $5610 \pm 60\text{BP}$ (TKa-14473; $^{13}\text{C} = -10.1\text{‰}$)

IntCal04による暦年較正年代を、グラフ1に示す。6400~6300 cal BP 付近は、暦年較正曲線が寝ているため、やや誤差が大きくなる。暦年較正の結果、6500~6300 cal BP の値が得られた。後述する古食性分析の結果から海産物の寄与が大きいことが推定されるので、やや古い年代が得られていると考えた方がよい。したがってこの年代を、植房式土器の年代に直接結びつけるのは危険である。実際の年代を検討するためには、採取されている炭化材の年代測定が必要である。

3. 安定同位体分析・古食性分析結果

抽出コラーゲンの安定同位体比

炭素安定同位体比 $^{13}\text{C} = -15.07 \pm 0.02\text{‰}$ (食糧基準に換算 -19.57‰)

窒素安定同位体比 $^{15}\text{N} = 12.71 \pm 0.08\text{‰}$ (食糧基準に換算 9.31‰)

(コラーゲンでは、摂取食料から ^{13}C が4.5‰、 ^{15}N が3.4‰だけ濃縮されているとして、補正している)

グラフ2に結果を示した。図の楕円は、一部を除いて遺跡から出土した動植物遺存体の同位体比をもとに、日本列島の食糧資源をグループ分けしたものである。骨コラーゲンがどのような食料グループから形成されているかを推定するための基礎情報となる。一般に関東の貝塚出土人骨は海洋資源に大きく依存している例は少なく、陸のもの、海のをバランスよく摂食していたと考えられている。千葉県姥山貝塚から出土した中期中葉の人骨、縄文後期の古作貝塚では、その特徴通りまとまった様相を見せるが、それぞれの集団から大きく離れて、窒素同位体比が大きい個体が存在する。今回の分析個体はこれに近い値を示す。一方、縄文前期の分析例は少ないが、熊本県轟貝塚では、きわめて大きな広がりを見せ、しかも海産物への依存が高い個体が多い。前期の貝塚から出土した縄文人に関して九州地方だけでなく、関東でも海洋資源の寄与が大きく、大谷貝塚の事例がこの特徴を示しているのか、あるいは関東地方の貝塚から出土した縄文人の特異例に相当するかは、今

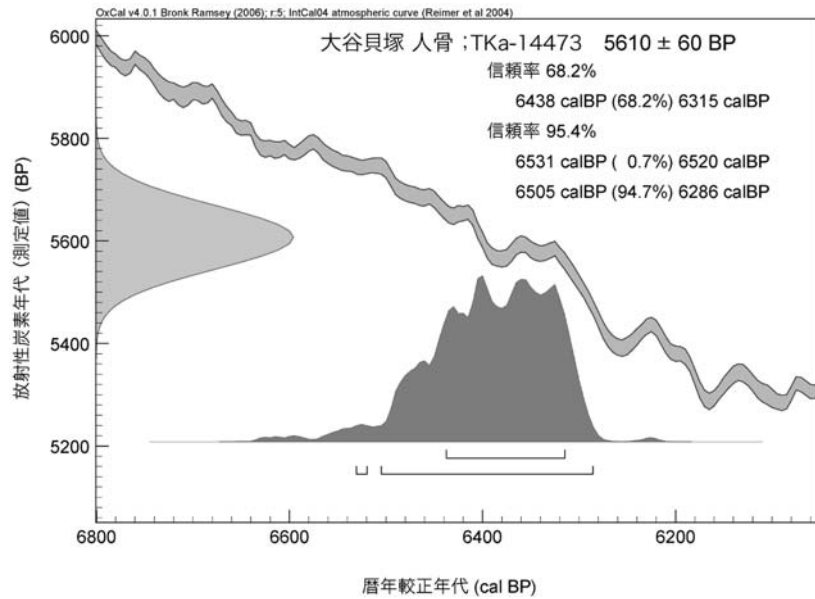
後の分析例が必要である。いずれにしる興味深い結果である。

引用・参考文献

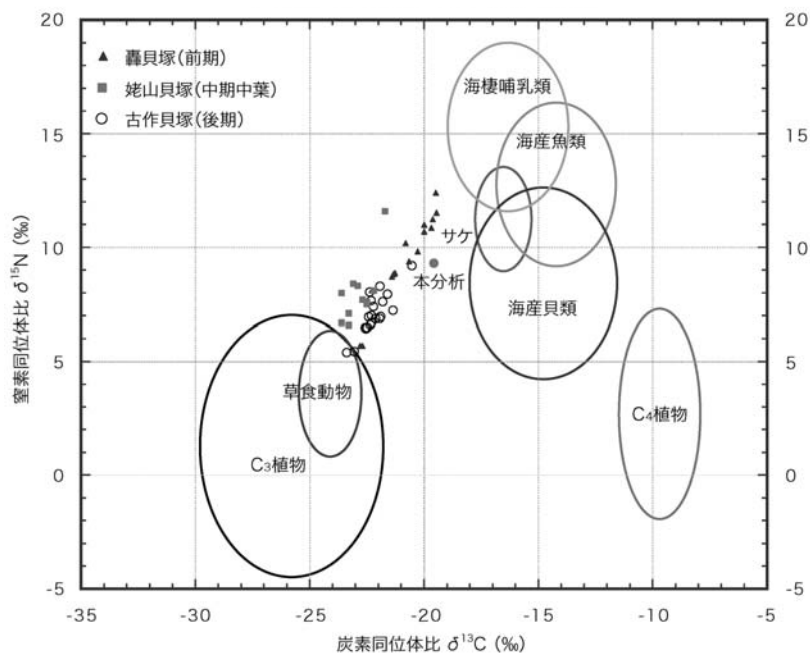
南川雅男 1990 「人骨・動植物の安定同位体 (^{13}C , ^{15}N) 分布及び集団の食生態分析」『先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略』文部省科学研究補助金重点領域研究 研究成果報告書, p. 1 - 15

吉田邦夫 2009 「縄文人の食性と生業」季刊考古学 105, p. 51 - 56

米田穰 2008 「同位体分析から見た市川の縄文人の食生活」『市川市縄文貝塚データブック』, p. 144 - 150, 市川市考古博物館



グラフ1 . IntCal04による暦年較正年代 (大谷貝塚出土人骨)



グラフ2 . 大谷貝塚出土人骨同位体比 (食糧換算)

大谷貝塚の土壌サンプルから得られた貝類遺体（予報）

黒住 耐二（千葉県立中央博物館）

大谷貝塚は、茨城県美浦村の霞ヶ浦南岸の標高25m程度の台地辺縁部に位置する縄文時代前期から中期の貝塚を有する遺跡である。

今回、財団法人茨城県教育財団による発掘調査が行われ、筆者は貝塚土壌のサンプリングを行うことができた。また、この土壌サンプルから抽出された貝類遺体を検討する機会を与えて頂いた。ここにその結果を報告する。

サンプルの採取と処理および解析サンプルの内容と方法

今回解析を行ったサンプルは、本報告書の土層・貝層断面図 - f の KB 2 b4 区の断面から、25cm角でコラム（柱状）サンプリングにより連続して得られたものである。各サンプルは、厚さ 5 cm を基準に、層位や貝類の集中性を考慮して、適宜区分して採取した。今回、これらのサンプルのうち、下部から # 27（縄文前期中葉：植房式期，335層，混貝土層），# 22（縄文前期中葉：植房式期，313層，混貝土層），# 16（縄文中期後葉：中峠式期～加曽利 E I（古）式期，314層，混貝土層），# 12（縄文中期後葉：加曽利 E II 式期，308層，混貝土層），# 11（縄文中期後葉：加曽利 E II 式期，380層，混貝土層），# 4（縄文中期後葉：加曽利 E II 式期，305層，純貝層）の 6 サンプルについて詳細に抽出・検討を行った。

各サンプルは、70℃で2日間以上十分に乾燥させ、水中で9.5，4.0，2.0，1.0のフルイで篩い、浮き上がったもの（浮遊部分：LF）は0.5mm未満のネットで回収し、沈殿したもの（沈殿部分：HF）はメッシュごとに乾燥させ、完全な個体（完形）のみならず、殻頂部や体層部を有し、個体数を産出できるものや破片でも完形等が得られていない種を抽出した。

各個体は、肉眼や実体顕微鏡下で、種の同定と成長段階（幼貝と成貝の区別）・出土部位・焼けているかや磨滅した死殻であるかどうかの確認等を行った。二枚貝類では、完形殻のサイズ（殻高を計測したマガキ以外は、殻長）をmm単位で計測し、前後端の一方が残存し殻サイズを推定できる個体についても推定値を求めた。また、破損殻が多かったシオフキの# 11の殻長部残存個体について、黒住ら（2007）に準拠して、殻頂から歯板の縁までの弾帯受幅を、同時に完形殻の殻頂・弾帯受幅も計測した。マガキの左殻に関しては、近接した陸平貝塚で報告されているように（樋泉2004）、ウミナナ類の付着した痕跡をチェックした。微小貝類の幼貝は、成貝サイズの1/2以上のものを大形幼貝（ljと表記）、成貝サイズの1/4 - 1/2のものを中形幼貝（mj）および同じく1/4未満のものを小形幼貝（sj）に区別した。

結果および考察

今回のサンプルからは、表 1 に示した同定の不確実な種を含み34科64種の貝類が得られた。沈殿部分の詳細を表 2 に示し、以下では由来ごとに内容を検討した。

1. 食用貝類遺体

(1) 種組成等

今回のサンプル中、食用と考えた種は23種であり、いずれかのサンプルで、3.5%以上の割合を占めていた種を優占種として、サンプルごとの組成を図 1 に示した。下部の前期中葉の 2 サンプル（# 27/22）では、アサリが約2/3と最も多く、ハマグリが20%程度で次いでいた。また、この時期にのみチョウセンハマグリが比

表1. 大谷貝塚の土壌サンプルから得られた貝類遺体リスト.

海産貝類		海産貝類	
軟体動物門 Phylum Mollusca		マルスダレガイ科 Family Veneridae	
腹足綱 Class Gastropoda		カガミガイ <i>Dosinia japonica</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯
カサガイ目 Order Patellogastropoda		アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯
ユキノカサ科 Family Lottiidae		ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯
ツボミ <i>Patelloida pygmaea f. conulus</i>	内湾 / 砂泥質底 / 潮間帯	チョウセンハマグリ <i>Meretrix lamarckii</i>	外洋 / 砂底 / 潮間帯 - 潮下帯
古腹足目 Order Vetigastropoda		ウチムラサキ? <i>Saxidomus purpurata?</i>	内湾 - 外洋 / 砂泥底 / 潮間帯
リュウテン科 Family Turbinidae		オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯
スガイ <i>Lunella coreensis</i>	内湾 - 外洋 / 岩礁 / 潮間帯	オオノガイ目 Order Myoida	
アマオボネ目 Order Neritiorpha		オオノガイ科 Family Myidae	
アマオボネ科 Family Neritidae		オオノガイ <i>Mya arenaria oonogai</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯
イシマキ <i>Clithon retropictus</i>	河口域 - 河川 / 礫底	キヌマトイガイ科 Family Hiattellidae	
ヒメカノコ <i>Clithon oualaniensis</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯	ナミガイ <i>Ponopea japonica</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮下帯
吸殻目 Order Sorbeochoncha		ソトオリガイ科 Family Laternulidae	
オニノツノガイ科 Family Cerithiidae		ソトオリガイ? <i>Laternula marilina?</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯
コゲツノブエ <i>Cerithium coralium</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯		
ウキツボ科 Family Litiopidae		掘足綱 Class Scaphopoda	
ウネハマツボ <i>Alba hungerfordi</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	ツノガイ目 Order Dentalioida	
ウミニナ科 Family Batillariidae		ツノガイ科 Family Dentaliidae	
ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯	ヤカドツノガイ <i>Dentalium octangulatum</i>	内湾 - 外洋 / 砂泥底 / 潮下帯
ホソウミニナ <i>Batillaria cumingii</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯		
イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯	陸産貝類	
フトヘナタリ科 Family Potamididae		腹足綱 Class Gastropoda	
フトヘナタリ <i>Cerithidea rhizophorarum</i>	アシ原 / 潮間帯	原始紐舌目 Order Architaenioglossa	
ヘナタリ <i>Cerithidea cingulata</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯	ヤマタニシ科 Family Cyclophoridae	
カワアイ <i>Cerithidea djadjariensis</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯	ミジンヤマタニシ <i>Nakadaella micron</i>	林内
モツボ科 Family Scaliolidae		ゴマガイ科 Family Diplommatinidae	
シマモツボ <i>Fenella purpureoapicata</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	ヒダリマキゴマガイ "Palaina" pusilla	林縁
ワカウラツボ科 Family Irvadiidae		有肺目 Order Pulmonata	
カワグチツボ <i>Irvadia elegantula</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	オカミミガイ科 Family Ellobiidae	
アッキガイ科 Family Muricidae		スジゲシガイ <i>Carychium noduliferum</i>	林内
イボニシ <i>Thais clavigera</i>	内湾 - 外洋 / 岩礁 / 潮間帯	キセルガイ科 Family Clausiliidae	
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	ヒカリギセル <i>Zapychopsis buschi</i>	林縁
オリイレヨフバイ科 Family Nassariidae		チュウゼンギセル <i>Mundiphaedusa sericina</i>	林内
アラムシロ <i>Reticunassa festiva</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯	ヒメギセル <i>Mundiphaedusa micropeas</i>	林内
テングニシ科 Family Melongenidae		オカクチケレイガイ科 Family Subulinidae	
テングニシ? <i>Hemifusus tuba?</i>	内湾 - 外洋 / 砂泥底 / 潮下帯	オカチョウジガイ <i>Allopeas kyotoense</i>	林縁
後鰓目 Order Opisthobranchia		ホソオカチョウジガイ <i>Allopeas pyrgula</i>	開放地
ブドウガイ科 Family Haminoeidae		ナタネガイ科 Family Punctidae	
ブドウガイ <i>Haloa jpaonica</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	ナタネガイ? <i>Punctum amblygonum?</i>	林縁
カイコガイダマシ <i>Liola porcellana</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮下帯	ナタネガイ属の一種 <i>Punctum sp. cf. harimensis</i>	[林縁]
二枚貝綱 Class Bivalvia		ベッコウマイマイ科 Family Helicariionidae	
フネガイ目 Arcoida		カサキビ <i>Trochochlamys crenulata</i>	林縁
フネガイ科 Family Arcidae		ヒメハリマキビ <i>Parakaliella pagoduloides</i>	林内
サルボオ <i>Anadara kagoshimensis</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯	キビガイ <i>Gastrodonta stenogyra</i>	林内
ハイガイ <i>Anadara granosa</i>	内湾 / 泥底 / 潮間帯	タカキビ <i>Coneuplecta praealta</i>	
カキ目 Order Ostreoida		ウメムシタラ <i>Coneuplecta japonica</i>	林縁
イタボガシ科 Family Ostreidae		ヒメベッコウマイマイ <i>Discoconulus sinapidium</i>	林縁
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	内湾 / 岩礁 - 泥底 / 潮間帯	ヒメベッコウ類似属 <i>Discoconulus? sp.</i>	開放地
ナミマガシワ科 Family Anomiidae		ナタネガイ科 Family Punctidae	
ナミマガシワ <i>Anomia chinensis</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	ナタネガイ属の一種 <i>Nipponochlamys? sp.</i>	開放地
マルスダレガイ目 Order Veneroida		ナミヒメベッコウ属? の一種 <i>Yamatochlamys? sp.</i>	林内
バカガイ科 Family Mactridae		ウラジロベッコウ <i>Urazirochlamys doenitzii</i>	林縁
バカガイ <i>Mactra chinensis</i>	内湾 - 外洋 / 砂泥底 / 潮間帯 - 潮下帯	コハクガイ科 Family Zonitidae	
シオフキ <i>Mactra quadrangularis</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮間帯	ヒメコハクガイ類似種 <i>Hawaia sp. cf. minuscula</i>	開放地
オトリガイ? <i>Lutraria maxima?</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮下帯	ナンバンマイマイ科 Family Camaenidae	
イソシジミ科 Family Psa mm obidae		ニッポンマイマイ? <i>Satsuma japonica?</i>	林縁
フジナミガイ? <i>Hiatala boeddinghausi?</i>	内湾 / 砂泥底 / 潮下帯	オナジマイマイ科 Family Bradybaenidae	
シジミ科 Corbiculidae		エンスイマイマイ <i>Trishoplita langfordi</i>	林縁
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>	河口域汽水域 / 砂泥底	ヒタチマイマイ? <i>Euhadra brandtii?</i>	林縁
		ヒダリマキマイマイ <i>Euhadra quaesita</i>	林縁

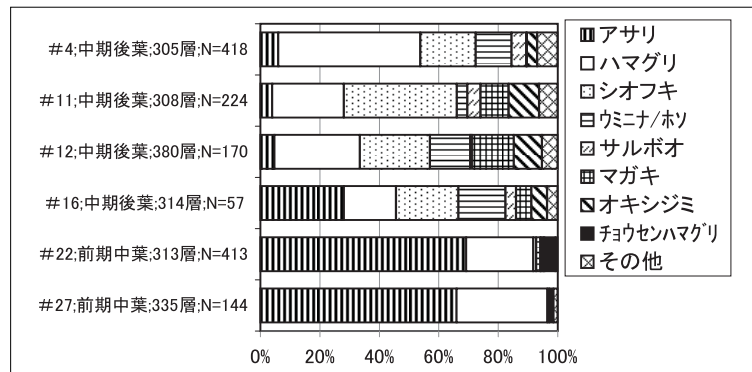


図1. 大谷貝塚の土壌サンプルから得られた食用貝類の組成変化.

較的多く採集され、僅かではあったがハイガイも確認された。中期後葉（#16）になると、アサリ・シオフキ・ハマグリ・ウミニナ/ホソウミニナが15 - 30%と4群が比較的類似した割合に変化した。さらに、サルボオ・マガキ・オキシジミも低い割合ではあるが、優占種となっていた。中期後葉（#12/#11）では、ハマグリとシオフキが多く

なり、全体の1/2以上を占めるようになる。そして、ウミナナ類やマガキ・オキシジミも多く、アサリは激減していた。同時期の純貝層（#4）では、ハマグリが1/2と極めて多くなり、シオフキ、ウミナナ類と続いていた。個体数は少なかったが、中期後葉になると、ナミマガシワ・バカガイも得られるようになり、#4のサンプルからは他のサンプルで認められなかったフトヘナタリやヤマトシジミも確認された（表2）。また少数ではあるが、各時期を通じて岩礁に生息するスガイ・イボニシが得られていた。焼けた個体は、破片のみで極めて少数であった。本コラムに隣接して採取された樋泉（本報告書）の結果とは、最下部でチョウセンハマグリの割合が大きいことや中期後葉でアサリの優占度がより高いこと等の相違はあるものの、全体の傾向は一致している。

全体的な傾向を、当貝塚周辺の縄文貝塚の貝類をまとめた樋泉（2004）の考察と比較すると、前期としてはアサリが最も多く、ハイガイがほとんど得られていないことやチョウセンハマグリの割合が比較的高いこと等が大谷貝塚の特徴として挙げられるであろう。中期に関しては、ハマグリ・シオフキ・ウミナナ類・サルボオ・マガキの多いことは他地域と類似し、特にシオフキとウミナナ類の多いことが今回のサンプルで顕著であった。

東京湾東岸・市原市の縄文貝塚出土貝類の現生種の生態分布との比較から、黒住・岡本（1994a）は、現在東京湾に多いバカガイがほとんど出土していないことから、本種の食用はタブーであったのではないかと考えた。しかし、酒詰（1961）の集成や於下貝塚（加納1992）からはバカガイが比較的多く出土し、樋泉（2004）も霞ヶ浦周辺の縄文遺跡で本種が稀ではないことを指摘している。両地域における相違は、当時のバカガイ生息量等に起因する可能性もあるが、タブーの強さということも想定される。一般的に、貝塚では当時の遺跡周辺の環境に依存した貝類採集が想定され、各遺跡で優占種（主体貝）が異なっていることは当然である。しかし、当貝塚では貝類相から想定される貝類採集空間の環境は大きく変化しているとは考えにくいものの、前期と中期でアサリやシオフキの量的な組成は激変していた（図1）。そして、優占種となっているアサリ・ハマグリでは小形個体の割合も高く、これらの種であるならばサイズに関係なく採集していたことがわかる。一方で、泥底に生息するオキシジミも多く、#4に少数認められたヤマトシジミの存在（表2）から、採集空間内かごく近接した場所にヤマトシジミ生息域が存在していたと考えられる。しかし、両時代の当貝塚の集団は、ヤマトシジミを主体的に採集していない。このように、貝類採集に関しては、利用種が決められ、それ以外の種を排除すると言う集団内の意図／規制（タブーを含めた）が強く働いていたことが考えられる。これは、時代／地域を越えて存在する一般化されるものと考えられよう。

砂泥底のウミナナ類と泥底のイボウミナナ・カワアイ類等の塔型（細長い）巻貝に関しては、体層のみの個体も多かった（表2）。これらの螺塔を折って食用とすることは、沖縄の先史時代遺跡での例があり（池原1977、黒住1987）、関東地方で詳細に検討されている（西野1997）。表2で「b：体層部」と表記したものが螺塔を折ったと考えられるものである。このタイプは前期から認められるが、中期で明瞭な傾向にあった。ただ樋泉（2004）は、陸平貝塚のマガキはウミナナ類に付着していた個体も多かったことを報告している。今回も、表4に示したように比較的高率でマガキにウミナナ類の痕跡が認められ、死殻（磨滅／他生物の穿孔）のウミナナ類も得られた。逆に、ウミナナ類生貝上に生息し、これらの生貝採集を示唆するツボミガイは#4から得られた。これらのことから、前期でもウミナナ類の食用の可能性はあるものの、明確なのは中期になってからであり、中期にはアシ原にすむフトヘナタリも利用されていた。

またイボニシを含むレイシ類は、縄文貝塚を含め、多くの遺跡から優占種となることはないが、比較的多く出土する。レイシ類は、「からにし」等の苦味に由来する方言名を持っている（例えば川名1988）。想像でしかないが、レイシ類は通常食材の味と異なった味覚のために選択されていた可能性も考えられる。

表2. 大谷貝塚の土壌サンプル(沈殿部分)から抽出された貝類遺体の詳細.

サンプル番号	#27 縄文前期中葉 / 植房式 335層 / 混土層 メッシュサイズ (mm)				#22 縄文前期中葉 / 植房式 4100 / 3.12				#16 縄文中期後葉 / 中峰式 - 加曽利E I (古式 314層 / 混土層 3250 / 2.39						
	>9.5	9.5-4.0	4.0-2.0	2.0-1.0	MNI**	>9.5	9.5-4.0	4.0-2.0	2.0-1.0	MNI	>9.5	9.5-4.0	4.0-2.0	2.0-1.0	MNI
二枚貝類															
アサリ*	>9.5 7.34u/10.32u 3.16u/2.20u 2.7u/5u 1u/1	46u/50u	1u/3u	2.0-1.0	MNI**	3cc/64.105u/72.107u 22.53u/23.46u.11A? 2u/0 2.8u/1.10u 0/2 0/1 0/1	2.107u/1.88u 13u/13u 3u/0 5u/2u 2u/1u	4u/2u 2u/3u 1u/1u	2.0-1.0	286 90 3 15 4 1 1	1.2u/3.4u 8/6.3u 4.1u/2.1u 3u/3u.2B 2co	7u/9u 2u/1u 1u/0	4.0-2.0	2.0-1.0	16 10
ハマグリ*					95										
ハマグリ類*					22										
チョウセンハマグリ*					23										
シオフキ*					1										
サルボオ*															
カサミガイ*															
ハカガイ*															
ナミマガシワ*															
マガキ*	2f				1	1/2	0/1			3	2/1	1/1			3
ハイガイ*	2f				1	1/1	1u/0			1	1co: 1/2				3
オキシジミ*															
ソトオリガイ*															
ヤマトシジミ*															
ウミナ*															
ホソウミナ*															
イボウミナ*															
ウミナ類*															
カラアイ*															
ヘナタリ*															
コケツノブエ*															
フトヘナタリ*															
ツボミガイ															
アラムシロ															
スガイ*															
イボニシ*					1					1					
アカニシ*	1fd														
テングニシ?															
ウチムラサキ?															
オノノガイ															
ナミガイ															
オノノガイ / ナミガイ															
フジナミガイ / オトリガイ															
二枚貝不明															
カワグチツボ	1f														
シマモツボ															
カイコガイダマシ?															
イシマキ															
ヒメカノコ															
ヤカドツノガイ															
ミジンヤマタニシ															
ヒダリマキコマガイ															
ヒダリキセル															
チュウゼンジキセル															
ヒメキセル															
オカチヨウジ															
ホソオカチヨウジ															
ヒメハラマキヒ															
キビガイ															
ウメムラシタラ															
ヒメハッコウマイマイ															
ヒメハッコウ貝類															
ナミヒメハッコウ類?															
ヒダリマキマイマイ															
化石貝類等															
微小海産貝類															
綿足類															
陸産貝類															

和名の*は食用種を示す, 数値の前の?は同定に疑問が残るもの, 記号の後の?は状態の判断が難しかったもの, ** : MNI (最少個体数) は食用個体のみの値
A : 殻品, a : 成貝, B : 焼け, b : 体積, co : 合弁, d : 死殻, f : 破片, j : 幼貝, m, j : 中型幼貝, r : 古い遺体, u : 綴頂, w : 齧履, 二枚貝は左 / 右.

当貝塚の前期には、外海に生息するチョウセンハマグリが、後述するように小形個体を中心に出土していた。このことは、単に本種の貝殻が持ち込まれたとは考えにくく、生きて個体が廃棄されたと思われる。小形個体が多いことから、自ら外海に出向き、採集した可能性も高い。ただ、本種の採集が目的であったかどうかは不明である。ただ、装飾品として利用されたと考えられるヤカドツノガイが得られており、この種は外海で得られた可能性もある。ただ、同じ前期の神奈川県羽根尾貝塚（金子2007）で出土している食料や貝製品素材以外の“趣味的に採集したと考えられる”貝類は今回のサンプル中には認められなかった。

（2）サイズ組成等

次に、優占種の二枚貝類のサイズを表3に示した。ハマグリは、15 - 60mmと殻長の範囲が広く、前期では計測できた個体数は少ないながら、その範囲は20 - 50mmとやや小形のものが多かった。中期になると、30m以下の個体の割合が高くなり、55m以上の大形個体も少数ながら得られている。いずれにしても、30mm以下の現在販売されている個体より小さな個体を採集しており、西野（1998）が明瞭に示したように、東京湾東岸でも中期に小形化していることと同様な現象かもしれない。陸平貝塚の中期前葉の本種のサイズと比較しても（樋泉2004）、より小形であると考えられる。純貝層の#4では年間成長量の大きな40mm以下の個体で、殻長のピークは明瞭ではなく、本種の採集季節にある程度の幅が存在していたことを示しているのかもしれない。

ハマグリの小形個体が多かったものの、採集時の混入種と考えられるアラムシロ等は極めて少なかった（表2）。これは、食用種の選別がかなり厳密であったことを示している。その種分けは、遺跡内ではなく、海浜部で行われた可能性も高い。また、当貝塚の中期層では厚い純貝層を形成しており、あたかも貝類加工の場と考えられている「ハマ貝塚」のような様相を呈している（例えば中期の東京都/中里貝塚：樋泉ら2000）。もちろん、自家消費以外にハマグリ等が用いられた可能性は充分想定されるが、本種の小形個体や巻貝のウミナナ類も多いことから、かなりの割合は自家消費されたと思われる。

また、縄文前期に見られたチョウセンハマグリでは完形殻が極めて少なく詳細なデータは示せなかったが20mm未満と推定されるものから45mmまでの中・小形の個体を得られていた。

ハマグリと同様に、前期に多かったアサリも25mm付近にピークを持ち、小形個体が多く、個体数は激減するが中期でも同様であった。マガキも、25 - 45mmの範囲の個体がほとんどで、30mm付近にピークを有し、かなり小形の個体であった。一方、サルボオ・シオフキ・オキシジミは、いずれもおよそ35mm以上の大形の個体を得られていた。個体数が少ないので今後の検討が必要ではあるが、サルボオ・オキシジミは、樋泉（2004）の示したもののより小形個体が少ない傾向にあった。

樋泉（本報告書）の示した優占種のサイズも、ほぼ同様な結果を示しているが、チョウセンハマグリではより大形の個体も確認されている。本種の大形個体は単に食用として得られたものではなく、何らかの用途に用いられた可能性もあろう。

2. 化石貝類利用等

今回のサンプルからは、化石由来と考えられる二枚貝類のナミガイ等や巻貝類のアカニシ等の大形種もいくつか抽出された（表2）。これらの種の完形個体は、当貝塚のピックアップ資料でも確認されている。新生代の「成田層」の化石貝類を縄文遺跡で用いる例は、市原市西広貝塚のツノガイ類で指摘し（黒住・岡本1994b）、その後、ツノガイに関しては陸平貝塚で完形個体を得られ、穿孔されたエゾタマガイや絶滅種のトウキョウホタテ等と共に化石貝類利用が報告されている（樋泉2004）。千葉県成田市の縄文晩期の荒海川表遺跡でも、貝製品として利用されたエゾタマキガイの他、加工痕等の認められていないピノスガイ・ナミガイ等が成田層の

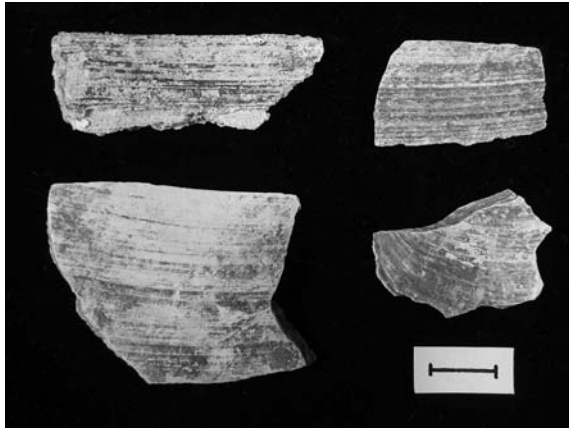


図2．大谷貝塚の化石を利用した“有角貝殻片”．
上：前期中葉，下：中期後葉．スケールは1 cm．

化石とされている（山田2001）。ヤカドツノガイは、装飾品として利用されたと考えられ、化石の可能性もあろう。

今回のサンプルで得られた化石貝類は、2 - 3 cm程度の略方形の破片が多く、研磨・穿孔等の加工痕は認められず、前期と中期の両時期から確認された（図2）。

加工痕の認められない二枚貝類を中心とした化石貝類の遺跡への持ち込みは上述のような詳細に出土遺体が検討された関東南部の遺跡では確認されることが多く、今回縄文前期からも認められたので、長期間比較的広い範囲で認められる現象の可能性が高い。利用の

意味に関しては、略方形化石貝類片の明瞭な遺構に伴った出土は知られていないので、現時点では不明である。もちろん、前述のように貝製品に用いられたものの破片も含まれている場合もあろう（例えばアカニシ貝輪製作に伴うもの等）。また、必ずしも化石貝類にこだわらないのかもしれない（例えばムラサキガイ；陸平貝塚での樋泉 [2004] のデータは本種が破片で得られていることを示している）。ただ、多くの場合、加工痕のないことから、「貝殻を割る」ことに意味があるのではないかと考えられ、その形状から大形二枚貝類が多く利用された可能性が高い。単なる想像でしかないが、これら“有角貝類片”は、墓や祭祀等を含めて、多少なりとも非日常的な状況で用いられた可能性もあろう。いずれにしても、貝塚からの出土状況を記載すると共に、遺構からの“有角貝類片”出土事例にも注意の払われることを期待したい。

3．海産微小貝類

今回のサンプル中からは、1 mmまでの沈殿部分とフローテーションで、海産微小貝類を少数確認できた。これらは、前述したウミナナ類に付くツボミガイや混獲のアラムシロの他に、内湾泥底に生息するカワグチツボ、内湾砂泥底のシママツボ・カイコガイダマシ？、同じ環境で海藻等に付くウネハマツボ・ブドウガイ、河口域から淡水域に生息するイシマキ・ヒメカノコの4種類のものが認められた。

カワグチツボは、アシ原に生息するカワザンショウガイ類と共に、関東地方の縄文貝塚では焼けた個体が多く出土し、枯死アシの利用（黒住1994）や“製塩”（加納2001）を示していると考えられており、福島県南相馬市の浦尻貝塚ではこの利用が縄文前期末には行われていたことも示されている（黒住2008）。しかし、今回のサンプル中からは、カワザンショウガイ類は得られず、カワグチツボも焼けていなかったため、この種はオキシジミ内の死殻として貝塚に持ち込まれた可能性も考えられる。シママツボ・カイコガイダマシ？も、確認個体数が極めて少なく、ハマグリ等の死殻由来と考えられる。海藻等に付く2種は、同じサンプル中に認められたことから、海藻採集に由来する可能性もあろう。

アマオブネ科に属するイシマキとヒメカノコは、ヤマトシジミやオキシジミの混獲物（死殻内に生息）の可能性もあるが、明瞭な貝製品の報告はないが、陸平貝塚ではヒメカノコの殻頂部を穿孔した可能性のある個体を得られている（黒住、準備中）。また、同じアマオブネ科では殻頂部や体層部を研磨した製品が関東地方の貝塚からも得られている（黒住2004、忍澤2007）。イシマキ・ヒメカノコの貝製品およびその素材としての検討も必要であろう。

表4. 大谷貝塚の土壌サンプルからフロロエーション法（浮遊部分）により抽出された貝類遺体の詳細.

サンプル番号 層名 土壌量 (cc) / 土壌重量 (kg)	#27 335層 3800 / 2.85		#22 313層 4100 / 3.12		#16 314層 3250 / 2.39		#12 380層 2950 / 2.12		#11 308層 3100 / 1.89		#4 305層 4000 / 2.47		
	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	NMI	
陸産貝類													
ミジンヤマタニシ	7lj, 8mj, 5sj	20	3a, 6lj, 8mj, 1sj, 1u	19			1lj, 2mj	3	1a, 2lj, 3mj	6			
ヒタリマキゴカイ	21a, 2ab, 4lj, 8u, 1w, 1mj, 1sj, 6u	33	15a, 5ab, 4lj, 1mj, 1sj, 6u	26	16	9a, 3ab, 3lj, 4u	80a, 6ab, 8lj, 3mj, 1mj, 1sj, 18u	110	61a, 1ab, 8lj, 3mj, 6sj, 19u, 3w	97	3a, 1lj	4	
スズケシガイ	2a, 3mj, 1u, 1w	6	1a, 1mj, 2sj	4	7	3a, 1lj, 2mj, 1u	17a, 2ab, 6lj, 15mj, 6sj, 13u	57	13a, 5lj, 1lj, 20mj, 1mj, 15sj, 9u	62		24	
ヒメギセル	1lj	19	1a, 1ab, 1lj	3	8	1a, 2ab	2a, 3ab	18	3a	47	2a, 3ab, 1lj, 2u	49	
キセルガイ類(小形)	2mj, 11sj, 5u, 3w		8mj, 4mj, 86sj, 20u	114		1mj, 5sj, 1sj, 2u	2mj, 12sj, 1sj, 4u		2mj, 3asj, 8u, 2w		19mj, 1mj, 18sj, 2sj, 8u		
ヒカリギセル					2	1a	1a, 1ab, 2u, 1w	10	1lj, 1w	17			
キセルガイ類(中形)						1u	4sj, 3u		11sj, 5u		1sj	1	
オカチヨウジガイ	2sj	2	2sj, 2u	2	3	3sj	2lj, 2mj, 1mj, 36sj, 10u	53	1a, 4lj, 9mj, 57sj, 5u	76	1mj, 3sj, 1u	5	
ホソオカチヨウジガイ	3lj, 3mj, 5sj, 1sj, 2u	13	2ab, 1lj, 4mj, 12sj	19	17	1ab, 2mj, 11sj, 4u	1lj, 1lj, 2sj	4	1mj, 7sj	8	5lj, 1lj, 2mj, 1sj, 2u	11	
オカチヨウジガイ類(卵)			1			1			2				
ナタネガイ?			1lj	1			1lj	1					
ナタネガイ類(中形)			6lj	6		1lj	3a, 14lj	17	2a, 12lj, 6mj, 2sj	22		1lj, 2mj	3
カサキビ							1a, 4lj, 1lj	6	1a, 1lj, 1sj, 1u	4			
ヒメハラムキビ	2sj	2				2lj, 1sj	3a, 20lj, 12mj, 1sj, 4u	40	3a, 19lj, 1lj, 20mj, 3mj, 11sj, 3u	56	7lj	7	
キビガイ			2lj, 1lj, 1mj, 1sj	5		1mj	2a, 11lj, 2u	15	2a, 12lj, 6mj, 3sj, 2u	25		3	
タカキビ						1lj							
ウメムラシタラ									1lj, 1sj	2	1mj	1	
ヒメベッコウマイ			1a, 4lj, 1mj	6		3lj	14lj, 1lj, 2mj, 2u	19	1a, 10lj, 9mj	20	3lj, 1lj, 1mj	5	
ヒメベッコウ類			3lj, 7mj, 2sj, 2u, 1w	14		1a, 4lj, 6mj	1a, 14lj, 14mj, 2sj, 1u	32	2(2c, 3), 14mj, 4sj, 4u	46	1(1, 5c, 3), 2u	14	
ハクサンベッコウ類													
ナミヒメベッコウ類?									2lj, 3sj	3	2lj, 3(2c, 2c), 1sj	1	
ウラジロベッコウ	1u	1	1sj	1			1a, 1mj	2					
ヒメコハクガイ類	3a, 14lj, 14mj, 1sj, 1u	33	2a, 21lj, 1lj, 27mj	51		1lj	2lj, 1mj, 1sj	4					
ニッポン/エンズイマイ			1u	1			2lj, 1lj, 1sj	4	2lj, 1mj	3	5lj	5	
エンズイマイ	1lj	1				1lj							
ヒタチマイ?						1sj	4sj, 1sj, 2u	5	1sj	1			
ヒタチマイ						1sj	9sj	9	4sj, 1sj, 2u	6			
カワグチツボ							1u	1			1a	1	
ウネハツツボ							1mj	1					
ブドウガイ							1lj	1					
その他													
炭(5mm以上)	16		30			39	51		24			14	
根(5mm以上)	19		9			7	4		18			9	
双翅目(蛹殻)												1	

a: 成貝, b: 体層, c: 色彩残り, l, j: 大形幼貝, m, j: 中形幼貝, s, j: 小形幼貝, u: 殻頂, w: 螺層.

4. 海域環境変遷等

今回確認された種(表1)の多くは、現在も東京湾等の内湾に生息する種であり、種組成から前期、中期とも、このような内湾環境にあったと考えられる。ただ、この中で現在銚子以北から現生種の分布記録のない「温暖種」に、ハイガイ・コゲツノブエとヒメカノコの3種が存在した。ハイガイの縄文時代から分布域の縮小は著名であるが、後の2種も松島(1984)により同様な現象が指摘されている。ヒメカノコは、近接した霞ヶ浦南西岸の縄文後期の上高津貝塚からカノコガイの一種で報告されている(黒住1994)。コゲツノブエも最近房総半島洲崎を越えた九十九里浜の縄文中期の境貝塚から確認された(西野・黒住2008)。霞ヶ浦周辺等では縄文中期に、このような温暖種が残存していたことが明らかとなってきた。

食用貝類でも述べたが、当貝塚でもナミマガシワが少数ながら中期の貝層から得られている。本種は、霞ヶ浦沿岸の貝塚(加納1992等)を含む関東地方の比較的多くの貝塚から出土している(酒詰1961)。しかし、例えば東京湾東岸、小櫃川河口干潟における貝類の生態分布でも本種は潮間帯から確認されておらず(大嶋・風呂田1980)、東京湾の調査では潮下帯から確認されており(黒住・土田2003)、現在は主に潮下帯に生息している種と言える。このような潮下帯に生息している種で、関東周辺の貝塚から比較的多く出土している種はほとんど認められない。

一方で、潮位変化の少ない日本海側の島根県中海周辺海域(境水道)において、本種は潮間帯の礫地に高密度で生息している例が認められた(図3)。現在の中海周辺(境水道)での状況と類似したナミマガシワが潮間帯礫地に生息するような現象が、当貝塚を含め関東地方の縄文時代に存在していた可能性も想定されよう。縄文時代においても太平洋側の潮位は現在と同様と考えられるので、ナミマガシワの潮間帯礫地生息という現象は、環境の変化というよりも、貝類の側の生態の変化と考えられるのではないだろうか。

5. 陸産微小貝類

今回のサンプルからは、10科25種の陸産貝類が確認され、大部分はフローテーション法で得られ、沈殿部分からは破損を受けたものを中心に少数が得られただけであった(表2, 4)。全ての個体は焼けていなかった。その優占種組成(図4上)では、下部の前期(#27/22)で林内生息種のみジンヤマタニシが特徴的に認められ、林内生息種のヒメギセルや林縁生息種のヒダリマキゴマガイ、開放地生息種のヒメコハクガイ類・ヒメベッコウ属類似属も多い。それが中期後葉(#16/12/11)では、林内生息種としてスジケシガイが多くなり、ヒ



図3. 島根県中海周辺(境水道)におけるナミマガシワの生息状況。
左: 松江市福浦, 右: 同森山(2008.12.1撮影)

ダリマキゴマガイ・オカチョウジガイの割合も増加し、前の時代とは組成が変化していることがわかる。#16と#12・11との比較では、同属のオカチョウジガイ類で、前者で開放地生息種のホソオカチョウジが優占していたものの、後者ではこの種がほとんど見られず、オカチョウジガイが優占しているという違いも認められた。中期後葉の純貝層（#4）では、またヒメギセルが約40%と最も多くなり、ヒメベッコウ類似属・ホソオカチョウジも高い割合であった。

これを生息場所類型で示したものが図4下である。その結果は3つの生息場所類型がおよそ1/3ずつという、時期別に極めて明瞭な変化を示すものではなかった。ただ、#16で林内生息種が減少し、#12・11では林縁生息種が多く、開放地生息種が極めて少なく、#4では林内生息種が半数を占めているという相違は認められた。

筆者は、これまで千葉県北部の縄文早期末の地点貝塚の微小貝類遺体を検討した結果、開放地生息種がほとんどを占める組成を報告してきた（黒住2003, 2005）。また、同地域の前期貝塚で報告のあった陸産貝類も開放地生息種であり、詳細な組成の報告されていた縄文前期の滋賀県石山貝塚（丹・塚本1956）でも開放地生息種が多いと考えられた。このことから、縄文前期まで、開放地生息種が分布する草原的な環境が広がっていたのではないかと想定し、これまでも神奈川県東部の縄文前期/茅ヶ崎貝塚の斜面貝層でもゴマガイ類等の多い組成が報告されていたが（忍澤2001）、今回の組成ほど林内生息種が優占する状況ではなく、その検証として縄文時代の古い時代の斜面貝層での検証が必要であるとしてきた。

今回の結果は、少なくとも本地域では縄文前期中葉には、中期と同様な陸産貝類組成が認められ、遺跡周辺

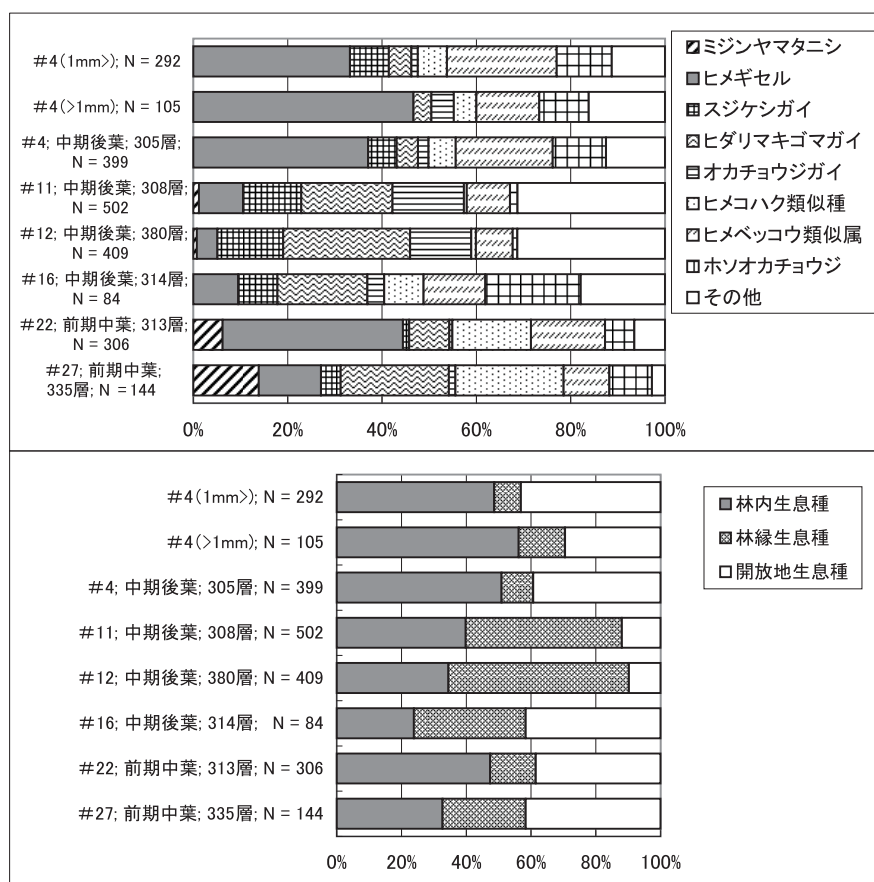


図4 . 大谷貝塚の土壌サンプルから得られた微小陸産貝類の組成変化 .
上：優占種組成，下：生息場所類型組成

の環境は両時期で林が存在しており、草原的な環境が広がっていた可能性はかなり低いと考えられた。今後、更に早期から前期貝塚のデータが集積されることが望まれる。

6. サンプルング方法等について

今回、土壌サンプルの水洗選別で、4サイズのメッシュで沈殿部分を篩い、同時にフローテーション法で0.5mm未満のメッシュネットで浮遊部分を回収した。その結果、食用貝類の検討には、およそ4.0mmまででほとんどの個体が得られていた(表2)。これは、関東地方の貝塚で対象とされていたサイズクラスであり(例えば西野1998, 樋泉2004等)、サンゴ礁域の砂丘遺跡でも4.0mmで食用貝類が得られることを報告されており(黒住1996)、今後も、この程度のメッシュサイズで処理されることが望まれる。

ただ、詳細に抽出するために、小形の殻頂部片も比較的多く得られる。そのため、サイズ組成を求める場合、完形のみならず、これらの破片も対象とせねばならない。一方、今回、表3で欠損部分があり、推定値を求めたものを区別して示したが、当然のことであろうが、大形個体で高率になっていた。これらに影響されずにサイズを復元するためには、これまでも行われてきたように(例えば久保1988, 阿部・加藤2003等)、殻サイズと残存部位の相関を求めることが必要になる。その一例として、今回は破損の多かった薄質のシオフキで、弾帯受幅と殻長の関係を図5に示した。この弾帯受幅は、バカガイでも行われ、計測部位として多少安定性に欠けることを指摘したが(黒住ら2007)、およその殻長復元としては、他の部位より残存率が高く、計測個体数が比較的多くなり、相関係数も低い訳ではなく、十分に利用できると思われる。優占種のサイズ組成に関しては、今後もこのような復元が必要であろう。

また、今回は3-4リットルの土壌から抽出を行ったが、図1に示したように食用貝類でも貝層断面で認められた優占種の傾向をより明らかにでき、組成変化も明瞭であった。

フローテーションを行うことによって、沈殿部分の表2と浮遊部分の表4で、かなり高率で陸産貝類が回収できることが示された。ただ、上高津貝塚の例でも同様であったが(真貝1994, 黒住1994)、キセルガイ類成貝等は出現個体数が少ないため、沈殿部分の検討も必要であろう。今後、フローテーション法を行うことにより、抽出の効率化を図ることができよう。

従来陸産貝類の抽出で対象とされていた沈殿部分の1mmからの抽出と、今回も用いた黒住(1997)のフローテーション法との相違を見積もるために、今回は#4のサンプルをフローテーション法で回収・分離した後、1mmメッシュで篩い、1mm以上と未満を比較した。その結果を、表4と図3に示した。1mm未満でスジケシガイやヒメベッコウ類似属の増加が認められたものの、種組成と生息場所類型組成とも極めて大きな相違は見られないようであった。今回の種組成は関東・南東北地方と類似したものであり(例えば黒住1994・2008等)、メッシュサイズの影響はそれ程大きなものではないのかもしれない。ただ、同様なフローテーション法で回収したサンプルの異なるメッシュサイズでの分離を沖縄島の遺跡で行った例では、サイズごとにかなり異なった結果が得られており(黒住2007)、メッシュサイズの影響は画一的なものではないと考えられる。

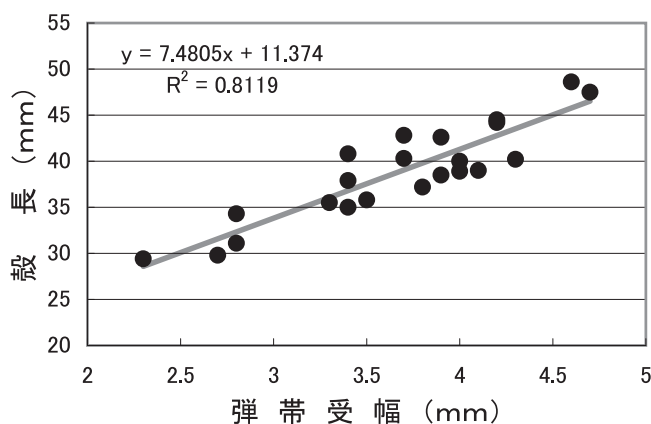


図5. 大谷貝塚におけるシオフキの弾帯受幅と殻長の関係

謝辞：財団法人茨城県教育財団の駒澤悦郎氏には発掘調査全般と報告書作成で、越川欣和氏と美浦村文化財センターの中村哲也氏には発掘調査で、早稲田大学の樋泉岳二氏にはサンプリング時や縄文貝塚の様々な情報のご教示で、大変お世話になった。これらの方々に記して御礼申し上げる。本報告は、明治大学学術フロンティア「環境変遷史と人類活動に関する学際的研究」(代表者：杉原重夫)の成果の一部である。

引用・参考文献

- 阿部常樹・加藤久雄 2003 近世江戸府内遺跡出土ハマグリサイズの推定法・史紋,(1): 37 - 44
- 池原喜美江 1977 貝類遺存体・渡喜仁浜原貝塚調査報告書 [I], 今帰仁村文化財調査報告書,(1): 46 - 63, pls .15 - 17
- 金子浩昌 2007 動物遺体・万田貝殻坂貝塚発掘調査報告書, pp .132 - 219, 239
- 加納哲哉 1992 貝類・於下貝塚発掘調査報告書, pp .102 - 132, pls 22 - 26
- 加納哲哉 2001 微小動物遺存体の研究・國學院大學大学院研究叢書, 文学研究 7
- 川名 興 1988 日本貝類方言集・未来社, 東京
- 久保和志 1988 ハマグリ殻長推定に関する一試論・古代文化, 40(5): 219 - 227
- 黒住耐二 1987 出土したキバウミナ類の特徴, 特に破損形態について・石川市古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書,(84): 346 - 358
- 黒住耐二 1994 柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体・慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報,(9): 291 - 317, pls 34 - 36
- 黒住耐二 1996 用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体(予報)・用見崎遺跡, 研究室報告,(31): 31 - 37・熊本大学考古学研究室
- 黒住耐二 1997 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体・用見崎遺跡Ⅲ, 考古学研究室報告,(32): 33 - 41・熊本大学考古学研究室
- 黒住耐二 2003 縄文時代早期の龍水寺裏遺跡の炉穴内貝層から得られた微小陸産貝類・龍水寺裏遺跡・(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書,(208): 181 - 182
- 黒住耐二 2004 千葉県井野長割遺跡の盛土部貝塚から出土した微小貝類・井野長割遺跡(第5次調査), pp .5 - 8, pl 37
- 黒住耐二 2005 千葉県太田長作遺跡の土坑内貝層から出土した微小貝類・太田長作遺跡(第2次)・(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書,(222): 196 - 200
- 黒住耐二 2007 今帰仁城跡周辺遺跡から得られた貝類遺体(その2)・今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ, 今帰仁村文化財調査報告書,(24): 283 - 290
- 黒住耐二 2008 微小貝類・浦尻貝塚3, 第2分冊 自然遺物編, 南相馬市文化財調査報告書,(11): 137 - 152
- 黒住耐二・岡本正豊 1994 a 千葉県市原市の貝類・市原市自然環境実態調査報告書, pp .7 - 34
- 黒住耐二・岡本正豊 1994 b 千葉市の貝類に関する中間報告2・千葉市野生動物植物の生息状況及び生態系調査報告, pp 270 - 301
- 黒住耐二・樋泉岳二・山根洋子・西野雅人・鶴岡英一 2007 港区芝の雑魚場跡鹿島神社境内地点から得られた動物遺体 - 近世のパカガイ貝剥きの検証・港区立港郷土資料館研究紀要,(9): 11 - 26
- 黒住耐二・土田英治 2003 東京湾における上部浅海帯の現生海産貝類相 底曳網漁による調査から 多摩川水系の貝類から見た自然環境の現状把握と保全に関する研究,(財)とうきゅう環境浄化財団・研究助成・学術研究, 31(226): 116 - 119
- 真貝理香 1994 貝類遺体・慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報,(9): 161 - 189, pls 31 - 33
- 松島義章 1984 日本列島における後水期の浅海性貝類群集 - 特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷 - . 神奈川県立博物館研究報告(自然科学),(15): 37 - 109
- 西野雅人 1997 ウミナ類の身を取り出す2つの方法・研究連絡誌,(50): 1 - 7・(財)千葉県文化財センター
- 西野雅人 1998 自然遺物・貝層サンプルの分析結果について・千葉県東南部ニュータウン19, 有吉北貝塚Ⅰ(旧石器・縄文時代), 第1分冊, 千葉県文化財センター調査報告,(324): 529 - 576, 582 - 598
- 西野雅人・黒住耐二 2008 貝類・境貝塚・山の台遺跡・儘田台遺跡・殿田古墳, (財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書, 第1分冊,(101): 274 - 279, 283
- 大嶋 剛・風呂田利夫 1980 小櫃川河口干潟周辺における底生動物の分布・木更津市小櫃川河口干潟の生態学的研究Ⅰ, pp 45 - 69
- 忍澤成視 2001 横浜市茅ヶ崎貝塚の貝層・茅ヶ崎貝塚, 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告,(28), 貝塚編・図版編 .49pp. + 5pls
- 忍澤成視 2007 骨角貝製品・市原市西広貝塚Ⅲ, 市原市埋蔵文化財センター調査報告書,(2): 863 - 1071, pls .126 - 178
- 酒詰仲男 1961 日本縄文石器時代食料総説・土曜会, 京都
- 丹 信實・塚本圭一 1956 自然遺物・滋賀県石山貝塚研究報告書,(1): 7 - 17, pls 31 - 37
- 樋泉岳二 2004 貝層出土の動物遺体・陸平貝塚, 陸平研究所叢書,(1): 44 - 70
- 樋泉岳二・黒住耐二・山谷文人・切通雅子 2000 貝類遺体・中里里塚, 北区埋蔵文化財調査報告書,(26): 99 - 1711, pls 26 - 30
- 山田敏史 2001 コラムサンプルと動物遺存体の分析・成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書, 第2分冊, pp 21 - 52, pls 24 - 27

大谷貝塚の貝層サンプルから得られた動物遺体

樋泉 岳二（早稲田大学）

はじめに

大谷貝塚は、茨城県美浦村、霞ヶ浦南岸に位置する縄文時代前期から中期の遺跡である。当貝塚では2006年度に行われた財団法人茨城県教育財団による発掘調査において、縄文時代前期から中期にわたって堆積した大規模な貝層が検出され、筆者は貝層のサンプルを採取・分析する機会を得た。ここでは、その貝層サンプルから検出された動物遺体（貝類遺体および脊椎動物遺体＝骨類）の分析結果を報告する。

なお調査・分析に際しては、駒澤悦郎氏をはじめ財団法人茨城県教育財団の方々、美浦村教育委員会の中村哲也氏、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏、国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏より多大なるご助力・ご教示を賜った。阿部きよ子氏、島田裕子氏、大津則子氏には骨類の拾い出しにご協力いただいた。報告に先立ち、厚く御礼申し上げる。

1. 分析試料

ここで報告する貝層サンプルは、2007年1月26日と2月21日に MOK - 18 - KB 2 b4 グリッドから採取したものである。サンプル採取地点の層準と考古代およびサンプル内容物の概要を表1に示した。

採集地点の層序は、下部から335層（少量の貝を含む土層：縄文前期中葉、植房式期）、313層（混土貝層：植房式期）、314層（微量の貝を含む土層＝前ノ中期貝層の間層：縄文中期後葉、中峠式期～加曾利E I 古式期）、380層（混貝土層：縄文中期後葉、加曾利E II 式期）、308層（少量の貝を含む土層：加曾利E II 式期）、305層（純貝層：加曾利E II 式期）である（考古代は駒澤悦郎氏のご教示による）。

貝層サンプルは平面積40cm×40cmの柱状サンプルとし、これを堆積層序に沿って区分して採取した（ただし同一の堆積単位が厚い場合は便宜的に区分した）。採取した各サンプルは、乾燥重量を計量した後、5mm、2.5mm、1mmのフルイを用いて水洗し、水洗後の残留物についても乾燥重量を計量した。

これらのサンプルの中から、層序・年代および内容を考慮して、代表的と思われる9サンプル（No4、No8、No10、No12、No16、No18、No22、No26、No30）を抜粋し（表1）、回収された動物遺体を分析した。貝類遺体については5mmメッシュ上で回収された資料（以下「5mm資料」）のみ、脊椎動物遺体（骨類）は全てのメッシュ上から回収された資料を分析対象とした。貝層サンプルの水洗作業および水洗後資料からの動物遺体の抽出作業は美浦村教育委員会の中村哲也氏に依頼し、同氏の指導のもとに行われた。

2. 分析方法

貝類遺体については、中村哲也氏に予備的な同定を依頼し、筆者が結果を確認した。二枚貝は殻頂、巻貝は殻口を残す資料を同定対象とした。今回は詳細な計測はできなかったが、優占種であるハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリ・オキシジミ・シオフキ・サルボオ・マガキについては、主体となるサイズを記録した。

脊椎動物遺体のうち魚類遺体については、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、主鰓蓋骨、椎骨の全資料およびその他同定可能な資料を同定対象資料とした。両生類・爬虫類・哺乳類では部位の判定可能な資料を同定対象資料とした。同定方法は、現生標本との比較によって行った。同定に用いた比較参照標本としては、筆者の所蔵標本のほか、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）の所蔵標本も参照させていただいた。2.5mm・1mm資料の観察は実体顕微鏡下で行った。魚骨については、貝層サンプル水洗前後の重量差を土壌重量とみなし、

土壌 1 kgあたりの魚骨検出数（同定対象部位のみ）を求めて「包含密度」とした。

3. 分析結果

(1) 貝類遺体

同定結果の一覧を表3，量的な組成の変遷を図1に示した。同定された分類群数は，腹足綱（巻貝）12，二枚貝綱15，計27である（表2）。以下に貝類の組成・サイズの変遷を記載する。なお貝類遺体については，筆者の採取したサンプルの隣接地点で黒住耐二氏が採取したサンプルに関する詳細な報告（本報告書）があるので参照されたい。

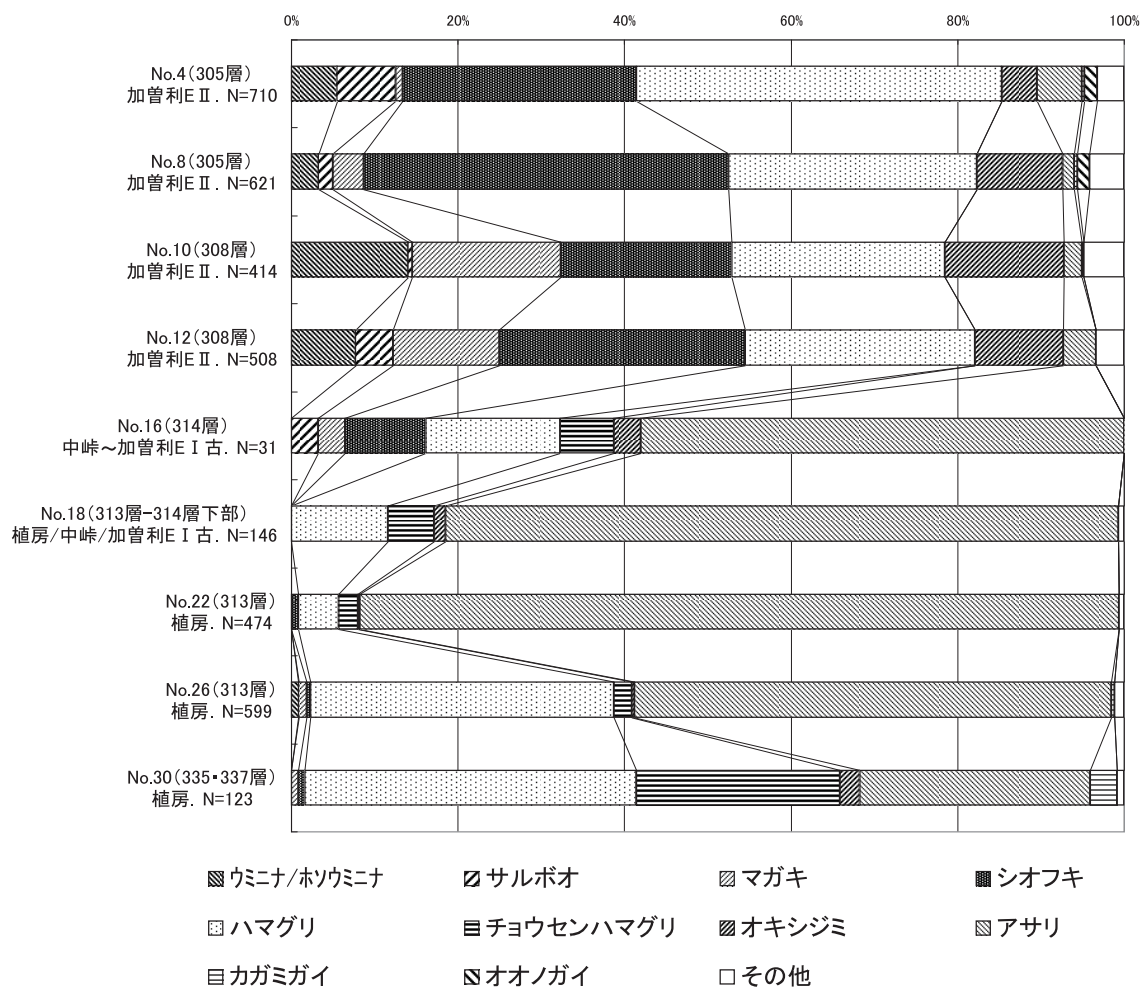


図1. 大谷貝塚貝層柱状サンプル（桶泉採取）出土貝類の組成変遷

縄文前期（植房式期）：試料No30～No18

縄文前期層準下部（335層）の試料No30ではハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリが組成の大半を占める。カガミガイ・オキシジミもやや多い。前期層準上部（313層）の試料No26～No22ではハマグリ・チョウセンハマグリが急減し，アサリが圧倒的多数を占めるようになる。また前期層準では，少数ではあるがハイガイ・フトヘナタリがみられる点も特徴である（表3）。試料No18は縄文前期（313層）と中期（314層）の境界層準の試料だが，組成は313層上層（試料No22）とほぼ同様であり，貝殻は前期貝層に由来するものと推定される。

優占種の中心的なサイズを表4に示した。ハマグリは殻長2.5～5 cm前後の小型～中型の個体が大半を占め

表2. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)から検出された動物遺体種名一覧

軟体動物門	Mollusca	オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i>
腹足綱	Gastropoda	脊椎動物門	Vertebrata
スガイ	<i>Turbo (Lunella) cornatus creensis</i>	軟骨魚綱(板鰓亜綱)	Chondrichthyes (Elasmobranchii)
イシマキガイ	<i>Clithon retropicta</i>	アカエイ科	Dasyatidae
ウミナナ	<i>Batillaria multiformis</i>	硬骨魚綱(真骨亜綱)	Osteichthyes (Teleostei)
ホソウミナナ	<i>B. cumingii</i>	マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
イボウミナナ	<i>B. zonalis</i>	コノシロ	<i>Konosirus punctatus</i>
フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i>	ウナギ属	<i>Anguilla sp.</i>
ヘナタリ	<i>C. (Cerithideopsis) cingulata</i>	サヨリ属	<i>Hyporhamphus sp.</i>
カワアイ	<i>C. (C.) djadjariensis</i>	ボラ科	Mugilidae
イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>	スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	キス属	<i>Sillago sp.</i>
アラムシロ	<i>Niotha livescens</i>	ブリ属?	<i>Seriola sp. ?</i>
ムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>	アジ科(マアジ?)	Carangidae (cf. <i>Trachurus japonicus</i>)
二枚貝綱	Bivalvia	クロダイ属	<i>Acanthopagrus sp.</i>
サルボオ	<i>S. kagoshimensis</i>	サバ属	<i>Scomber sp.</i>
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	ハゼ科	Gobiidae
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>	ギンボ類	cf. <i>Enedrias nebulosa</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	コチ科	Platycephalidae
バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>	ヒラメ科	Paralichthyidae
シオフキ	<i>M. veneriformis</i>	カレイ科	Pleuronectidae
イチョウシラトリ	<i>Pistris capsoides</i>	両生綱	Amphibia
マテガイ	<i>Solen strictus</i>	カエル類	Salientia
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	爬虫綱	Reptilia
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	ヘビ類	Ophidia
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	哺乳綱	Mammalia
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	モグラ科	Talpidae
チョウセンハマグリ	<i>M. lamarckii</i>	ハタネズミ亜科	Microtinae
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	ネズミ亜科	Murinae

(右段に続く)

る。チョウセンハマグリは殻長3~4cm程度の小型個体が主体だが、最下層(試料No26・30)では殻長7~8cmの大型個体もみられた。アサリは殻長2~3cm前後の小型の個体が主体をなすが、大きさにはかなりのばらつきがあり、数は少ないが4cmを超える大きなものや1cm程度のごく小さいものもみられた。オキシジミは殻長3~3.5cm前後、シオフキは殻長3.5~4cm前後である。

縄文中期(中峠式~加曽利E I式~加曽利E II式期): 試料No16~No4

縄文中期層準下部(314層:中峠式~加曽利E I式)の試料No16では、アサリが主体を占め、ハマグリ・チョウセンハマグリが多い点は前期層準と共通する。一方で、シオフキ・サルボオ・マガキが普通である点は、以下に述べる中・上部(380層~305層)と類似する。本層準の年代は中峠式~加曽利E I式と推定されているが、上記の点および本層が間層(土層)であることからみて、少なくとも貝類の多くについては、この時期に採集されたものというよりは、上下の層から混入したもの(前期の貝を主体として、中期のものが混在)である可能性が高いと推定される。

縄文中期層準中部~上部(380層~305層:加曽利E II式期)の試料No12~No4では組成が一変する。すなわち、アサリが激減する一方で、ハマグリとシオフキが卓越するようになる。ウミナナまたはホソウミナナ(ウミナナが多い)・マガキ・オキシジミ・サルボオも増加する。ただし、最上部(305層:試料No8~No4)ではマガキは減少し、少数ながらオオノガイがみられるようになる。

上記以外に縄文中期層準では、少数ではあるが、スガイ、ヘナタリ、カワアイ、アカニシ、イボニシ、アラムシロ、ナミマガシワ、ヤマトシジミがみられる点も特徴である(表3)。

優占種のサイズ(表4)を見ると、ハマグリは縄文前期と同様に殻長2.5~5cm前後の小型~中型の個体が多いが、2cm前後のきわめて小型の個体も多く見られた。アサリは1.5~2.5cm前後のきわめて小型の個体が多く、ハマグリと同様に縄文前期に比べて小型個体が増加する傾向にあるらしい。一方、オキシジミ・シオフキは殻長3~4cm前後、サルボオは殻長3.5~4.5cm前後の比較的大型の個体が主体をなしており、ハマグリ・ア

表3. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)出土貝類の同定結果. 重量はg.

試料No.	腹足綱(巻貝類)														二枚貝綱										
	スガイ		イシマキ ガイ	ウミナ ホノ ウミナ	イボウミ ナ	ウミナ 属	ヘナ タリ	カワ アイ	ホ ヘナタリ	アカ ニシ	イボ ニシ	ムシロ ガイ	アラ ムシロ	キセル ガイ科	小計	ハイガイ		サルボオ		ナミ マガキ	マガキ		シオフキ		
	殻	蓋														L	R	L	R		L	R	L	R	L
4	個数	1	1	1	39	3	1		1	3	1	4	2	58			50	40	3	6	4	199	165		
	重量	2	1	1	31	2	1		1	18	4	1	1	64			300	220	4	3	5	325	270		
8	個数	11			20	2	2	1	1	1	2	1	1	42			11	7	3	23	18	272	224		
	重量	12			15	1	1	1	1	106	4	1	1	143			82	43	9	6	20	377	325		
10	個数				58	4	5	2	1		1	1	5	77			2		5	74	57	85	73		
	重量				42	2	2	1	1		1	1	1	51			8		13	104	39	103	67		
12	個数	1			39	5	0	3	2				3	4	57		19	23	3	65	49	150	147		
	重量	1			32	3		1	2				1	1	41		173	207	7	97	42	185	179		
16	個数													0			1				1	2	3		
	重量													0			11				1	1	4		
18	個数													0	1										
	重量													0	1										
22	個数									1			1	3									3	4	
	重量									1			1	3									8	10	
26	個数				5					2				7	2						6	4	3		
	重量				2					1				3	4						5	3	6		
30	個数													0	1	1					1	1	1		
	重量													0	1	3					1	1	2		
計	個数	13	1	1	161	14	8	6	5	3	2	6	2	10	12	244	4	1	83	70	14	175	134	715	616
	重量	15	1	1	122	8	4	3	5	2	124	9	2	5	4	305	6	3	574	470	33	216	111	1007	855

試料No.	二枚貝綱																				合計			
	バカガイ		イチョウ シラトリ		マテガイ		ウネナシ トマヤガイ		ヤマト シジミ		ハマグリ		チョウセン ハマグリ		オキシジミ		アサリ		カガミガイ		オオノガイ		小計	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				
4	個数	1			1			1	1	1	305	312			30	28	30	38	1	2	11	4	1233	1291
	重量	2			1			1	1	1	530	533			72	77	8	11	18	11	7	4	2404	2468
8	個数	1									185	178			55	64	9	6	1	2	8	9	1076	1118
	重量	2									394	399			192	228	4	8	3	12	7	6	2117	2260
10	個数	1									106	97			59	30	9	8	1				607	684
	重量	3									173	188			118	64	9	6	14				909	960
12	個数										126	140			54	54	20	14					864	921
	重量										314	421			163	163	7	5					1963	2004
16	個数										5	4	2	2	1		18	17					56	56
	重量										5	3	5	2	3		9	8					52	52
18	個数										17	13	5	8		2	118	109					273	273
	重量										32	20	8	7		2	67	69					206	206
22	個数	1									21	23	11	8	1		432	391					895	898
	重量	1									44	61	17	19	1		357	310					828	831
26	個数		2				1				196	218	13	13	2	1	337	343	2	1			1144	1151
	重量		3				1				441	386	22	73	4	4	308	313	12	11			1596	1599
30	個数										39	49	30	15	2	3	34	34	2	4			217	217
	重量										43	117	82	40	1	6	23	26	27	30			403	403
計	個数	4	2	0	1	0	1	1	0	1	1000	1034	61	46	204	182	1007	960	7	9	19	13	6365	6609
	重量	8	3	0	1	0	1	1	0	1	1976	2128	134	141	554	544	792	756	74	64	14	10	10478	10783

表4. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)における主要貝種の主体となる大きさ(cm).

種類	計測位置	No4	No8	No10	No12	No16	No18	No22	No26	No30
ハマグリ	殻長	2.0~5.0	2.0~5.0	2.0~5.0	2.5~5.0	2.5~3.5 (少数)	2.5~5.0	2.5~5.0	2.5~5.0	2.5~5.0
チョウセンハマグリ	殻長	-	-	-	-	-	3.0~5.0?	3.0~3.5	2.5~4.0 +8.0	3.5~7.0
アサリ	殻長	1.5~2.5	1.5~2.5	2.5~3.0 (少数)	1.5~2.5	1.5~2.5	1.5~3.0	2.0~3.0	2.0~3.0	2.0~3.0
オキシジミ	殻長	3.0~4.0	3.0~4.0	3.0~4.0	3.0~4.0	3.ㄨ(1点)	2.ㄨ(1点)	2.ㄨ(1点)	3.0~3.5	3.ㄨ(1点)
シオフキ	殻長	3.0~4.0	3.0~4.0	3.0~4.0	3.0~4.5	3.ㄨ(1点)	-	3.5~4.0	3.0~4.0	-
サルボオ	殻長	3.5~4.5	3.5~4.5	約3.5	3.5~4.5	4.ㄨ(1点)	-	-	-	-
マガキ(左殻)	殻高	2.5~3.5	2.5~4.0	2.5~3.5	2.5~3.5	-	-	-	約2.0	-

サリとは傾向が異なる。マガキは殻高2.5~3.5cm前後の小型個体が主体である。

(2) 魚類遺体

同定結果の一覧を表5・6に示した。大半は2.5mmメッシュおよび1mmメッシュからの回収資料で、5mmメッシュからの回収資料はごく少ない。同定された標本数(NISP:表7)の合計は688点、特定できた分類群数は板鰓類(エイ・サメ類)1,真骨類16である(表2)。他に詳細な分類群を未特定の資料が若干ある。以下に魚骨の包含密度と組成の変遷を記載する。

縄文前期(植房式期):試料No30~No18

魚骨の包含密度(土壌1kgあたりの同定対象魚骨数)をみると、下部(335層)の試料No30では12.6と少ないが、上部(313層)の試料No26・No22では61.2~97.5と急増する(表7)。組成(図2)をみると、ニシン科(種を同定できた資料はマイワシが大半を占めるが、少数ながらコノシロも見られる)が80%前後と圧倒的に優占し、スズキが5~18%でこれに次ぐ。ほかにサバ属・キス属・板鰓類(歯でアカエイ科が確認されている)も普通である。なお、試料No30の「真骨類(未同定)A」とした歯は、确实ではないがサワラ属のものである可能性が高い。

縄文前期(313層)と中期(314層)の境界に位置する試料No18でも魚骨の包含密度は52.5と高く(表7)、組成も313層上層(試料No22・26)とほぼ同様であり(図2)、貝と同様に、魚骨についても前期層準に由来するものである可能性が高い。

縄文中期(中峠式~加曽利E I式~加曽利E II式期):試料No16~No4

下部(314層:中峠式~加曽利E I式)の試料No16では、魚骨の包含密度が28.9と急減する(表7)。組成は基本的に前期層準と同様だが、ウナギ属・ボラ科がみられる点は、以下に述べる上部層(308層~305層)と類似する(図2)。このことから魚骨についても、貝類と同様に、この時期に採集されたものというよりは、上下の層から混入したもの(前期のものを主体として、中期のものが混在)である可能性が高いと推定される。

中部(380層~308層:加曽利E II式期)の試料No12・No10では、魚骨の包含密度は14.8~16.0とさらに低下する。組成(図2)はニシン科(種を同定できた資料はマイワシのみ)が引き続き圧倒的に優占するが、その比率は60%前後に低下する。板鰓類・サバ属は消滅し、替わってウナギ属・ボラ科・ハゼ科が増加する。

上部(305層:加曽利E II式期)の試料No8・No4では、魚骨の包含密度は37.8~32.3とやや増加するが、前期に比べるとはるかに低い。組成(図2)は、ウナギ属がさらに増加して2割前後を占めるようになり、ギンボラ科が出現する。いっぽう、ボラ科・スズキ・キス属はほぼ消滅する。

以上の他に中期層準では、少数ながらアジ科(おそらくマアジ)・カレイ科がみられる点も特徴である。

(3) 両生類・爬虫類・哺乳類

両生類では試料No18から小型のカエル類4点が、爬虫類では試料No16・No10からヘビ類の椎骨各1点が検出された(表5・表6)。いずれも少数であり、自然の遺骸と推定される。鳥類は確認されなかった。

哺乳類ではモグラ科、ネズミ科(ハタネズミ亜科・ネズミ亜科)、イノシシまたはシカが同定されたほか、種同定未了の小型哺乳類が若干みられた(表5・表6)。モグラ科は試料No16から下顎骨1点が検出された。ネズミ科は、試料No18・No16・No10から検出された。とくに試料No16からは歯多数(臼歯はすべてハタネズミ亜科)と大腿骨がまとまって採集されている。その大半は同一個体のもので推定されるが、上顎切歯数から最小個体数は2個体である。ほかに、試料No18から臼歯3点(ハタネズミ亜科2点、ネズミ亜科1点)、試料No10から下顎切歯1点が検出された。モグラ科・ネズミ科はいずれも自然の遺骸の可能性が高いが、試料No16の

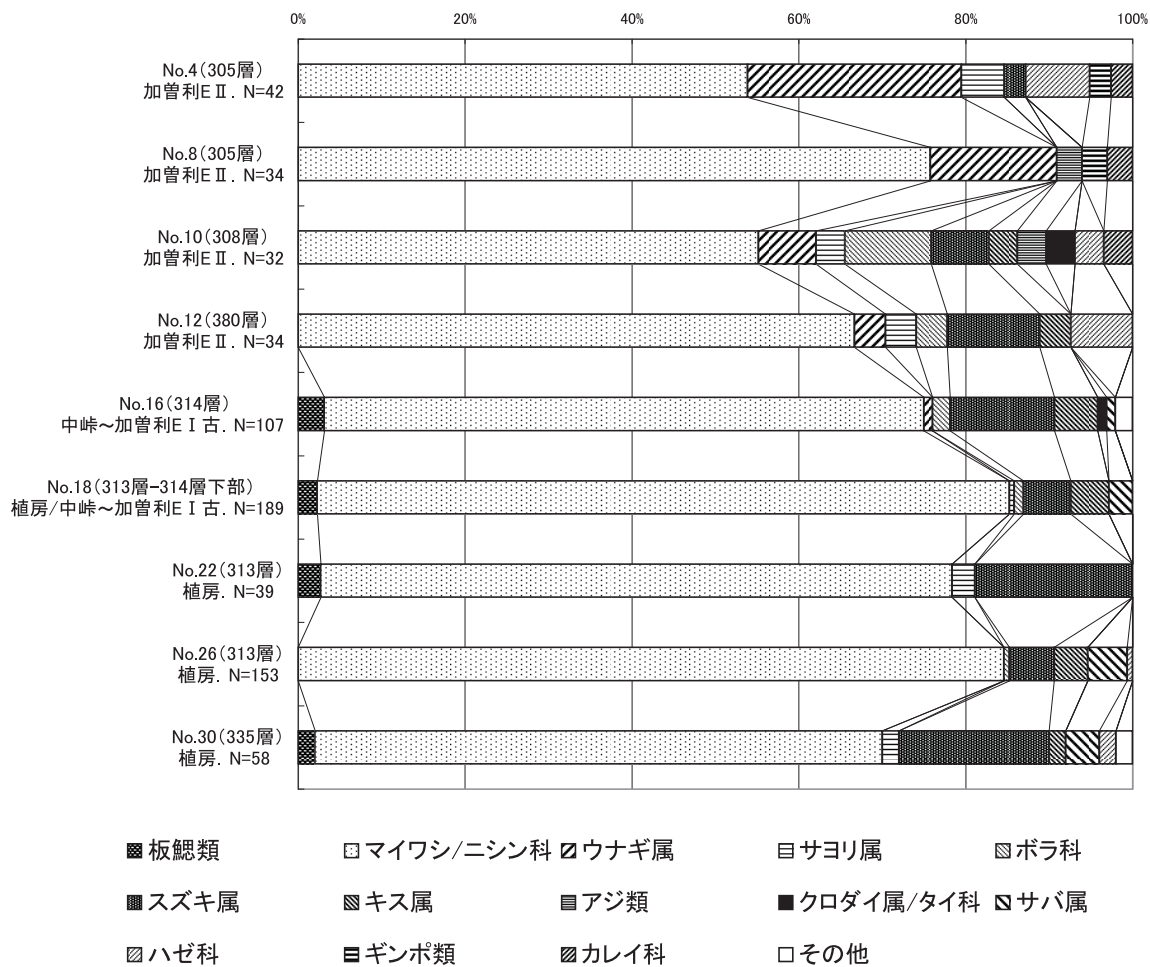


図2. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)出土魚類の組成. 5mm・2.5mm・1mm資料の合計によるNISP比.

表5. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取) 5mmメッシュ試料から検出された骨類の同定結果.

試料No	メッシュ	種類	部位	位置	左右	数	備考
4	5	カレイ科	尾椎			1	
8	5	カレイ科	尾椎			1	
10	5	ヘビ類	椎骨			1	
16	5	ヘビ類	椎骨			1	
18	5	スズキ	主鰓蓋骨	関節部	R	1	若魚
18	5	イノシシ/シカ	上腕骨	骨幹破片		1	
30	5	ヒラメ科	腹椎			1	若魚

ネズミ科は人為的に廃棄された可能性もある。以上のほかに、試料No.18からイノシシまたはシカの上腕骨骨幹破片1点、試料No.10・No.16から種同定未了の小型哺乳類の遊離歯が若干検出された。

4. 考察

先述の通り、貝類遺体については黒住耐二氏による詳細な考察がなされているので、ここではおもに魚類遺体に基づいて、遺跡周辺の水域古環境および魚類資源利用の様相について考察する。

a . 周辺の同時代遺跡との比較

今回得られた魚類遺体の内容を、周辺の縄文前・中期遺跡で、水洗選別採集された魚類遺体が報告されている事例として、美浦村陸平貝塚（A貝塚1997年調査資料。阿玉台I b～II式期）、麻生町於下貝塚（阿玉台式期～称名寺式期）のデータ（樋泉2004，加藤ほか編1992）と比較した。比較した項目は、魚骨の包含密度、5mm・2.5mm・1mmの各メッシュから検出された魚骨の量的比率、種類組成の3点である。魚骨の包含密度とメッシュ別の検出量の比率については、比較可能なデータのある陸平貝塚のみを比較対象とした。なお、大谷貝塚（中期）とほぼ同時期の陸平貝塚G貝塚（加曾利E式期）についても魚骨の概要（中村2008）が示されているが、詳細が未報告のため、以下では補足的に言及するにとどめた。

魚骨の包含密度

陸平貝塚では水洗後のサンプル重量のデータがないので、水洗前の体積・乾燥重量をもとに、サンプル体積1000ccおよび重量1kgあたりの魚骨検出数（同定対象部位のみ）を求め、大谷貝塚と比較した。当貝塚については、試料No18・No16は縄文前期と中期の骨が混在している可能性があるため、年代が確実な試料として、前期（植房式期）は試料No30～22，中期（加曾利E II式期）は試料No12～4のデータを用いた。

結果をみると、貝層サンプル1000ccあたりの魚骨数は当貝塚の縄文前期が13.0，同中期が4.2，陸平が4.7，サンプル1kgあたりの魚骨数は当貝塚の前期が21.6，同中期が7.6，陸平が6.8（陸平G貝塚では7.0）となった。当貝塚の中期と陸平貝塚の値はほぼ等しく、当貝塚の前期の値はこれらの3倍前後とかなり高い。両貝塚では貝層の堆積状況や分析したサンプル量の違いもあるので単純には解釈できないが、縄文中期の当貝塚と陸平では魚の消費量に著しい格差はなかったとみてよいだろう。また前期より包含密度が低下する点については、魚の消費量が減少した可能性に加え、貝類の消費量が相対的に増加したためである可能性も考えられる。

メッシュ別の魚骨検出量

5mm・2.5mm・1mmの各メッシュから検出された魚骨の量的比率は貝塚の縄文前期が0.4：22：78，中期が1.4：22：77，陸平が5.5：23：71となった。いずれも1mmメッシュと2.5mmメッシュの検出資料が大半を占め、とくに1mmメッシュからの検出数が多い点で共通する。このことから、本地域における縄文前・中期には、こうした小型魚類が漁獲物の主力であったと推定される。ただし、陸平貝塚では5mmメッシュからの検出量がやや多く、当貝塚よりも大型魚（クロダイ属・ボラ科・ヒラメ科・コチ科など）の利用が活発であった可能性がある。ただし、この点については当貝塚のサンプル量が少ないこともあり即断はできない。今後、現地採集資料の分析結果も考慮した上で改めて検討する必要がある。

魚類組成

当貝塚と陸平・於下両貝塚の魚骨組成の比較を表8に示す。なお、陸平・於下貝塚のデータは現地採集資料（発掘時に目視で確認され、手で拾い上げられたもの）も考慮されたものだが、表に示した当貝塚のデータはここで報告した水洗選別資料のみに基づくものであり、現地採集資料に多くみられる比較的大型の魚（マダイ・クロダイ属・ボラ科など）については現地採集資料の内容を確認したうえで、改めて多寡を検討する必要がある（このため表8の当貝塚欄では、これらの魚は（ ）を付けて表示してある）。したがって、ここではおもに水洗選別によって採集される比較的小型の魚類に関してのみ比較を行うこととする。

縄文前期については、当貝塚以外に水洗選別データがないため、当貝塚の特徴については言及できない。縄文中期に関しても当貝塚（加曾利E II式期）と同時期の資料はないが、近接する時期として陸平貝塚から阿玉台I b～II式期、於下貝塚から阿玉台式期および加曾利E III～IV式期のデータが得られている。これらと比較すると、各貝塚ともニシン科・ウナギ属・サヨリ属・ボラ科・スズキ・アジ類・ハゼ科・カレイ科といった主

表6. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取) 2.5mm・1mmメッシュから回収された骨類の同定結果.

左右のある部位はL/Rで示した.

種類	部位	No.4		No.8		No.10		No.12		No.16	
		2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm
アカエイ科	歯										
エイ目	椎骨									1	
板鰓類	椎骨									1	1
マイワシ	主上顎骨			1 /				1 / 1			
マイワシ	角骨	/ 1	/ 1								
マイワシ	方骨					/ 2					
マイワシ	主鰓蓋骨										
マイワシ	基後頭骨							1			3
マイワシ	第1椎骨							1			1
マイワシ	第2椎骨										1
コノシロ?	基後頭骨										
コノシロ	第1椎骨										
ニシン科	第1椎骨										
ニシン科	第1/2椎骨										
ニシン科	腹椎		4	1	6	6		1	3		33
ニシン科	尾椎	1	14	2	15	2	5		10		31
ニシン科	尾部棒状骨						1				
ウナギ属	角骨		1 /								
ウナギ属	方骨	1 /									
ウナギ属	第1椎骨				1						
ウナギ属	腹椎	1		4							
ウナギ属	尾椎	2	5			2			1		1
サヨリ属	第1椎骨	1									
サヨリ属	腹椎		1			1			1		
サヨリ属	尾椎										
ボラ科	方骨										
ボラ科	腹椎					3					
ボラ科	尾椎							1			1
スズキ	主鰓蓋骨									1 /	
スズキ属	主上顎骨										1 /
スズキ属	前上顎骨										
スズキ属	歯骨										
スズキ属	角骨										
スズキ属	方骨							/ 1			/ 1
スズキ属	前鰓蓋骨破片										
スズキ属	擬鎖骨										1
スズキ属	第1椎骨										
スズキ属	腹椎					1	1	1		7	
スズキ属	尾椎	1				1		1			1
キス属	主上顎骨										
キス属	前上顎骨										
キス属	方骨										/ 1
キス属	腹椎						1				1
キス属	尾椎							1		1	2
アジ類(マアジ?)	腹椎						1				
アジ類(マアジ?)	尾椎				1						
アジ類(マアジ?)	稜鱗								1		
ブリ属?	尾椎										1
クロダイ属	歯骨						/ 1				
タイ科	犬歯								1		
タイ科	白歯		1		1	1	4	2	1	3	3
タイ科?	腹椎										1
サバ属	歯骨										
サバ属	第1椎骨										
サバ属	腹椎										
サバ属	尾椎										1
ハゼ科	前上顎骨		/ 1								
ハゼ科	方骨		1 /								
ハゼ科	尾椎		1				1		2		
ギンボ類	尾椎		1	1							
コチ科	歯骨										1 /
イシガレイ	楯鱗						1				
カレイ科	前上顎骨						/ 1				
真骨類(未同定)A	歯										
真骨類(保留)	角骨								/ 1		
真骨類(同定不可)	椎骨		3		1		3	1	5	4	7
真骨類(同定不可)	尾部棒状骨										
カエル類	橈尺骨										
カエル類	椎骨										
モグラ科	下顎骨									1 /	
ハタネズミ亜科	白歯										13
ネズミ亜科	白歯										
ネズミ科	上顎切歯									1	2
ネズミ科	下顎切歯					1				1	1
ネズミ科	大腿骨										1 / 1
食肉目	切歯					1					
小型哺乳類・保留	犬歯										1
小型哺乳類・保留	白歯										1
		8	34	8	26	11	29	8	31	27	109

表6. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)2.5mm・1mmメッシュから回収された骨類の同定結果(つづき).
 左右のある部位はL/Rで示した.

種類	部位	No18		No22		No26		No30	
		2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm	2.5mm	1mm
アカエイ科	歯		2						
エイ目	椎骨								
板鰓類	椎骨	1	3	1				1	
マイワシ	主上顎骨		/ 1	1 /			7 / 4		1 /
マイワシ	角骨			1 / 1		1	1 /		
マイワシ	方骨		/ 2		2 /		1 1 / 1		
マイワシ	主鰓蓋骨			1 /	1 /				
マイワシ	基後頭骨		2		1		6		1
マイワシ	第1椎骨		6				4		1
マイワシ	第2椎骨		10		1	1	4		
コノシロ?	基後頭骨						1		
コノシロ	第1椎骨		1						
ニシン科	第1椎骨		1						
ニシン科	第1/2椎骨						2		
ニシン科	腹椎	3	38		2		40		14
ニシン科	尾椎	3	77		17	6	45	5	12
ニシン科	尾部棒状骨		2				1		
ウナギ属	角骨								
ウナギ属	方骨								
ウナギ属	第1椎骨								
ウナギ属	腹椎								
ウナギ属	尾椎								
サヨリ属	第1椎骨								
サヨリ属	腹椎		1	1					
サヨリ属	尾椎								1
ボラ科	方骨	/ 1							
ボラ科	腹椎								
ボラ科	尾椎	1				1			
スズキ	主鰓蓋骨								
スズキ属	主上顎骨	/ 1				/ 1			
スズキ属	前上顎骨					1 /		1 /	
スズキ属	歯骨						1 / 1		
スズキ属	角骨					/ 1			
スズキ属	方骨		1 / 2			1 /			
スズキ属	前鰓蓋骨破片			1					
スズキ属	擬鎖骨								
スズキ属	第1椎骨	1							1
スズキ属	腹椎	3		1	1	1		2	
スズキ属	尾椎		1	3	1	1		4	1
キス属	主上顎骨		1 /						
キス属	前上顎骨						1 /		
キス属	方骨								
キス属	腹椎	3	1			1	2		1
キス属	尾椎		3			1	1		
アジ類(マアジ?)	腹椎								
アジ類(マアジ?)	尾椎								
アジ類(マアジ?)	稜鱗								
ブリ属?	尾椎								
クロダイ属	歯骨								
タイ科	犬歯		2						1
タイ科	臼歯	1	2				5	2	9
タイ科?	腹椎								
サバ属	歯骨		/ 1						
サバ属	第1椎骨					1			
サバ属	腹椎	2				1		2	
サバ属	尾椎	1	1			5			
ハゼ科	前上顎骨								
ハゼ科	方骨								
ハゼ科	尾椎						1		1
ギンボ類	尾椎								
コチ科	歯骨								
イシガレイ	楯鱗								
カレイ科	前上顎骨								
真骨類(未同定)A	歯								2
真骨類(保留)	角骨								
真骨類(同定不可)	椎骨	3	10	1	1	1	3	1	6
真骨類(同定不可)	尾部棒状骨								1
カエル類	橈尺骨		1						
カエル類	椎骨	2	1						
モグラ科	下顎骨								
ハタネズミ亜科	臼歯		2						
ネズミ亜科	臼歯		1						
ネズミ科	上顎切歯								
ネズミ科	下顎切歯								
ネズミ科	大腿骨								
食肉目	切歯								
小型哺乳類・保留	犬歯								
小型哺乳類・保留	臼歯		1						
		26	177	11	28	26	132	20	51

表7. 大谷貝塚貝層柱状サンプル(樋泉採取)から回収された魚類遺体の組成(NISP = 同定標本数). 歯・鱗は含まない. >2.5mmには5mmメッシュ試料を含む.

種類	NISP																											
	No.4			No.8			No.10			No.12			No.16			No.18			No.22			No.26			No.30			
	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	>2.5mm	1mm	合計	
エイ目/板鰐類																												
マイワシ	1	2	1		2	2																						
コノシロ																												
ニシン科	1	18	19	3	21	24	2	12	14	1	13	14																
ウナギ属	4	6	10	4	1	5	2		2																			
サヨリ属	1	1	2				1		1																			
ボラ科							3		3	1																		
スズキ/スズキ属	1		1				1	1	2	3	9	3	12	6	4	10	5	2	7	6	2	8	8	1	9			
キス属								1	1	1	1	1	4	5	3	8												
アジ類(マアジ?)							1	1	1																			
ブリ属?										1		1																
クロダイ属										1		1																
タイ科?																												
サバ属										1		1	3	2	5													
ハゼ科	3	3																										
ギンポ類	1	1	1																									
コチ科																												
カレイ科	1	1	1																									
ヒラメ科																												
真骨類・保留																												
真骨類・同定不可	3	3																										
合計	9	33	42	9	25	34	9	23	32	6	28	34	21	86	107	24	165	189	11	28	39	26	127	153	19	39	58	
土壌 1kgあたりの魚骨数			32.3			37.8			16.0		14.8		28.9		52.5		97.5		61.2		12.6							

表 8 . 大谷貝塚と周辺遺跡の魚骨組成の比較

水洗選別による魚骨採集が行われている遺跡のみを示した。 +++ : 最多, ++ : 多い, + : あり, - : なし。

大谷貝塚において () で示したものについては、現地採集の大型魚骨資料のデータを踏まえたとさらに検討を要する。

生息環境		分類群	大谷 (美浦)	陸平 (美浦)	於下 (麻生)	大谷 (美浦)	於下 (麻生)	於下 (麻生)
			植房	阿玉台 I b - II	阿玉台	加曾利 E II	加曾利 E III - IV	加 E IV - 称名寺
外洋 沿岸性	岩礁	コショウダイ属	(-)	+	-	(-)	+	-
		オニオコゼ科?	-	+	-	-	-	+
		マダイ	(-)	+	++	(-)	+	+
		カワハギ類	-	-	-	-	+	+
外洋→内湾 回遊性		サメ類	(-)	+	-	(-)	-	-
		ニシン科	+++	++	+	+++	+	+
		カタクチイワシ	-	+	-	-	-	-
		ダツ科	-	+	+	-	+	+
		サヨリ属	+	+	+	+	+	+
		ブリ属	-	+	-	-	-	-
		アジ類	-	+	+	+	+	+
		サワラ属	(+ ?)	+	-	(-)	-	-
外洋～ 内湾 沿岸性	岩礁	ウミタナゴ科	-	+	-	-	-	-
		フサカサゴ科	(-)	+	-	(-)	+	-
	砂泥底	エイ類	+	+	+	-	++	+
		キス属	+	+	-	+	-	-
		コチ科	(-)	++	++	(-)	++	++
		ヒラメ科	(+)	++	-	(-)	+	+
		カレイ科	-	+	+	+	++	++
		アナゴ属	-	-	-	-	+	+
	フグ科	(-)	+	++	(-)	+	+	
内湾→汽水		シログチ	-	+	-	-	-	-
		スズキ	(++)	++	++	(+)	++	++
		ボラ科	(+)	++	++	(+)	+	+
		クロダイ属	(+)	++	+++	(-)	+++	++
内湾～淡水		ハゼ科	+	++	+	+	+	
(内湾～)汽水～淡水		ウナギ属	-	++	+	++	+++	

要種はほぼ共通している。当貝塚では種数がやや少ないが、これは分析したサンプル量が少ないこと、また現地採集の大型魚骨が考慮されていないことが主な原因と推測される。

いっぽう量的な組成をみると、当貝塚は前期、中期ともにニシン科（マイワシ）が圧倒的に多い点で陸平・於下とは明確に異なる。当貝塚ではボラ科・スズキ・クロダイ属が少ないが、これは上記の通り、主に現地採集資料が考慮されていないためと思われる。ウナギ属がやや多い点はすべての貝塚で共通している。なお、陸平G貝塚（加曾利E式期）の2.5mm・1mm資料ではニシン科が約5割、ウナギ属が約2割で、ハゼ科がこれに次ぐ。これは当貝塚（とくに305層）と比較的類似したパターンといえる。

b . 魚類遺体から推定される大谷遺跡周辺の縄文前期から中期の水域古環境

主要魚類の生息環境を表8に示した。組成の主体をなすマイワシは外海沿岸性の表層回遊魚だが、内湾にも多く来遊する。アジ類・サバ属も基本的に同様である。キス属・カレイ科は外海～内湾の沿岸浅海の砂泥底を

主な生息域とする。スズキ・ボラ科・クロダイ属は内湾に多くみられる魚で、汽水域にも頻繁に進入する。ウナギ属とハゼ科は内湾から淡水域まで広く生息するが、ウナギ属は淡水～汽水域が主な生息域である。

以上を魚骨の組成と照合すると、縄文前期、中期ともに、内湾に進入する回遊魚または内湾域の生息種が魚類遺体の大半を占めていることがわかる。このことから、当貝塚の周辺水域は縄文前期（植房式期）から中期（加曾利EⅡ式期）まで、一貫して内湾環境が卓越していたと推定される。

ただし、縄文中期にはウナギ属の明確な増加が認められることから、この時期には汽水～淡水域がある程度拡大してきた可能性が考えられる。当貝塚の面する高橋川低地は、近接する陸平貝塚周辺における沖積層の珪藻分析結果（中村2008）から類推して、縄文海進最盛期に相当する縄文前期中葉の植房式期には溺れ谷となっていたものと推測されるが、縄文前期末に想定されている海水準低下（小杉1989）あるいは砂州による開口部の封鎖などによって、縄文中期には淡水化がある程度進んでいたのではないかと推定される。これは、これまでに周辺の縄文前期から中期貝塚の魚貝類遺体から想定されている古環境イメージ（樋泉2004）と矛盾しない。

なお、当貝塚の貝類では、中期層準においてスガイ・ナミマガシワといった岩礁や転石に付着するものがみられた。また陸平貝塚の魚類でも、少数ながら岩礁性種のフサカサゴ科などが確認されている（表8）。これに対し、今回の魚骨資料では岩礁性種は確認されていない。これは、先述のとおり分析したサンプル量が少ないこと、あるいは現地採集の魚骨が考慮されていないことに起因するものとも考えられるが、魚類と貝類とで漁場構成が異なっていた（岩礁域が魚類の漁場として利用されなかった）可能性もある。

c．魚類資源利用の様相

大谷貝塚における縄文前期から中期の魚類資源利用の様相

今回の資料は、大谷貝塚における植房式期および加曾利EⅡ式期の魚類資源利用の一端を示すものである。先述の通り、本報告で記載した資料は限られたサンプルから水洗選別によって得られた小型魚のみであり、大型魚の利用の様相に関しては今後の課題である。ただし、上記の通り5mmメッシュからの魚骨の検出量はごく少なく、2.5mm・1mmメッシュからの検出資料が大半を占めていることから、当貝塚では縄文前・中期を通じて、こうした小型魚（小型種および大型種の若魚）が漁獲物の主体をなしていたものと推定される。当貝塚の漁具遺物に関しては現時点では詳しい情報を得ていないが、これらはその体長からみて網（またはトラップ類）で漁獲された可能性が高い。以下、縄文前期、中期の様相について要約する。

縄文前期：魚骨の包含密度はきわめて高く、動物質食料に占める魚類の比重の高さが示唆される。具体的には、検出された魚骨の大半をニシン科が占めており、なおかつマイワシ以外（サッパ・コノシロなど）がほとんどみられないことから、当時内湾となっていた霞ヶ浦に回遊してくるマイワシの群れを狙った網漁がきわめて活発であったと推定される。またスズキの若魚やキス属などを対象とした沿岸浅瀬での漁も比較的盛んであったと思われる。なお、前期にやや多いサバ属（若魚）はマイワシ漁の混獲物である可能性がある。

縄文中期：多数の魚骨が検出されているが、縄文前期に比べるとその包含密度は大幅に低下し、魚類資源の相対的な比重は低下したと推定される。マイワシの網漁が圧倒的に優勢であり、これにスズキなどの沿岸性小型魚の漁が加わる点は前期と同様だが、淡水～汽水域におけるウナギ漁が活発化する点が特徴である。

以上をまとめると、当貝塚の小型魚漁は縄文時代前期、中期ともにマイワシ漁を中心とした内湾性魚類の網漁を主力とする点で一貫した特徴を示すが、縄文中期には遺跡近隣の淡水～汽水域におけるウナギ漁が活発化したと推定される。とくに注目されるのは、当貝塚の小型魚漁がマイワシ漁に著しく偏向する点で他遺跡にはみられない強い個性を示しており、なおかつ、それが前期、中期のいずれにおいても高い類似性をもって認められるという点である。しかし、当貝塚の立地条件が周辺貝塚に比べてとくにマイワシ漁に適しているとは考

えにくく、一方で、当貝塚において植房式期から加曾利E式期まで、断絶期を挟みつつマイワシ漁の伝統が継続していたと解釈するのも無理がある。この点をどう解釈するかは今後の課題だが、当貝塚および陸平貝塚をはじめとする周辺貝塚群の関係と変遷を解明する上で重要な示唆となるように思われる。

縄文中期における大谷貝塚と陸平貝塚の魚類資源利用の比較

ここでは、縄文中期における当貝塚と陸平貝塚の魚類資源利用について比較検討する。陸平貝塚の様相をみると、魚骨の包含密度は当貝塚の縄文中期層準とほぼ同じである。小型魚類(2.5mm・1mmメッシュ検出資料)の内容は、ニシン科(マイワシ・サッパなど)、スズキ・ボラ科の若魚、キス属、ハゼ科など、内湾に來遊する多様な魚類が主体をなす(表8)。陸平貝塚の小型魚類はこれら内湾における各種魚類の網漁を主力とし、さらに遺跡近隣の淡水～汽水域におけるウナギ漁も重要な要素であったと推定される(樋泉2004)。

これを当貝塚の縄文中期の様相と比較すると、内湾性魚類の網漁を主力としてウナギ漁が加わる点では類似するが、上記の通り、当貝塚ではマイワシへの偏向が著しい点で明らかに様相が異なる。ニシン科の種構成をみても、陸平貝塚ではマイワシ以外にサッパ・コノシロも普通だが、当貝塚ではほぼマイワシのみであり、選択性がきわめて強い。詳細を論じる紙数がないが、少なくともこうした違いを当貝塚と陸平貝塚の地理的条件(周囲の水域環境の違い)によって説明することは難しい。遺跡の機能差を示している可能性もあるが、今回比較した資料の年代は陸平貝塚が阿玉台I b～II式期、当貝塚が加曾利E II式期でかなりの時間差があること、また、すでに触れたように陸平貝塚G貝塚では、当貝塚と比較的類似した様相がみられることから、縄文中期内部における時間的な変化も考慮する必要がある。今後、こうした資料の比較研究を進めれば、当貝塚と陸平貝塚の遺跡間関係について、生業面から具体的にアプローチし得るものと期待される。

引用・参考文献

- 加藤晋平・茂木雅博・袁靖編 1992 『於下貝塚発掘調査報告書』麻生町教育委員会
小杉正人 1989 「完新世における東京湾の海岸線の変遷」地理学評論62A:359-374
樋泉岳二 2004 「貝層出土の動物遺体」『茨城県稲敷郡美浦村陸平貝塚-調査研究報告書1・1997年度発掘調査の成果-』美浦村教育委員会
中村哲也 2008 『霞ヶ浦の縄文景観・陸平貝塚』新泉社

写真図版



谷を埋めつくす貝層（斜面高所から中腹）



谷を埋めつくす貝層（斜面中腹から低所）



大谷貝塚遺跡遠景



大谷貝塚完掘状況



斜面貝層確認状況



斜面高所の貝層断面



斜面高所の貝層断面



中央ベルトの貝層断面



中央ベルトの貝層断面



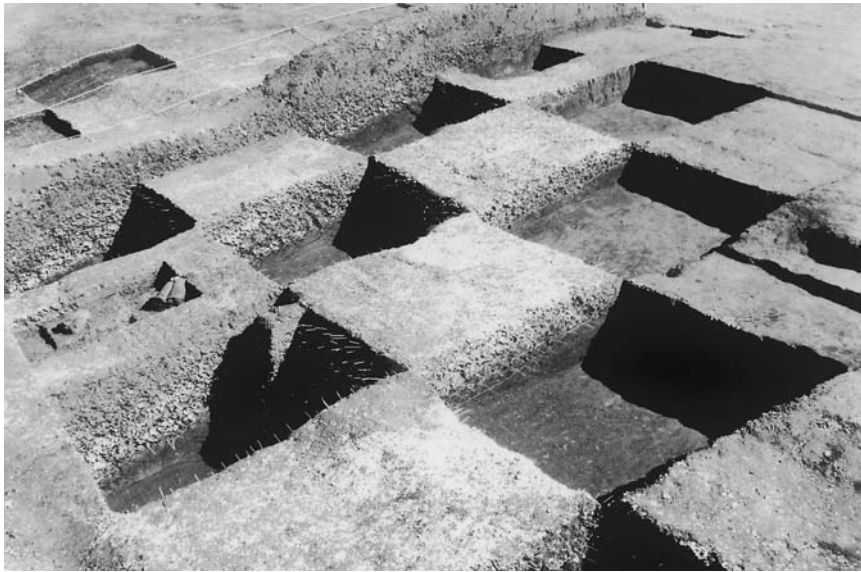
中央ベルトの貝層断面



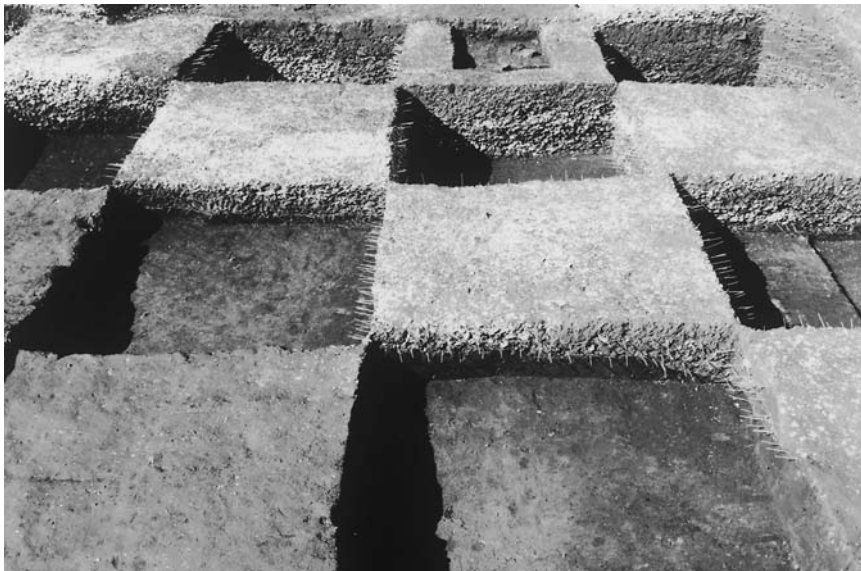
斜面貝層完掘状況



斜面貝層基底部の基本土層



斜面高所の
貝層掘削状況



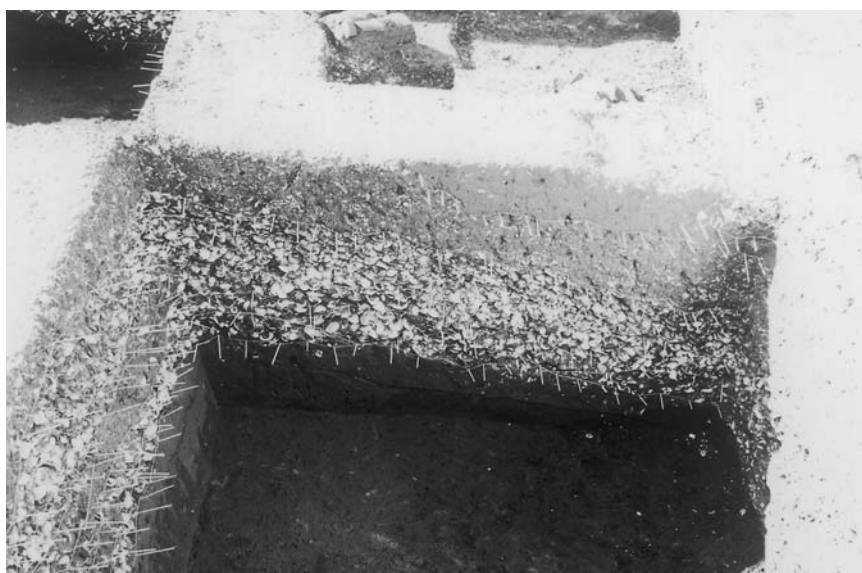
斜面高所の
貝層掘削状況



斜面中腹の
貝層掘削状況



貝層断面・KA 3 b2 付近



貝層断面・KA 3 e1 付近



貝層断面・KA 3 d2 付近



貝層断面・KB 2 b2 付近



貝層断面・KB 2 a2~5 付近



貝層断面・KB 2 a5 付近

貝層断面・KB 3 d4 付近

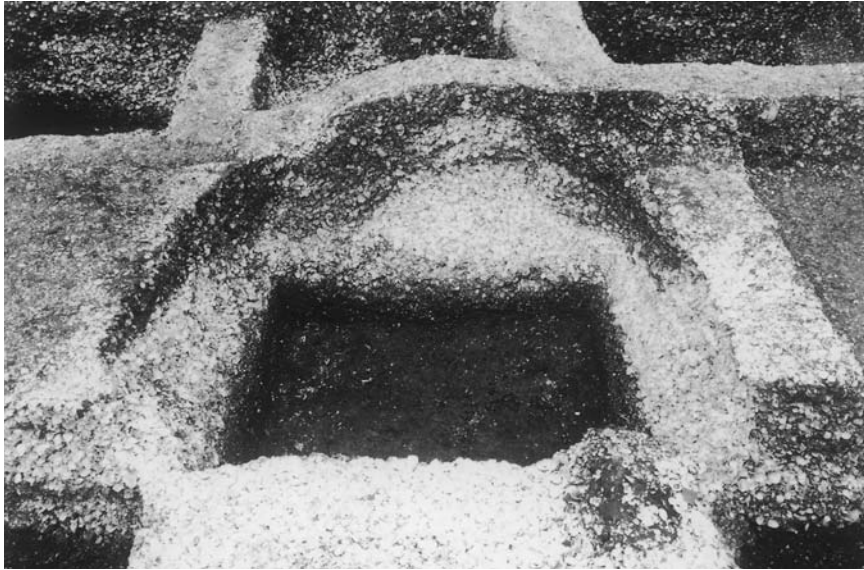


貝層断面・KB 3 b5 付近



貝層断面・KB 3 b1 付近





貝層断面・KB 3 b1 付近



貝層断面・KB 3 a2 付近



貝層断面・KB 3 e3 付近



貝層断面・KC 2 a1 付近



貝層断面・KC 3 a2 付近



貝層断面・KC 3 a3 付近



貝層断面・KC 3 a5 付近



貝層断面・KB 3 e1 付近



貝層断面・KC 3 付近



貝層断面・KC 3 付近



貝層断面・KB 3 d1 付近



貝層断面・KB 3 d1 付近



貝層断面・KB 3 b1 付近



貝層断面・KB 3 a1 付近



貝層断面・KB 3 付近

貝層断面・KB 3 d1 付近



貝層断面・KC 2 付近



貝層断面・KC 3 付近





貝層断面・K C 3 付近



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



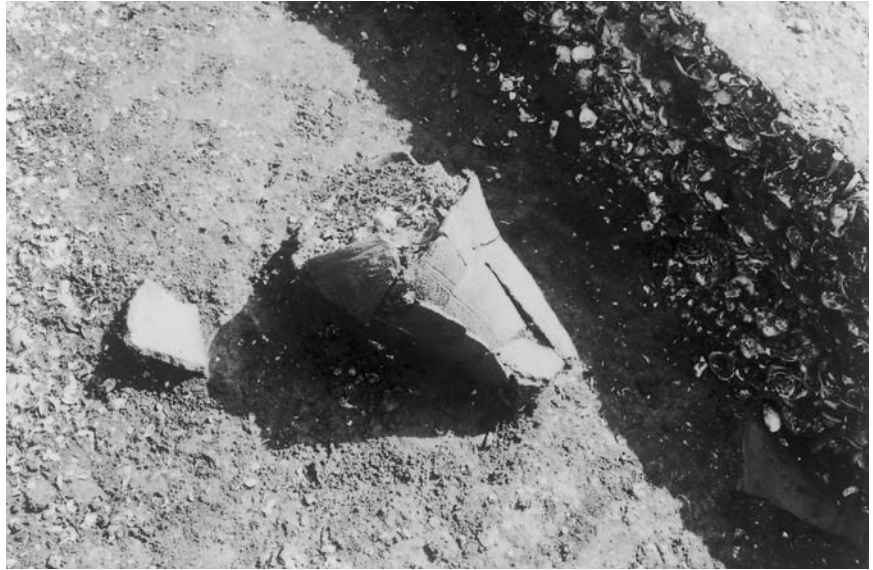
貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土狀況



貝層・遺物出土狀況



貝層・遺物出土狀況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況



貝層・遺物出土状況

第 5 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 35 号 住 居 跡
完 掘 状 況

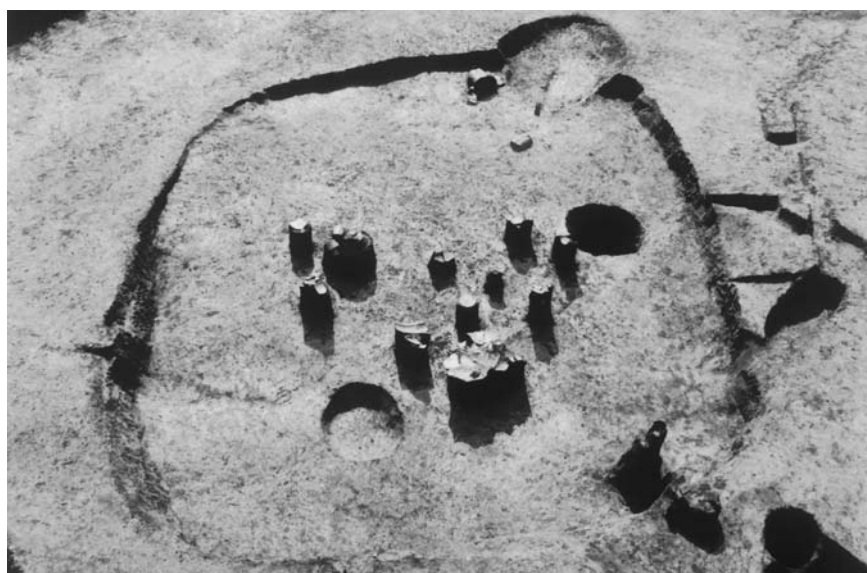


第 36 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況





第 37 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 37 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 4 号 住 居 跡
完 掘 状 况

第 6 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 10 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 13 号 住 居 跡
完 掘 状 況





第 14 号 住 居 跡
完 掘 状 況

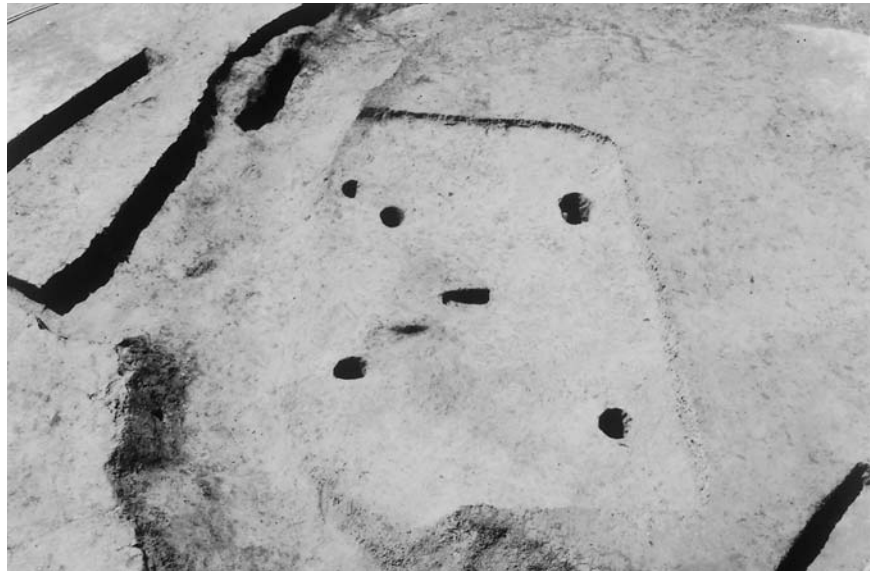


第 18 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 25 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 27 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 27 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 29 号 住 居 跡
完 掘 状 況





第 1 号住居跡
完 掘 状 況



第 1 号住居跡竈
完 掘 状 況



第 1 号住居跡
遺 物 出 土 状 況

第 2 号住居跡
完 掘 状 況

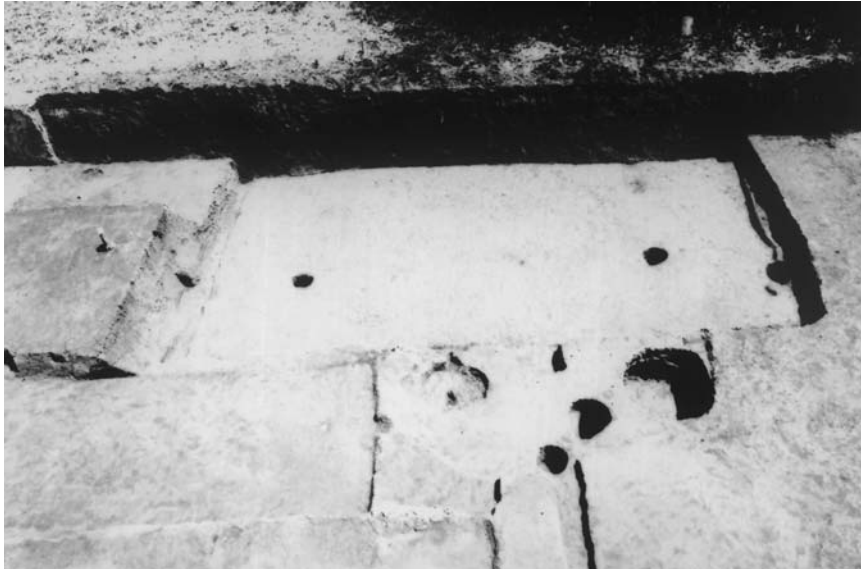


第 2 号住居跡竈
完 掘 状 況



第 2 号住居跡竈
遺 物 出 土 状 況





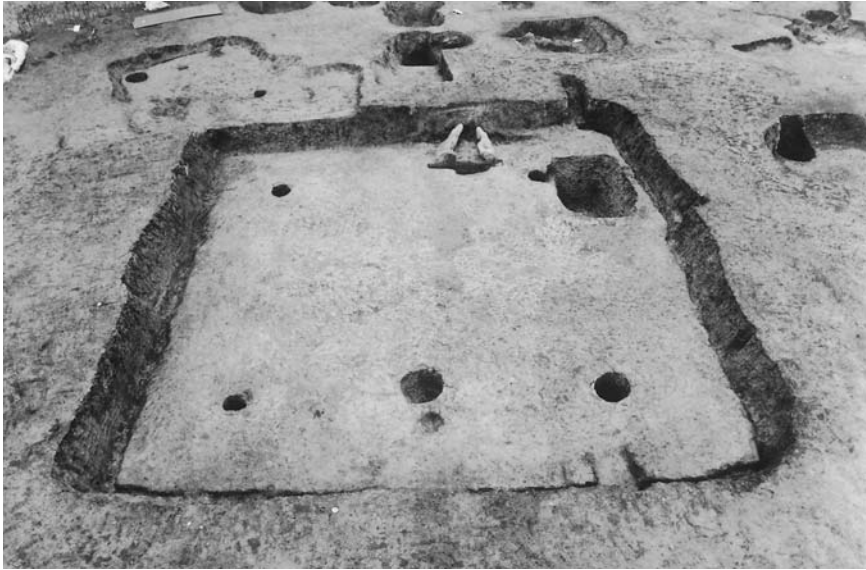
第 11 号 住 居 跡
完 掘 状 况



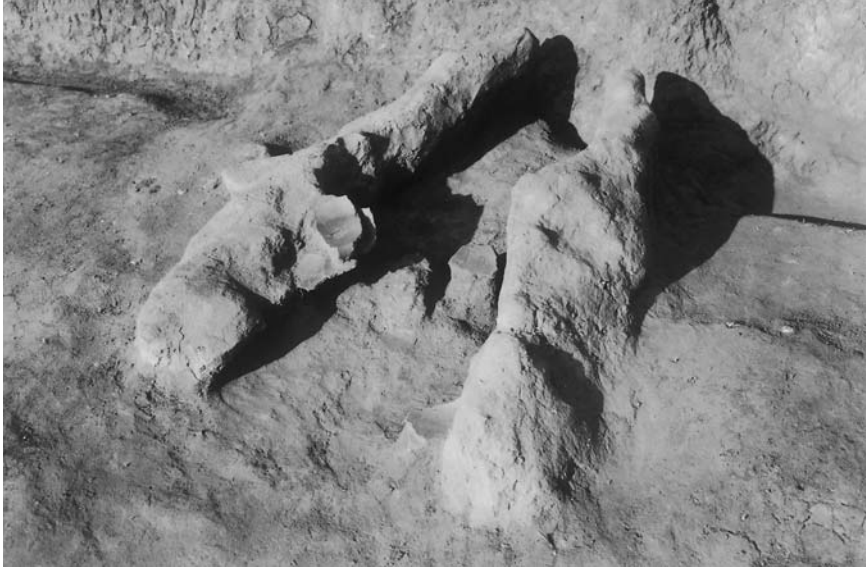
第 11 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 况



第 3 号 建 物 跡 ·
第 22 号 住 居 跡
完 掘 状 况



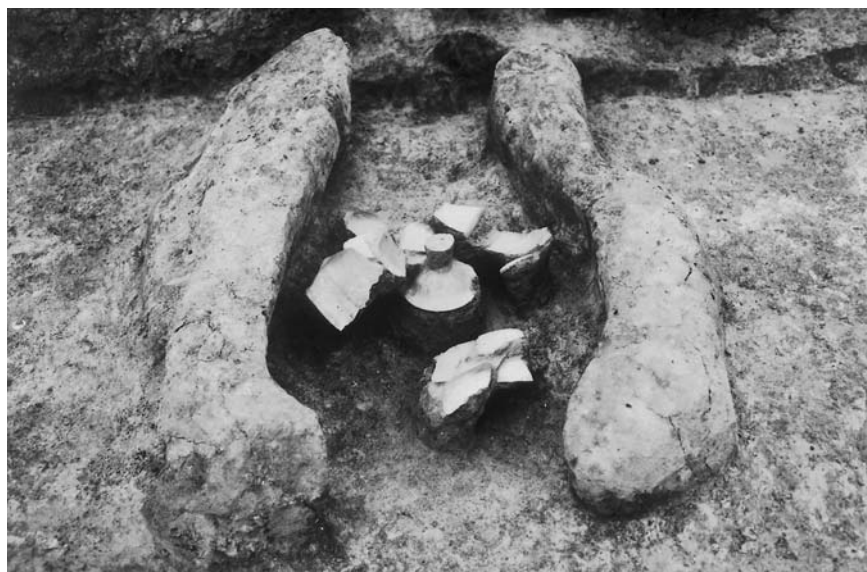
第 24 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第 24 号 住 居 跡 竈
遺 物 出 土 状 况



第 30 号 住 居 跡
完 掘 状 况



第30号住居跡竈
遺物出土状況



第36号住居跡
完掘状況



第36号住居跡
遺物出土状況

第 28 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 28 号 住 居 跡 竈
遺 物 出 土 状 況

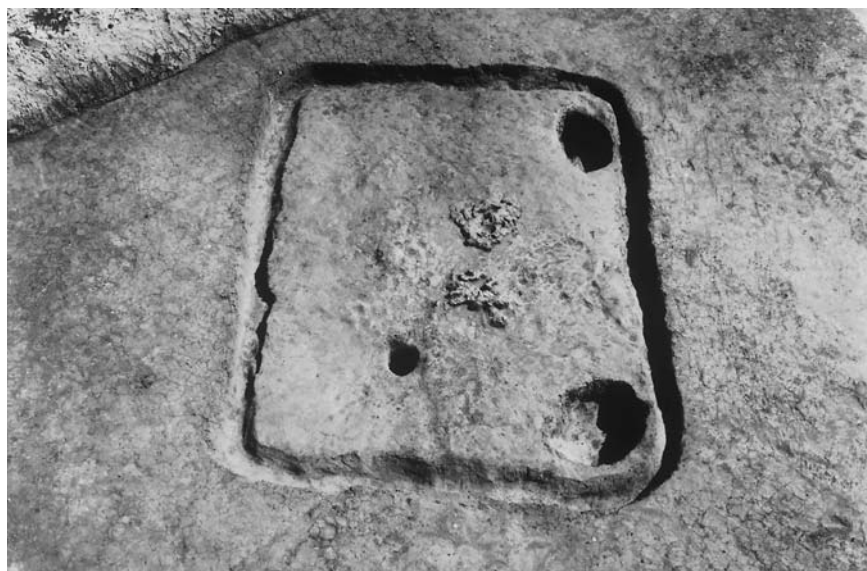


第 1 号 建 物 跡
完 掘 状 況





第 2 号 建 物 跡
完 掘 状 況



第 4 号 建 物 跡
完 掘 状 況



第 4 号 建 物 跡
遺 物 出 土 状 況

第 5・6 号建物跡
完 掘 状 況

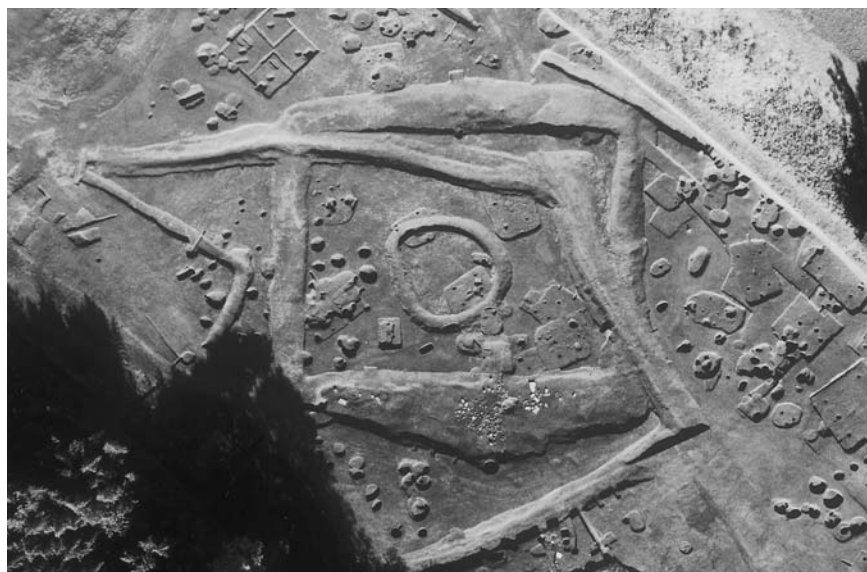


第 5 号建物跡竈
遺物出土狀況



第 1 号墳
完掘狀況(遠景)





第 1 号 墳
完掘状況(近景)



第1号墳第1埋葬施設
粘土塊出土状況



第1号墳第2埋葬施設
粘土塊出土状況



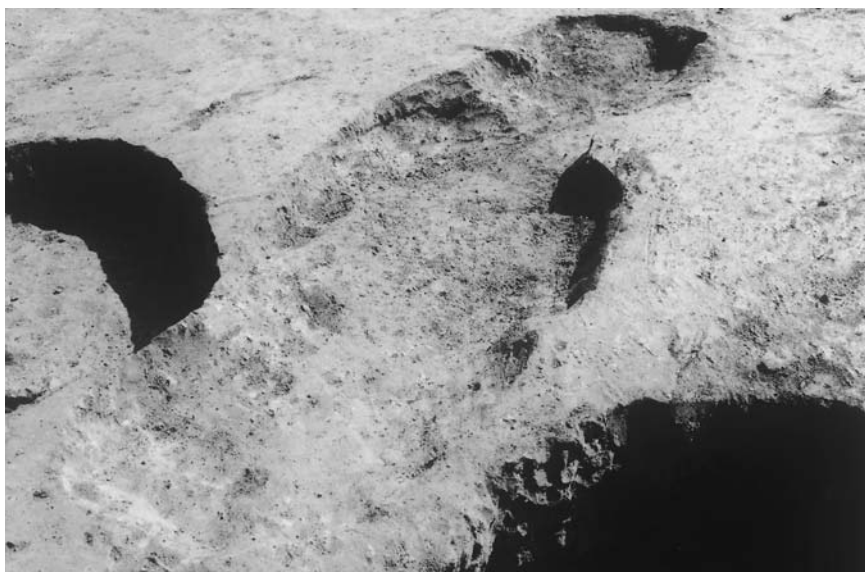
第 1 号墳周溝部
遺物出土状況



第 1 号墳周溝部
遺物出土状況



第 2 号周溝跡
完掘状況



第 1 号 炉 穴
完 掘 状 况



第 2 号 炉 穴
完 掘 状 况



第 1 号 土 坑
完 掘 状 况

第10・11号土坑
遺物出土状況



第17・22号土坑
遺物出土状況



第25・26号土坑
遺物出土状況





第 44 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 46 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 76 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 271 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



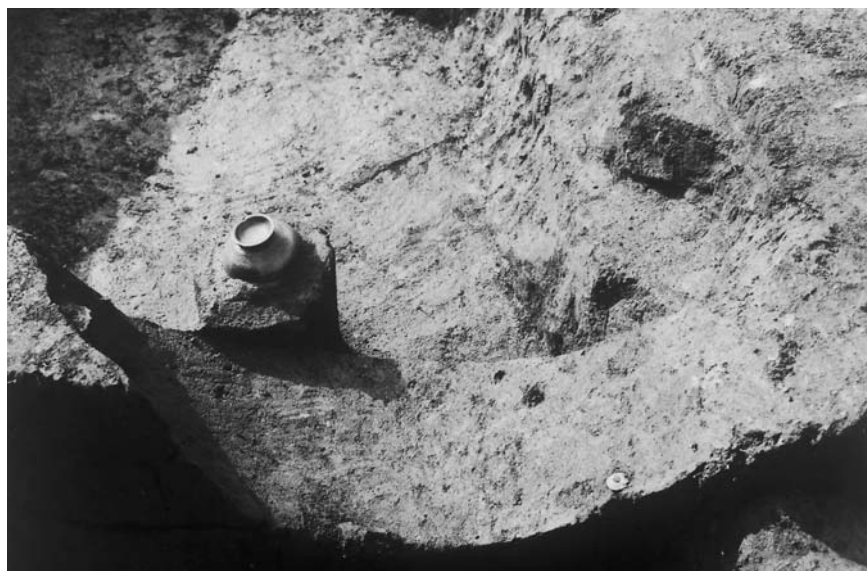
第 300 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 315 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 395 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 399 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 532 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



KA 3 e2-1



KA 3 e1-35



KA 3 e2-37



KB 2 b4-334

斜面具層出土土器



斜面貝層出土土器



KB 3 b3-138



KB 3 b3-137

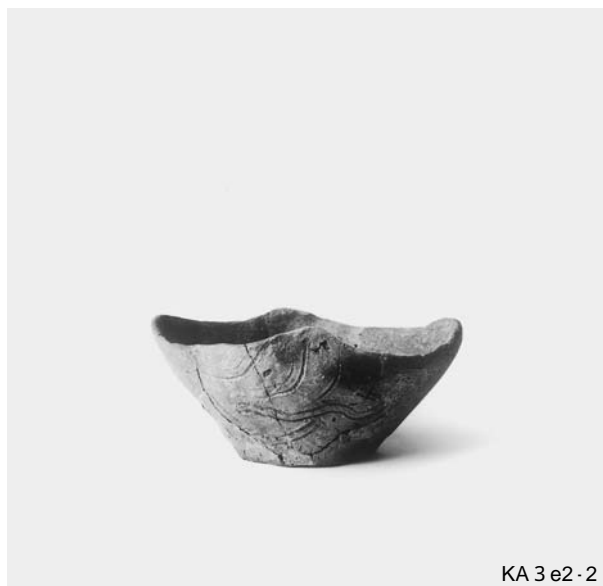


SK345-576



SK17-532

斜面具層，第17・345号土坑出土土器



KA 3 e2-2



KA 3 e1-23



KA 3 e4-26



KA 3 e4-27



KB 2 a3-39



KB 2 b5-63



KB 2 c2 - 66



KB 2 a5 - 329



KB 3 b2 - 130



KB 2 c3 - 69



KB 3 a4 - 127



KB 3 c2 - 161

斜面具層出土土器



斜面貝層，第112号土坑出土土器



SI1-387



SI36-510



SI1-389



SI36-512



SI39-523



SI27-459



SI2-409



SI30-481



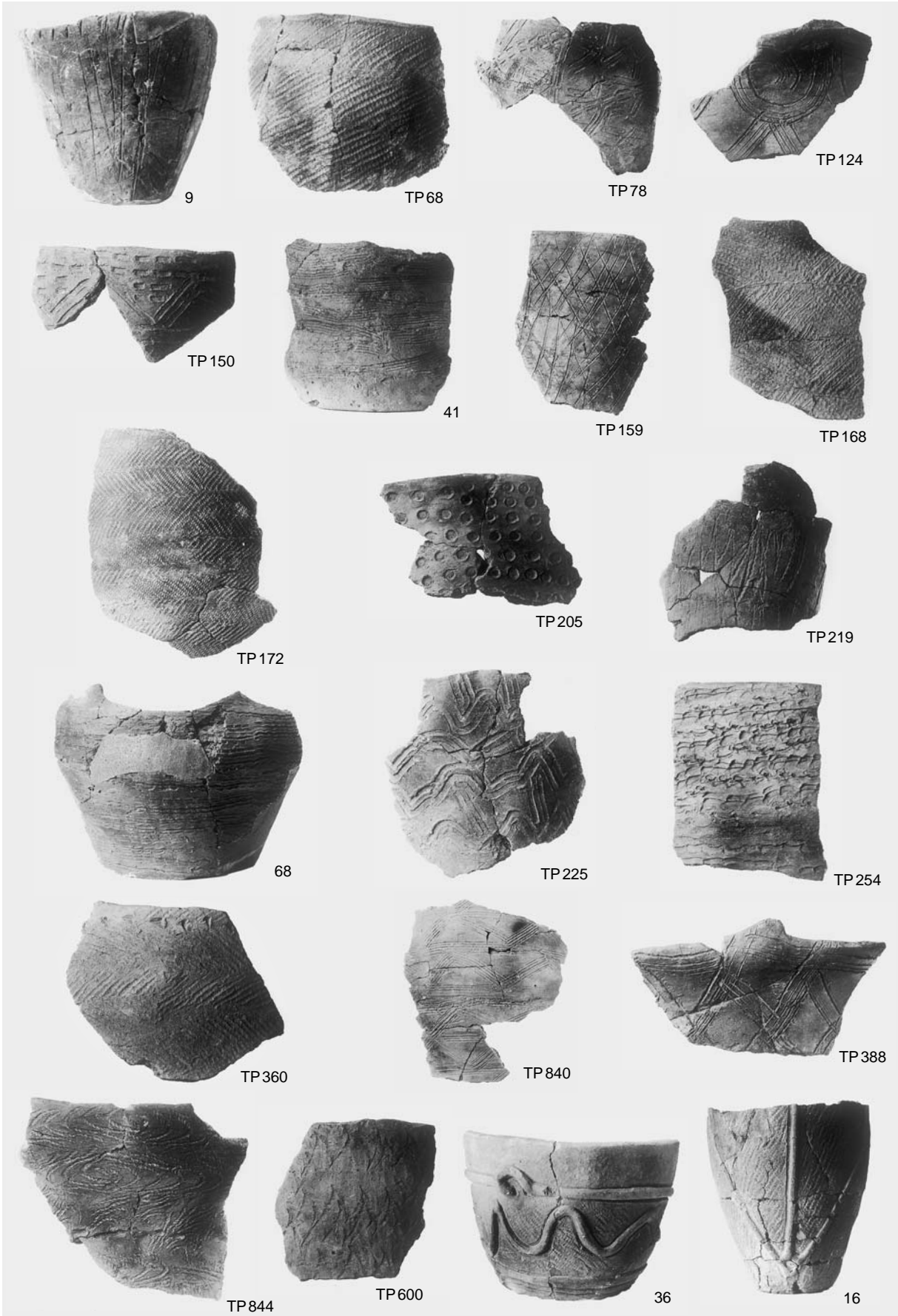
SI30-479



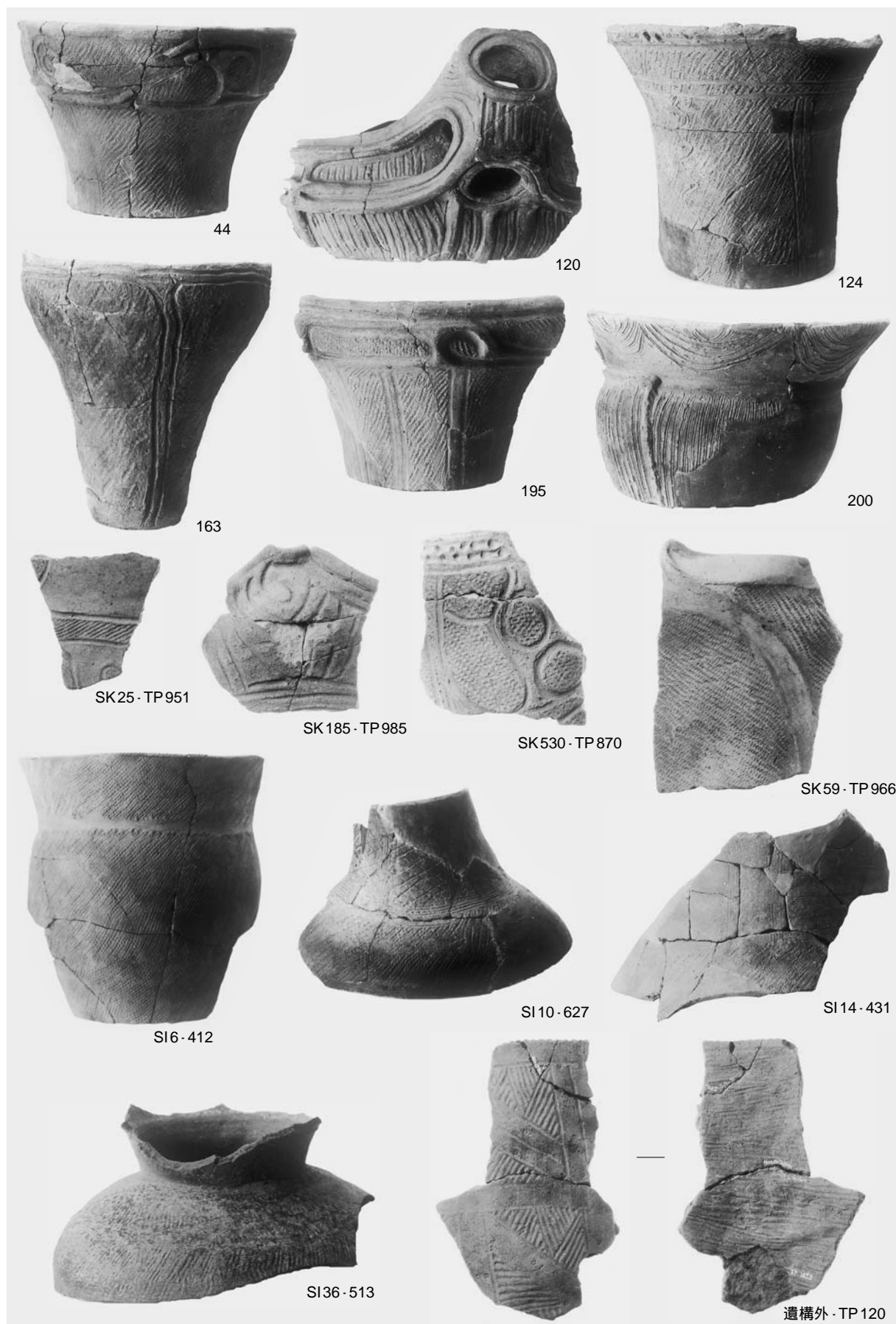
SI11-424



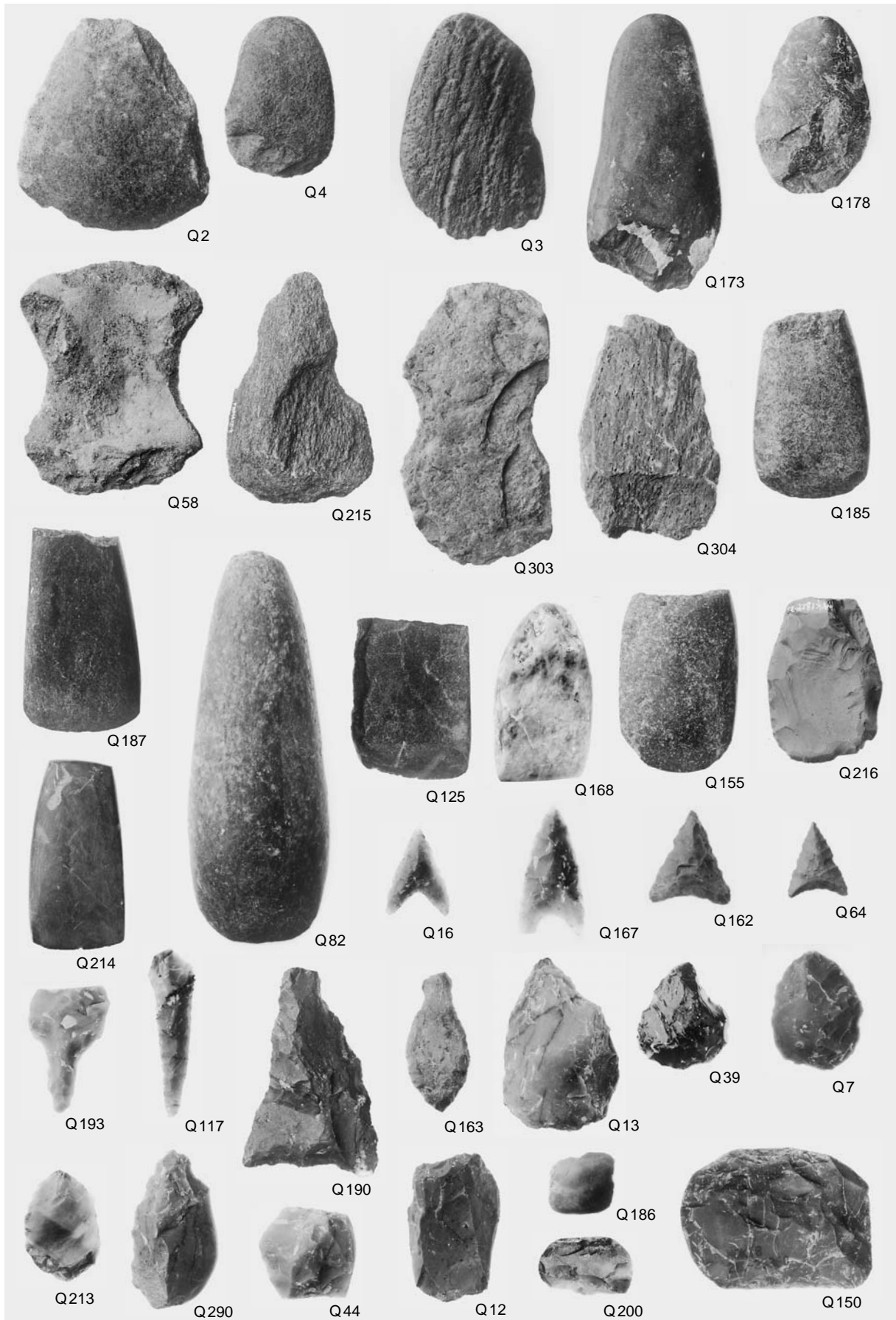




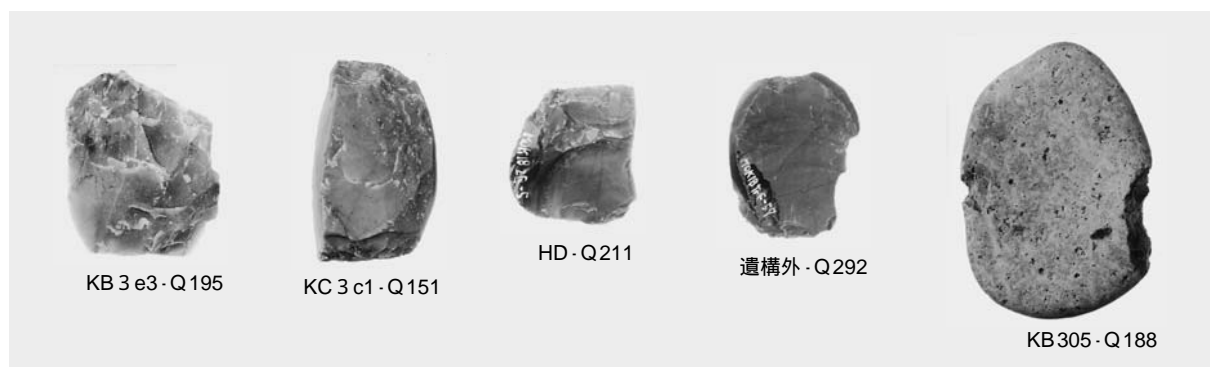
斜面具層出土土器



斜面貝層，第6・10・14・36号住居跡，第25・59・185・530号土坑，遺構外出土土器



斜面貝層，表土，遺構外出土石器



斜面貝層，住居跡，土坑，表土，遺構外出土石器



SI24-Q227

SK532-Q224

SK44-Q249



SK76-Q252

遺構外-Q315

遺構外-Q319

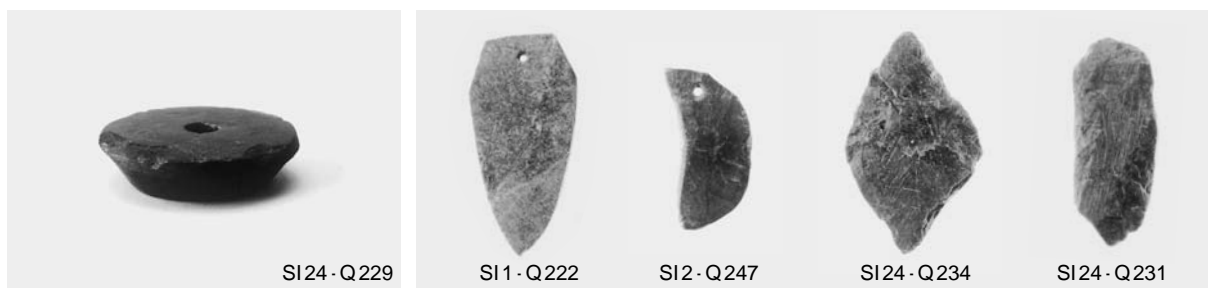
遺構外-Q320



遺構外-Q311

遺構外-Q318

SI24-Q228



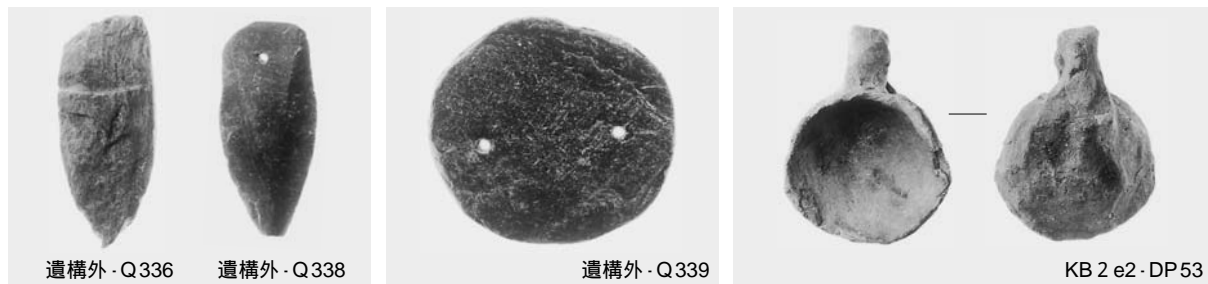
SI24-Q229

SI1-Q222

SI2-Q247

SI24-Q234

SI24-Q231



遺構外-Q336

遺構外-Q338

遺構外-Q339

KB 2 e2-DP53

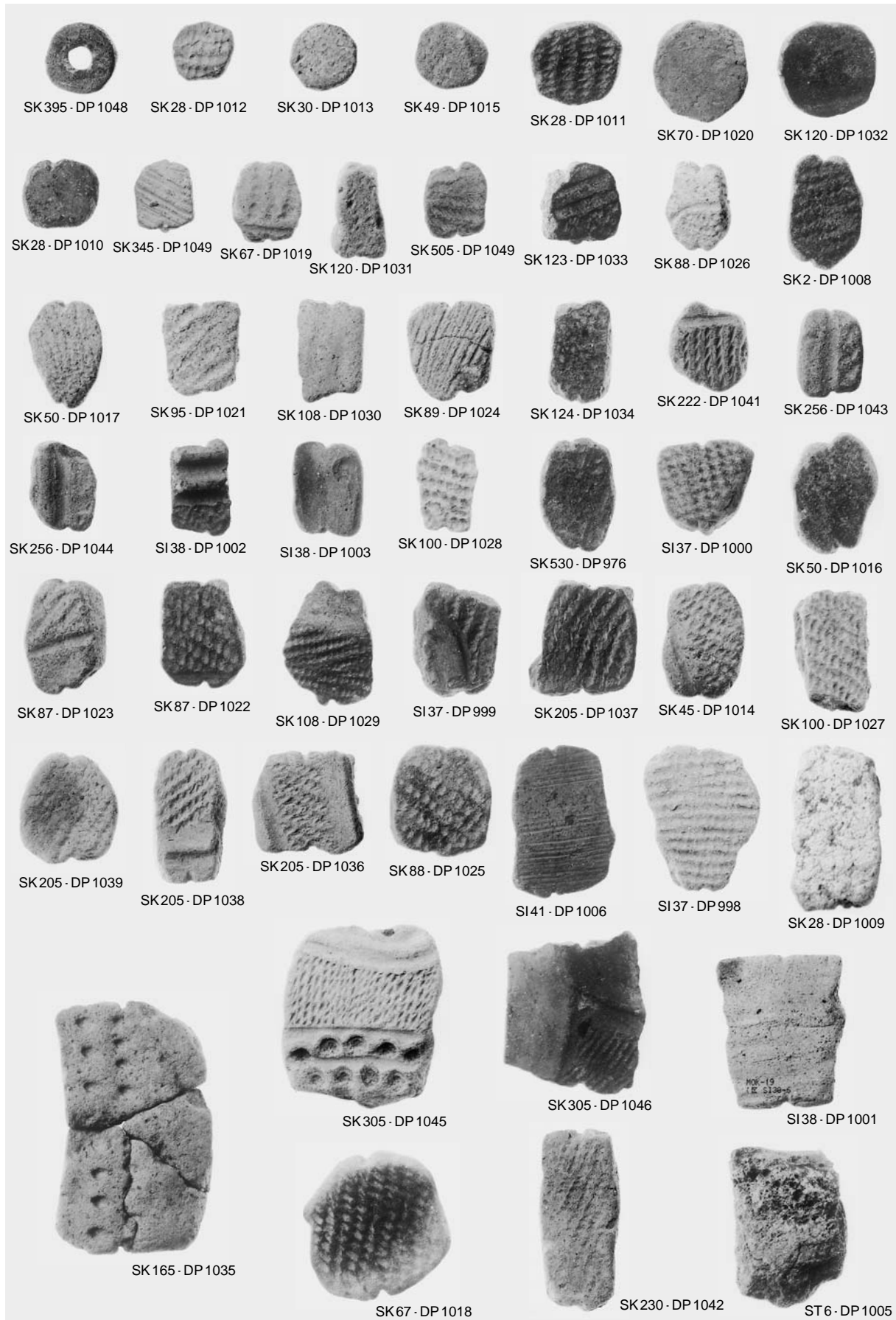


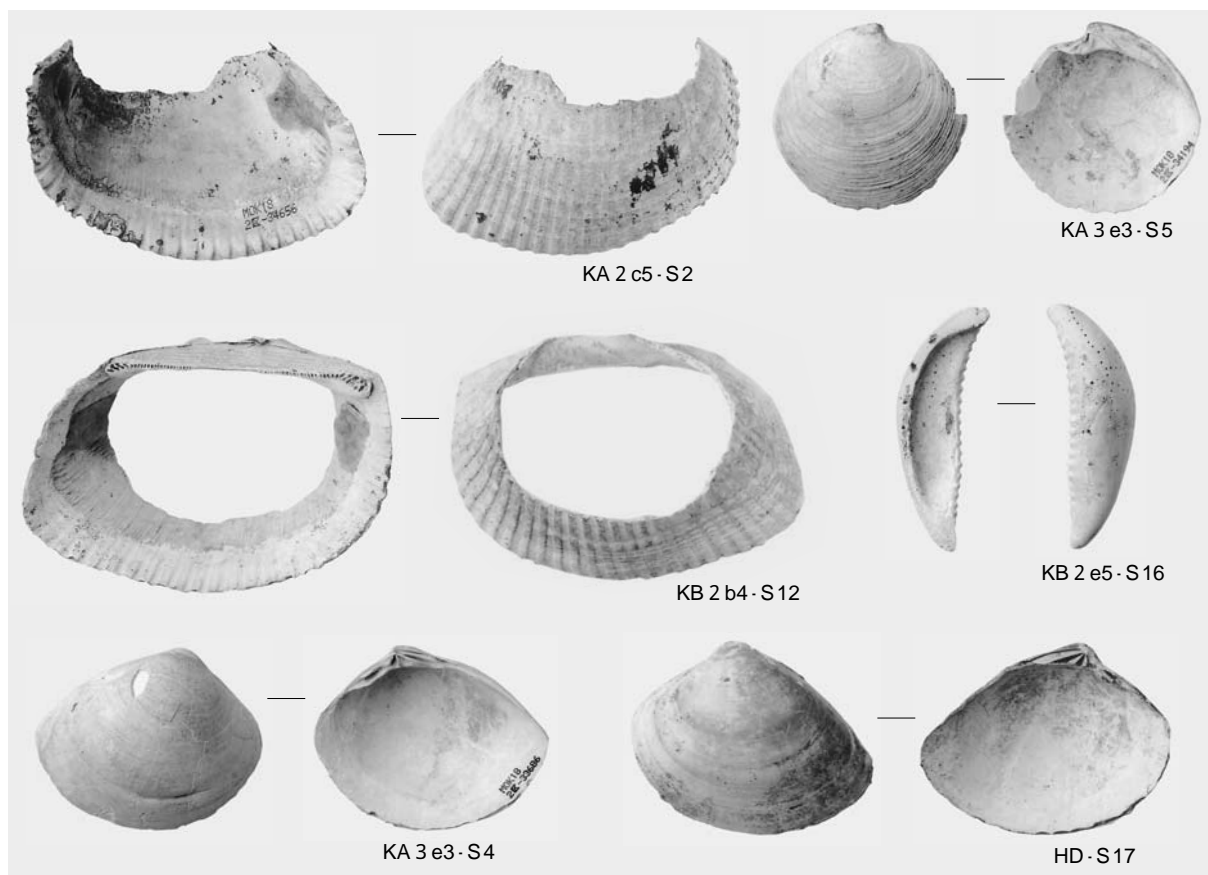
KC 2 c4-DP162

KB 3 d1-DP97

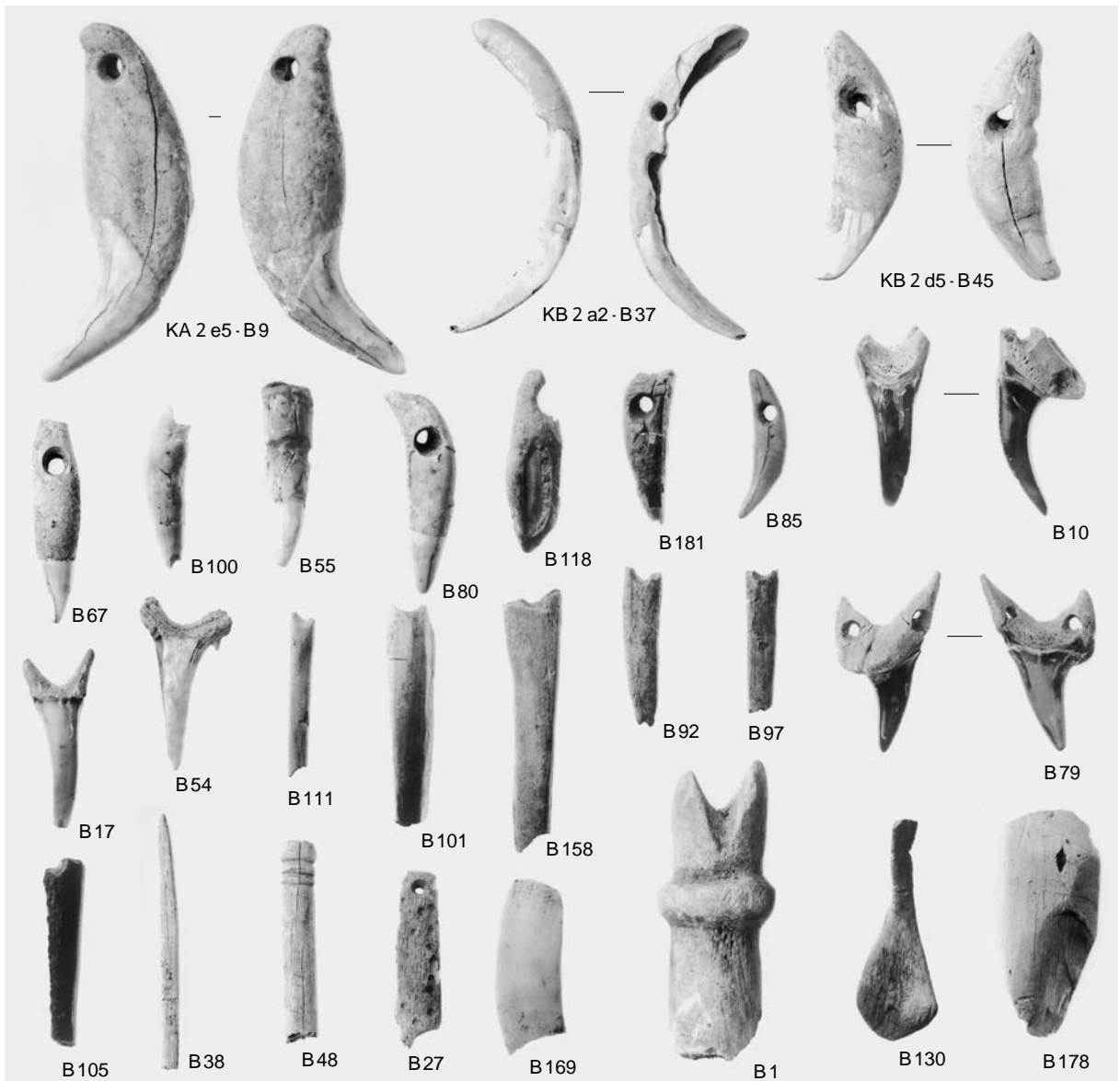
KB 2 e2-DP724

斜面貝層，第1・2・24号住居跡，第44・76・532号土坑，遺構外出土石器，石製品，土製品

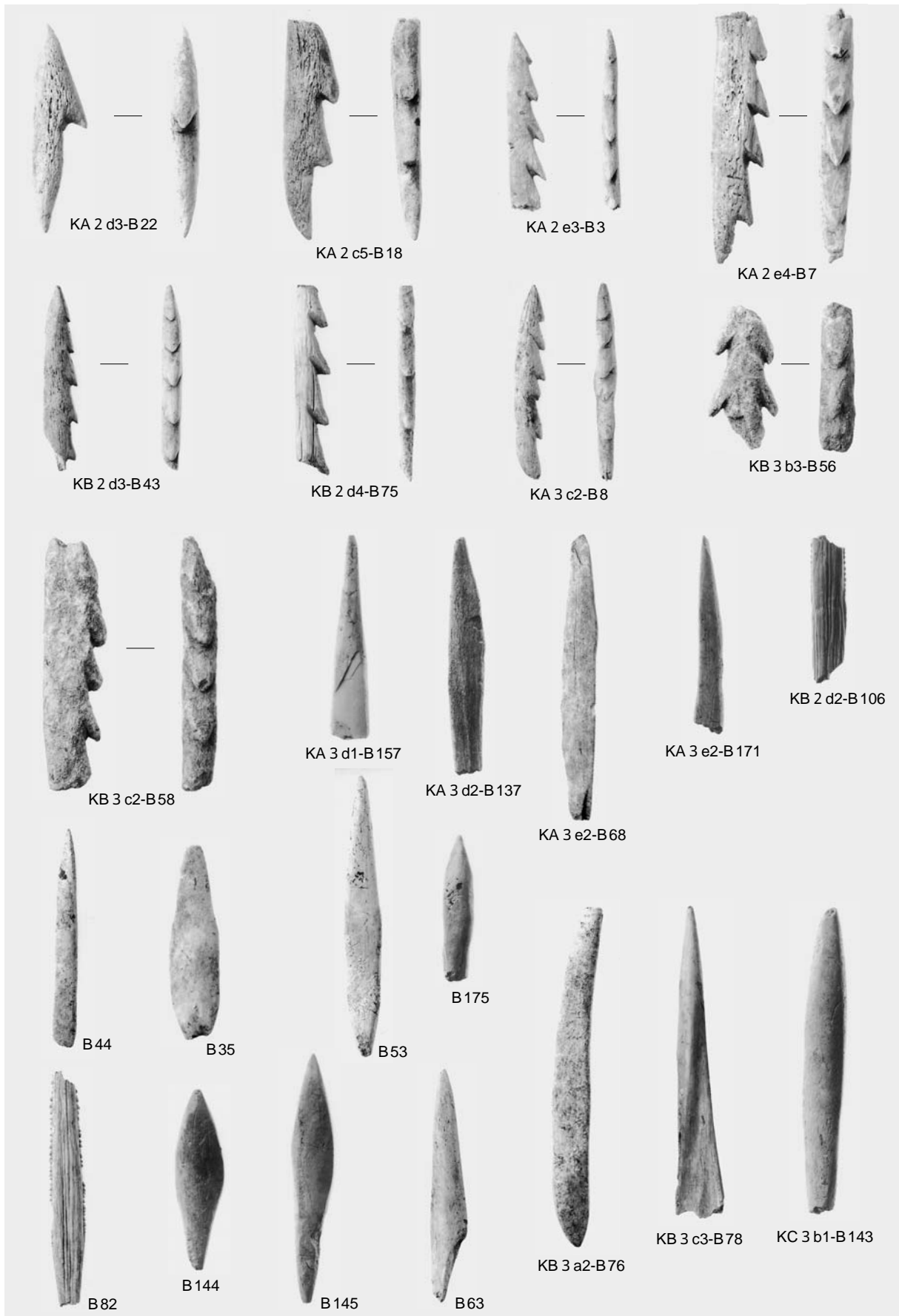




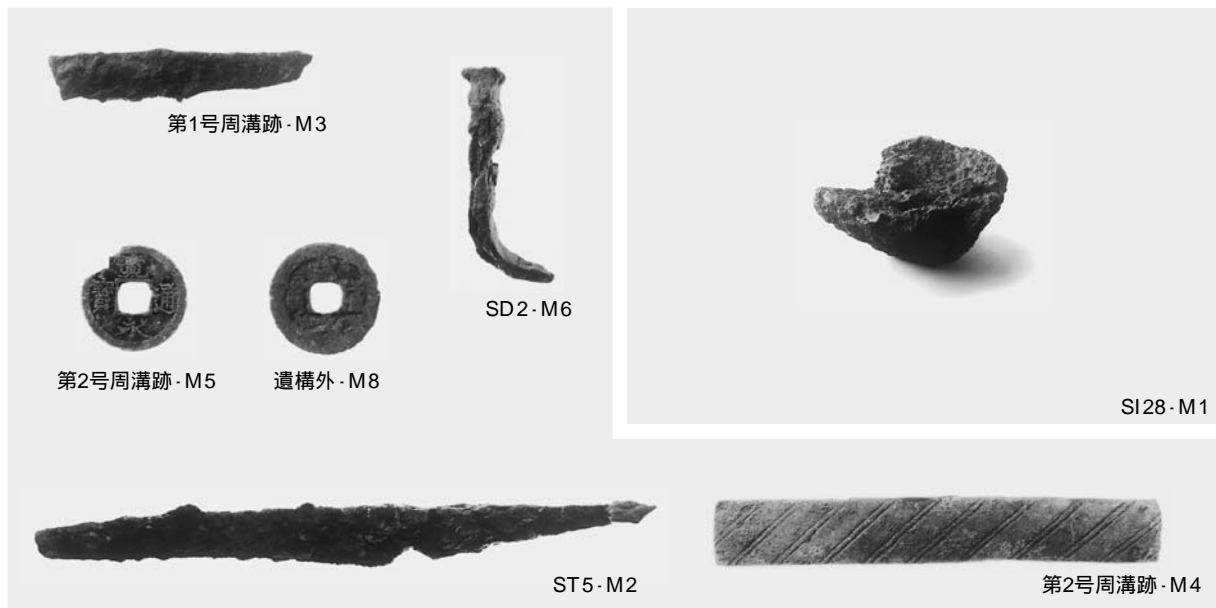
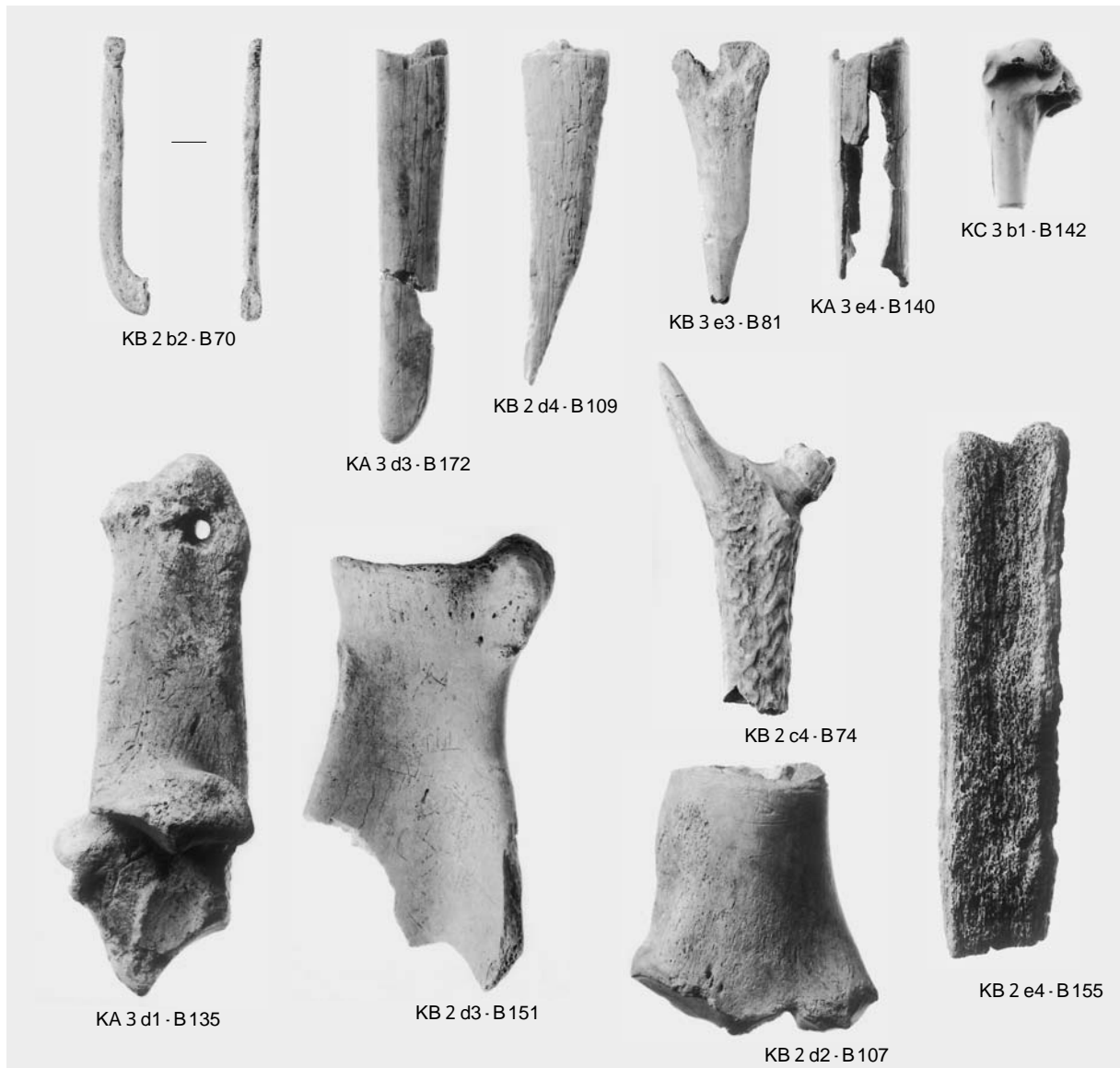
出土土製品・貝製品



出土骨角器・骨角製品・骨角齒牙製品



出土骨角器



抄 録

ふりがな	おおやかいつか							
書名	大谷貝塚							
副書名	国道125号大谷バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第317集							
編著者名	駒澤悦郎 成島一也 作山智彦							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
おおやかいつか 大谷貝塚	いばらきけんいなしきぐんみほ 茨城県稲敷郡美浦 むらおおあさおおや 村大字大谷881番 ち地ほか	08442 109	36度 00分 01秒	140度 18分 47秒	18.5 24.5m	20060401 20070331 20070401 20071231	7.664㎡	国道125号 大谷バイパス建設事業 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大谷貝塚	包蔵地 集落跡	旧石器 縄文	竪穴住居跡 炉穴 炉跡 土坑 土坑墓	7軒 2基 2基 435基 1基	石器(ナイフ形石器, 石刃) 縄文土器(深鉢), 石器(石 鏃・楔形石器・打製石斧・ 磨製石斧・磨石・敲石・石 皿), 石製品(石棒・小玉), 土製品(土器片錘・土器片円 盤), 人骨	斜面貝層は、縄文 時代前期中葉及び中 期後葉の2次期にわ たって形成され、内 湾性砂泥底に棲息す る貝が大量に廃棄さ れていた。そこから は、膨大な縄文土器 をはじめ、骨角歯牙 製品や貝製品、動物・ 貝類・魚類遺存体が 多数出土している。 前期中葉のアサリな どを主体とする貝層 からは、植房式土器 がまとまって出土し 中期後葉のハマグリ などを主体とする貝 層からは、加曽利E II~IV式土器と共に 多量の土器片錘が出 土している。また、 前期に属する埋葬さ れた人骨を確認した。		
		弥生	竪穴住居跡 土坑	14軒 9基	弥生土器(壺・甕), 土製品 (紡錘車), 石器(敲石・ 石皿)			
		古墳	竪穴住居跡 土坑	8軒 5基	土師器(椀・坏・高坏・椀・ 壺・甕・鉢・甑), 須恵器 (坏・蓋・壺・甕), 石製 品(剣形模造品・双孔円板・ 勾玉), 土製品(支脚・球 状土錘・管状土錘)			
		平安	竪穴住居跡 竪穴建物跡 火葬墓 土坑 周溝跡 溝跡	2軒 6棟 1基 6基 1基 1条	土師器(坏・高台付坏・皿・ 高台付皿・小皿・壺・甕・ 鉢・甑), 須恵器(坏・高 台付坏・壺・甕・鉢・甑), 土製品(球状土錘・管状土 錘・紡錘車), 金属製品(刀 子)			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
		中世・近世	土坑墓 2基 周溝跡 1基 溝跡 5条 道路跡 3条	陶器(碗・鉢・播り鉢・甕), 磁器(碗・皿),土師質土 器(カワラケ・内耳鍋), 瓦質土器(鉢),金属製品 (銭貨・小柄・釘・火皿), 土製品(泥面子),陶製品 (転用砥),石製品(砥石), 人骨	鑑定の結果,壮年後 半の男性で,変形性 脊椎症,骨膜炎,骨 関節症が認められ た。放射性炭素年代 測定によると「5610 ±60BP(TKa-14475)」 の年代が得られた。 注目できる遺物とし ては,前期の貝層か ら出土した,ツキノ ワグマ・オオカミ・ イノシシ・キツネ・ サメ・バンドウイル カなどの歯牙を加工 した垂飾りや,鋸歯 状の線刻が施された イノシシの肩甲骨な どである。出土した 植房式土器は,今日 に至るまで類例が乏 しく,型式学的にも 多くの課題を残した 土器群である。そう した中で,当貝塚に おける植房式土器の 様相は,霞ヶ浦沿岸 地域における標準的 な資料として位置づ けられる。
	貝塚	縄文	斜面貝層 1か所	縄文土器(深鉢・浅鉢・蓋・ 器台・有孔罎付土器・瓢箪 形土器・小形土器・特殊土 器),石器(石鏃・石匙・ 搔器・削器・尖頭器・楔形 石器・石錐・石核・剥片・ 研磨器・砥石・打製石斧・ 磨製石斧・磨石・敲石・凹 石・石皿),石製品(石棒・ 石錘・浮子・軽石製品・垂 飾り),骨角歯牙製品(逆 刺付刺突具・刺突具・釣り 針・磨製刃器・端平頭棒状 角製品・珥形角器・垂飾 り・針・札状加工品・錐状 加工品・ヘラ状加工品・線 刻を有する骨・切断痕を有 する骨角),貝製品(貝輪・ 貝輪素材・貝刃・タカラガ イ加工品・ツノガイ加工 品・貝器),土製品(土器 片錘・土器片円盤・耳栓・ 大珠形土製品・土製垂飾 り・スプーン形土製品・土 製球状耳飾り・不明土製 品),人骨,動物・魚類・ 貝類遺存体	
		古墳	方墳 1基	土師器(椀),須恵器(坏・ 甕),雲母片岩片	
	その他	中世・近世 時期不明	塚 1基 土坑 46基	陶器(碗),磁器(碗)	
要約	<p>後期旧石器時代のナイフ形石器や石刃が,後世の遺構覆土などから出土しているため,調査区周辺に石器集中区が存在している可能性がある。斜面貝層は主に縄文時代前期中葉及び中期後葉に形成されており,膨大な縄文土器,骨角歯牙製品や貝製品,シカ・イノシシを主体とする動物遺存体をはじめ,魚類・貝類遺存体が多数出土し,前期の埋葬された人骨も出土している。その他,縄文時代から平安時代に至るまでの集落跡をはじめ,古墳時代後期の方墳や平安時代の火葬墓,中世・近世の土坑墓,塚,溝跡,道路跡などを確認した。各時代における複雑な土地利用の変遷が明らかとなり,集落や墓域が断続的に形成され,信仰や交通を含めた生活の舞台であったことが判明した。特に,縄文時代前期と中期の斜面貝層の調査は,当時の漁労を主体とする生業活動のあり方や,集落を取り巻く自然環境の復元に大きく役立つと考えられる。</p>				

茨城県教育財団文化財調査報告第317集

大 谷 貝 塚

国道125号大谷バイパス建設事業
に伴う埋蔵文化財調査報告書2

下 巻

平成21(2009)年3月18日 印刷
平成21(2009)年3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団
〒310 0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029 - 225 - 6587

印刷 (有)川田プリント
〒310 - 0041 水戸市上水戸4丁目6 - 53
TEL 029 - 253 - 5551